

A low-angle photograph of a Ferris wheel with orange capsules against a clear blue sky. The Ferris wheel's white metal structure is prominent, and the orange capsules are arranged in a vertical line. The text 'ハロー、アゲイン' is overlaid on the image.

ハロー、アゲイン

poripeimos

u

観覧車の頂上から見える東京の端っこの景色は茫洋としていて、こっそりと感傷に浸るにはあまりにも冷酷すぎる。

外の景色がぼやけて見えるプラスチックの窓から目を離し、正面に視線を転じると、一人きりのゴンドラが僅かに私のほうに傾いた。初夏の太陽が目の前の空席に落ちている。剥きだしの腕がほんのりと赤くなって、細い血管が弾けんばかりに浮き出していた。これは焼けるだろうなあとぼんやり思いながら、不意にそうしたくない眩きにいつも目を細め、口の端を上げていた関谷先生が火照った脳を過ぎて、心臓が熱く、疼いた。

ゴンドラが頂上に達したとき、私の狭い視界は空だけになった。それは青くも黄色もなく、まるで露光しすぎた写真のように真っ白で雲さえない。ゴンドラ内部はまるでサウナの中にいるような暑さだ。そこで私は空を見、正面を見、からだを乗り出すようにして地上を見た。それから数秒間だけ、祈るときのように息を潜めた。空に浮き、空中で回転し、自由を勝ち得ていることに集中しようとする。淋しくない。大丈夫だ。これからだって、やっていける。続けて念じてみるけれど、どうしても途中で切り離される。自分がどうしようもなくひとりだという意識が邪魔をするのだ。まるで空にも地上にも、冷たい視線を返されているようだ。唐突に落ちていく感覚に襲われ、慌ててからだを前倒しに丸め、強く目を瞑った。少しだけゴンドラが揺れて、同時にスイッチが切れたように、頭のずっと奥が真っ暗になった。

暑さにやられたんだろうか。ここは空に近すぎる。

地上に近づく間、朝のニュースで聞いたアナウンサーの「今日は夏日」という声を思い出す。そう言えば、関谷先生と初めて観覧車に乗ったあの日も、今日と同じように暑い日だった。

今日も慣れ親しんだ納得と落胆に交互に殴られて、目に涙を溜めたまま歩いている。これから遊園地に入って行こうとするカップルや家族連れに怪訝な視線を送られながら出口のゲートを通り抜けたとき、それを見計らっていたかのようなタイミングで携帯電話が震えた。

「やっと繋がった」声の主はそう言ったかと思うと、すぐにうんざりした声で「また観覧車？」

「違うよ」

無意味な嘘を咄嗟についてしまったことを後悔する間も与えない素早さで、北川逸也きたがわいつやは「はいはい」と吐き捨てるように言った。

「違う、ほんとに」

「いいよ。行くなと言ってなんかいないだろ。ただ、嘘がむかつくんだ」

逸也はそう言うと、電話の向こうで煙草に火をつけた。同時に私のそばまで紫煙が漂ってきたような気がして、からだに彼に会いたかった。

「今、どこにいるの」

「実家」

「会いたくなった。イツちゃん、迎えに来て」

「わがまま女」

そうして唐突に電話は切れた。本当にその通りだなと思いながら、駅までの道をとぼとぼと歩き始めた。まだ昼を過ぎたばかりで、太陽は燦々と輝いている。白いハンカチを取り出し、それを頭に乘せると視界が少し暗くなり、擦れ違う人の顔だけが見えなくなった。頭のない、からだだけの人間たちがぞろぞろと移動していく。目の端にそれを映してひたすら歩数を数えていたが、そのうち自分がもうずっと本格的に泣き始めていることが無視できなくなってきて、駅の階段を上る頃には声まで漏らして泣いた。目の奥が

熱いのも、頬がやけにガサついているのも、この馬鹿みたいに熱い太陽のせいではない。

いっそのまま友人に手を振って別れるときのような気軽さで、目の前の線路に飛び込んでしまってもいいかななどと思う。けれどそのときまた図ったようなタイミングで携帯が震えて、メールが届いたことを知らせた。

《西武園だろう？ 所沢まで出て来いよ。そこで拾ってやる》

逸也からだった。冷たくなっていた指先に熱が戻ってくる。熱い指先がまた逸也を求め始めた。思いがけない突風に飛ばされそうになったハンカチを頭から離し、私はもう死のうとしていたことを忘れて、メールの返信を打つのに夢中になった。

所沢駅に着き、小ぢんまりとした駅のロータリーに行くバスをぼんやり眺めていると、やがて逸也の乗った車が滑るように入ってきた。私は急いでそれに駆け寄り、飛び乗った。

「待った？」

「待ったよ。すごく待った」

「そういう嘘なら許してやろう」

「何それ」

「この嘘つきヤロー」逸也は見透かすように笑って、「束縛されるの好きだろ」

首都高に乗り、しばらくしてから彼は私のことを横目で見て、ギアに乗っていた左手を私の太腿の辺りに乗せ、熱いな、と言った。履いてきたアイボリー色のコットンレースのスカート丈が急に頼りなく感じられて、逸也の視線が離れた際に強く引っ張った。

逸也は大学で英語の非常勤講師をしている。

歳は離れていたが、私たちはいわゆる幼馴染で、彼の弟の^{かずし}一志と私が同い年だったこともあり、小さい頃はよく団地の敷地内で三人で遊んだものだった。

母子家庭で育った私は小さい頃から逸也に纏わりついて、彼のお嫁さんになるのだと周囲に触れ回っては彼を困らせていた。だがそれは子供の成長期にありがちな戯言というよりは、もう少し生存本能を含んだそれだったかもしれない。私の母がどちらかと言えば奔放で、そのくせ精神的に脆かったせいだ。だから、七歳上の逸也は、いつの間にか近所のお兄さんというより男に近い存在だった。私の中の女の本能が、初めからそう認識させていたのかもしれない。

逸也と再会したのは一年半前のことだった。

大学進学に伴い家を出て行った彼と再び会うまでに、八年の歳月が経っていた。

「観覧車はどうだった」

「日曜日に行くもんじゃないね。人がいっぱい、変な目で見られた」

「それでも懲りずに乗ってきたんだろ」

「好きなのよ、観覧車が。乗ると落ち着くし、元気になるし」

「違うだろ」逸也はまた何もかも分かっているかのように笑って、「何か理由があるんじゃないの。誰かを待ってるとか」

「そんな漫画みたいな展開はないよ。イツちゃんって結構ロマンチストだよ」

また嘘をつくんだな。言われると思ったけれど、逸也は何も言わずに、アクセルを強く踏んで速度を上げた。

彼は私が何故こうして殻に閉じ籠って無様な姿を晒しているのか、その理由を詳しく聞こうとはしない。私がどこへ行って何をしようと、その根っこにある理由や原因は深く追求しないし、答えを待たない。彼は私が猫のように自分勝手に振る舞うことを許してくれる。私はそれに甘え続けている。

「今日は何をしていたの」

「俺？ 俺はいつもの休日と変わらないよ。朝とも昼ともいえない時間に起きて、適当にパン焼いて食って、新聞に目を通して、ああまたガキが人殺してるよって思いながらメールチェックして、着替えて、それでお前に電話した」

「一志は？」

「さあ、元気してるんじゃないの？ あいつは全然連絡してこないから」

「おじさんは？」

「入金があるから、たぶん生きてるって。一志が」

そう言って彼は笑いながら煙草を吸い始めた。

逸也と一志の母親は三年前に病死して、それまでずっと単身で海外勤務を続けていた彼らの父親は去年、一志が高校に上がるると同時に再婚した。一志は陸上の特待生として高校に入学して寮生活となり、逸也は大学入学と同時に東京で一人暮らしをしていたので、長い間北川家は空っぽだった。けれど勤務している大学の校舎が移動になったとかで、距離的に少しでも通いやすい実家に、逸也だけ一年半前から一時的に戻ってきているのだった。

「二人ともおじさんに会ってないの？」

「会ってない。会っても、今更イギリス人の母親なんて馴染めないし、一志も今は陸上に専念したいって言ってるしさ」

「ああ、今年は一志にとって最後の年だもんね。全国大会は夏だけ」

逸也はあからさまに興味がないという表情で首肯したが、彼が年の離れた弟を溺愛しているの是一目瞭然なのだった。それを証拠に、彼の車には一志の出場する大会が近づくと、お守りが増える。

一志は中学の頃から陸上部に所属し、主に二百メートルの短距離ランナーとして活躍している。毎年夏に行われる全国大会では一年生で大会新を出すほどの実力を発揮して、陸上界ではちょっとした有名人なのだ。

「そういえば、イッチャんの住むところはどうなりそうなの」

「それが朝、良い物件が出たって不動産屋から連絡があったんだ。だから今からそこへ行こうと思ってる」

「一緒に行っていくの？」

「いいから迎えに来たんだろ」

逸也が勤める大学は文京区にあって、都営三田線沿いで良い部屋がないか探している最中なのだった。マンション探しは私にとって初めての経験で、たまに付き合ってはまるで玩具を選ぶような気軽さで楽しんできた。三年になっても進路が決まらず、こうして休日を遊んで過ごす私は、少しは一志を見習わなければならない。

“良い物件”は本当にいい所だった。八階建ての六階で角部屋の1DK、西向きなのと駅から徒歩二十分というのが難点ではあったけれど、日の入りが悪いわけではないし、何よりとても静かなところが良かった。築年数は十五年とわりと古いのに、台所に二口コンロが付いているのもポイントが高い。

「イッチャん、ここにしなよ！ だってヒーターじゃないよ、ガスコンロだよ！」

「あの、お二人で住まれるんでしょうか。お話ではお一人で住まれるお部屋をお探しいたことでしたが」

ついてきた不動産屋の加藤という男性が神経質そうにメタルフレームの眼鏡の縁をいじりながら、私と逸也を粘つくように交互に見て言った。たじろいでいると逸也が笑って、

「違いますよ。こいつは付き添いで来た妹で、住むのは僕一人です。こっそり同棲したりしませんから、安心してください」

それを聞いた加藤さんはあからさまに安心しきった表情で「そうですかそうですか」と繰り返した。そ

うか、勝手に同棲を始めたりすると追い出されるのか。思いながら一方で、子供っぽさのせいで不審がられたのではなかった、と私は安堵した。

結局逸也は即決して、そのまま契約を済ませ、ついには引越しの日取りまで決めてしまった。私はそのやり取りを脇でぼんやりと眺めながら、別の場所からだを移すことは案外容易いことなのだと思ってた。お金さえ払えば、ただの居場所なんて簡単に作れるのだ、どこにでも。

帰り道、逸也はお互いの家の近くを流れる大きな河のそばに車を止め、付きあわせて悪かったなと言った。

「会いたいと言ったのは私だよ」

「お前、受験生だろ。勉強してる気配ねえけど大丈夫なの」

「大丈夫大丈夫」

「大丈夫なわけあるか。誘った俺も悪いけど、お前もう少しちゃんと勉強しろ」

「してるってば。それに今日は良い社会勉強もしたし」

ふざけて言うと、逸也は呆れたように肩を竦めて煙草に火をつけた。逸也の火の付け方はいつも少し乱暴で、ジッポライターの炎はとても大きい。怪しく揺らめくそれを見ていると、二人の間の中途半端な空気だけでなく、私の中にある狡さや罪深さまで焼いてくれるような気がして好きだった。

顔を上げると、彼は何か逡巡しているような面持ちで、窓の外に広がる黒い川を眺めていた。小さい頃は、逸也と一志と三人でよくこの川へ遊びに来た。先を走っていく一志に追いつこうと、思い切り自転車を漕ぐ逸也にしがみついて乗っていた。風に靡く逸也の猫っ毛はいつもきらきら光る川の水面のように、太陽の光を受けて光っていた。だが今、車内から見る暗がりの川は、光っていたことなど嘘だったかのようにタールに似た黒い肢体をうねらせている。映りこむ外灯の明かりなど、すぐに崩れて消えてしまう。それを見ている逸也の頬には、二十六歳という年齢にしては深い皺と疲弊が刻まれていて、何かが確かに彼をここまで磨り減らしたのだということを物語っている。

「本当は今日、千穂子^{ちほこ}さんにお前の勉強見るように頼まれてたんだ」

千穂子とは母の名前だ。逸也は母をきちんと名前で呼称する。

「あの人、そんなこと頼んでたの？」

驚いて問うと、逸也は短くなった煙草を灰皿で揉み消し、ヘッドレストに頭を預け、「水穂の家庭教師になってくれってさ」と言った。

「あの方はいつもそうだ」

せっかくいつもの生活から離れた世界の中にいるのに、私はやはり母の身勝手さに苛立つことをやめられない。どんな理不尽なことでも考えなしに口に出し、そしてそれがいつだって当然許されるものと思っている。隣人の息子に対しても女を剥きだしにし、逸也の腕を執拗に引っ張り、猫撫で声でわがままを言っただろう彼女の姿がありありと目に浮かんで胸が重くなった。

「ごめん。お願いだから気にしないで。あの方はいつも何でも勝手に決めるんだ。イツちゃんもよく知ってるでしょ」

「いや、やってもいいよ。家庭教師」

「だって大学は。三週間後には、今日決めたマンションへ行っちゃうじゃない」

「引越しまでみっちり見てやるよ。まだ三週間あるし、新居にだって水穂が来たいときに来ればいい」

「なにそれ。それじゃ家庭教師って言わないじゃん」

私が笑うと、逸也は私の頬を軽くつねって引っ張った。子供の頃から彼が私にする癖だ。水穂の頬はまるで餅だ、つねりがいがある、とよくいじられた。

「やだ、離してよ。これ以上顔が大きくなったらどうすんの」

「いいじゃん。長所は伸ばせよ」

そう言って笑う彼の両頬に現れたえくぼは昔のまま変わっておらず、だからこそ余計に刻まれた皺が目立った。思わず目を反らそうとすると、だが逸也は唐突に私の腕を強く引き、自分の胸に押し付けた。

逸也がこうして私を抱きすくめるのは、もう何度目のことだろう。だが最近の逸也の抱き締め方は、以前と変わった。今まさに腕の中心におさまっているというのに、力が強まる度、私は腕から押し出され、抜けてしまう気がする。そしてまるで浮遊霊になったかのように、私を抱きしめる彼を上から眺めているような気になるのだ。以前はこんなことはなかった。

上から見る彼は、いつもどこか必死だ。けれど決してそれ以外は求めてこない。唇を求めることだってない。だからこそ私はこうされるとどうしていいか分からなくなって、そこら辺にあるポールみたいに硬直してしまう。抱きしめてもらっても、それに見合った返せるものが一つもないという事実が喉を押し潰し、声を奪う。ただ、どうか逸也が、バランスが損なわれつつあることに気付かないようにと祈ることしかできない。

不意に、一年半前の冬、年が明けてすぐに住み慣れた古びた団地に逸也が帰ってきたことを思い出した。あまりに突然のことに戸惑い、私たちは最初とてもぎこちなかったけれど、それでも話しているとそれは薄れて、私はその足で逸也の部屋を訪れた。

彼の部屋は彼が高校生の時のまま、全く手が加えられておらず、思いがけず穢れのないものに触れた私は竦みあがった。当時の私はただ日々流されるようにして生きていて、だから逸也との無垢な過去の前でどんな顔をしていいのかわからなかったのだ。

ほとんど逃げるように立ち去ろうとした私を、だが逸也は許さなかった。初めて逸也に抱き締められたのは、そのときだ。でもそのとき彼は、今のような、二人の間にある厚い時間の層を押し潰そうとするかのような抱き締め方はしなかった。壊れものに触れるように触れたのだった。初めは動揺していた私も、だがショートボブの隙だらけの首に彼の熱く湿った息が掛かると、徐々に感じる人の熱に、張りつめていたものが容易く緩んでしまった。そうして柔らかくなると、いかに人の熱を切望していたかが浮き彫りになってしまったのだった。それはまるで裸にされて、立たされているような気分だった。しかし羞恥したのは一瞬で、ダイレクトに感じるようになった逸也のからだのかたちを私は卑しく自分に押し付けた。浅ましい行為だと自分を汚らわしく思いながらも、逸也がそれを拒むことなく、むしろ私のからだに回した腕の力を強めたとき、もう何の制御も効かなくなってしまった。

逃げ場のないところで、からだを寄せ合っているような気分がした。互いが互いの視界を塞ぎ、暗闇の中でいつまでも熱を貪った。昔のようからかうことも誤魔化すこともない。私たちはきっとその温もりを守ることに躍起だった。それは言葉に出さなくても、触れるだけで明白になった。自分たちを救うものは人の熱以外になかったせいかもしれない。そして恐らくそれを偶然享受しあつたに過ぎない。それが分かっているとしても、逸也と抱き合うことは気持ちが悪くて、私はすぐに彼に夢中になった。

一志から、逸也が長く付き合っていた年上の女性と破局したらしいという話を聞いたのは、それからすぐのことだった。そのときにはすでに、私たちは互いのからだにすっかり依存していた。互いの熱が傷口を守るガーゼになり得ると知ったからこそ、その保障された関係に安心しきって身を委ね合っていたのだ。

「もう帰ってご飯作らないと」

堪らなくなって言ったが返事はなかった。エアコンのファンの音だけが激しく騒いでいる。やがて逸也が喘ぐように、

「妹なんて言って悪かったな」

「え？」

聞き返してすぐに、加藤さんに部屋を見せてもらっているときのことかと思いがたって、しまったと思った。拗ねるべきだった。ここは、拗ねていじけるべきところだった。しかし今更もう遅い。

逸也は私からからだを遠ざけると、パワーウィンドウを開け、そこから首を突き出して空を見上げ、「おお、星がすげえ出てる」

私も窓を開け、同じように空を仰いだ。気温は随分落ちたものの、外気が車内に入ってくるとむんとした湿気と熱気に纏わりつかれて息苦しくなる。思わず咳き込むと逸也がやんちゃな顔で笑いながら、「変わらねえなあ、水穂は」と言った。この人は何を見ているんだろう？ 私はこんなに変わってしまったじゃないか。思ったけれど口には出せない。

しつこく忍び笑いを引き連れたまま、逸也は車を発進させた。距離が開くごとに川はますます暗さを際立たせて、土手との境界をなくした。それはまるで曖昧になってきている私たちの関係のようで、ずっとは見えていられなかった。

最近になって感じ始めた懸念が臓腑をなぞって、私を脅かしている。

逸也が私に求める感情が、初めの頃より、僅かに変化している。

触れるとそれは顕著になるのに、だが私は知らないふりをし続けている。理由も意味も追求しあわない、この宙ぶらりんの関係をどうしても守りたいと思うからだ。私はまだ、一人で歩くことができない。バランスのとり方をまだはつきりと思い出せない。この無力感と恐怖感を少しでも薄れさせることができるのなら、誰に詰られても私は

七月に入っても、空は梅雨のどんよりとした雨雲に遮られて、まるで睫毛で雲を支えているんじゃないかというくらい視界が暗い。テレビをつければ、今年は例年より雨が少ないと気象予報士がいかにも深刻そうな顔で声を上げているのに、梅雨は明ける気配も見せずに世界を灰色に染めている。まるで同じ時を延々と繰り返しているような感覚が気だるさを強めていく。

母は寝ているのか、閉められた襖の向こうからは物音ひとつしない。恐らく帰ってきたばかりなのだろう。私は出来る限り音を立てないように卵焼きと冷凍食品を詰めただけの弁当を作り、台所に立ったままその残りとおパンを口に詰め込んで朝食を摂った。

母は逸也が帰ってきた頃、突然友人のスナックを手伝いたいと言いだし、こちらの返答も待たずに夜の仕事に就き始めた。それまでは駅前の建築事務所で経理の事務をしていたため規則正しい生活をしてきたけれど、スナックに行くようになって帰りはいつも朝の五時頃になり、すれ違いの生活が続いている。

父と三年前に離婚してから、私に極端に甘えるようになった彼女は、母親というより大人の風貌をしたただの子供のようなものだ。奔放さに加え、子供が親に愛情を確かめるときにするような媚を私に売るようになり、辟易していた。

顔を合わせたくなくて、急いで制服に着替え、逃げるように外に出るとべたつく湿気の中を細い雨がしとしと降っていた。憂鬱な気分で傘を差し、団地の外にぽつんと立っている小さな時計台を見ると、もう七時半を回っていた。雨の日は早めに出ないと、八時半の予鈴に間に合わなくなる。急いで駐輪場から自転車を引きだし、漕ぎ出した。

事態が急転したのは、団地を出て少し走ってからだった。

雨で霞んだ視界に目を疑うような光景を見て、反射的に強くブレーキを握った。思った以上に耳障りな音が鳴ってしまって、私は咄嗟にそばの民家のブロック塀の陰に身を隠した。自転車を支える左手と両足の爪先が細かく震えていた。

視界の先に突如現れたのは、関谷先生の車だった。

雨に濡れた黒いボディはぼやけていたが、彼の車に間違いはない。それは以前、いつも待ち合わせた路地裏に、まるで行き場を失くしたように停まっていた。見間違えるはずがない。

何故ここに。まさか私を待っているというのか。

とりとめのない疑問が矢継ぎ早に過ぎていき、その度に私の息で糸雨は乱れた。

どのくらいの時間が経っただろうか。ただひたすら呼吸が苦しく、杭を穿たれたように微動だに出来ぬまま、私は塀の陰から車を見つめてただ立ち尽くしていた。そのときだった。突然車のドアが開いたかと思うと、スーツ姿の男が慌てたように飛び出してきた。そのシルエットに胸が激しく震えて、そのまま膝をついてしまいそうになった。関谷先生の姿を最後に見たのはもう一年近く前のことだった。夢と記憶の中でしか存在し得ずにいたからだが今、百メートルも離れていないところで息をし、動いている。そのからだから、視線が逸らせない。

しかし、私は腹や太腿や腕の皮膚をいたずらに抓り、何とかからだを動かした。そして余計な感情が生まれる前に方向転換をして、ただ無心で自転車を漕いで漕いで漕いだ。雨を吸って重くなるシャツやスカートを脱ぎ捨てたいと思いながら、だが止まらずに全速力で漕ぎ続けた。

こちらに向かってこようと乗り出した彼のからだは、開け放したままの車のドアにぶつかって沈黙したけれど、それでも視線は私の方を捉えて離さなかった。上手く隠れたつもりだったけれど、きっと彼は私を見つけたのかもしれない。視線の先にいた彼は、私に何かを言おうとしているように見えた。いや、結局は私が何かを言って欲しくて、だからそう見えただけのこともかもしれない。それに例え彼が私に言いたいことがあったとして、そんなことを考えたところで今の私に分かるはずもない。まるで不毛な時間だ。

教室に着くと友人の^{ふのあんり}布野杏里が突然廊下まで飛び出してきて、私の腕を引いて階段の端まで連れていった。彼女は私がびしょ濡れの状態にいることにさえ目に入らない様子で、

「笠原、聞いた？」

「何を」

「いい？ 落ち着いて聞くんだよ。実は……関谷が復職するかもしれないんだって」

銃弾が頭蓋を割って、そのまま貫通していったような衝撃があった。さっき、あの路地裏で見た関谷先生が目の裏で点滅して、狼狽はいっそう増した。

「誰から聞いたの、そんなこと」

「一昨日の土曜日、軽音部の練習に顔出したらしいんだよ、関谷。^{さいだ}細田がさっき言ってたの。帰り際にまだ戻って来ないのかって聞いたら、近いうちに戻るよって言ってたって」

関谷先生は一年前まで数学を教え、軽音楽部の顧問を持ち、生徒との壁を感じさせない親しみやすさと、マイペースだけれど芯の通った姿勢が格好いいと、男女の隔てなく慕われていた。細田君はなかでも特に関谷先生への憧れが強くて、入学当初、学園祭で関谷先生が教員バンドで披露したギター演奏に惚れこんで以来、軽音楽部を作って顧問を関谷先生に頼みこみ、自分もギターを始めたいらしい。その軽音楽部の練習はいつも土曜日の放課後だったはずだけれど、関谷先生は一体いつの練習から来ていたのだろう。

「良かったね、笠原」突然杏里に両肩をまれ揺さぶられた。

彼女の本当に嬉しそうな眩しい笑顔が胸に痛かった。杏里は私がそれがたった一年間のこととはいえ関谷先生と付き合っていたことを知らない。彼女を信用していないわけでは決してなかったけれど、結局言えず仕舞いのまま、関谷先生とは唐突に終わってしまったのだった。

私は彼女の高揚に乗れず、先ほどの衝撃と軽い頭痛に苛まれたまま、目の裏の関谷先生を見ているしかできなかった。

「何よ、嬉しくないの？ 今度こそチャンスじゃん。思い切って告白しなよ」

「そんなことしないよ」

「何だよ」

「何でもよ」

曖昧に笑って、杏里から目を逸らした。押し留めていた記憶ががたがた震えて、関谷先生の体温や皮膚の張りや、薄めの唇や長い指先がからだを縦横無尽に走っていく。

「でも最初が肝心だよ。本当に関谷が戻ってきたら、印象に残るようなアプロチかけなきゃ駄目だって。どんだけライバルいると思ってんの」

杏里が私の背中をバンバン叩きながら言う。その振動に揺られながら、もし彼が本当に戻ってくるのなら、私は彼に何と声を掛けるだろうかと考えてみた。だが、考え始めるとこれまで逸也で塞いでいた穴がいつも簡単に剥き出しになり、そこを竜巻のような風がごうごうと音を立てて通り抜け始めてしまった。同時に、これまで隠していた関谷先生との間にあった全ての事がそれに煽られ、私の眼前に無様に散らばった。「ちょっとしっかりしてよ。物思いに耽るのも結構だけど、もう予鈴鳴ってる」

白いシャツの袖口を杏里に何度も引っ張られて、ようやく我に返った。顔を上げると、もう彼女は先に教室に向かっていて、等間隔に廊下に差し込む日光が彼女に降り注いでいた。その無防備な小さな背中に、私はいつかの自分を重ねた。同時に、割れた頭蓋の穴から血液が零れだしてきたかのように、頬や耳の先が痛むほど熱くなっていくのを感じた。

七階建ての集合団地の、煤けたような色をしたコンクリートの階段を三階まで上り、玄関の扉を開けると、母と逸也が如何にも呑気そうに笑い合っている姿が飛び込んできて、私の身体は固まった。

「水穂、お帰り」

二人して言って、そのタイミングが合ったことに盛り上がっている。部屋の中はすでに二人の吸う煙草のにおいに満ちている。煩い。邪魔だ。二人の生む何もかもが煩わしい。苛立ちで喉の奥がヒリヒリしていた。しかし結局は何も言えずに、帰宅途中にスーパーで買ってきた食材をぐとぐととテーブルに置いていった。

「今日のご飯は何」

フィルターすれすれまで吸った煙草を水で消し、台所の生ゴミ入れに捨てた母が甘えるように顔を近づけてきた。

「ちょっと、そこに捨てるのやめてって言ってるでしょう。臭うんだよ」

「あ、鶏肉と卵がある。水穂ちゃん、親子丼作ってよ。卵とろとろのやつ。そうだ、お弁当にもしてくれない？ 水穂ちゃんのあれ、あの人も大好きなのよ」

彼女が寄りば寄るほど、体臭に酒が染み込んだようなにおいと、男の濃い汗のにおいが混ざり合ったものが強まり、突き飛ばしたい衝動に駆られてしまう。我慢していると、ひりついた喉に酸っぱいものが湧き上がってきたので、私は俯いて必死に耐えた。それにも気付かず、母はテーブルに肘をつき、体重を預けた格好で、逸也に肩など揉ませて「ああ、そこそこ」と気持ち良さそうにしている。

何だか、今日は、全部駄目だ。もう限界かもしれない。思うと、観覧車が目の奥で眩しいほどの光を発して存在を主張してきた。だが、それは同時に関谷先生の影も連れてきて、また私を混乱させる。

「水穂、どうした」

逸也だけが私の異変に気づいたようだった。耳のそばで発された言葉はいつものようにとても優しい響きを持っていただけで、今日はそれさえ耳障りに思えた。今朝からずっと続いている動揺が、私のからだを作り変えてしまったのかもしれない。

「何でもない」

辛うじて口にし、わざと耳障りな音を立てて食材をテーブルに並べた。そして忙しいふりをして、大仰な動作でボウルを取り出し、卵をいくつも割った。

菜箸の転がる音やジャガイモの土臭さに塗れていくと、僅かに落ち着きが戻ってきた。いっそそれらが私から一切を取り上げて、ただの飯炊き女にすればいいのにと思う。

車内で抱き合ってからまだ一日経つか経たないかのうちに私が変わってしまったことに、逸也は気付いている。彼がテーブル越しに私を観察し、何と声を掛けようかと思案している気配がある。そのとき、

「ねえ、イツちゃんは彼女いないの？ モテるでしょう、女に。あんた、ちょっと苛めたくなるもんね。ねえ、水穂ちゃんなんかやめなさいよ。あたし、いくらだって紹介するからさ」

冗談でしょ、と逸也が困ったように笑って言ったのが背中に当たった。

「だってこの子、つまらないでしょう」

「そんなことないよ。水穂はいいよ、千穂子さん」

「あら。良かったじゃない、水穂ちゃん」

母が冷蔵庫から缶ビールを取り出して言い、プルリングを開ける音がした。私は何とか米の摩擦しあう音に集中しようとしていた。だが泣きだしたくなるような閉塞感や苛立ちは簡単にその隙をついて足元に流れ出し、澱のようにたまって私をどこへも行けなくさせる。

「でも、イツちゃんがここへ帰ってくるなんて、思わなかったわ」

「どうして」

「だってあんたが一番ここを出て行きたがってたじゃないの」

「そうだったかな」

「それに最初見たとき、びっくりしたわよ。随分痩せたし、別人みたいだったから」

「大袈裟だな、千穂さんは。久しぶりだったからそう思っただけだよ」

「イツちゃんのことは、こーんな小さい頃から知ってんのよ？」

「さすがにそんなに小さくはなかったよ」

「もお、あたしは何でも分かるのよ？ あんた、手痛い恋愛でもしたんでしょ。だからこんな何も無いところに帰ってきたのよ。恋愛だけよ、こんなところにあんたを帰すのは」

逸也が困っているのが、空気で分かる。母の意地の悪い、試すような短いため息が聞こえた。いつも適当でいい加減なくせに、珍しく核心を突くような推測だった。しかし私は救いの手を出さなかった。なぜならこういうとき、彼はこれまでずっとそれを必要としてこなかったからだ。どんなに八方ふさがりになるうとも、唇を生意気そうに歪めて笑い、のらりくらりと交わすことのできる人だったからだ。だから私は待った。早くそんな戯言なんか一笑してよ。米を研ぐのに集中しているふりをして、いつものように彼の口元が意地悪そうに歪むのを待っていた。しかし、今日に限ってそれは、いつまで経っても起こらない。こんなところで母なんかに暴かれて。大体何で今日なんだ。何も今日、嘘を見破られた子供のようにならなくたっていいじゃないか。蛇口を捻って米に水をぶちまけると、激しい水流に暴れていたが、やがて不透明な水の底に沈んでいった。

強く研ぎすぎてかたちが崩れた米を水につけ、テーブルの上に置いたとき、唐突に母が言った。

「ね、水穂ちゃん、ちゃんと慰めてあげなさいよ」

「いや、そんなんじゃないんですよ。忙しくて、恋愛なんてしてる暇なんかなかったんですから」

今更、逸也がぐもった声で弁明した。嘘が嫌いと言って嘘をつく。嘘がこんなに下手だとは知らなかった。

「ちょっと水穂ちゃん！ 何とか言ってあげなさいよ、もう。この子がこんな風なのはね、出て行った父親のせいなのよ。あの男のせいで、男が嫌いになっちゃったのね」

「ちょっと、やめてよ」

「いいじゃない。どうせまだ話してないでしょ。あの人が出て行った理由」

「だからって、今言うことないでしょう」

意思とは反対に声が震えて、そんな私を逸也が目敏く見ていた。母は少し酔っているのかもしれない。そのうえ今朝は、昨日はなかった翳りが目の下に鎮座している。そこには疲れと、苛立ちのようなものが見えた。昨晚、何かあったのかもしれない。思ったけれど、からだの戦慄きは納まってくれない。

「いつ言ったって一緒じゃない。あんたは変わったわ。イツちゃんだって、不思議に思ってるでしょう。水穂に何があったんだろうって、思ってるわよ、ねえ？」

「ああ……まあ、そうですね。でも、彼女が言いたくなかったときに聞きますから」

逸也はずるい言い方をした。私はそれを、心の中で責めた。

今日は、帰ってすぐ逸也の体温が必要だった。変わってしまいそうなからだを繋ぎ止める熱が、なくてはならなかった。逸也は何を言われなくてもそれに気づいて、私を抱き締めなければならなかった。いつもならそうしてくれる。いつものように何も聞かず、何も知りたがらず、暗黙の了解を守ってそうしてくれる。それなのに。

裏切りに似た怒りが湧いてからだ中が燃え滾り、堪えきれずにダイニングテーブルの上のものを思い切りなぎ払った。林檎や玉葱がごとごと落ち、卵もペシャペシャと情けない音を立てて床に流れだしていった。水につけていた米も、床にぶちまけられると同時に、まるで波が岩肌を打つような音を立てた。釜だけがいつまでもゴウンゴウンと鈍い音をさせて揺らいでいたが、それもやがて止まった。逸也はさすがに驚いた表情を浮かべていたが、母だけは未熟なものを見るような目で私を見ていた。

「何よ、馬鹿ね。冗談じゃないの。ムキになって」

「冗談？」

「水穂ちゃんが言わないことを、あたしが言うわけないでしょう」

その甘えた声に、^{おさきふうこ}小崎風子というやけに大人びた女の子のことを思い出した。小学生のときに同じクラスにいた女の子だ。修学旅行の夜、好きな人を告白するという恒例行事に嫌々参加した次の日、私が口に出した男子の名前がクラス中の人間に露呈していたことがあった。小崎風子が吹聴したのだというのは明白だった。彼女が、団体行動を好まず輪を乱しがちな私を嫌っているのは、専ら有名だったからだ。悔しくて校舎裏で問い詰めた私に、彼女は狡猾な顔で言った。「笠原さんの秘密を、私がばらすわけないじゃん」と。ニタニタと八重歯を見せて嘲笑した。まるで相手が自分の玩具というような顔をして。

今、目の前で目を細めて笑っている母は、その小崎風子によく似ていた。

「言うでしょ」私が呟くと、母はゼリーみたいな目をこちらに向けた。「あなたは言うよ。だって、あの日、私を早く帰らせたときと、同じ顔してるもん」

命が尽きても言わないと心に決めていたことが、飛び出した弾丸が止まらないのと同じように母に向かって飛んでいった。ほんのり赤らんだ母の顔が強張って、唇が震えたのが見えた。私は逸也の方に向き直り、暴発に任せて冷えた言葉を吐いた。

「イツちゃん。お父さんが出て行ったのはね、浮気をしたからなんだよ。学校から帰ってきた私が、父と若い女の人がこの床の上でセックスしてるのを見てから全部壊れたの」

逸也がよく分からない顔をして私を見ていた。きっと本人でさえ、自分が今どんな顔をしているか分かっていないのだろう。しらけた気持ちで彼の視線の先を追って、そこが米やら水やら米やら卵やらでどろどろになっているのを見た。

「何、言ってんのよ。あたしはなんにも悪くなんかないわ！あの人にはあたし達を裏切って、二十も歳の若い女作って勝手に出て行ったんじゃないの」

「違う。先に裏切ったのはあなただよ。私をだしにして、家族を壊した。私は絶対に忘れない。あの日、私を早く帰してあの現場を目撃させたことも、お母さんがお父さんを殺そうとした日のことも」

同時に母の、悲鳴にも似た泣き声が部屋中に広がった。彼女は少女のように蹲り、顔を覆って泣いていた。私はそれを冷たい気持ちで見下ろし、当時、父の不貞を目撃したときの自分の姿をそこに見ていた。母が父の不貞の瞬間を視認するのを避けたのは明白だった。初めて学校に電話を掛けてきて、早く帰ってくるよう急かした。どうして？ と聞く私に、彼女は理由を言わなかった。何でもいいから、とにかく帰っ

て来てと言った。そうして彼女はまず、私に足を踏み入れさせたのだ。それでいて、全てが壊れたことを受け入れられずに心中しようとしたこの弱い女を、父に対して同様、私は憎んでいる。

与えられた現実を、納得し、受け入れようともがく逸也が視界の端に見えた。古びた、汚れた床から目を逸らさずに、いる。あの日の父の姿をあえて想像して、許そうとしているのかもしれない。彼は、父にとっても可愛がられていた。彼の父親は小さい頃から海外赴任をしていたから、彼にとっては私の父の方がずっと父親像に近いかもしれない。そのことを失念したわけじゃなかったのに、こんな風にぶちまけてしまったことを私はもう深く後悔していた。

関谷先生だったら、今の私に何と言うだろうか。

不意に思うと、すべてを受け入れられ、与えられ、そして奪われた過去が津波のように押し寄せて、たった一年だけのあの地獄と背中合わせの極上の時間が、私を浚った。

突然、もういいか、という気になった。絶望はなかった。冷静だった。振り向いて包丁を手にした。日々の命を支えたそれは、いつもと同じように何も言わなかった。だから調子に乗って身を任せて、昔と同じことをしようとした。

「水穂！」

そのとき名前を呼んで走り寄ってくるものがあつた。それは私の手を上から強く押さえつけるように握り、それからもう一度私の名を呼んだ。流れを堰きとめられ無力になった私は、その手を辿って逸也の顔を見上げた。目と目が合うと、彼は私の背中にぴったりとからだをつけ、まるで捻り潰そうとするかのように腕ごときつく抱き締めてきた。そうされると痛みが熱を生んで、冷たく鈍感になっていたからだが温かみを取り戻すのが分かった。これを待ってたんだ。私は逸也に体重を預け、赤ん坊のように目を瞑って思った。息さえ苦しくなるその強さは、私から殺意をひりださせた。それは床に流れ出た様々な命と一緒に、やがてその境界はすぐに分からなくなった。

朦朧とした私を連れ出し車に乗せた逸也は、ただひたすら走り続けた。

どれほどの時間が流れただろうか。私はいつの間にか眠ってしまっていたらしかつた。

やがてほとんど真っ暗な暗闇の中に車が止まると、逸也は「長野まで来ちゃったよ」と言って、子供のように笑つた。からだがかうして遠くの場所に運ばれても、心の中はまだあの台所にあつて、どろどろとしていた。手がべたべたして気持ち悪いと告げると、「折角だから蕎麦でも食つて帰ろうぜ」と逸也は言つて、今度はのんびりとアクセルを踏みながら闇を抜けた。

三十分ほど走つて、まだ営業している蕎麦屋を見つけ、私たちは連れ立って中に入った。さすがに老舗といわれるような蕎麦屋は営業を終えてしまつていて、入つたのはファミレスのような佇まいでやけに照明が明るく、「信州そばあります」と看板に銘打つているほどだつたのに、メニューを広げるとまずすき焼き鍋やカレーうどんが載つている、そんな店だつた。

私たちを迎えた若い店員が注文を取つて去つてしまうと、やけに周囲が閑散とした。あれ、と思つて見渡すと、客は私たちの他には誰一人入つていないようだつた。

化粧室に立つて手を洗い、席に戻ると、すでに注文した天ザルが運ばれていて、逸也は先に食べ始めていた。

二人の蕎麦を啜る音と、場違いな有線放送だけが鳴つている。九十年代に流行つた夏を象徴する歌が突拍子もなく流れてきて思わずぼうとなつてしまい、気づくと天ぷらが天つゆに浸かつて、衣がどろどろになつてしまつていた。

「何やつてんだよ」

逸也の笑い声がして、いつもとちつとも変わらないその声を聞くとどうしてか心細くなり、今すぐ私の胸に顔をうずめて欲してほしいと思つた。

「ごめんね。さっきも……びっくりさせてごめん」

「正直、驚いたから、まだ上手く飲み込めてない」

「お父さんのこと、イツちゃん、大好きだったもんね」

「大好きだったのはお前だろ。ご近所中に知れ渡るくらいファザコンだったじゃねえか」

「ずっとむかしの話だよ」

そう言うと、それまで窓の外を通り過ぎていく車のテールランプを追っていた逸也の目は、何も追わなくなつた。通り過ぎるライトバンのライトも外灯の明かりも、目は何も映していないようだった。その横顔は自信がなさそうで、まるで置き去りをくらった少年のようだった。かわいそう、と突然思った。かわいそう、この人かわいそう。何度も思ってみる。そのうちそう思うことで、私は逸也との脆く優しい関係を取り戻そうとしているのだと気づいた。あさましい行為だと分かっている、あの台所で彼が私よりも狡さを取ったことが、私をしたたかにさせていた。

昨晚感じた彼の変化を忘れた訳ではなかった。逸也は再会した当初よりも、私を強く束縛するようになっている。だから私は昨日、この人の望むものを差し出せなくなれば私は放られるだろうと怯えたのだ。そのくせ、いざ抱き締められるとがらんどうの自分を持て余すしかない。それでも私はこの人かわいそうと思いつけた。そうしなければ私はまた、あの地獄へ舞い戻ってしまうだろう。皮膚を刻まれ続けるような痛みが待っていると知っていても、きっと私は自分から戻ってしまう。あの人の、黒い影を求めて。

「で、^{よしゆき}吉行さんは、今どうしてるの」

父の名を久しぶりに聞くと、からだの中がぬるぬるして落ち着かない、変な感じがする。「知らない。出て行ったきり、連絡ないから。生きてるのかも分からない」

「そう」

「そうだ、さっきはありがとう。私、イツちゃんがいなかったら今頃少女Aになってたところだったよ。キレる十七歳世代だし、ニュースになったらそれなりの扱いを受けたかもしれない」

ふざけて口にしたら、起きていたかもしれない現実がやけにリアルなって、からだがぶるっと震えた。包丁の柄の硬く冷たい感じや、それでいて吸い付くようにしっとり馴染む感じを思い出すと、酸っぱいものが喉をせりあがってくる。

「あのさあ、殺したって、憎しみなんか消えないんだよ。消えるわけない。お前さ、憎み続けるなんて馬鹿なことはやめて、自分の人生を生きるよ。もう十八なんだから、どこへだって行けるんだ」

あまりに断定的な口調にどきりとする。でも逸也の言っていることはとても正しくて、だからこそ苛立つ。いや、実際はそうでなく、同じく駄目になった人間同士と思っていたのに、突然指導者のような口をきかれたことに苛立っているのかもしれない。

「分かってるよ。私だってちゃんと考えてる。大学には進まずに、地方へ行って就職しようと思ってるの」

「ほう、そうやって俺からも逃げるのか？」

逸也は短く笑い煙草に火をつけると、あまり美味くなさそうに吸い、ふうと煙草の煙を吐いた。俯いた彼のまぶたに、それまで隠れていた奥二重の線が現れた。目つきが悪いせいで悪い男に見られる逸也が、途端に弱弱しくなった。

「そんな言い方をしないでよ。どこへでも行けるって言ったのは、そっちのくせに」

「すまんすまん」

「でも、逃げるつもりはないよ。逃げたらお父さんと一緒になってしまう」

言っただけのもの、それはどこか心許なかった。逸也は煙草を忙しく吸うばかりで、それに対して何も言わなかった。

「千穂子さん、今、付き合ってる人がいるんだっけ？」

「ああ、うん。今働かせてもらっている店の常連さん。お母さんはお父さんを責めることばかり言うけど、本当はどちらの浮気が先だったか、わからないんだよ。気づいたときには、お母さんにもそういう人が、もういたの」

「でも千穂子さんは、本当に吉行さんが好きなんだろうな、きっと今でも」

「え、何で？ どうしてそう思うの」

「憎んでいるから」

そう即答した逸也の顔がひどくあどけなかったので、私は思わず目を逸らしてしまった。

「水穂には分かんないか。分かんないよなあ」

視線を戻すと、そこにはもう壊れやすそうな奥二重の線はなく、いつもの切れ長のすっきりとした鋭い目があった。今のは何だったのだろう。不意に、別れたという女のことを聞きたい衝動に駆られたが、鈍感なふりをして堪えた。

逸也の言ったことの意味は分かっていた。愛しているから憎む意味は痛いほど理解している。でもそのことを考え始めると、関谷先生のおいが鼻先に漂ってきてしまい、せっかく戻りつつある冷静を再び失ってしまいそうになる。どうしてこんなにも憎んでいるのに、鼻はにおいを求めてひくひくと動いてしまうのか。再び蘇らせないように心を閉じたとき、

「もういいの？」

私の、まだたっぷりと残った天ザル蕎麦に目をやって聞く逸也に向かって頷くと、彼は煙草を神経質に揉み消して食べ始めた。水分の飛んでしまった麺は固そうで箸では取りづらそうだったが、勢いよく麺を啜る音が響くと気持ち良かった。

「逸也が食べてるところ、好きだなあ」

「見るなよ、あんまり」

逸也は照れて嫌がったが、私はいっそう身を乗り出し、赤黒い口の中に蕎麦が運ばれていくところを観察した。まるで荒々しい口づけのように物を食べる人だった。腹が減れば摂取するというだけの本能の行為なのに、まるで挑むように食いかかってくる。食べ方が汚いのも、ただ豪快なのでもない。見ていると、からだのずっと奥のほうを風が駆け抜けていくように、ざわめく。そして何故だかせつなくなってくるのだ。

ほとんど二人分を平らげた逸也に続いて席を立った。時計を見ると、もう十一時半を回ろうとしていた。外に出ると、気温は随分下がっていたが、肌に張りつく湿気が満ちていて鬱陶しさを感じる。もうすぐ梅雨が明けて、また夏がやってくるのだ。季節の連れてくる空気の匂いや、むんとした湿気の記憶が、いちいち感傷を連れてくる。勝手に集束していく記憶を崩そうと、濡れた犬のように頭を振って、急いで車に乗り込んだ。シートベルトに手を伸ばし、差込口に向かって伸ばす。上手く入らず、いつまでもカチカチとやっていると、突然逸也の長い腕が私の肩をんだ。そのまま引き寄せられ、頭の天辺に逸也の鼻が潜りこんでくるのを感じる。頭蓋を通り越して、息を送り込まれているようだ。眠気を誘う、あたたかいからだだった。彼は何も言わずに、もう何十年も前からそうしてきたようにきつく私を抱きしめて、皮膚と皮膚をこすり合わせ、深くにおいを嗅いだ。そうする彼を、私も抱いた。背は高いのに、力を入れると骨のかたちまで容易く覚えてしまえそうなほど細い。

「水穂。どこかへ行くときは必ず、まず俺に話して」

「うん。絶対、そうするよ」

「お前さ、本当は」

私が促すと、だが逸也は小さく首を振って、「いや、何でもなし。あんまり遠くへ行くなよ」

「何それ。子供じゃないんだから」

「真面目に話してんだ、馬鹿。苦しくなったら、俺の家に来たらいいから」

私は返事する代わりに彼の鉄骨みたいなからだを熱心に撫で続けた。Tシャツの薄い生地越しに感じる硬い皮膚と汗のにおいで、まるで獣を抱いているような気になってくる。

やはり、もう限界なのかもしれない。ふと、そう思う。逸也の熱は、時間が経てば経つほど心地良いものから苦しいものになってしまう。今や空っぽの私に、彼の熱は少し熱すぎる。そう感じてしまうのは、彼が私に求めるものが強まったからだろうか。それとも、関谷先生が戻って来たからだろうか。

私と逸也は同じ秘密を抱えている。だから私たちは肝心なことは何も言わず、二人して悲劇のつまんだ殻の底に漂っている。あまりの孤独に耐え切れなくなったとき、触れ合える距離にいて欲しいと思うから、口を嚙み続けているのだ。過去も未来もどちらも不透明にしたまま、お互いがお互いを利用しあっている。

けれど、近づくと浮かび上がってくる。記憶の中の、危険なところのない絶対的に安全だったイツちゃんは、もうどこにもいない。きっと一志に言われなくても、初めて彼に抱き締められたときから、分かっていた。髪を撫でる手も、私をきつく抱きしめる力も、全てがすでに確立されたものだった。当然それは、彼が初めから持っていたものではない。私と再会するまでの過程で、誰かのことを悦ばせるために、彼が探して身につけてきたものだ。そうして今、目の前にいる北川逸也という人が出来上がった。私にはそれが痛いほどよく分かっていた。

だからこうして私に触れる彼も、恐らく分かっているはずだ。私にもまた、夢中で愛した人がいたということ。私から生まれる体温の熱さも、背中に回す手の強さも、やはり過去に生まれ、染み付いてできたものだという。そして、私がまだその人を忘れていないということも。

逸也のずるさを責めながら、だが私も逸也に過去を訊ねる勇気がなかった。聞けば、必然的に自分の過去も話さなくてはならなくなるからだ。このままではいけないと思っていながら、過去に縛られていることを認める度胸がない。こうしてずるさに甘えているから、心がどんどん干上がって空っぽになっていくのかもしれない。

やがてどちらからともなく離れ、逸也は来たときと同じように、何も言わずにエンジンをかけて走り出した。

道はただひたすら真っ直ぐで、所々に建つ飲食店やガソリンスタンドは真っ暗だ。フロントライトで照らされる闇ばかり見ていると、進んでいるのだから戻されているのだから分からなくなる。帰り道からどんどん遠ざかっているような気配に少し恐ろしさを覚えた。逸也がいるのに、何が怖いというのだろうか。誰も私を待つことのない町になんか、このまま帰らなくてもいいと思っているほどなのに。

やっと対向車が現れ始めたとき、関越自動車道の入り口が見えてきた。蒸し暑さに窓を開け、等間隔に並んだオレンジ色のナトリウム灯が次々にやってきては通り過ぎていくのを見ていた。そのとき、後方から見覚えのあるかたちをした車が追い抜いていった。闇に紛れる真っ黒な車。大きな車体が風を切って、滑るように去っていく。その瞬間、身を乗り出しかけ、だが逸也に何ごとか叫ばれながら引っ張り戻された。不安定に揺れた車体を慎重に操作しながら、逸也は路肩に車を寄せた。

「危ねえな！ 何やってんだよ」

狼狽した声で言われたが、答えられなかった。

あの車、あの大きな黒い車は関谷先生のものだ。

一瞬見えたナンバープレートも、運転者の影も、関谷先生のものとはまるで違うと分かっているのに、車種が同じと言うだけで、条件反射でからだは反応してしまう。

今朝、細雨の中、あの路地裏に停まった車から飛び出してきた関谷先生が、目の裏で濃くなる。ふやけつつあったものが際立ってくる。

叫びたかった。地鳴りのような声を上げ、この激しい鼓動も、強まったり弱まったりする記憶も、すべて消

し飛ばしてしまいました。しかし押さえつけられる。薄れていこうとするものを守ろうと、忘れようとする軽薄な自分に、もう一人の私が全身で対抗している。

「一体どうしたんだよ、水穂」

戸惑いと不安に満ちた声だった。

「何でもないよ」

続けて謝る。ごめんね、という声は上ずって、それをハザードランプの点滅音が笑った気がした。恐る恐る逸也の方を向いたが、視線は合わなかった。運転席に沈みこむように座って、分からないところを見ている。暗い横顔だった。痩せて肉が削げ落ちたところが、養分を求めるように暗闇を吸い込んでいる。癖毛の厚い前髪のせいで目が隠れるから、余計に暗く見えた。

顔を戻すタイミングを失ってしまい、穴が開くほど見つめていた。尖った顎の下に、剃刀負けした赤い傷を見つけた。引き締まった首に、大きな喉仏が主張していた。それはまるで寄ってくるものを阻むように、内側から小さな抵抗をしているようだった。そんな風に彼をかたち作る特徴はすぐにくいつも見つかった。けれど、そこには私に帰り道を教えてくれるものはない。彼の特徴を見つける行為は、私を迷子の子供にさせるだけだった。

移動手段といえば自転車の、ただの高校生の私にとって、ここは途方に暮れるほど遠いところにある。その距離は私を一時強くさせたけれど、過去はいつでも穴倉に寝そべる獣のようにひっそりと息をされていて、唐突に目を覚ますものらしい。

ここじゃない。ここじゃないんだ。

たった一年間のあの時間が、私がこの世で一番帰りたくなくて、一番帰りたい場所なのだ。

そのとき、私の諦念を咎めるように逸也の手が私の手を強く握ってきた。

ここを出て、自由になろうとするつもり？

骨ごと潰しそうな力は、きっとそう言っていた。血の気の失せた逸也の手に、自分の手を重ねた。すぐにはなかったけれど、やがて少しずつ彼の力みは消えていった。二人してまったく別のところを見ているというのに、触れ合うと、たちまち溶けた。綺麗には混ざりあわないけれど、ひとりではなくなる。奪ったり憎んだりするよりはずっといい。そうだ、帰りたくても、もうあそこは私の帰る場所ではないんだ。裏切りをするあの人よりも、逸也と一緒にいる方が幸せに決まっている。

「大丈夫か？」

「うん」

漠然とした確認をしあって、車はまた帰路についた。少しずつ速度が上がっていく。僅かに開いた窓から、湿った生温い風が入り込んできて、不意に女の甘い香りが漂った気がした。けれどそれはすぐに行き場を失い、消失した。

雨の中を掻い潜るようにして、視聴覚準備室からギターをつま弾く音が聞こえていた。

放課後が来てはこの南京錠で閉ざされた屋上の前の階段に逃げ込む私の元に、それは今日も届いている。

関谷先生せきやの鳴らしているものだという事は、最初から分かっていた。彼がここでこっそりギターを弾いているのを知ったのは四月、高校に入学してすぐのことだ。

まるで独り言に似たその音は、時折雨のように曖昧になったり、何かを軽薄に破り捨てるような音になったりする。演奏されている曲は、ビートルズの「Something」だった。ずっと何という曲なのか判然としなかったのだが、家でたまたまつけたラジオで曲名を知った。

そのどこか淋しい音を聞いたときから、私の中で関谷先生は絶対的なものになった。夜の校舎に作り出されるそれは、冬の朝の布団のように私を離れがたくさせる。普段、教壇に立っているとき以外のことなど想像も出来ない彼の、こうした秘密の姿をきっと私だけが知っているという興奮に、いつもからだか震えた。早く帰らなくては。思うのに、あと五分、あと三分とからだかいつまでも離れない。そうしているうちに、突然音が止んで、ほとんど同時に引き戸が開く音が薄闇の中でした。逃げ遅れて中途半端に腰を浮かせたまま固まっていた私を、関谷先生はすぐに見つけた。

ギターを手にしたまま、薄暗い廊下に出てきた彼は、私を見て腕時計に目を落とし、それから「俺の時計は壊れていないと思うけれど」と言った。授業のときとは違う、低い、寝起きのような隙のある声をしていった。

「すみません。でも雨が降っていて、自転車じゃ帰れなくて」

「通学バスがあったでしょう」

「バスには乗り遅れて」

最終バスは七時で、部活もしていない私が乗り遅れるわけはなかった。その嘘を見抜いたのか、彼は呆れたように「ふうん」と言い、だがすぐに私を見て表情を消した。

「な、何かついていきますか」

「ああ、いや。君、随分長い距離を学校まで来ているよね？」

「どうして知っているんですか」

「毎日、必死に自転車を漕いでいる姿を見かけるから」

関谷先生が私のことを知っていたという事実に、鼓動が、今初めて動き出したというように大きく、激しく鳴った。同時に羞恥が襲って、私は頬に手を当て、俯いた。

関谷先生は「困ったなあ」と呟きながら外に目をやり、まだ雨が窓を叩いているのを見つめた。彼を困らせていることやこの気まずさに耐えきれなくなって、

「雨がやむか、せめて小降りになるまで待ってみますから。すみませんでした」

「でも、もう学校にいては駄目だよ。生徒が帰らなければいけない時間はとうに過ぎているし」

「あ、そうですよね。すみません」

慌てて謝ると、関谷先生は息を漏らすように笑った。

「そんなに恐縮しなくていい。いかにもなことを言ったけれど、俺の勤務時間も本当のところはもう終わってるから」

そう言って、ギターを掲げてはにかんだ。大人がそんな風に笑うのを初めて見た私は、彼の顔から目が離せなかった。

「俺が夜の学校で遊んでいるのは駄目なのか」

私のしつこい視線に咎められていると勘違いしたのか、関谷先生は「笠原は厳しいな」と困ったように笑って言ったので、私は驚いてしまった。

「私の名前も知っているんですか」

「君は有名人だよ」

「有名人？」

「あんなに遠くから自転車通学しているのは、この学校に君と、それから十組の勝浦だけだから。教員の間では根性がある二人ということになっている」

「そうだったんだ……」

気まずくなって視線を外に移すと、それまで窓を叩きつけていた雨がだいぶ弱まっているように見えた。

「あ、雨、弱くなったみたい。帰ります」

「まだ降っているんじゃないか」

そう言って窓ガラスに近づいて映った彼の顔はまるで大学生みたいにあどけなく、私は勝手に高揚していく感情を抑えきれなくなって、

「でもこれくらいなら何とか帰れますから」

早口で言った私に、関谷先生は「うーん」と細く唸り、突然私を振り向くと、

「俺が車で送っていくよ」

「そんな。悪いからいいです」

「いや悪くないよ。それより、あの距離をこの雨の中帰ろうとする人を送り出すのは、さすがに出来ないだけだから。生徒に何かあってはこちらが困る」

すぐに首を縦に振るのはえげつない気がして、散々迷ったふりをしてから私はその好意に甘えた。心の裏側では、例え彼が想像もつかないような悪意を持つ人間だったとしても、あんなに優しい音を生む指になら何をされても構わないと思っていた。しかし私はそれを周到に真新しい制服の下に隠し、先を歩いていく彼の後を三步遅れて追った。

車中で私たちは、これまでに観た映画や読んだ本の話、好きな音楽や小さい頃のトラウマのことまで話し続けた。私の家が近づいても、路地裏に車を止めて、まだ話をした。

関谷先生は私が勝手に作り上げていた人物像のそれよりもずっと楽しい性格をしていて、大学時代に彼の作ったという、地上で生きたいと願う鳥と空を飛びたいと願う蟹が神様によって合体させられてしまい、最後には結局元の自分に戻ることを欲し、お互いを殺し合うため不自由なからだで奮闘しようという内容の映画の話には、お腹を抱えて笑った。そんな風に腹の底から笑ったのは久しぶりのことで、そのことに気付いたときにはもう、彼に心底恋をしていて、だからか、私のからだはどこまでも緩んでしまっていた。気付けば父に対して憎しみがあることや母との小さな衝突や、日々生まれる愚痴のようなものまで、そこら中を水浸しにするような勢いで喋っていた。関谷先生は何も言わず、ただ相槌を打ちながら私の話を聞いてくれた。それがとても心地良く、他人に自分の深い部分の話をしたことが初めてだったということにさえ気付かなかった。

「笠原は大人っぽいね。十四も歳が離れているような気がしない」

会話が途切れて、私が車から降りようとしたとき、関谷先生がぼつりと漏らした。その一言にやけに救われたような気になり、同時に私の心臓は破裂せんばかりに高鳴った。その時初めて知った三十歳という彼の年齢も、躊躇するどころか、かえって興味を惹かれた。彼の口にした言葉に言外の意味などないことは分かり切っていたけれど、頭の中で何度もリピートしては嬉しさでくらくらしていた。

だがその夜から一ヶ月ほど、関谷先生とは言葉を交わすことも目を合わせることもなくなってしまった。期末試験週間ということもあってか、彼が視聴覚準備室にギターを弾きにくることもなかった。だから私

の中で想いはどんどん大きくなって、気づいたら私の手には負えないほどの存在となってしまっていた。期末試験が終わったその日はひどく暑く、まだ梅雨の只中にあるなど信じられなくなるほどの、吸い込まれそうな青空が広がっていた。テストは三日間に渡って行われ、最終日のその日は二教科のみで午前中に終わり、昼には帰宅することになっていた。だがどうしても早く帰るのが嫌だった私は、いつものように屋上の扉の前で本でも読んで時間を潰そうかと思っていた。その矢先、突然校内放送で「職員室に来るように」と名前を呼ばれた。教室中の注目を浴び、少し恥ずかしい思いをしていると、友人の杏里が私の席のそばにやってきた。彼女とは同じ母子家庭という境遇で親しくなった。私たちはいつも家事や母との関係に疲れていて、日々磨り減っていく精神や青春そのものを愚痴という魔法で補填し合う、互いに必要不可欠な存在だった。杏里は動くときふわふわと揺れる、短い癖毛の髪を気にしながら、ニヤニヤと笑って、「珍しいね、笠原が呼ばれるなんて。あんた、何やったのさ？」

「いや、何もやってないよ。たぶん進路のことだと思う」

「もしかして、まだ進路表出してなかったの？」

「うん。というかその台詞、たぶんこれから担任に言われまくると思うから、あんまり言わないでくれるとありがたいんだけど」

「って言ったって、もう七月じゃん。進路表渡されたの五月だし。笠原って、見かけによらずそういうとこ雑で強気なんだよね」

杏里の的を射た意見に送られながら廊下に出ると、いつの間にか生徒の数はもう少なくなっていた。ふざけあっている男子が教師に怒られている声はどこかすぐそばでしたが、それもやがて消えて、まるで差し込んでくる太陽光線にみんな溶けて蒸発してしまったようだと思う。

職員室の扉をノックしようと、手を上げたときだった。それが突然ガラリと開いて、同時に男子の笑い声がこちらに向かって飛び込んできた。驚いて動けずにいると、

「あ、わり！」

咄嗟に顔を上げると、細田君が両手を万歳のかたちに挙げて、私とぶつかる寸での所に立っていた。彼の後ろには、同じ軽音楽部のメンバーである男子生徒が二人いたけれど、その後ろで驚いた顔をして立っている関谷先生に、私の目は釘付けになっていた。

「笠原か。ほんとごめんな」

細田君が言って、私も謝って道を譲ったが、その間も視線は関谷先生から離せずにはいた。その前を他の二人が疑問符を顔に浮かべて通り過ぎていくのが分かっていたけれど、どうすることも出来なかった。

「どうしたの？ 誰か呼ぶか？」関谷先生が私をあまり見ずに素早く言った。

「あ、坂崎先生さかざきに呼ばれていて」

「ちょっと待ってて」

関谷先生は手際よく坂崎先生を呼び、それじゃあと私の横を通り過ぎた。そのとき一瞬だけ目が合っ、その瞬間、彼がああの夜車内で見せたような隙のある顔をしたので、私のからだは再び固まった。

後ろで細田君が、「じゃあ先行って始めてるかな！」と関谷先生に向かって焦れたように叫んだ。ああ、テストが終わったから練習をしたいのかなと、のぼせた頭で思っていると、

「悪い！ やっぱり今日駄目だ！」突然関谷先生が私の頭の上で叫んだ。

「は？ 何でだよ！ 意味分かんねえ！」

細田君と後の二人が噛み付くように反論しているのを軽く受け流すような調子で、

「すまん。急用思い出したんだよ。明日こそ空けとくから」

「明日って」細田君は天井を見上げて考えていたが、「休みじゃん！ 創立記念日！」

「どうせ来るつもりでいただろうが」

「ったく、しょうがねえな！ 絶対明日だからな！ 朝から行くからな！」

細田君は関谷先生に指を向けて確認するように言うと、他の二人と文句を言いながら、だが楽しそうに去っていった。ちょうどその時、背後からひどく神妙な顔をした担任の坂崎先生がやってきて、「ちょっと生物準備室で話そう」と言うと、私を待たずにどんどん歩いていってしまった。慌ててそれを追おうとすると、突然肩にずしりとした重さが乗った。すぐに耳元に風が起きて、コーヒーの微かな匂いが鼻腔に入り込んだ。こちらが声を出すよりも先に、「視聴覚準備室に」という関谷先生の早口の声がして、振り向いたときにはもう、彼は職員室の扉を閉めてしまった。

顔だけが別のものになってしまったかのように、赤く火照っていくのが分かった。私は熱い耳に手を当てて、坂崎先生の後姿を、わざと太陽の光が伸びているところを通過して追いかけた。

坂崎先生との面談は一時間以上にも及んだ。坂崎先生は熱血というほどではないが、何事にも熱心に取り組む人だ。だがその熱は時折こちらを困惑させるほど空回り、その回転は先生の納得のいく結果が出るまで止まることはない。そのうえ、回転が速まると短気になっていくから厄介だ。そんな彼を私は思い切り失望させているのだった。

だが本音を言えば、そんなことはどうでもよかった。私が進路表を出さなかったところで、別段坂崎先生が誅首されるわけでもない。出そうが出すまいが、彼はいつも通り給料を貰い、金曜の夜や週末に酒を呑んだり、彼女とデートしたりするのだ。彼が将来はどうするのだどうしたいのだと私を詰問するのは責務上仕方のないことだろうが、それに付き合う義理もない。捻くれながら黙っていると、どうして笠原はそんなに無気力なんだ、と呆れ返るように言われて当惑した。

「私が無気力だと、先生の出世に響きますか」

思わずそんな風に言うと、坂崎先生は憤慨したのか、顔を真っ赤にして「俺がこんなに親身になってやってるのに」と舌打ちした。ますます冷めた気持ちになって、「恩を売られても」と漏らしてしまった。それが何よりの間違いだった。坂崎先生はそれから意地になって、私の将来を力づくでも決めてしまおうと、大学が一覧となっている分厚い本を乱暴に捲りながら、演説のように長い説教を始めた。

ようやく適当な大学名を言って坂崎先生を納得させ、私はカバンを取り落としそうになりながら、急いで階段を駆け上がって視聴覚準備室に向かった。それが見えるところまで来てから、鼻の頭に掻いた汗を拭い、肩までの髪を素早く整えた。弾む呼吸を落ち着かせながら、周囲の音に集中する。ざわめきはまるでなかった。私の呼吸と飛び出していきそうな鼓動の音だけが廊下に満ちている。

準備室のクリーム色の扉をロックし、返事を待つのももどかしくてすぐに扉を開けた。室内は黒いカーテンが閉まっていて暗かったが、カーテンの隙間から差し込む外の光だけはとても眩しかった。

「悪かった、突然」

パイプ椅子に座って本を読んでいた関谷先生がゆっくりと顔を上げ、頬を挟みながら扉の鍵を閉めるように言った。

「遅くなってごめんなさい、坂崎先生がなかなか帰してくれなくて」

「ああ、あの人は融通利かないからなあ」

「あまり仲良くないんですか」

「仲？」関谷先生は笑いながら聞き返して、窓を全開にすると「仲ですか。良いですよ。これでも一応、人間関係は無難にこなしたい方なんだよ」

暫くぶりの先生の言葉遣いに、心臓が高鳴った。

視聴覚準備室は八畳ほどのスペースしかなく、隣の視聴覚室が一望できる横長のガラス窓には黒い幕が掛かっているの、ますます狭く見える。その上、映像機器やスチール棚が所狭しと置かれているせいか、二人の息遣いまですぐ近くに感じた。

「何だか笠原と話をするのは、久しぶりだな」

「あれから一ヶ月ですから」

「そうか、もう一ヶ月も経ちますか」

「私に何か用でしたか」私はいやらしい聞き方をした。

「いや、用というほどのことではないんだけど」関谷先生は困ったように笑い、外に視線をやりながら「どうしていたかと思って」

「どうしていたか、ですか」言われて、馬鹿みたいに関谷先生のことを考えていた毎日を思い出して、嘘を吐いた。「テスト勉強をしていましたね」

「そうか。良かった」

「良かった？」

「あの夜、なんだか俺の個人的な話までしてしまっただろ。不味かったなあとずっと気になっていたんだ。だからきちんと勉強してきてくれて安心した」

不意にこれまで押し留めていた感情の箱が震えて跳ねて、私を内側から叩いた。

好きだと伝えるなら、今なのかもしれない。

急かされるように思ったが、実際、喉をせりあがってくる言葉は何もなかった。顔を見たら頭で考えた言葉など瞬時に意味を成さなくなってしまった。呼べば応えてくれるこの距離にすでに充足を覚えてしまっているからだと思った。それでもこうしてそばに立ってしまったら、胸の高鳴りも愛しさも天井知らずに昇って行って、何か伝えたくて話をしたくて堪らなくなってしまう。この感情をどう言えば表すことができるのか必死に考えたが、結局「好き」という単純な言葉しか見つからない現実にはぶつかっただけだった。「本当は、勉強なんて全然捗らなかった。あの夜のことが、とても嬉しくて、集中なんか出来ませんでした」好きだと言う代わりに、私は続けた。「大人の人にああしてちゃんと接してもらったことがなかったから、すごく救われたんです」

「それは少し大袈裟じゃないか？」

「大袈裟なんかじゃないです。今度のテスト、赤点だったら先生のせいでもあるんですからね」

「いや、本当に悪かった。このとおりだ」

関谷先生はそう言って頭を下げると、ようやく私の方を見て笑った。その笑顔が、一見少年のそれのようなのに、よく見るとそこには純粹さが無いことに気づいて、気づいてしまうと一緒には笑えなかった。顔は笑っているのに、心はそうでない。そこには遠い距離がある。それはそのまま彼と現実の間にある距離のようで、あの日の夜には気づかなかったけれど、関谷先生にはどこかこの現実をきちんと生きていないような感じがあると思った。

「突然だけれど、明日は何か予定がありますか」

「明日ですか。いえ、特にはないですけど」

「じゃあ突然だけど、俺と遊園地に行きませんか」

驚きのあまり何も言えずにいると、彼はもう一度「俺に付き合っただけで、遊園地に行ってくれませんか」と言った。

「あのそれは、どういう意味ですか」

「意味、か。うーん、一緒に行ってほしいと思っているだけなんだが、意味を言わなくちゃ駄目かな」

関谷先生はそう言って俯き、「いやすまん、そりゃ驚くよなあ」と申し訳なさそうに頭を掻いていた。

「それは……デートなんですか」

「いや、そう直球で来られると……」

「じゃあ何なんですか。からかってるんですか？ だって今の流れからすると、おかしいじゃないですか」

「いや、からかっているつもりは毛頭ないです。ただ、俺と一緒に遊園地に行つて欲しいんです」

「だからそうなるに至つた理由が」

そこまで言つたものの、私は一体何を期待しているというんだろうという気持ちになつて、もういいやとばかりに「じゃあ喜んで」と投げ遣りに答えた。

「ありがとう。じゃあ明日十時に、この間別れた路地裏に迎えに行くのでいいですか」

私が首肯すると、彼は「じゃあ明日」と早々と視聴覚室から出て行ってしまった。

私は訳が分からないと思ひながら、だがようやく肩の力が抜けて、ため息と共にずり落ちそうなほど深くからだを椅子に預けた。

次の日、外は火の粉でも降り注いでいるのじゃないかと思ふほどの熱気で、家を出てすぐに帽子を被つてこなかつたことを後悔した。

約束の時間の十分前に路地裏に着くと、関谷先生の車はもうそこに停まつていて、その大きな車は夜に見たときよりもどこか高圧的に見えて、私は少し萎縮した。

即座に助手席のドアを開けるのは憚られて、運転席とは反対側の後部座席のドアを開けようとする、ウィンドウが開いて「助手席に」と言われた。

緊張しながら乗り込むと、だが車内は適度な温度に満ちていて、思わず弛緩しかけてしまう。慌てて「遅れてごめんなさい」と謝ると、

「遅れてないよ、十分も早いじゃないか」関谷先生は狭い道路を器用に曲がると、国道へ向かつて速度を上げ、「笠原はよく謝るね」

「でも、待たせたのは事実だし」

「結構義理堅いね」関谷先生はそうからかうような口調で返して、私のほうをじっと見ると、「ああ、女の子だねえ」

「先生はいつも唐突ですね。言つてることが全然分かりませんよ」

「服を褒めたつもりなんだが」

「分かりにくすぎますよ」

困惑して言うと、関谷先生はハハハと笑つた。

彼の着ている白いポロシャツが眩しかった。下はストレートのブラウンのチノパンにヌメ革のサンダルという格好をしていて、こういうカジュアルな格好もするんだなと思うと、彼の私生活をもっと知りたいと思う欲求が高まってくる。

行楽日和だったが、平日だからか外を歩く人も車の数も少ない。空いてるからすぐ着きそうだなと関谷先生が言つた時、不意に細田君のことを思い出して声を上げてしまった。

「どうした？」

「先生、今日は細田君たちと約束してたんじゃないんですか？」

言うと、関谷先生は明らかに失敗したという顔をして車を止め、携帯電話で細田君に電話を掛け、ひたすら謝り始めた。

「先生は意外とそそっかしいんですね」

電話を切り、再び車を走らせ始めた関谷先生の運転する顔を見ながらそう言うと、

「今日で俺の化けの顔なんて簡単に剥れそうだ」

「剥がれると不味い人格でも出てくるんですか」

「出てくるねえ」

関谷先生はのんびりと口にして、カーラジオをつけた。すぐにビーチボーイズの『フォーエバー』が聞こえてきて、何だかこれじゃあ本当のデートみたいじゃないか、と思つた瞬間、今になってこの状況に混乱

し、どういう態度でいたらいいのか、まるで分からなくなってしまった。

「ねえ、先生。こんなことをして大丈夫なんですか」

「こんなことというのは、こうして二人で遊園地に行こうとしていること？」

「もちろんそうです」

「駄目だろうねえ」

関谷先生がさっきと同じように間延びした声で言うので、

「やっぱりからかっているんじゃないですか」

「昨日も言ったけれど、からかってなんかいないよ。ただ遊園地に行きたかっただけだよ」

関谷先生はそう静かに、けれど断定口調で言うとエアコンのファンを最大にした。車内に嵐が入り込んだような音が舞って、会話は途切れた。いや、途切れたのではなく、強制的に終了させられたのかもしれない。車内に差し込む日差しは殺人的に熱く、どんなに冷気で冷やされても、皮膚が剥き出しになっているところが、じわじわと赤くなった。

どんどん学校から遠ざかっていくのに一緒に居るのは、何だかとても変な感じだった。学校というサークルから外れた私はとても曖昧なものになっていて、気を抜けばからだは透けて、そのまま消失してしまうんじゃないかと思う。

関谷先生が何を思って運転しているのか、想像さえつかない。着ているパフスリーブのカットソーもフレアスカートも、知らぬふりをして冷房に煽られているだけで、私を何者にも変えてくれない。

距離が近づいたのはつい最近のことだというのに、やっぱりこんなのは変だ。こんな風に二人で、しかも遊園地に出掛けるなんて、一体どういう気持ちでいたらいいのか。確かな答えが欲しくて、ついしつこく口にしそうになったけれど、関谷先生の「もうすぐだよ」と言う声に押し留められた。

側道に植えられた、日光を遮る重なり合った葉の緑は綺麗で、伸びた枝の複雑な絡まり方は美しかった。それに目を奪われていると、関谷先生は料金を払って砂利の敷かれた駐車場に車を走らせていき、数台の車が停まっている辺りからは離れた日陰の中に車を停めた。木陰の間から、赤や青のカラフルな観覧車のゴンドラが見えた。駐車場の端には「西武園ゆうえんちはこちら」と書かれた看板が、斜めになったまま立てられていた。文字のペンキは剥がれかけていて、古さを感じると共に、どこかへ迷い込んでしまったというようなざわめきを覚える。

先生がすぐさま車から降りたので、私も急いで後を追った。二人して何も言わずに、遊園地の方へ向かってずんずん進んでいく。私はもう彼が何を考えているのか、考えるのをやめにした。その代わりに、距離がこれ以上開いてしまわないように必死で背中を追いかけた。

ワンデーパスチケットを買いに行った彼が、その一枚を手渡してくれるとき、ようやく私を正面から見た。それは真剣な眼差しで、まるで私の覚悟を確かめようともしているかのようだと思って肩に力が入った。お金を払おうとするとそれを強く止められたので、仕方なく手を引っ込めてお礼を言うと、彼は頷きながら力なく笑って、今度は並んで歩いた。

中に入るとすぐに、百円でのろのろと動くパンダや犬の乗り物がまるで捨て置かれているようにあちこちを向いて並んでいるのに出くわした。懐かしさが込み上げてきて、呼ばれるように小走りで駆けていった。その毛はどれも薄汚れていたけれど、ごわごわしたその感触はまだしっかりと覚えていて、指を潜らせるととても気持ちが良かった。

「小さい頃よく、デパートの屋上にあったこれで遊んだんです。両親が買い物してる間中、いつまでも遊んでた。でもいつも途中で父が買い物から抜け出して来て、私と一緒にこれに乗るんです。おじさんは乗るなよなって子供に詰られても譲らない父が恥ずかしくて恥ずかしくて」

思い出して笑いながら言うと、関谷先生は目を細めながら、もう百円を入れていた。硬貨が落ちる音が

すると少しの間があり、やがてオルゴールの音色で「星に願いを」が早いテンポで鳴り始めた。中の機械が狂っているのか、僅かに音が外れている。放っておくと、一人でどンドン歩いて行ってしまうその速度は、子供のときに感じたそれよりもずっと速くて、何だかおかしくなってきた笑いながら見ていると、そんな私を関谷先生が見ていた。気付いてしまうとどんな顔をしていいのかわからなくなって、なかなか鳴り止まない「星に願いを」に、ひやかされているような気にさえなった。

関谷先生が西の方に見える大観覧車を指差し、

「笠原は高いところは大丈夫？」

「観覧車に、乗りたいんですか？」

「俺は観覧車が好きなんですよ」

「観覧車、私も好きですよ。子供の頃から高いところが好きなんです。だからかよく、廃墟になっている団地の給水塔にこっそり父が連れて行ってきて、不法侵入なんですけど、そんなこともお構いなしに」

そこまで言ったとき、先を歩いていた関谷先生は私をつと振り返り、「お父さんが、好きなんだね」

「そんなこと、ありません。言ったでしょう？ 私は父親を憎んでいるんです」

憤慨して言ったが、考えてみれば先ほどから父の話しかしていない。こんな晴れやかな午後に、何より関谷先生の前で、何故私はあんな最低な男の話を嬉々として話しているのだろう。混乱して、額を手で押さえた。その手を突然関谷先生がんだ。

「誰かに見られたらどうするんですか！」

思わず声を震わせた私に、関谷先生は手に力を入れて、「構わないよ」

「そういう投げ遣りなのは、よくないと思います。それに、私、こういうことに慣れていないんで、やっぱり理由がないと」

「笠原は真面目だなあ」

「真面目とかそういうんじゃないよ」

「じゃあ、はぐれたらいけないから」

彼の手のかたちが私の手に刻まれたとき、俄かに彼を構成する物質や情報が私の中に雪崩れ込んでくるような感覚に溺れそうになった。本当はとんでもなく嬉しかった。関谷先生の予想外の強引さに私は散々理由をつけたがっているけれど、本当は気持ちよくて仕方がない。気を許すと、口から「好き」が零れ落ちそうになってしまう。でもいざ気持ちを伝えたら、目の前で化けの皮を剥がしかけている彼が、何故だか綺麗に消失してしまうかもしれない気がしている。

ああ、この手にずっと触れていたい。思うと触れているそれだけが、この世で唯一自分を守ってくれるもののように信仰し始めてしまう。

余計な感情も何もかもを閉ざして、今日一日だけシンデレラになったつもりでいようと密かに思った。そんなくだらない、幼稚な考えさえ名案だと手を叩きたくなるほど、私は理由も意味も分からないこのデートに浮かれていた。

観覧車のそばにある自動販売機で水を買って、観覧車乗り場に向かった。乗り場には私たちに以外に人はなく、恐らくアルバイトだろう、金髪に染めた髪の毛をいじっている若い女性が、私たちの姿を面倒臭そうな顔で見て、

「少々お待ちくださいあい」

間延びした声はすぐに機械音にまぎれ、彼女はのろのろとした動作で作業を開始した。

やがてやってきた真っ赤なゴンドラに詰め込まれた。正面に向かい合うと膝が当たったが、先生は微動だにしなかった。ゴンドラの中は蒸し風呂のように暑くて、鼻の頭に浮かんでくる汗や、恐らく立ち昇っているだろう汗のにおいが気恥ずかしくて、ぎこちない動きで外の景色に目をやった。

ゴンドラは一定の速さで空に向かって昇っているはずなのに、突然早くなったり遅くなったりするような感覚を植えつける。落ち着かずにいると、多摩湖が太陽の光を反射させ、キラキラと光っているのが見えてきた辺りで、関谷先生が口を開いた。

「今日、君をここに連れてきた理由を話してもいいですか」

あまりの唐突さに彼を振り返ると、光を見つめていたせいで目の前が点滅して、視界が欠けたようになった。齧られたように欠けた先生がどんな顔をしているかよく分からず、私は何の警戒心もなく、少しの期待さえ手にしたまま、頷いた。

「実は、一年前の四月、俺は君に会っているんだ」先生は私の呼吸に合わせて続けた。「駅前のルノアールで」

そう言われて、私の心臓は飛び跳ねた。口から奇妙なかすれ声が漏れる。嫌な汗が噴出してくると白い日差しは消え、目の前が闇を撒かれたように真っ暗になった。突然視力を失ったようになった私に、だが関谷先生は容赦なく畳み掛けた。

「君は中年の男性と会っていた。恐らく、君のお父さんと」

*

一年前、まだ中学三年に上がったばかりだった私は、四月下旬のある日、駅前のルノアールで父と待ち合わせをしていた。会うのは、自宅で父と若い愛人の情事を目撃して以来だった。

水穂に謝りたいんだ、どうしても。

もう別居していた父が母のいない時を見計らって家に電話を掛けてきて、どうか時間を作ってくれないかと言ってきた。私は何か思うよりも先に、いいよと言っていた。視線の先には、出刃包丁があった。私はそのまま昼の十二時に彼と待ち合わせをした。

殺すつもりだった。そこに存在する罪悪感、蟻を踏むのと同じくらい軽かった。私は彼が少しでもあの日の最悪な夜を思い出すように、祝日だというのに制服を着て、通学鞆に包丁だけを忍ばせて家を出た。

喫茶店に着いて店内を見渡すと、父が背を丸めて窓際の端の席に座っていた。その背には、幼い時分に追い掛け回し、抱っこをせがんだ時の面影はまるでなかった。

店内は若い女性客や中年の女性たちのグループ客でごった返していて、流れているクラシックミュージックは彼女たちの声で掻き消されている。私は平和な休日の昼をこれからぶち壊してしまうことを心の中で詫び、声を掻き分けるようにして父の座る席の斜め後ろに立った。外の桜はすっかり落ちて青々とした葉を茂らせているのに、何故か父の肩には桜の花びらが一枚だけ乗っているのだった。黒い長袖のカットソーに、それはよく映えていた。

彼は私に気付くと、まず私が制服であることに怯んで、それから今にも泣き出しそうな顔をして、

「水」

「名前を呼ばないで」

私は冷たく言い放った。とりあえず座ってほしいと言われ、このまま刺し殺してしまってもいいと思ったけれど、最後に何と言って言い訳をするつもりかと興味が出てきて、言われた通りに対面に座った。いつでも包丁を引き抜けるよう、鞆は胸の前で抱えて持っていた。父はそれを一瞬怪訝そうに見たけれど、何も言わなかった。

注文したアイスコーヒーが運ばれるのを待って、父は「お母さんとは、離婚することになりそうだ」と切り出した。

「まだしていなかったの？」

母はもうすでに離婚届を出したと言っていたのに。思っていると、

「そうか……もう知っていたのか。母さんが言ったのか？ もう少し様子を見てからと言っていたのに……。」

それは申し訳なかった。離婚届は、確かにもう出したよ」

この期に及んで嘘について。そんな嘘で、私に対して犯した罪が少しでも軽くなると思ったのだろうか。離婚届がいつ出されようが、もう何も変わらないのに。頭が中心が冷たいのか熱いのか分からないような温度に支配されていた。

「そういえば、お父さんは約束を守ったことも、嘘をつかなかったこともないよね。お母さんの誕生日だって早く帰ると言って、帰ってきたのは結局三日後だったし、数ヶ月前に送ってきたクリスマスカードには、私を世界一愛してるとか書いてあったけど、あれも嘘。愛してたら、こんなことにはなっていないもの。最後に破ったのは何の約束だったっけ？ ああ、思い出した。遊園地に行こうと誘っておいて、やっぱり帰ってこなかったんだ。そのときだって、帰らずにあの化粧の濃い女の人と一緒にいたんでしょ。よくもまあこれだけ嘘を言って生きられるよね」

一旦口を開いてしまうと止まらなくなって、私はとりとめもなく思いつくままに吐き出し続けた。

「愛してるよ、水穂。嘘なんかじゃない」

父は目を細めて、低い地鳴りみたいな声で言った。瞬間、二十も歳の離れた二十四、五歳の愛人と、普段ご飯を食べたりテレビを見たりしている部屋の中で睦みあっていた二人の裸の姿を思い出してしまって、アイスコーヒーが逆流しそうになった。涙目になりながら水を飲み干し、喘ぐように息をした。

「悪かった。あんなものを見せて。でも見られたのがお前で、良かったのかも知れない」

「何言ってるの？」

「水穂に見られたから、お父さん、ようやく終われる。今は分からないかもしれないが、お前ならいつかきっと分かってくれると思う」

「だから、何言ってるの？ 分かる訳ないでしょう？ 父親の最低な浮気現場を見せられて、何を分かれって言うのよ。お父さん、知らないでしょう？ あの日、お母さんから学校に電話があったんだよ。早く帰ってこいって。言うとおりにして帰ったら、お父さんが、あの台所でしてたんだよ。ねえ、これが何を意味しているか分かるでしょう？ お母さん、知ってたんじゃない。自分が鉢合わせするのが嫌だったから、私を使ったんだよ。こういうことの、何を分かれって言うのよ」

「そうか……そうだったのか。でも、どうしようもなかったんだ。もう、駄目だったんだよ、お父さんもお母さんも」

「どうしようもないと、あんなことをするの？ 二人して、私を普通じゃなくして、許されると思ってるの？ 私、一生許せないよ。お父さんのこと、死ぬまでずっと憎み続けるよ」

声を震わせると、父は唇の端を上げて困ったように笑ったので、我慢がきかなくなって私は小さく、だけど激しい振動が起こるようにテーブルを拳で打った。

「いつもそう。お父さんはいつもそうなんだよ。いつも自分のことばかり！」

頭や顔に上った血がごぼごぼと音を立てて、私を真っ赤なもので染めていく。そのせいで、周囲の音が少し遠くに聞こえた。その一方で冷静に包丁を取り出そうとしている自分がいる。

感覚はなかった。腕も指も、どちらの方向を向いているのかさえ判然としない。ここがどこなのかも分からない。どうしてここに父といるのか、どうして父は私を愛しそうに見ているのか。自分が一体こんなところへ何をしに来たのか。何もかも歪んで、早くこんなところから逃げ出したいと強く思った。だがその瞬間、目の前の父の顔が恐怖に歪んでいくのが見えて、ああ、私は包丁を取り出したのだなとぼんやり思った。あとはこれをこの男の首に渾身の力で振り下ろすだけだ。そうすれば消える。派生して永遠に増え続けていく言葉も感情も断ち切れる。

そのとき、父のからだテーブルに突っ伏すように倒れるのが、スローモーションになって見えた。瞬きをした直後に砂嵐に似た喧騒が戻ってきて、父の後ろに座っていた人がしきりに頭を下げているのが視界に入った。下に目を向けると、テーブルの上にグラスが倒れていて、水や珈琲がそこら中を濡らしていた。

店員が慌ててこちらに飛んでくるのが見えて、私は咄嗟に自分の手に視線を戻した。

父を本当に刺してしまったと思った。包丁の柄を強く握り締めている手は、自分の手とは思えないほど骨が白く浮き出していた。だがその刃は全く汚れてなどいなかった。持ち出してきたときと変わらず鈍い鉛色をしたままで、私の顔をおぼろげに映している。

叫びだしてしまいそうな衝動を、息を止め、腹の下に力を入れることで何とか耐えた。そこにあるのは「殺人を犯さなくて良かった」という虚脱ではなく、安堵だった。結局父が生きているという現実、胸を撫で下ろしていたのだ。

店員が跪くと同時に、私は慌てて包丁を鞆の中に深く突き入れ、それから手を離れた。心臓が別の生き物のようからだの中で跳ねて、暴れ回っていた。視界の中で父が濡れたカットソーやズボンを笑いながら拭いており、女性店員が床を拭いていた。彼女は一度だけ、座ったままの私を迷惑そうな顔で見上げたが、動けなかった。テーブルの上でできた黒い液体の池の中に、先程父の肩についていた桜の花びらが浮いていた。そこには儂さも美しさもなく、ただ汚いだけだった。

それからすぐに父の後ろに座っていた人が、立ち上がる拍子にバランスを崩し、父の方に倒れ込んだのだということが分かった。その人はただひたすら謝り続け、去り際、私のところに来て、同じように謝り、だが突然耳元に寄ると「この人は嘘をついていない。だから間違いは犯しちゃ駄目だ」と囁いた。未遂だったとはいえ、父に対する殺意が気付かれていたのではという恐怖と驚きで、からだは容易く石になった。何とか顔を上げたときには、だがその人はもう私のそばを離れ、レジの方へ行ってしまうていた。

*

訳が分からず、放心状態で黙っていると、

「驚いたよな」関谷先生はこめかみを伝って落ちる汗を手の甲で拭い、私の顔を覗き込んだ。「大丈夫？」

「大丈夫じゃ、ないですよ」

「自転車を漕いでいる君を見つけたときは、俺も本当に驚いた」

「でもよく、分かりましたね」

関谷先生は初めて言い辛そうな顔をして、「あの日から、忘れたことはなかったから」

「どうしてですか」

「笠原の言葉を借りるなら、あの日、救われたから、かな」

「それは、どういう」問い質そうとしたとき、不意に鈍器で頭を横から殴られたかのような目眩が私を襲った。「まさか、あのとき、私に耳打ちしたのは」

最後まで言えずに、口を開けたまま肩で呼吸をする私に、関谷先生はゆっくりと頷いた。

「あのとき言ったことは本当だよ」

口を開けたままでいたせいか、喉の渴きを覚えた。ペットボトルの水を差し出されたので、私はそれを遠慮なく受け取って口をつけた。水が喉を下りていくと、地上から離れたところで水など飲んでいることが唐突に受け入れ難くなってきて、からだがどんどん冷たくなった。

「言うつもりはなかった。わざわざ蒸し返すようなことをして君を傷つけたくはなかったし、例え距離が近づくことがあっても、言うまいと心に決めていた。救われたなどと言っても君を困惑させるだけだろう。だから自分の中に葬るべきだと思っていた」

「じゃあどうして、こんなところで私に話したんですか」

「この間、車の中で話をしたとき、君がまだお父さんを憎んでいるのが気に掛ったから」

言われて、口の中に苦い味が広がった気がした。舌を噛んで苦味に耐えるが、それは痛みよりも早く私の口内に広がり、やがて全身に回った。

「勿論、君とお父さんの間にあったことは、あの日盗み聞いてしまった表面的なことしか分からない。でも、

表面的なことでも十分、君のお父さんがしたことの惨さは分かっているつもりだ。けれど俺がああとき君に言った言葉に嘘はない。君は、ちゃんと愛されていたと思う。だからといって君のお父さんのしたことが許される訳ではないが、愛されていたという事実で君が悪夢から解放されることがあるのなら何度でも伝えたいと思った。ここに誘ったのは、あの日、笠原がお父さんに言った言葉がずっと残っていたからだよ」「何なんですか。放っておいて、お願いだから」

私は外に視線を移して答えた。多摩湖はもう完全に姿を見せて、白鳥のボートが何隻か浮かんでいるのが見えた。園内を歩くまばらな人のかたちも、まだ認知出来る。

私にとって、遊園地は特別な場所だった。

父の裏切りによって、思い出の場所はほとんど汚されてしまったけれど、遊園地だけはスノードームの中に降り続ける雪のように、楽しい思い出ばかりが色褪せずに残っていた。だからこそ、最後にした約束が果たされなかったことが許せなかった。

それなのに、今日の私はどうかしている。口を開けば父の話ばかりして、それをこの園内に降らせる度、浮かれている。浮かれて、それを見抜かれている。

「放っておいてください」再び言った。「余計なお世話ですよ。今更こんなところに来たって、何も変わらない。思い出して、いっそう憎むだけです」

「もう自分の人生を、好きなように生きていいんじゃないか」

「今更……そんな風に生きることはできません。自分の人生なんて、どんなものかももう忘れまして」

「君は、とても魅力的なのに、勿体ないな。この間、話をしているうちに本当にそう思ったよ。それはもっとがむしゃらに守っていいものだ。それに、今更というにはまだ若すぎるだろう。強く望めば、人生はどんな方向にだって進んでいくよ」

関谷先生は根気強く、私を諭し続けた。それに反発する間、自分がそうした優しい言葉や私を肯定する言葉に屈したりしないように、ただ意地を張っているのに気付かされていた。決して自分が「可哀想な少女」と思って生きてきたわけではない。けれど、こうして大事にされる度、私はいつでも話題の中心でいたがる幼児のように、駄々を捏ねてまあいい言葉を跳ね返し続けてしまう。

しかし、関谷先生の言葉は羞恥にまみれ、身動きの取れなくなった私のからだに響いた。そしてその響きは、私に「もう一度生まれ直せるかもしれない」という期待を与えた。それが指先に触れると、からだの奥がぶるっと震えた。同時に、初めて明確に救いを叫びたがっている自分の、マグマのように熱い思いに気付いて涙がこみ上げた。

「……それには、どうしたらいいの？ お父さんのことは、きっと一生消えないわ。何をしても、何をしても無理なんです。だからこのまま、思い出さないくらい深く沈んでしまうまで、取り出すもんかって思った。重力に任せていれば、きっと腹の底まで沈んでしまうって。でも、本当は違う。私は、こんなところにいたくない」

「助けて欲しい？」

「出たいです、ここから。助けて欲しいです」

先生が一瞬、笑みを浮かべた気がした。その笑みがやけに卑しく見え、臓腑が粟立ち、緊張が走った。何故だかとても恐ろしい気持ちになって、唇を内側に強く巻きこんで、弱い声が出ないように耐えた。けれど次の瞬間にはもう、それが錯覚だったと思うほど先生は優しさに満ちた穏やかな顔に戻って、また寄り添うように、

「ここから棄ててしまえば」

関谷先生はゴンドラのプラスチックを叩いて続けた。「最高部、六十二メートル。ここから投げ棄てれば、恐らくそんな思い出なんてひとたまりもないよ」

「ここから？ 棄てる？」

「そう。憎しみなんか、今ここで棄ててしまえ。持っていたって大事に出来ないのならば、手放す努力をすべきだ。重力に逆らっても。そうする君を誰も責めない。そんな権利は誰にもない」

ゴンドラはもうすぐ折り返しというところまで来ていた。前の空っぽのゴンドラの窓の先には空しくなく、じっと見ているとまるでゴンドラごと空に飛び出していくように見えた。

僅かに開いた窓から、動物の鳴き声のような、女の咽び泣きのような風の音が鳴り響いた。とても高い場所に、私は居た。遊園地は箱庭のように小さくなり、人のかたちを探すのもいつの間にか困難になっている。私のからだは様々な束縛や責任から逃れ、確かに空の上にあった。

耐えても涙が落ちてきて、私は声を上げた。耳を劈く拙い自分の泣き声を聞いたのは、久しぶりのことだった。腹のずっと奥の、湿った昏い穴の底のようなところから染み出してくる出来損ないの声だ。

まるで排泄しているような時間だった。

隠してきた穢れが皮膚に張り付いて、羞恥に塗れている。それでも無責任に浸って感情を吐き出すと、からだが軽やかになるのを感じた。一体何に泣いているのかもはや分からなくなっているのに、皮膚の下の細胞が釜に蒸されたように熱くなると、本当に生まれ変わっていくような気さえするのだった。

声が嘎れ果てて関谷先生の方を見ると、彼は突然ぐちゃぐちゃな顔の私を引き寄せ、胸に押さえつけるように抱き締めた。

「十秒だけ許して」

引き寄せられたことで床に膝をつくようなかたちになったので、ゴンドラが重く揺れた。からだは本当に十秒で離され、ゴンドラはまた揺れた。何一つ生まれる隙はなく、ひんやりとした鉄の床の冷たさのせいで、いつまでも夢の中にいるような気がしていた。

やがて十二時の鐘が鳴るような残酷さで、金髪の女性従業員が前触れもなく寄ってきて扉を開け放った。私たちは追い立てられるようにゴンドラを降りた。

去り際、観覧車を見上げてみた。恐々と見上げたそれは雄大で美しく、私が棄てたおぞましい過去などそのどこにも見当たらなかった。

遊園地から帰ってきたら、気持ちを確かめ合う間もなく、私たちはお互いを求めるようになった。先生がいるときだけ、何故だか私は父のことも家族のことも忘れて、ただの十六歳の女の子でいられた。そんな風になれたのは父の起こした騒動以来初めてで、その興奮と身軽さは私にもう先生がいれば他に何もいらないとさえ思わせた。そばにいて、私を認めて受け入れて、求めてくれるのなら、全て失えると本気で思った。似合わない制服を着ることに何の抵抗もなくなってきた頃には、生まれる欲望を貪りあうように消化するようになっていた。私に向かってくる先生の気持ちを一度も疑うことがなかった。どうしてそれほどまでに彼を信じ、全てを委ねることが出来たのだろうか。ふとしたときに問いは生まれたが、明確な解答を手に入れるまでもなく、触れると、これは私のものだと、初めからインプットされていたかのようにからだの中にじっくりくるのだった。

夢中だった。先生はいつでも、生きているという実感を私にくれた。それに浸ることは、それまで私の目に留まることのなかった多様な可能性が溶けたプールに飛び込むことと同義だった。

そんな風にして一年はすぐに過ぎ、また夏が来た。

その日は、週に一度の約束の日で、私は学校が終わると、杏里の誘いもぞんざいに断って飛び出した。

学校から自転車で十五分ほど行くと、やがて雑木林が見えてくる。

関谷先生の大きな車がやっと通れるほどの、昼でも暗く狭い林道がいつもの待ち合わせ場所だった。地元の人でも、あまり足を踏み入れないのか、誰にも会ったことがない。そこに関谷先生は仕事を早く切り上げて、必ず私を迎えに来てくれるのだ。

着いたらすぐに携帯電話を取り出し、まだ連絡が入っていないことを確認して念入りに身だしなみを整える。そんな風に待っている、この時間が好きだった。早く来て欲しいと喉の奥がひりつくほど焦がれているのに、いっそ来なければいいのにとおももする。この時間を通り過ぎなければ、別れることもない。生まれでてくるものをただひたすら感じて、忠実に待っている。それだけで十分幸福だからだ。

その日の夕日は真っ赤に燃えていた。世界が終わっていくようなその景色を見ていると、時間が動いている感覚がなくなり、ただ嵐の前のような静かな興奮に包まれる。

湿気を含んだ熱が、スカートから突き出た足に纏わりついてくる。雑木林から土のむんとしたにおいが漂ってくる。風に煽られ、葉が擦りあって鳴く。普段はじっとしているからだのずっと奥がうずいて、刺されたように痺れている。母の女の部分を強く嫌悪していたのに、今こうして関谷先生を思って熱くなり緩む部分がそれと全く同じものだと知っている。数十分前まで普通の顔をして制服を着ていた自分がおかしくなるほど、満たされることに飢えている。

一時間半ほど待っていると、細い未舗装路を関谷先生の車が走ってくるのが見えた。午後六時の空はまだ赤いが、私がここに着いたときよりも鮮やかさは失われ、台頭してきた紺色と混ざり合って黒ずんできている。

周囲に注意し、関谷先生と入れ変わりで後部座席に乗り込んで伏せた。彼はその間に私の自転車をトラックに積み込むと、すぐに運転席に戻って器用に車をUターンさせた。

「遅くなってすまん。相当待ったよな」

確かにいつもより待ったけれど、私は身を伏せたまま否定した。「忙しかったんでしょう？ 大丈夫だった？」

「ああ、ちょっと会議が長引いて。でも大丈夫」

そう言う先生の声はぼんやりしていて、ひどく疲れているようだった。いつもなら、こんな風に心配する私を馬鹿にして笑うくらいなのに。心配になって、まだ学校に近いところを走っているというのに、私は顔を上げてミラーを覗き見た。そこに映っていた彼の顔は、これまで見たこともないほどくたびれていて、まるで死人のように色がなかった。これまでも理由の分からない疲れを目元やため息に潜めていることがあったけれど、ここまでどきりとさせられる疲弊を見たのは初めてで、私は簡単に動揺した。

「先生、どうしたの。何かあったの」

「どうしてそんなことを聞くの」

彼の声が車内に広がると胸がざわついて、たちまち乾きが迫ってくるような気配がして力が入った。

「だって、すごく疲れてるんだもん。今日はやめといた方が良かったね」

私が言うと、彼はふっと息を漏らして笑ったようだった。けれど、ミラーに映る顔はまるで泣き出しそうに歪んでいる。私はつい、弾かれたように身を起こしてしまった。

「まだ、だめだよ」

柔く制止されたけれど、ちょうど赤信号になったのを見計らい、身を乗り出して顔を覗き込んだ。今日は帰る、と言おうとして、だが先に頭を撫でられて私の喉は潰れてしまった。

「無理をして。馬鹿だね」

「何が」

「今日は帰るとでも言おうとしたんでしょ？」

「全部、お見通しなのね、いつも」

「ははは、笠原は分かりやすいんだ。どうせ君は帰れない。君が俺を前にしてそんなことできるはずがない」

「私だって、やろうと思えば、出来ますよ」

「無理だよ、笠原には。君には俺が必要でしょ」

関谷先生は即答した。私をいつまでも苗字で呼ぶところも、憎まれ口を叩くところも、普段と何も変わらなかった。それなのに、今日はどうしてだかどんな言葉も枯葉のように崩れ去って届かないという気になった。

「こんな疲れ方をしているのは、初めてだね」

「もう歳なんですよ、俺も。笠原は俺をいくつだと思っているの」

信号が青に変わり、再び車が走り出して会話は途切れてしまった。諦めて後部座席にからだを深く預けると、先生の手が助手席に伸びていくのが見えて、そこに放り投げてあったスーツの上着の胸元をまさぐるのが見えた。

「どうしたの？」

私が聞くと、関谷先生の首のあたりが緊張した。

「何でもないよ」

「何か探していたんじゃないの？ 危ないから、私が探すわ」

「いや……いいんだ」

「何がいいの」

しつこく尋ねる私に根負けしたのか、彼は「やめた煙草をすっかり探していた」と白状した。

「ちょっと待って。私、一度も吸っていたところなんか見たことない」

「昔の話だよ。疲れるとよく吸ってたんだ」

「突然恋しくなるものなの？」

「恋しいわけじゃないよ」

「じゃあどうして」

「紛れるからかなあ」ひとりごとのように言って、突然とりなすように続けた。「今日もお母さんは仕事？」

「うん。店には男がいるからね、毎日張り切ってる。きっと今日も遅いわ」

そう言った私に、関谷先生は「おとこ」と言って鼻で笑った。

「何もおかしいことはありません！ 男は男だもの！ 先生だって驚くよ、あの人見たら。もう四十五になるのに、思い切り女なんだから」

「四十五でも五十五でも、女は女でしょう」

「だって、母親なのに」

「コドモ」

先生はくっくっとおかしそうに笑って、私が「うるさいなあ」とむくれると、フロントミラー越しににやりと悪戯っぽく笑った。そこにはまだ性質の悪い疲れが隙間なく密着していた。

やがて彼の住む五階建てのマンションが見えてきた。だが、いつものようにそのまま駐車場には入っていかず、車はその手前で停まった。不思議に思って沈めていたからだを起こすと、突然後ろを振り向かれて動けなくなった。しかしどんなに待っても先生は何も言わず、ただ半身だけをこちらに向けて、私をじいっと見つめている。まるで値踏みするように、そうかと思えば子供を心配する親のように。

「どうしたの」

「いや」

先生はそう呟くと、駐車場に入ってしまった。

今のは一体何だったのか。こんなことはこれまでに一度もなかった。

驚きを引き連れたまま持て余していると、だがおかしなことはそれだけで終わらなかった。

いつものように近所の視線に用心し、彼が先に部屋に向かうものと思っていた私は、車を降りた彼が後部座席のドアを開けて私の腕を引き寄せたことに、ひどく驚かされることとなった。思わず声を出しそうになった私に、素早く自分の口に人差し指を当てて、先生はそのまま私を引っ張って行った。

そこはいかにも幸せを絵に描いたようなマンションで、周囲にも大小様々なマンションが整然と並んでおり、一つ一つの部屋からは煌々と明かりが漏れていて、その中で家族が団欒している様子がまざまざと目に浮かぶのだった。前から、ここを一人で背中を丸めて歩いていく彼を車の中から見るたびに、私とは切り離されてしまった世界を見ているような気になったものだった。だが今日は、隣に並んで歩いている。これにずっと焦がれていた。けれど実際に手を繋いで歩いていると、濡れた捨て犬と歩いているような、不意に雨のにおいが立ちのぼってくるような感じがある。手の力を緩めたら、そのままふらふらとどこかへ行ってしまうような危うさがある、少し首を突き出して歩く先生に思わずからだを寄せた。そんな私を悲しそうな目で見たとしたら、突然唇を重ねてきた。驚いて顔を見上げると、彼は声は出さずに楽しそうに笑っていた。

「いつも刹那的すぎるよ、先生は。後先のことを全然考えないんだ」

思わずばやいてしまう。それでも関谷先生はにやけて交わすばかりで何も言わない。

時々、私は先生のこうした突拍子のない行動に不安を覚えた。学校の外で寄り添うことを望めば、彼をいつでも無責任にさせるしかないと分かっているのに、彼の読めない行動は追いかけてくるものをただ振り切ろうとしているだけのように思えて、ひたすら悲しい気持ちになるからだった。

二人で滑り込むように玄関に入り、同時に彼は私の顔の下のほうから潜り込むように近づいてきて唇を押し当て、無理やり上を向かせた。

シャツのにおいも、皮膚に乗る熱も何もかもが愛しくて、私は一生懸命舌を動かし、早く先生と同じところまで行こうと焦った。こんなところでひとりになりたくない。抱っこをせがむ子供のように腕を伸ばして、先生の首筋にすがりついた。粘ついた欲が、私の口内で何かを探るように暴れている。爪先立ちになった

私の腰に腕が回され支えられる。でも、先生はまだ納得がいけないというように、執拗に触れている。私の愛撫はとてもそんな風には呼べるものでなく、ただ溺れている人のように、上手く息が吸えずにもがいているようなものだった。与えてもらったものの百分の一も返せないことに苛立っては、思い通りにならないからだなどいっそ打ち捨ててしまいたくなった。

暗い玄関でいつまでも舌を絡めている。うっすらと漂っている食べ物のおいだけが、この部屋で唯一の、先生の生活のおいだった。あとはもう何もなくて、棚に入った食器や台所を見ても、部屋は時間が止まっているかのように恐ろしくしんとしている。そこでは激しい動悸が際立ち、それを感じるたびにますます高揚した。そうしてそのうち、また私の奥があたたく溶け出す。

「先生、はやく」

重なりの合間に喘ぐように言うと、先生は驚いた顔をして、からだをわずかに引いた。唇から唾液の糸が引いて、たちまち切れた。熱が去っていくのが怖くなって、私は先生の皺のついたシャツに飛び込んだ。先生はそんな私の頭をゆっくりと撫でてくれた。けれど私の髪を滑っていくその指先がただのろのろしているだけのように思えて、不安になる。やっぱり疲れているのかな。そっと目を上げると、突然子供を担ぐときのように抱き上げられて、つい彼の首筋に巻きつくように顔を沈めて笑ってしまった。

「何、笑ってるの」

呆れるように言われたけれど、支える手の指先が熱く揺れていたから私はいつまでもくすくすと笑っていた。心配が杞憂だったことに安堵したのだった。

玄関へ続く廊下に、溢れ落ちた欲望が点々と落ちている。外界から離れ、義務や役割が情欲に食い破られていく。そうして私たちは対等になっていく。

ベージュの遮光カーテンの隙間から見える外はもう薄暗く、台所の前にぼつんと置かれた小さなダイニングテーブルやリビングのソファが薄闇の中でぼんやり浮かび上がっていた。

普段ならその、まるで絵の中の死んだ空間に似た無機物の中に自分も入り込むことが嬉しくてたまらなかった。消しても薄れない、父親の残した饅頭たにおいが染みついているあの団地の一室を出て、誰も知らない私にさせてくれるこの場所は、神様の口の中のようなだった。あたたくくて粘っこい。その熱に囚われて、私はどこまでも溶け出していける。

けれど、この日は何かが違った。

ダイニングテーブルもソファもじっと息を潜め、まるでこちらを窺っているような居心地の悪さがあった。落ち着かず、彼の首に回していた腕の力を強めても、彼が私の不安に振り向くこともなかった。

彼は私を抱えたままリビングのそばの寝室のドアを躊躇なく開けた。ふわりと起こった風に、かすかに嗅ぎ慣れない煙草のおいがした。あれ、と思ったときには、からだをベッドの上に横たえられて、制服のボウタイが引き抜かれていた。足と足の間に先生のスーツがこすれて、割り込まれる。再び唇に熱が押し掛かってきて、単体の生き物のように滑らかに動く舌が私の舌を絡めとった。眉間に寄った皺がいつもより深く、闇の溜まったそこにそっと触れたとき、手の自由も奪われた。

先生はじれったそうに私を一息でまっさらになると、硬くした舌で私を探り始めた。もうこれまで何度もしていることなのに、舌先は蛇が這うように動きながら私の隅々を舐めていき、舐められたところは溶けて、かたちを失くしていった。

時間が流れて、ようやく先生は私の中心に身を沈めた。始め、彼の浅黒い肌はかさついていて、どんなに舌を這わせてもちっとも潤わなかった。けれど繋がりが生まれると、きつくなったり弱まったりしているうちに、肌は吸い付いてくるようになった。

先生はいつも少し乱暴だった。乱暴にするのが好きなのではなくて、乱暴にしか出来ないみたいだった。ひたすら私に腰を沈めて、猛っていく。私はそれに全部で挑む。今にも流れ出しそうなほど熱く緩んでも、

振り落とされないように絡みつく。けれど私はかなわない。やはり百分の一も返せないまま、ひとりで先に行ってしまう先生の背中を必死で追っているうちに、結局二人して漂流していく。

この日はそれが一段と際立っていた。どんなに探り合っても、快感が生まれても近づけない。どうしても邪魔をする、壁のようなものが二人の間に常に立ちはだかっている。それは言葉や力を振りかざしてどうにかなるものでないことが何故か分かる。最初は勘だったものが、今では否定できなくなっている。初めてのときから今まで、裸でたくさん絡まった。私はだんだんこつをつかんで、今では溢れてくるものに怯まなくなり、どんなに乱暴にされても崩れない、ただ白くて柔らかいだけだった若いだけの取り柄のないからだにしなやかさを得て、先生のかたちになった。それでも今、掬い取れなかった欲がどこかに流れ落ちていくのを感じている。

埋まらない距離を前に立ち尽くすように、突然関谷先生は揺すぶりを止めた。不安になって目を凝らすと、彼は中途半端に口を開けて、何かに堪えるような顔をしていた。絡めていた手をほどいて汗ばんだ喉に伸ばす。脈に触れると、繋がったお腹の奥で先生が緊張したのが分かって、胸がざわめいた。

「せんせい」

舌が引っかかって、不安が如実に現れてしまった。先生はまるで今にも泣き出しそうな下手な笑みを見せたかと思うと、繋がりを解いて私の上に覆いかぶさってきた。

「ごめん」

「どうして謝るの」

「黙っていることが、ある」

「黙っていること？」

そのとき、「実は、俺は」と言う弱弱しい声と同時に、どこからか鼻を吸う音のようなものが聞こえた。からだが強張って心臓が鳴った。暗闇の中で目を凝らしたけれど、音の出所は先生ではなかった。もちろん、私も鼻を吸ったりなんかしていない。

横たわっているからだに何かが忍び寄ってきて、私を雁字搦めにしたような気がした。それまで舐められていたところがひやりと冷えて、やけに喉の渴きを感じる。

「^{すみよ}純代」

突然、先生が身を起こし、知らない女の人の名を呼んだ。

彼の視線はベッドのそばのルーバー扉のクローゼットに注がれていた。

起き上がろうとすると、それを静止させられ、彼は足元に追いやったタオルケットを引っ張ってきて私のからだにそっと掛けた。視線はまだクローゼットに注がれたままだったけれど、傍らにある手は私の頭に触れていた。頭のかたちを確かめるようにする、いつもの撫で方だった。

そのとき、斜め後ろで扉がレールを滑る音がして、人の気配が強まった。先生がベッドから降りて下着を着け、クローゼットに近づくのが分かった。私は同時にそろそろと起き上がり、タオルケットを顎の下まで引きずり上げて後ろを振り返った。

先生が細い白い棒のようなものを上に引き上げようとしているのが見えた。未知が恐怖を強め、不気味なまでの静けさに急ぎ立てられている。それを早く払拭してしまいたくて、私はベッドのそばのカーテンをつかんで、ゆっくりと開けた。差し込む光に、人のからだ浮かび上がった。関谷先生の手先の腕があって、クローゼットに座り込む髪の長い女の人がいた。そのとき同時に、細い白い棒のように見えたのはその女性の腕だと分かった。

あまりに混沌とした光景に、萎縮していたからだはかえって弛緩して、声が漏れた。クローゼットの中の女の人がゆっくりと顔を上げて私のほうを見た、気がした。その目は涙に濡れて輪郭がぼやけ、まるでガラス玉が嵌め込まれているかのようにどこを見ているのか判然としないものだった。だが、白々しい月明か

りに照らされ暴かれたこの夜の前では、氷のように冷たく見えるその目に射抜かれているようにしか、感じられなかったのだった。

先生に腕を引かれて立ちあがったその人の、真っ青なカーディガンが揺れていた。

純代と呼ばれた女性は思った以上に背が高く、百七十五、六センチメートルはあろう先生と、そう変わらなかった。まっすぐな黒髪と真っ青なカーディガンの下に見える真っ白なくるぶし丈のワンピースが、それを引き立たせている。

「抜け出してきたのか」

先生の静かな、けれど怒りを押し殺した声に、彼女は答えなかった。

「千葉のご両親は」

「知らない。探しているのじゃないの」

まるで年老いた人のようにしわがれた声に慄いた。少し左側に傾いたからだはとても美しいのに、落ちる前髪を耳にかけて瘦せこけた頬が露になると、ますます彼女の年齢は分からなくなる。

「何も言わずに来たのか」

「何を言えというの。何も言えなかったわ」

一体何が起こっているのか。

まるで何も分からないまま、私は窓のそばで小さくなったまま、先生たちを見ていた。臓腑が震えて、風邪を引いたときのように芯が冷えているを感じる。この女性が誰なのか、ということよりも、ルーバー扉、隙間　　そうした情報の一つ一つが作り出す、ひとつの恐ろしい仮説に酸っぱいものがこみ上げてくる。

見られていたんじゃないか、全部　　。

何故だかは分からないが、このクローゼットの中に潜み、細い僅かな隙間から、息を潜めて私と先生が睦みあうところをこの人は見ていたんじゃないか。

そのとき私は、始めに感じた違和感はきつとこれだったのだ、と静かに確信した。

見られているような気配は、当然無機物のものであるはずはなく、本当に人のものだったのだ。

床に散らばった服の山がひどく拙劣で、真剣だった夜もまるでままごと遊びのように思えた。

先生が抑えた声で繰り返し問いかけている。いつからいたのかとか、鍵を盗んだのかとか、もう一緒にはいられないということとか。彼女は私に視線を向けたまま、それに拙い動作で否定したり肯定したりしていた。

前触れなく激しい家鳴りがして、彼女の視線が私から外れた。私はその隙を見逃さなかった。皮膚を強くつねってからだの感覚を取り戻し、床に落ちた制服や下着を素早く手繰り寄せた。それを先生が捉えて、一瞬だけ怯えたような目でこちらを見た。突然のことで私の顔はひきつって歪んだ。けれど動きを止めてしまったら、未だ全貌を現さない怪物に捕まってしまう気がして、すぐに目を逸らし、作業に没頭した。

「琉二は、今じゃあんな風に女を抱くんだね」

どこまでも追ってきそうな声だ。低く、尖った声。タオルケットを剥いで、ブラジャーのホックも留めずに制服のシャツを着た私に、それは刺さった。手を止めて恐々と顔を上げると、だが彼女は声の様子とは裏腹にさめざめと泣いていた。まるでマンホールを押し上げて溢れ出す雨水のように、ごうごうと音がしそうな涙を流している。そのあまりに狂乱的な泣き方に、私はますますここから早く逃げ出すことしか考えられなくなった。

「ねえ、この子となら、子供をつくるっていうの」

「そういうことじゃない。ただ、彼女に救われたんだよ。だから一緒にいたくて、居る」

「こんな、ただの、子供の女に？」

「どうしようもないんだ」先生は相手のからだに刻みこむように言った。「俺はもう、他には何の術も持っ

ていないんだよ」

「分かっているわ。だから来たのよ」純代さんは確信を滲ませて言った。「見ていたら、分かったわ。琉二は結局どこにも行けない。どんなに逃げ出したくても、絶対に出来ない。あなたはこれからどんな女とも生きてはゆけない。なぜなら、あなたは女が、皆、に」

突然声を奪う、乾いた音が響いた。

振り返ると純代さんが左頬を押さえて、床を見つめていた。布を噛んでなかなかチャックの上がないスカートと格闘していた私はその手を止めて、関谷先生を見た。彼は振り上げた右手を、自分の太腿に振り落とし、顔を歪ませていた。

叩いたんだ、先生が。そう思ったとき、けたたましい笑い声が鳴りだした。純代さんが乱れた髪をかき上げ、俯いたままからだ全部を震わせて笑っている。

笑い声に、殴打されているような感覚があった。そのときにはもう、目の前で起こった何もかもについて想像は働いていた。だから私はベッドから飛び出し、玄関に向かって駆け出した。

「笠原！」

先生が私を呼んだが、構わず廊下に転がった鞆を取り、裸足のままローファーをつっかけ、外に飛び出した。

エレベーターの中で靴を履きながら呼吸を整える。しかしマンションから遠ざかろうと走り出すと、またすぐに乱れた。苦しさでどうにもならなくなると栓が緩んで、私は声を上げて泣きだしていた。激しい鳴咽が漏れて、しゃくり上げる情けない音が住宅街に響き渡った。

槐の木々がざわざわと騒いで、まばらに咲いた白い花が揺れていた。まだ七月上旬なのに、気の早い蝉が何匹か鳴き始めている。そのなかを目的地もないまま、ただ走り続けた。だが少しも行かないうちに、肩を強くまれて、引き止められてしまった。バランスを崩し、右足からローファーが脱げ、コンクリートをまともに踏んだ足の裏に鋭い痛みが走った。しかし先生はそんなことには気づかず、私の肩をんだまま、正面に回った。

彼の乱れたシャツや掛け違えたボタン、皺だらけのスーツのパンツに激しい嫌悪感を覚えた。夢中になって欲したからだは恐ろしく、別の男のもののようにさえ見えた。強く噛んだ唇に血が滲む。ぬるっとした感覚に唇が濡れると、目の前のこの人にそこを執拗に舐められた記憶が過ぎった。それがにせものの記憶のようになってたり、そうかと思えば、自分でも説明の出来ない、からだの芯に染み付いた前世の記憶のように、遙かずっと昔からあったような気になってたりを繰り返している。そのなかを凝然として漂っていると、目の前の夜が剥がれていくようだった。

「本当に、ごめん」

何とか顔を上げて見る。関谷先生は私を雑木林に迎えにきたときよりもずっと憔悴し、目の下に出来た隈が今にも彼のからだを乗っ取りそうだった。

「ごめん。笠原」

繰り返されたので、困って、

「何がですか」

「何がって」

「他に、女の人がいたことが、ですか」

言うと、先生は、眉根に深い渓谷を作って黙ってしまった。

ほかの、おんなのひと。

自分の口から出てきた言葉が、ゆらゆらして、足元に落ちていった。途端にまた強い嫌悪がやってきて、私はローファーを履いているほうの足で思い切り地面を擦った。前後に、強く、かたちがなくなるまで、続

けた。

「違うんだ」

学校にいるときのような、抑揚のない声が出た。何を考えているのかよく分からない感情の染み出ない声。それが私の前だけでは甘く、かすれるのがとても好きだった。遊園地からの帰り道、私たちは湯気が互いの存在によって潤うことを知った。それから今日まで、もっとぐずぐずに湿りあうことを欲しがり続けて、ここまで来た。それでも全てを欲した訳じゃない。関谷琉二という人の裏側にあるものなど、知る必要はなかった。からだに触れる熱と、粘ついた欲望さえあれば、それでよかったのに。

「実は、結婚しているんだ」しつこく地面を擦り続ける私の頭に向かって、関谷先生は続けた。「結婚したのは二十三の時。九年前のことだよ」

「また、そんな下手な嘘を」

引きつった顔で笑いながら、卑しい期待を口にしてみた。しかし、そんな願いが掬いあげられることはない。今日は七夕でもなければ、流星の降る夜でもなかった。

先生は私の無様な顔から眼を逸らすと、弱々しい声で言った。「さっきのが、妻の純代だ」

「じゃあ、何ですか、先生はこの一年、ずっと、ずっと私に嘘を！」

関谷先生は肯定も否定もせずに、ただ悲しそうに目を伏せていた。また彼がみすばらしい野良犬のように見えて、ぞっとする。

「大体、黙ったままやり過ごせることじゃないじゃないですか。学校でも、そんな話は一度も」

「黙っていてもらってるんだ。校長が、便宜を図ってくれて」

「どうして」

「彼女は精神病だから」

せいしんびょう、と私が繰り返すのを待って、彼は続けた。「俺がそばにいと治らないんだ。あの人を立ち直れなくなるほど深く傷つけたのは、俺だから」

「言っている意味が、よく分からない」

「彼女は今、療養施設に入っている。昨日から二泊三日の外泊許可が出て、昨日は俺と、義父とのそれぞれの話し合いに当てて、今日は静岡の実家に帰っているはずだった。そこから、抜け出してきたらしい」

「らしい、って。全然分かんない！」

「施設に入って、三年になる。彼女が施設に入ると同時に、義父に離婚してくれと再三頭を下げられたのもあって、それから一ヶ月後、離婚届に判を押して渡した。けれど彼女自身はそれを了承しなかったの、そのままになっていた。昨日は義父に早く届を役所に提出してくれるよう頼んできたんだよ。半ば無理やり。だから病状が悪化したのかもしれない」

「そんな、そんな……何でそんなこと言うの」

「黙っていたわけじゃない。……言えなかったんだ」

私にはそれが嘘なのか、本当なのか、もう判断がつかなかった。ただ私の輪郭だけを残し、まるで竜巻が通り過ぎていったかのように何もかもがなぎ倒されてしまったような気がした。私の中も、私を取り巻く外も空白になってしまうと、確かに睦みあったことも、覚えた彼のかたちも、もう忘れてしまった。

「本当は分かっていたの？」

「何を」

「先生は、あの部屋にあの人がいたことを、本当は最初から知っていたんじゃないの」

沈黙が続き、恐る恐る顔を上げたとき、だが目の前の光景は思っていたものとはまるで違っていた。彼が緊張した顔を力なく私から背けると、自分の口から出た最低な言葉が奇しくも正解を言い当ててしまったことに気付いたのは、ほとんど同時だった。

「その通りだよ」先生は乱れた前髪をかき上げ、地面に向かって長い溜め息を吐いた。「部屋に残った煙草の臭いが気になっていた。純代が、吸うんだ。寝室に入ったとき気配がして、いるな、と分かった」自分から張り裂けるような声が出たように感じたが、実際には息をすることを忘れてしまっただけだった。今にも潰れそうだった胸に慌てて酸素を詰め込むと、胸がひどく痛んで咳が出た。粘ついた唾液が口の中で絡まって、恐怖を覚えるほど「汚い」と思う。そのとき唐突に、父と若い愛人のセックスを見た十五歳のあの日に飛ばされた。目の裏にこびりついた純代さんの目が、父と睦みあっていた若い女の恍惚とした目と重なって、全身に鳥肌が走った。

同じことをしているのか。

あの日の父と同じ、この世で一番愚かなことを。

からだは石のように硬くなって、肝が冷えた。冷や汗が噴出し、千の針で突かれるような痛みと吐き気がやってくる。そして彼もまた、自分と同じ罪を抱える人となったことを、私はぼんやりと理解した。だが、理解はしても、簡単に受け入れられない。遊園地で棄てたはずのおぞましい過去が、すぐそばで息を潜めて、忘れようとしたことの罰を与えようと機を窺っているように感じた。

「分かっている。俺が君にどれだけ酷いことをしたのか」

「どうしてですか。先生は知っているじゃないですか、私が過去に何を見て、何を憎んでいるのか。それなのにどうしてこんな、父がした裏切りと同じことを」

「俺のものにしたかったんだ」

「何言ってるの？」

「俺の一部に」

元々その先を言うつもりではなかったのか、それとも意図的に言葉を止めたのか、関谷先生は不自然に黙ったまま、だが手を私のほうに伸ばしてきた。それは父の裏切りの記憶と同じように、私を地の果てまで追いかけてくるような滑らかさで伸びて、私は思わず数歩後ろに退いた。彼は淋しそうな目でそれを追って、だがまたゆっくりとその手を伸ばしてきた。その甲が頬に触れたとき、彼の指から自分のにおいがした気がして、どうしようもない憎しみに囚われた。

「ここを出て、どこへ行けばいいっていうの」

これまでの夜のような時間は、もうやってこないの？ 秘密基地のようなところでただひたすら熱を求めて、唯一のものを探して、与えられるものに純粹に沈みこむ時間は、もう訪れないの？ 聞いておいて、自分のほうが打ちのめされていく。

音が遠のていく。頭の中が朦朧としていた。不意に聞いたことのあるギターの音が耳の奥のほうで鳴った。それは視聴覚室準備室の手前、あの屋上へ続く階段でよく盗み聞きした「Something」だった。行き止まりの階段に座って足を投げ出し、窓も光もないその場所で、私はいつも救われていた。それも、もう、今では損なわれてしまったのだ。

「行くのか」

先生は私の頬に触れていた手を耳の後ろのほうに滑り込ませて、私の頭をまた確かめるように撫でて、言った。生暖かい風が吹き抜けていき、制服のスカートが重そうにはためく。チャックが最後まで上がってなかったことを思い出して、唐突に腰の辺りを気持ち悪く感じる。その瞬間、戻れるわけじゃないか、と思った。私の足はもう以前のように綺麗じゃない。制服が、とてつもなく似合わない。このいかにも清純な濃紺の下は、腐ったいやな臭気を発している。

公園に一人だけ取り残されたときのような空虚さが辺りに漂っていた。迎えはいつまで経ってもやっちは来ない。木々がざわめくばかりで、夜が永遠に終わらないような感じがある。どんなに剥がれても、まだその下に夜がある。

逃れられない。たぶん。

立ち尽くしたまま、私は自分のからだに目を落として、どうせここからどこへも行けないと思った。戻るわけがないと思ったり、どこへも行けないと思ったり、自分のこととはいえ何を言っているのだろうと思う。

行きたくないのか、行けないのか。

考えれば考えるほど判然としない何かがあった。ただ分かっていることは、どんなに嫌悪を感じても、頭の後ろで蠢く、髪に絡んだ指はどこへ行こうが離れないということだ。

からだ中がべたついている。早く帰ってシャワーを浴びて、洗い流して眠ってしまいたい。私は日々の営みのことに意識を集中し、一思いに切り捨ててしまおうとした。けれど惑乱し続けた頭では、上手くものさえ考えられない。

なんか、汚い。汚いのはいやだ。からだを硬くして、何度も思う。先生は裏切り以上のことをした。嵐のように突然、私たちの間にあった何もかもを否定して、そのうえ父と同じことをさせたのだ。

「こんなに汚くなったのは、先生のせいだ！ 先生のせいだよ！」

そう叫んだ瞬間、私の身体は重力を失った。すぐには抱き寄せられたことに気付かなかった。気付いてすぐからだに力を入れたけれど、それがこれまでされたどんなものよりずっと悦びに満ちていて、宝物をかき抱く少年のように甘ったれていたもので、私は怯んでしまった。苦しくて、喘ぐように息を吸うとどこもかしこも自分と同じにおいがして、大波が迫ってくるような恐怖が訪れる。彼の皮膚が、肉が、骨が、傷んでいる。許せないと許したいが揺れ動いては、私のからだに作られたいくつもの軌跡がじんじんと疼く。

そして私は、とうとう首を振ってしまった。一人になる勇気がなかった。

ひとりには嫌だあ、とぼそぼそ言いながら、ゆらゆらといつまでも首を左右に振り続けた。振ると、からだはますます腐っていくようだった。

「笠原が望むなら、俺はここを絶対に離れないよ。一人にしたりしない。ずっと一緒にいるよ」

先生は息を吐き出すように、言葉をひとつひとつ切ってゆっくりと発音した。いっしょ。口の中で転がすと、それは飴玉みたいに舌に絡んで、溶けていく。けれど再び近づこうとすると一度開いた距離はかえって明確になって、初めてそこに漂っていた臭気に気づかされた。

「夏のカレーみたいだね」

何言ってるの、という風に、関谷先生は笑った。空気が動いて、甘く腐ったにおいが立ち込める。その渦中にいるときには気づかなかったけれど、これまでもずっと腐り続けていたのだろう、きっと。

きつく私を抱いていた腕を解いて、関谷先生は目を細めて言った。

「送るから、ちょっと待ってて。鍵も免許証も、何も持ってこなかったんだ。取ってくるよ」

「大丈夫、一人で帰れます」

「いや、ちゃんと送るから」

そう言って、もう一度私の頬にかさついた手の甲を当てると、背を向け、マンションに向かって来た道に戻り始めた。そのとき突風が私の髪を乱し、奥に潜んでいた熱まで攪って散らせた。そういえば、ここはまだ先生のマンションの前だった。鈍りだしていた感覚が鋭くなって、私はまるで磔になった罪人のように不自由になった。視線の先の彼はどんどん小さくなって、萎んだように頼りなくなっていく。

何が、ひとりには嫌だ、だ。当然、離れて、終わりにするべきだった。

知らなかったとはいえ、確実に、あの女の人を苦しめたのだ。

けれどそう思うたびに、離れたくないという思いが強まってしまう。いざまた一人になって日々をやり過ぎて生きていくことを思うと、今までよりずっと地獄のように思えるのだ。

湿った団地の、腐った部屋のことを思う。私は結局、どこにいても腐っているんじゃないか。それならば

いっそ最低に汚いところまで、落ちてしまいたい。もう這い上がってはこれないところまで落ちて、地の底みたいなその場所で、先生とずっと燻るものをぶつけあって、交わってほしい。

マンションを囲む木々や外灯が、まるで大きな食虫植物のように厳かに佇んでいる。獲物が迷い込んでくるのを沈黙して待っているような静けさに満ちている。

怖い！

その場にいられなくなって、私は先生を待たずに走り出した。必死に腕を振り、足を上げて走っているうちに、いつかもこれに似た怖さを味わったことがあったような気になる。やがて閃くものがあって、走りながら思わずああと声を漏らした。それは、生理だった。私のからだを一晩のうちにぬめぬめとしたものに塗りかえた、あの変化だ。この肉の中が爛れて、染み出した体液でべたべたに濡れているような、拭っても拭っても消えないこのぬめりは、月経に似ているのだ。

私はその感覚を、退廃のように感じた。芽吹いたばかりのはずの自分の性は、瞬時に汚く萎れ、だが萎れてなお乾きに飢えて濡れている。まるで卑しい老婆のように。

関谷先生のマンションから逃げ帰ってきてから、突然、私は、待たなくなった。

うだるように熱い雑木林に行くのをやめて、先生を避けるようになった。頭ではたいそうなことを思っておきながら、私は結局、本当のがらんどろに落ちる覚悟がなかったのだ。

だから中途半端なところからだをぶら下げたまま、どうして彼が純代さんにあんなところを見せたのかをずっと考えていた。

彼は私を自分のものにするためだと言った。だがその意味を考えようとすると頭の中に靄がかかって、からだから力が抜けていってしまう。あの槐の木々がざわめく通りから逃げてきたせいで、あの日に起こったことも、それまでに超えてきた夜のことも、何一つ言葉に出来なくなってしまったみたいだった。

けれど時間が流れると、やはりからだは先生を求め始めてしまう。注ぎ込まれる快感を覚えてしまった私の奥は、どんどんとろけて、かたちを崩していってしまう。そうなるとお腹のあたりが疼いて、会いたくて仕方がなくなる。だが、こうして私を突き動かすものに、もう自信を持ってない。私は確かに、彼を憎んだ。愛情と同じ重さの憎しみを抱いた。それなのに、からだを憎むことだけを許さないように、与えられた快感の記憶のみをどんどん鋭敏にさせていってしまう。

俺の一部に。

言われた意味も分からないというのに、耳の奥で蠢く声に焦がれている。そんなとき私はたった一人きりで、愛撫の記憶をなぞって幻影を生んだ。自分から先生のかたちが完全に消えてしまう恐怖で、汚いからだをどんどん溢れてくるもので満たした。けれど、あるところまでいくとやはり壁が立ちはだかる。そのとき初めて、先生がどうしてあんなに乱暴になったのか分かる気がした。ひとりになると分かってしまった。奥で溶け出しているものを奪って欲しくて、侵されたくて仕方がないのに、壁のせいで進めなくなる。ただ、ふたつのからだそれぞれは近づけないということを目の当たりにさせられる。そうするとまるで最初から相手など居らず、ひとりきりで挑んでいるような孤独がつきまとう。するとそのうち渾然となりたくても、なるべきかたちがぼやけてしまうのだ。だから彼はあんなに荒く乱暴で、私はいつまでも許されなかった。

でも私は、あの雑木林には行かなかった。携帯電話の電源も切り、どんな夜が私に噛み付いてきても、朝には制服を着て、平気な顔をして自転車を漕いで学校に行った。

一度だけ、廊下の向こうから歩いてくる関谷先生とすれ違うことがあった。平然と通り過ぎようと思ったけれど、こちらに進んでくる先生の目があまりにも粘ついてきたことに怖気づいて、露骨に顔を背けてしまった。先生は止まりかけたからだに鞭を入れるようにして通り過ぎていった、ように見えた。いや、私がそう見たいと望んだから、そう見えただけかもしれない。けれど小さくなっていく足音に私の方が耐え

られなくなって、結局走ってその場を離れた。

そして二年の前期終業式の日、私は体育館で凍りつくことになった。

校長先生の長い話が終わって、生徒たちのざわめきが大きくなったとき、

「まだ大事な話があるので、静かに」

マイクを通した学年主任の声が響き渡った。教師陣のほうから漂ってくる不穏な緊張に、ようやく生徒たちが興味を惹かれた頃、壇上に上がってくる関谷先生の姿が私の目に飛び込んだ。

彼は黒のパリッとしたスーツを着ていて、記憶よりもずっと痩せていた。まだあの夜から数週間しか経っていないというのに、先生はまるで何かをこそげ落としてきたように、ほっそりとして見えた。

「突然のことですが、関谷先生がこの学期をもって、一年間休職されることになりました」

学年主任の先生が恭しく言って、壇上の関谷先生を促した。女生徒の理由を求めたり引き止めたりする声が、あとからあとから湧いてくる。そのうるさい声に苛々しながら、たくさんの人の頭の上にぽっかりと浮かんでいるように見える先生を、睨むように見つめていた。目を逸らしたら、きっとそのまま見失ってしまう。生徒たちの騒々しくなる声に飲まれていくような気がした。自分から逃げ出しておいて、目の前の遠い隔たりに打ちのめされている。

先生はいつも学校でそうしているように、少し冷たく見える目をして、抑揚のない声で簡単な挨拶をした。一年間休職をすること、それは一身上の都合であること、学期の途中で休むことに対する詫びなど、どうでもいいようなことばかり訥々と話をすると、さっさと壇上から降りてしまった。

彼は最後までどこを見ているのか分からない目をしていた。

その目は以前よりもずっと冷たく濁り、足元には暗い夜の海のような水がとぶとぶと満ちているようだった。

教室に戻って、夏休みを前にした注意事項を我慢して聞き、号令がかかると同時に私はすぐさま外へ飛び出した。持って帰らねばならないものは山ほどあったのに、鞆だけを抱えて、脇目も振らずに走った。もどかしい気持ちで上履きをローファーに履き替え、うだるように暑い屋外へ肌を晒した。そして世界を真っ二つに割るような蝉の声に追い立てられながら、自転車置き場の自転車に縋り付くように飛び込み、焦る手で鍵を差し込んでチェーンを外した。

連絡はしなかった。あの夜に先生を置き去りにして墜落から逃げたから、連絡なんて出来なかった。

一身上の都合と言っていたけれど、きっと奥さんのことが関係しているんだろうという直感があった。あの夜のことが原因になったのか、それともまた別の問題なのか、それは分からない。そのことを確かめる気があるわけでもない。だが私は自転車に跨り、あの雑木林へ向かって必死にペダルを漕いでいた。駐輪場は日陰だったのに、サドルもハンドルも焼けるように熱く、手も尻もびりびりと痛んだ。汗が滲んで、強く握っていてもハンドルから手が滑り落ちそうになる。それでも私は猛スピードで関谷先生を目指した。

それは賭けだった。

週に一度の約束も、もう生きていない。

けれど雑木林で彼を待つのだ、と強い気持ちで、決めた。そしてもし、先生があの黒い悪魔のような車を滑らせて私の元へと来たならば、今度は逃げずに彼の言葉をもっときちんと聞こう、と思った。

雑木林は数週間前とは比べ物にならないほど繁茂して、蝉の棲み処と化していた。命の限りを尽くして鳴く声は、宙ぶらりんな私が足を踏み入れたことを責めているようで、自転車を止めて耳を塞いでもからだの中に潜り込んで響くその声の前で小さくなるしかなかった。けれどしゃがみ込むとそこら中で何かの蠢く音や、不法投棄のせいか、腐った甘い臭いが充満していて、地面がひっくり返るほどのめまいでくらくらした。風もない、入道雲が支配する空が、遠い。いつものように、来て欲しいような、来て欲しくないようなどっちつかずの感情を持って余している。

制服のシャツが汗で透けて、下に着たキャミソールは丸見えだ。太腿に張り付く、汗を吸って重くなったプリーツスカートが気持ち悪くて、少しだけたくし上げる。突き出た青白い太腿に、暗い木々の影が落ちた。青い血管が縦横無尽に走っていて、それを手のひらで撫で付けるように触れると、唐突に寂寥が忍び寄ってきた。あれほどどんな荒々しさにも耐えたしなやかだったからだが、何の変哲もない子供のからだに戻っていて鳥肌が立つ。もう、先生のからだがないと生きていけないような絶望感がまた迫ってくる。津波のような轟音を立てて、何かが私を飲み込もうとしている。恐怖を覚えて、何かにしがみつきたい衝動に駆られた。欲しい、欲しい、あれが。子供なのに汚いからだを両腕でかき抱き、今こそあれがないと、私は駄目になると突発的に怯えた。

晴天の下にいるのに、真っ暗な闇の中にいるようだった。膝小僧に臉を強く押し当ててみる。ますます暗闇に飲まれて、遠くのほうで光っていた星も消えてしまった。大量の蝉の声に取り囲まれている。硬くからだを縮こまらせていると、蝉が頭上から降ってきて私のからだを押し潰してしまう気がした。そして、私はここで、誰にも知られずに腐って朽ち果てるのか。

そのとき荒々しいエンジン音が雷鳴のように轟いて、どんどん大きくなってきた。顔を上げる気力もなく、混濁する意識の中で、悪魔が来た、と思った。

「水穂！」

声が出たけれど、顔が上がらない。上げようとするとなんかに強く押さえつけられているような重みを感じて、頭が割れるように痛んだ。声も出せずにいると、からだになんかに支えられて、少し解れた。冷たいものが額や首筋を移動すると、急激な乾きを覚えて、まだ変に力が入った両手をどこに伸ばしているのかわからないまま、だに前に突き出した。そこにペットボトルが触れて、私はそれを口に勢いよく運んだ。冷たい水分が潤れた喉に流れていき、深く息を吸うと、嗅ぎ慣れたにおいに電気が走ったように全身が痺れた。先生のおいがしていた。

「大丈夫か」

いつもは私が聞くほうなのに、変なの。笑おうと思ったけれど、まだ強張って思い通りにならなかった。そのままからだに浮いたと思ったら、後部座席に寝かせられた。車の中は少し煙草の臭いがして、先生のおいは薄れていた。けれど私はそれをたくさん吸い込んで、息をした。まるで魚になったような気分だった。先生の海でしか、私は生きられない。

車体が揺れて、自転車が積まれたのが分かった。じっとしたまま、うっすらと目を開けた。からだから、異常な熱が去った感覚があった。けれど、重たいだるさが残っている。

「気分は、どうだ。苦しいか？ 痛いところは」

関谷先生が運転席から私の顔を覗き込んで、心配そうに聞いた。私は緩慢な動作でそれにひとつひとつ首を振って、否定していった。先生はやっぱり、来てくれた。ひとりきりで漂流しかけた私の元に、この悪魔みたいな車を走らせて掬い上げに来てくれた。今や同じ罪を背負っているからか。もう何でもいい。

「熱中症かな」

先生は私の額に手をやり、そうかと思うとその手は頬を過ぎ、首筋を過ぎて、胸元に忍び寄ってきた。やけにひんやりとした手に、短い悲鳴が出た。谷間のそばの骨の浮いたところを、先生の指が行き来した。

「病院に行こうか」

「いい、大丈夫。それより、どうして、来たの」声を出すのはまだしんどかったけれど、ゆっくりと聞いた。

「慌てて出て行くのが職員室から見えたから。もしかしたら、と思って」

「怒ってる？」

恐る恐る聞くと、先生は指の動きを止めて、今度は私の頭を撫でた。「ちっとも。怒ってなんかないよ。怒るわけがない」

「でも、私は逃げたよ」

そう言うと、先生は私を真剣な表情で見つめて、うん、とだけ言った。その後しばらく私の頭を撫でていた彼は、だが突然弾かれたようにシートベルトを締めて、アクセルを踏んだ。対面のガラスから、乾いた土煙が上がったのが見えた。まるで大量の、腐った蟬の死骸を蹴散らして突き進んでいくようだ。私は寝そべったまま、からだに伝わる振動に身を沈めた。もう、どこに運ばれたっていい。そう思って、また目を閉じた。

気付くと、まだ夕方にもならないというのに、車はラブホテルの駐車場に入っていた。まだ少し気だるいからだを起こして、ガラスから目だけを出して周囲を見渡したけれど、ここがどの町なのか、まるで分からなかった。

「先生、私、制服だよ」

言うと、彼は鼻に皺を寄せて笑って、助手席にあったスーツをこちらに向かって投げた。

「とりあえず、それ羽織って」

外に出てみると、駐車場の入り口にかかったビニールの暖簾の隙間から、青々とした田んぼが見えた。随分田舎に来たみたいだ。思って建物を見上げると、昼間のラブホテルは妙に閑散としていて、誰からも忘れ去られた、ただの古びた建物に見えた。夜になると大袈裟で、狂った照明で変貌するあの姿は、ただ強がっているだけなんだな、とぼんやり思う。

歩くとまだふらふらするので、先生の腕に縋り付くようにして歩いた。薄れていたにおいがまた絡み付いて、汗臭いシャツが愛おしくなる。ラブホテルに入るのは初めてだったけれど、別に何の感慨もなかった。ただもうあの神様の口の中みたいな、あったかくて粘っこい場所には行けないのだろう、と改めて感じて、からだはまたかさかさとした乾いた。

先生のからだの影に隠れながらフロントを抜けて、薄暗いエレベーターに滑り込んだ。非常口の緑色がやけに鮮やかに光っていて、気味が悪い。

三階で降りると同時に私のからだを突然先生が抱え上げた。そのまま私は先生の所有物になって、部屋まで運ばれた。

頑丈な扉を開けて大股でベッドに近づくと、先生は私をそこに放り投げた。丸い、柔らかすぎるベッドの上で跳ねると、からだの奥が潤んでいることに気付かされる。振り払うことも出来ず、いつまでもついてくるあのぬめぬめした生理に似た感覚がまた擦り寄ってきている。向こうのほうから、浴槽に湯をためる音が聞こえてきた。それから何やらガタガタと音がしていたと思うと、シャワーが流れる音が続いた。先生がシャワーを浴びているのか。私は羽織っていた先生のスーツの前をかき合わせて、体育座りしたからだに巻きつけた。

備品のガウンを纏い、濡れた髪をタオルで拭きながら戻ってきた先生は、私の格好を見て噴出した。何やってんの、と笑いながら、ゆっくりと近づいて隣に座り込んだ。ふわっと空気が動いて、湿った髪から安っぽいシャンプーの匂いが香る。もう、煙草のにおいはどこにもなかった。そのとき、彼があえて煙草のにおいを落としてきたのだと気付いた。

投げ出された足も、ガウンの前から覗く腹もやはり少し削げ落ちて、まるで荒野のような衰えを感じた。それを隣に座ったまま、じっと見ていると、

「大丈夫だよ、しないから」

「えっ？」

「もう触らないから、心配しないでいいよ」

先生は起き上がって、髪を乱暴に拭きながら洗面所に入っていった。追いかけて、腰にしがみつきたい衝動に駆られたけれど、そうして触れられて、自分の退廃に気付かれるのが、何だかとても恐ろしかった。

罪をもたらして、私のからだを汚したのはそもそもこの人だということに、私はあの夜よりずっと前と同じように、何ひとつ変わっていないからだに彼に抱きつきたかった。だからスーツの鎧に身を包んだまま、ドライヤーの風音を静かに聞いていた。

「つい勢いでこんなとこまで連れてきちゃったけど、ごめんな」

丸いベッドの足元のほうに浅く腰をかけて、関谷先生は少年みたいに笑って言った。まだ僅かに水分を含んだままの髪が、空調にふわふわと揺れている。

「全然いい。だって私は、待っていたんだから」

「そうか」

「でも驚いた。もう、学校に来ないの」

「ああ。とりあえず一年間、奥さんの実家に行くことになったんだ。言えなくて、ごめん」

「あの人、悪くなったの」

関谷先生は曖昧に頷いて、「少しね。静岡の義父から頭を下げられたんだ。純代が精神的に参っていて、手に負えないって。俺のことをしつこく呼ぶから、最後に罪滅ぼしだと思って来てくれ、と」

最後、という言葉が気にかかったけれど、それを問うのはやめた。代わりに、鎧を脱いで四つん這いで先生の隣に寄っていった。ごわついた先生のガウンが指先に触れて、心臓が早鐘を打つ。再び雑木林に立ったときから、こうなることは分かっていた。背中に頭を預けると、先生のからだがりびくっと跳ねた。緊張が伝わってきて、彼が離れていこうとしているのが分かった。

膝立ちになって、頭を抱え込むようにして抱き締めしてみた。ワックスのついていない髪が鼻先をくすぐるので、涙を噉りながら笑ってしまう。先生は私が笑えば笑うほど頭を俯けた。膝に置いた拳が小刻みに震えていた。どうして先生が泣くの。そんなの絶対許さないわ。許さないわ。抱き締める腕に力を込めた。首筋に舌を這わせて、私の唾液を染み込ませるように何度も丁寧に舐めた。そのたびに先生はくぐもった声を漏らして、からだを震わせていた。舐めたくないのに執拗に舐めて、唾液のにおいがして、不快感に震えた。どうしようもなく憎くて、けれどやっぱり愛しくて堪らないのだった。

ガウンは先生の熱を吸って、先生のからだのかたちになってきていた。彼は痩せて少し荒れ果てたけれど、張った肩や筋肉質な背中はまだ動物のように美しい。それに手を添え、撫でていると、突然彼が顔を上げて私の腰にしがみついた。

臍の奥が先生の息で湿って、暖くなる。制服の生地を一枚挟んでも、強く押し当てられた額のかたちに腹が凹んだ。私は彼のふわふわした髪を指で梳いて、「許さない」と言った。先生は回した腕を背中に這わせて、顔を私の胸のあたりまで上げた。私が下を向くと、先生は真っ赤な目をしてにんまりと笑っていた。ぞくぞくするほど恐ろしい、観覧車で見たときと同じ、悦びに溢れた笑顔だ。その赤い唇はとても卑しくて、どこまでも背德的だった。思わずからだに力が入ったけれど、回された腕に阻まれてびくともしない。先生を本当に、怖い、と思った。

私が意地になって動いていると、試すように先生の力は簡単に緩んだ。私はその機を逃さず彼の腕を引き剥がし、回りこんで彼の肩を強く突き飛ばし、腰のあたりに馬乗りになった。先生はまるで動じなかった。傍観者のような顔つきで、後ろに肘をついてからだを支え、赤い目をこちらに向けている。私はまた制服の下の退廃を思って、唇を噛んだ。舌を動かすと先生の味がして、臓腑が痙攣するみたいに震える。制服の臍脂色のボウタイを、一息で抜き取った。シュッと衣擦れの音がして、先生の濡れた睫が少し動いた。ボウタイの両端を手に巻きつけて左右に引くと、ピンッと乾いた音がした。それをゆっくりと、先生の首に巻きつける。太い首に臍脂色のボウタイが巻かれると、ままごとでもしているかのようなおかしさがあった。

彼の膨れた頸動脈が脈を刻んでいる。一定の速度で、早まりはしない。私は少しだけ力を入れてそれを絞

めた。からだを支えている膝小僧が、柔らかいベッドに埋もれて、ふらふらしてくる。先生が少しからだを起こして大きな手を伸ばし、私の腰に当てた。すると不安定は去って、私は根の生えたような安定を取り戻した。

先生の気味の悪い落ち着きと静かな覚悟に簡単に怯んで、ままごとはすぐに終わってしまった。

ボウタイを引き抜き、うっすら赤く痕のついた先生の首を爪で刻み込むようになぞった。そうするとすぐに爪の軌跡が赤く浮き出て、喉が動くと一緒にうねった。熱くなった瞼を開くと、先生がいつの間にかまた赤い目から涙を流していた。まるで血の涙を流しているかのようだ。時折眉間に皺が寄る。苦しそうに、耐えるように、深く影がたまる。けれど口元はやはり優しく緩んで、私をただ生かしていた。

「どうして、泣くの」

「泣けるから」そう言って彼は私の頬に手の甲を触れて、涙を拭う所作をした。

「私は泣いていない。私は、泣かない。だって泣けないもの、こんなの」

「うん」彼は笑って言った。「そうだね」

先生が考えていることが、まったく分からない。分からないのに、もう完全に終わったのだということが分かる。恨み言やわがまは私の中で混じりあって全身に廻っているのに、外にまでは漏れ出てこない。胸がきゅうっと絞られるように痛んで、私は落ちるように先生の腰から降りた。

世界が揺れて、立ってられない。握り締めた硬いシーツを口に当て、からだを丸めて叫んだ。遠吠えのようなこもった咆哮を、埃っぽい、どことも知れぬラブホテルでした。直後に隣から壁を叩くドンという鈍い音がして、驚いて顔を上げると関谷先生が喉を鳴らして笑って、私を緩やかに抱き寄せ、服を脱がせた。たちまち下着まで外されて裸にされると、先生はそれを隣から執拗に眺め始めた。

ほとんど何も考えられない状態のまま、彼の真剣な目の前に晒された自分の悲しい変化と心中したいと思っていた。隠す力も残っていなくて、私は素っ裸で仰向けに寝そべったまま、暗く薄汚れたしみだらけの天井を見ていた。

やがて先生は私のからだの隅々に、啄ばむような口づけをし始めた。唇の裏側のねっとりとした熱に吸われると、からだを嫌悪感と欲情の混ざったものにとり付かれて、助けてと叫びそうになった。

「もうやめて。許せないの。ねえ、先生。どうしてあんなことしたの。どうしてお父さんと同じことを！」

感情が昂って、今更言っても仕方のないことを喚いて責める私に、だが関谷先生はうっすらと死人のように穏やかな笑みを漏らすばかりで、何も言ってはくれなかった。ただ私の老婆のようにかさついていくせに、奥をひたひたに濡らしたいやらしいからだに口づけをして、綺麗だよと言った。

こうなっても、この人はまだ私を許さない。

まだ罪をきせて、私のからだを奪っていく。

私は覆いかぶさる先生の背中に爪を立てた。許せなくて、深く抉るように、指先に力を入れた。けれど先生のからは怯まない。もう壁の前にもやってこない。それどころか、幼い子供の頬にするように、愛撫ではない口づけを繰り返しているだけだ。

不意に、私の中に閃くものがあった。

きっと彼は、もう壁にぶつかってまで私を手に入れようとする必要がなくなったんじゃないか。

けれど、何故。

その答えは、最後まで得られなかった。

いつの間に眠ってしまったのか、起きると、私は貧相なラブホテルに置き去りにされていた。残り香さえ無情に連れて、去ったのだ、彼は。

あの長野へのドライブから、逸也の姿を見ていなかった。

引越しまではまだ三日あるので、恐らく実家にはいるのだろうが、私は行かず、連絡もしなかった。それ以前に、逸也から連絡がないことに、私はどちらかといえば安堵していたのだった。杏里から齎された噂に思っていた以上の動揺を受けていたからだ。鼻先が過去のにおいを見つけるたび、まだはっきりとは見えないけれど、遠くのほうから確かにやってくる津波のように、何かが私という岸にやってくる気配を感じて怯えが走る。それを悟られなくて済むことに胸を撫で下ろしているのだった。

「そういえば、最近イツちゃん、見ないわね」

十分程前に酒の抜けていない様子で帰ってきた母が、ダイニングテーブルの上に突っ伏した体勢で、私を見上げて言った。学校へ行こうとしているところだったのに、甘えた声で珈琲を入れてくれとせがまれ、仕方なくドリッパーを用意していた私は、その呟きに緊張した。

長野へ行った日から二日後、母とぎこちない仲直りをした。二日後になったのは、それまで彼女が不在だったせいだ。恐らく男のところへ身を寄せているのだろうな、と思って憤っていた。けれど二日前、私が学校から帰ってくると、母が親子丼を作って待っていて、私が啞然としていると「ごめんね」と謝り、照れ臭そうに「お腹すいたでしょ」と言ってきた。そのとき、何だかどうでもよくなってしまった。不器用な母が作った親子丼は塩辛く、卵も火を通しすぎていて硬かったが、全て食べた。食べてしまうとますますどうでもよくなって、同じように謝り、それからまた、いつも通りの生活が始まったのだった。

私たち母娘にとって、父を中心に起こったあの出来事は、再び口に出すにはあまりにも多くのしがらみが纏わりついている。だから普段は間合いに入りすぎないように、気を遣い合って生きている。例え深く入りすぎてしまったとしても、互いに防衛本能が働くのか、怒りや失望は長くは続かない。それでもそれは本当の意味で消失するのではなく、ただ見えなくなるというだけのことだ。しかし今までそれで何度も持ち直して、お陰でこの家にまだ住み続けることが出来ている。どうしようもないと諦めて視界を殺すことが、私たちの処世術なのだ。

「あれから会ってんの？」

剥げ気味のマニキュアを眺めながら、母が呑気そうに言う。勝手なことを言うものだ。だが口には出さず、珈琲を手渡してやる。それを彼女はまるで子供のように両手で受け取り、ふうふうと繰り返しては口をつけた。

「お母さんには関係ないんだから黙っててよ」

あまり逸也の話をしたくなかったので、足元に置いていた鞆を急いで取って、言った。

「連絡取ってないの？ 馬鹿ね、ちゃんと取りなさいよ。最近見てないわよ、イツちゃん」

「お母さんも見ていないの」何となく引っかかって、靴を履こうとしていた手を止めて母を振り返った。

「見てないわよ。車も見てないし」

「そう。じゃあ忙しいんじゃないの。行ってきます」

ローファーの踵を潰したまま、飛び出すように玄関の扉を開けて外へ出て暗い階段を駆け下りる。途中で足が滑って、尻を打ちそうになり慌てて手すりにしがみつき、難を逃れる。早鐘を打つ心臓を制服のシャツの上から強く押さえて、動揺から何とか目を逸らした。

眩暈を起こしそうな太陽の下へ出て、自転車を漕ぎ始めた。今日は前期の終業式だった。

学校へ着く頃には半袖の制服は汗を吸って、朝、せっかくシャワーを浴びてきたというのに、この自転車通学のおかげで何の意味も成さない。少し伸びてきた髪も襟足に纏わりつくようになって体感温度はますます

す増し、朝からもう疲労しているからだに苛立ちが募る。足にへばりつくスカートをいっそ思い切り扇ぎたい衝動に駆られながら、自転車を駐輪場に止めた。

自販機で買ったペットボトルの水を額に当てると霞んでいた視界も少し晴れ、濡れたところに風が当たると涼しい。口に含むと、ようやく一息ついた。

腕時計を見ると、まだ予鈴が鳴るまで三十分程あった。暑くならないうちに早く出てきたせいだ。どこからか、朝練している吹奏楽部の楽器の音や、運動部の掛け声などが聞こえてきていたが周囲に生徒の姿はない。火照った目にペットボトルを転がしながら、上履きを出す。乱暴に出したので、ひっくり返ってしまったそれをからだを曲げて拾い上げようとしたとき、ふと見慣れたかたちが視界の端を通り過ぎたような気がして腹に力が入った。反射的に、過ぎて行ったものの方へ頭が動く。同時に懐かしいにおいに鼻先がくすぐられる。早足で、靴の底を鳴らして歩く音が遠ざかっていく。よろめくからだを靴箱で支えて、懐かしい気配の残る廊下に飛び出した。

視界の先に、見覚えのある後姿が映った。

やがて足音さえ完全に聞こえなくなったとき、汗を掻いたペットボトルが手から抜け、ベコンと間抜けな音を立てて廊下に落ちた。

暑さで頭がやられてしまったのか、それとも私はまだ彼の幻影を見てしまうほど、彼の世界の中で溺れているというのか。狼狽の中で、だが彼の足音は確かに廊下に残っていて、耳がその音をまだ覚えている。関谷先生の音だ。

戻ってくるかもしれないという話を聞いたのは、数日前だ。しかし、それがまさかこんなにすぐだなんて。狼狽しながら教室に急ぐと、私の席に杏里が座っていた。彼女は私に気付くと手を振り、

「おはよう」

「おはよう。ねえ、杏里。今、関谷先生を見かけたような気がするんだけど」通学鞆の紐を握る手に力を入れて、声が震えないように気をつけて言った。

「想いの大きさと、違いがあんのかな」

「え？」

「さっきどっかのクラスの女子たちが職員室に見に行ったみたいだけど、誰も見られなかったんだって」

「じゃあ、あれは見間違いではなかったんだ」

「違う違う。来てるらしいよ、関谷。終業式で話あるんじゃない？ 一年前のときみたいに」

でも、今度は逆だけどね、と杏里はにやにやしながら私の腕をぐいぐい突いた。一年前、という単語にからだは素直に反応する。あの日、生徒の頭の上に壇上の関谷先生がポツンと浮かんでいた。もちろん突然の休職に驚きはしたけれど、それよりも壇上の先生との距離のあまりに絶対的な遠さに震えて、雑木林へと駆け出したのだ。だが結局、それはかえって開いてしまった。

本鈴が鳴るとほとんど同時に、繰上げで引き続き担任になった坂崎先生が入ってきて、体育館への移動を指示した。私たちは皆、それぞれ気だるい歩調でぞろぞろと廊下に出て、体育館へ向かい始めた。周囲で交わされる昨日のドラマや新刊漫画の話題が耳元を通り過ぎても、からだはあの日のおぼろげな記憶にゆっくりとなぞられて、私だけが現在から弾き出されて浮いているみたいだった。

体育館に着くと、騒がしい生徒たちの会話の中に何度も関谷先生の名前を聞いた。それが頭の中に意味を伴って入ってくると、やっと現実感が出てきた。あれから一年が経っていること、自分がまだ十八歳であること、残された罪が未だ薄れず、私のからだにしっかりと残っていること、そして今やそれだけが、依然先生と私を繋ぐものであること。

式が順々にこなされていく間、壁際に並んだ教師たちのほうを何度も見た。けれど厚い生徒の壁が阻んで、関谷先生の姿は見えない。出席番号順に並ぶことを守らなかった杏里が終業式の間中、挨拶あんのか

な、と囁いていたけれど、うまく頭に入らず、何も言えなかった。

式の終わりは唐突に告げられた。先ほどまで関谷先生の話で騒いでいた女生徒たちが呆気に取られている。だが一拍置いてがやがやは轟いて、体育館はすぐに音の箱のようになった。私は堪らず杏里の手を引いて、その音を掻い潜るようにして、教師たちが並ぶ壁のほうへとずんずん進んでいった。だが生徒の壁を越えても、そこに関谷先生の姿はなかった。生徒たちを教室に戻そうと声を張り上げている坂崎先生に見つかり、手で追い払われたので、仕方なく私たちは教室へと戻った。

「関谷、来なかったね」

戻る途中にがっかりした様子で言う杏里がおかしくなって、つい笑いながら「そうだね」と同意した。

「何笑ってんだよー、ほんと素直じゃないなあ」

「ごめん。でもいつもの杏里なら、元気出せて背中を叩いてくるのにさ、そんなにしょんぼりしてるんだもん」

「だって、笠原が、あんまり探してるから」

「えー、私、そんな必死に探してた？」

杏里は拗ねながら頷いて、繋いだ手を引っ張った。四百人以上の生徒が教室への道をぞろぞろと行く。熱気が増して、吸う息が熱い。集中して歩かないと、人のうねりに飲まれてしまいそうになる。体育館を囲む緑の影を歩きながら、ふと左手に見える校舎を見上げた。

「また、見てる」私の顔のすぐそばに顔を寄せて、杏里が私の目線を追い、「いつも校舎のほう、見てる」

「そんなこと、ないよ」

「いや、あるって」

笑われて、校舎から目を背けた。だが一瞬だけ、視聴覚準備室のカーテンが揺れていた気がして、またすぐ振り向きたい衝動に駆られてしまう。確かに、私はいつも校舎のほうを見上げている。あの三階の右から二つ目の小さな窓に呼ばれている気がして、つい見つめてしまうのだ。

教室に戻ると、すぐに坂崎先生が戻ってきて、早く座るようにと指示をした。夏の休暇中の簡単な注意事項の後、杏里が待ってましたとばかりに、「関谷先生は戻ってきたんじゃないんですか」と質問をした。坂崎先生は一度洪面を作り、だがすぐに淡々とした調子で、

「戻られてるよ」

「じゃあ、何でさっき体育館で何の説明もなかったんですか」

「まだ完全に戻ってきたわけじゃないからだ」

「それは、どういう意味ですか」

私が突然質問したことに坂崎先生は驚いたのか、目を丸くしていたが、

「それは俺の口から言うことじゃないから。正式な発表は、夏休みが終わったらあるよ。どうせ、もう休みに入るんだから、関谷先生の在、不在はお前らには関係ないだろう。いつまでも残っていないで、早く帰るように」

面倒臭そうに言って、坂崎先生は無理やり生徒の質問を断ち切った。同時に日誌や名簿を教卓の上で揃えたので、硬質な音が響いて、私たちは先生の思惑通り何も言えなくなった。真面目な坂崎先生は、もしかしたら女子生徒の嬌声ばかり受ける関谷先生に、いい顔をしていないのかもしれない。いつだったか、付き合いづらいつらいつという本音を隠さずに、仲は良いよ、と言った関谷先生を思い出し、つい懐かしさに笑ってしまう。それを目敏く見つけた坂崎先生は私を睨むように見て、さっさと教室を出て行ってしまった。杏里が何あれ、という風に、強く閉められたドアを振り返りながらやってきて、

「職員室、行ってみる？」

「ううん、いい」

「どうして」

「会いたいわけじゃないから」

私が言うと、杏里は眉根を寄せて変な顔をした。

「なに、その顔」

「だって、何でそんな嘘つくの」

私は曖昧に笑って、誤魔化した。それは半分嘘で、半分本当の感情だった。どうせ会ったところで、私の中に巣食った感情を的確に表せる言葉なんて存在しない。だから会いたいけれど、会いたくない。それに、いざ顔を見てしまったら、私の中で何が起こるか、想像もつかない。それが恐ろしかった。

名残惜しそうにバスケット部の練習に行く杏里を見送って、私は屋上へ続く階段へとぼとぼ歩いていった。置きっ放しだった教科書が重くて、何度も右肩の通学鞆を背負い直した。そしてスカートの中に隠した携帯電話を、硬い生地の上から強く握った。

階段を上って携帯電話を引っ張り出し、逸也の番号を呼び出す。早く逸也の声を聞こう。そうしなければ、流されてしまう。大きなものに流されて、私はまた道をなくしてしまう。蟻地獄に片足を捕らえられたような心持ちで、携帯を両手で支えて、耳に当て、息を殺した。

だが随分鳴り続けて、それは留守番電話サービスに繋がった。発信音の後にメッセージを　　と言う機械女の言葉に狼狽して、思わず切った。そうして初めて、愚かな甘えに気付いて空恐ろしさに背筋に力が入った。好きで好きで堪らない人が戻ってきておかしくなりそうで怖い。そんな泣き事でも言うつもりだったか？　胸の中で罵声を浴びせるように思うと、からだのどこかに穴が開いたように、ぷしゅうと音を立てて、かたちを失くしていくような感覚に襲われた。

耳から携帯電話を離すと、残酷なほどの静寂がそこにあった。錆び付いた南京錠でがちがちに封鎖された屋上の扉を振り返る。両の掌を開いて、その鉄の扉にぺたりとつけてみた。そこはいつでも、冷えている。逃げ場をなくした熱気に左右されることもなく、私の皮膚を瞬時に冷やす。行き止まりの前で私はゆっくりと呼吸をして、からだに鉄臭い空気を送った。

屋上の扉の前には一畳ほどのスペースがあって、奥まったところに座ってしまえば階段からは見えなくなる。二年前はよくここで、階段を下りたすぐ近くにある視聴覚準備室から漏れてくる、アコースティックギターの音を聞いていた。今は当然耳を澄ませても何の音もしない。それにこの東棟は、家庭科室や理科室などの特別な教室が多く、しかも三階には視聴覚室とその準備室の他に、コンピューター室と会議室しかない。今日のように半日で終わってしまうと、生徒がこちらの棟に来ることは珍しいのだ。

仰向けになり、薄暗い天井を見上げた。無防備な腹が心許ないが、膝の裏や肘にひんやりとした床が当たって気持ちがいい。何か、疲れた。思いながら、ついうとうとしてしまう。そういえば食材が結構切れていた。眠気に逆らいながら、冷蔵庫の中身を一つずつ思い出していく。早く帰って、スーパーに寄って、ご飯を作らなきゃ。思ったところで、事切れたように眠りに落ちた。

呼ばれたような気がして重い瞼を開けたとき、同時にからだ金縛りにあったように硬直した。いつの間にか周囲は闇で、しかも足元に大きな丸い黒い影がぼんやりと浮かびあがって見えていたからだ。声も出せず、仰向けのまま寝たふりを続けて、どうしようどうしようと慌てた。階下の窓から差し込む外灯の明かりが、少しだけこちらに流れているばかりで、ここは結構暗い。

「どうして君は、こんなところで寝てしまうんだ」

まだ慣れない目を瞬かせていると、影が苦笑しながら、そう言った。その声は紛れもなく関谷先生のものだった。まだ目は慣れなかったが、ポップコーンが弾け飛ぶような勢いで身を起こして、尻をついたまま壁際に向かって後退りしてしまった。

「そして一度寝ると、なかなか起きない」関谷先生は静かに笑って続けた。「変わらないな」

「関谷先生」

名を呼ぶと、まるで封印が解けたかのように、すぐに彼の輪郭がはっきりした。その変化に私の喉はきゅうっと狭まった。最後に別れたときよりも髪が雑然と伸びていた。髪は綺麗に剃られているが、何より頬がげっそりしている。捲り上げたワイシャツから突き出た腕は以前よりも随分細くて、肉が殺げ落ちて骨の浮き出た手の甲は老人のようだ。落ち窪んだ目の下の隈も深く、口元でも皺が主張を強くしている。

そこには途方もなく、疲れた印象があった。微笑んではいたけれど、その目に隙はない。まるで敵の奇襲に緊張する兵士のように、怯えてさえ見える。あまりにも歴然としたその変化に、私の中はダムが決壊したように氾濫した。しかし手を伸ばすことも、声を漏らすことも出来ない。目の前に鎮座している深い溝を前に立ち止まるしかない。鼻の奥が乾いて、つんと痛んだ。

「どうして　　」

「それは、こっちが聞きたいよ」関谷先生は伸びた髪をかき上げると、静かに言った。「もうここには来ないだろうと思ってきたら、すやすや寝てるから驚いた」

「先生は、どうしてそう、いつも突然なの」

「そう言われても、なあ」

立ち上がろうとすると、立ち眩みに襲われて動けなくなった。躊躇いなどないというように、いっそ素早く去ってしまいたいのに。これではまるで引き止めて欲しがっているみたいじゃないか。

「そもそも、どうして学校にいるんですか」

「うん、ちょっと色々、休んでいた間に雑用が溜まっていて」

「少し前に、先生が戻ってくるって、皆が噂して騒いでた」

「へえ。笠原も噂を信じたりするんだね」

「別に信じたわけじゃないけど」

言い返した私を、彼は懐かしいものを見るような目で見ていた。思わず目を逸らすと、先生は目を伏せて、

「妻と、正式にやり直すことになったんだ」えっ、と声が漏れて、顔を上げると、何かを言うのを許さないような素早さで先生は続けた。「ちゃんと治るまでは、まだ別居だけれど。そうだ、あいつが　純代が君に言っていた。巻きこんでしまっでごめんなさい、と」

瞬間、からだが熱くなった。地獄を前にした、純代さんの真っ黒な虚空のような目が、あの日と同じにまた私を射抜いた。彼女の口が、巻き込んでごめんなさい、と動く。恨みが競りあがってきて、耐え切れずに先生を睨んだ。何度となくあの夜に殺されかけたことを、何故か嘲笑われているような気さえしていた。

そのとき視線の先の先生が、突然ふっと力を抜いた笑みを見せた。皺がくっきりとなって、彼はますますうらぶれた。コップが倒れて、零れた中身が一気に広がっていくように、愛しさが憎しみを濡らした。濡れた憎しみが、正義になったり負い目になったりしている。その一方で罪にまみれた私のからだを愛でた手の動きも、口づけした唾液のにおいも、犯した罪の意味を隠したまま置き去りにされた憎しみも、すべて等しく、許してしまえる気になる。そのことに混乱して、目から涙が零れ出た。

「また、泣かせたなあ。君に泣かれるのが、一番堪える」

「泣いてなんかいない。こんなの泣けないって言ったでしょう」

「じゃあこれは、なんだよ」

突然、先生の手の手が伸びてきて、乱暴に両頬を拭われた。頬に当たった指先が熱くて、かさついていて、思っていた以上に硬くて、だから余計に涙が出た。

「子供のくせに」

「子供は、先生でしょ。あのホテルでだって、私は泣かなかったわ！」

しゃくり上げながら言うと、先生は以前のように顔をくしゃくしゃにして笑った。かすれた声で楽しそうに笑う彼はまるで手を離された風船のように見えた。魂をどこかに置き忘れた入れ物のように、儚い。再び純代さんとやり直すことを決め、前に進んだかのような彼が、何故だか一年前に感じたときよりももっと現実に生きていない人のように見えた。どうしてそんな風に思うのか分からなかった。けれどそれを訊ねることも、探ることもあまりに遠すぎて、適わないと知っている。何だか、何もかもが変わってしまった。

「ねえ、先生」

「なに」

「どうして、私に救われたと言ったの、遊園地の観覧車で。私に言ったでしょ、十五の私に救われたんだって」

先生はネクタイに指を差し入れて緩めると、これまでで一番優しく、悲しい声で言った。

「あの時、君は俺を殺して気づかせてくれたから」

「どういうこと」

「もし、笠原にあの日、あの時間に会っていなかったら、俺は、純代を殺していたかもしれなかった。それぐらい切羽詰っていたんだ」

「なんで、純代さんを殺す必要が、あるの」

「あの頃、子供を、せがまれていたんだ、欲しいってずっと」先生は抜き出して啜えたまま弄んでいた煙草を口から離して、少し笑った。「それをずっと拒んでた。気づいたときには、彼女も、生活も壊れかけてた。若かったのかな、逃げたかったんだ」

ねえ、この子となら、子供をつくるの。

不意に、純代さんの声が蘇って、心臓がどきりと鳴った。あの時、彼女は何かを言いかけていた。それがここまで出掛かっているのに、出てこない。それに囚われていると、先生は今度こそ煙草に、安物の駄菓子みたいな青色をしたライターで火をつけた。薄闇にぼんやりと赤い炎が揺らいで、すぐ消えた。一瞬、彼の手が震えているように見えた気がしたけれど、気のせいかもしれない。先生はゆっくりと白い煙を吐いた。

「ルノアールで、まだ中学生らしき女の子が、目の前の父親を憎しみと愛情を持った目で睨んでいるのを俺はすぐに見つけた。女の子は通学鞆に不自然に手を突っ込み、そこから包丁の鉛色と黒い柄が見えていた。それを見てたら、何だか目が覚めたんだよ。上手く言えないけれど、ああ、生きていける、と思ったんだ。だから純代を治療できた」

「愛情なんかなかった。私は、父親を殺そうとしてただけの、最悪な娘だよ」

言うと、先生はまた静かに、長く、吸った息を吐いた。ほんのり赤く照らされた目元に皺が寄って、優しく笑っているのが分かった。

「それは一度、棄てたはずだろ。それは消して、君の言うその最悪が、俺みたいな人間をこうしていつまでも救ってるってことを覚えていてよ」

「ずるい。本当にずるいよ、先生は」

言いながら、濡れてぶれた視界の中で通学鞆を急いで肩に掛けた。もう行かなければ、ここから去らなければ、あの熱にまた捕まってしまう。それでも去り際、我慢できずに聞いた。

「それ、吸い始めたの」

「ああ。引越しのとき、むかし吸ってたのを見つけて。吸ってみたら、やめ方を忘れた」

「引越し？」

「この一年、静岡にいたからね。維持費が勿体ないから、あの家は、手放したんだ」

「そう、なんだ」

動揺した。

あの部屋は、私にとっては、ずっと秘密基地だったのだ。

たった二年前のことなのに、遠い過去の話をしているような気になる。けれど地獄を生む前は、あの場所が天国だった。いつもしゃっくりみたいに突然現れては突然消えてしまうけれど、神様に見守られているような絶対的な安心と、震えるほどの幸福があそこにはあった。

その跡さえ、もうなくなってしまった。

そう思ったら、急に道を違える前の日々が色を失ってしまった。茫漠とした虚無感に足首をまれた気がして、からだは石のように硬くなった。

でももう、すでに終わっているじゃないか、一年前に。

どんな傷もかさぶたになって癒えるように、植えつけられた罪の記憶だって、いつかは消える。膿んでいるみたいに、いつまでも乾かずに疼いているあの過去も、いつかはその痛みさえ忘れる。それが人間といういきものなのだ。だから、いつまでもしがみついているのは、おかしい。もう、あの場所も消えた。だから

改めて思って、けれど目は継るように関谷先生に向いた。眉間に皺を寄せて煙草を吸っていた彼は、携帯灰皿に揉み消すと、私に背を向け、壁にもたれて天井を仰いだ。その背は人を簡単には寄せ付けようとしなない防壁のようで、夜の海のような色をしていた。

動けないでいると、先生のほうが先に振り向いた。

「さて、俺はもう行かなきゃ。休職明けで、サボりがばれるわけにはいかない」

抗えない迫力を感じて、私は息を呑んだ。言葉が何も出てこなかった。彼はそんな私の頭をまたかたちを確かめるように一度だけ撫でて、そのまま階段を下りて行ってしまった。

気配が完全に去っても、靴音だけがずっと聞こえていた。それを聞いていると、まるで絡まった糸を追っているような気分させられる。解こうと焦れば余計な糸を引っ張ってしまい、絡まりはより一層複雑になる。そして纏れて団子状になればかえって距離が近づいて、私からどんな手段も奪っていくのだ。

乱暴に顔を擦って、鞆を背負い直した。そして気配を振り切るように、静寂に包まれた階段を駆け出した。耳の中で、私の足音だけが反響して大きくなっていった。

学校の外に出ると、湿り気を帯びた夜気が支配を始めていた。濡れたように黒々と光るコンクリートの路面に、店の明かりや車のヘッドライトが反射して、周囲は御伽噺に出てくる世界のように煌いている。そこを通り抜けてしまうと、今度は古びたオレンジ色のナトリウム灯の下を走った。闇が増えると、周囲のものが遠ざかっていくように見える。唐突に帰り方が分からなくなるような不安に襲われて、私は猛スピードの自転車を、急ブレーキで止めた。金切り声に似たブレーキ音が夜道に撒き散らされたが、目の前の分厚い闇を切り裂くまでには至らなかった。

スーパーで買い物をして、団地に帰ってきた。ちゃんにご飯食べて行ったのかな。冷蔵庫に昨日の残りのマーボー豆腐があったことを思い出しながら、もうとっくに仕事に向かったはずの母のことを思う。

のろのろと駐輪場に自転車を入れて、まだ熱い頭とからだの力を抜いて団地を見上げた。そのとき、点いているはずのない部屋に電気がついているのが見えた。部屋のカーテンが内側から照らされて、微かにオレンジ色に光っている。まだ母がいるのか、いや、彼女が私の部屋に入るわけがない。慌てて階段を駆け上がって玄関の扉を開けると、三和土に見慣れたスニーカーを見つけた。

スーパーのビニール袋を持ったまま、纏れる足で自分の部屋の前まで行くと、

「お帰り、水穂」

逸也が、部屋の小さな丸テーブルに突っ伏すような格好で、煙草を吸いながら笑って言った。短かった髪が少しだけ伸びたせいか、癖毛の毛先がますますあちこちの方向に向いて跳ねている。

「ただいま」

かすれた自分の声が、部屋の中に響いた。会っていなかったのは一週間程度のことだというのに、もう随分長い間会っていなかったような気がして、胸が締め付けられるようなやり切れなさに囚われた。

「どこ行ってたの。今日、電話したんだよ。どうして突然いなくなったりするの」

「ほう、いなくなってみるもんだな。水穂が俺を恋しがってら」

「恋しかったよ」

勢いあまって言うと、逸也は複雑な顔をした。困っているような、苛立っているような、淋しがっているような、よく分からない暗い影を落として笑った。どんな顔をしていいのか分からなくなって俯いたら、足元に通った敷居が、まるで逸也との間に引かれた境界線のように見えた。

「ほんと嘘が下手だな。お前は」テーブルの上で腕を組むようにしてからだを起こした逸也は、短くなった煙草を消して、何かを慈しむ時のような顔をした。「こっちへおいで」

境界を踏み越え、隣に落ちるように座ると自分でも驚くほど、からだから力が抜けていった。

「遅かったな。千穂子さん、もう随分前に仕事行ったよ」

「あ、うん。今日は友達の部活が終わるのを待って、それからこれ、スーパーで買い物してきたから」

しどろもどろで説明する私を、逸也は面白いものを見るような顔をして黙って見ていた。言葉を吐けば吐くほど、背中に汗を掻く。頬が自分でも分かるほどに熱くなったとき、自分がそうして守ろうとしているものに気づいて、語尾は尻つぼみになった。逸也はそんな私の隣で小さく唸り、髪の毛をがしがし掻くと、

「実はさ、今日引っ越したんだ。今日はそれだけ伝えようと思って来たんだけど」

「えっ、だって引越しまではまだ日があったよね、確か」

「うん、でもここからだ遠いから、早く越したかったんだ。塾、引継ぎが結構大変でさ。昼夜逆転生活だし、終電に間に合わないし、毎度始発で帰ってくるのもしんどいし。色々片付いたから、ちょうどいいかって」

「ちょっと待って！ 塾って……塾って何？ だ、大学は？」

「辞めた。辞表、出した」

「どうして、何で」

「ごめん、水穂。校舎が変わるなんて、嘘。嘘ついたんだ、俺。本当は半年前から、塾でアルバイトしてた。で、明日から、歴とした塾講師」

「言ってることが、全然、分かんないよ」

「引越し先の近くにさ、進学塾があんの。で、そこで塾長やってる知り合いがいんの。そこで雇ってもらった。分かった？」

「分かんない」動揺して言うと、逸也が「分かれよー」と眉を下げて笑うので、ますます混乱してしまう。

「全然、気づかなかった」

「気づかれねーようにしてたんだよ。ちゃんとするまで、気付かれなくなかったんだ。だからくだらん嘘までついて」

自嘲気味に言って、細いギンガムチェックの古着のシャツの胸ポケットから煙草を取り出して、飛び出た一本を口で引き抜いた。

「なんで……」

「聞きたいの？」

彼の鋭い目に捕まって、口を噤んだ。聞きたいはずがない。私たちは、この風の海のような水面にしか立ってられない。波風が立って、バランスを失うことを何よりも恐れている。だから私は下唇を噛んで、曖昧に首を振った。聞きたくない、とはっきり口にすることも出来ない。踏み込まず、失わない、最低のラインを常に保っている。そうしていれば、感情はやがて静かに去って、怠惰でぼんやりとした時間に捕ら

えられて、無責任でいられるはずなのだ。

だが、今日は違った。

いくら待っても、凧はやってこなかった。

耳に、風が集まり轟く音が聞こえる。私は乱れたプリーツスカートの折り目を見つめて、意識を逸らそうとした。無造作に座ったせいでできた跡を、指先で神経質になぞり続ける。その手に、突然逸也の白くて大きな手がどしんと乗ってきた。

「俺は何でも知りたいけど」

脳天に落とされた声は、やけに静謐で、幼い頃の記憶のように優しく、一瞬だけ彼が高校生の頃に帰った気がした。だから私は油断した。彼はそこを見逃さなかった。

「水穂は、まだ無理？」握ったままの私の手を自分の心臓の辺りに押し付け、「ここに来るのは、まだ無理か？」

返事に窮した。凧の海に嵐を持ち込もうと、私に雨のにおいを近づける。湿った、波乱のにおい。けれど今は彼よりも、骨を叩く、あの足音のほうはずっと恐ろしい。私からいっさいを奪い、溢れんばかりに与えてもいくあの人のほうはずっと。

「ちょっと早すぎたか」

そう言って肩を竦めて笑った逸也の顔は、やっぱり疲れていて色艶がなかった。二十六歳の持っているはずの若さがまるでないのだ。だが私は、きっとそういうところにいっそうの安心感を覚えている。教室の喧騒や町に溢れる女の子の嬌声から逃げて、この一年間、私はここに帰りを続けた。私と同じように、どこかでエネルギーを使い果たして帰ってきたこの戦士のそばで、漂った。

手の甲に、逸也の鼓動が伝わる。少し早い拍動と私のそれは似ている。めまいのするほどの穏やかさの一方で、波のうねりのような起伏を持つ、関谷先生のそれとは全然違う。私たちはたぶん同じような氾濫から、からだを寄せ合って身を守ってきた。だから彼は、私に絶対に罪をきせたりなどしないだろう。

ゆっくりと、握り返す手に力を入れてみる。自分の中に巣食う浅ましさが、強まる雨のようにその影を濃くした。

「お前、何かあったね」

「えっ」

逸也は仰向けのまま、実に美味そうに煙草を吸って言った。「男のにおいがする」

「そ、そんなことは」

逸也は、ふはは、と煙草を挟んだまま笑って、目を瞑ってしまった。長い睫毛が伏せられて、彼の視界から自分が消えたとき、彼が覚悟を決めたということがいっそう現実となって押し寄せてきた。水かさが増してくるように、足元からじわじわと詮索の目が私に注がれ始めている。きちんと答えなくては。沈黙は、人を鬼に変える。

「与えてもらっても、私には返せないよ。そういうことが、上手く出来ないの。変わったのは、私のほうなんだ」

「何言ってるんだよ、こんなにガキの頃のままのお前が」逸也は楽しそうに言うと、煙草を口に挟んで手を伸ばし、膨れていた私の頬に触れ、「ほれ、この頬だろ、それからこの右だけ跳ねる髪だろ、それからこの低い鼻も薄い唇も」

そう順に触れていって、だが唇に触れた中指だけはいつまでも離れなかった。顔の前で揺れる煙に捕らわれ、縛り上げられるような感覚がある。逸也の中指が唇に埋まっていくと、からだに対して大きなその手の所有物になった気がした。その密着感に、私は陶醉した。いつもそうだ。逸也のそばにいと、醜悪に変化した私は薄れる。彼に隙がないせいか、正義に溢れているからか、こうして一緒にいると、磁石のよ

うに、私の中の悪はあるところまでしか寄ってこられない。そのことが分かったとき、もうこの人と一緒にいたら大丈夫なんじゃないか、と思った。何が大丈夫なのかは、よく分からない。けれどここにいればもう、関谷先生と一緒にいたときのように、からだをかなぐり捨てたくなるほど溶け出したり、飲んでも飲んでも乾いたりすることもない気がする。ここには溺れるような苦しみはない。

「イツちゃん」

昔のように甘えた声で呼ぶと、逸也は初めぎょっとした顔をした。私はゆっくりと息を吐いて、逸也の覚悟に触れてみることにした。

「どうした」

「私、死ぬほど好きな人がいたんだ。殺したいくらい憎い人。その人が今日、これまでよりももっと遠くにいったのを見た」

言葉に出すとあまりの薄っぺらさにおかしくなって、私は喉をくくくと鳴らし笑った。逸也はそれを寝そべったまま黙って見ていたけれど、やがて自分の膝をぼんぼんと叩いた。寝ろってことかな、と思って、そろそろとからだを倒していくと、途中で肩を抱かれて押し付けられ、蛙が潰れたような声が出てしまった。

「大丈夫。お前が変わっても、ずっとそばにいてやるよ」

何の根拠もないというのに、それがいかにも不動のものであると言わんばかりに言って、逸也は私の頭を、まるで犬にするように乱暴に撫でた。撫でられると、余計な言葉の出来損ないたちは散らばり、嬉しさだけがぼつんと残った。

「あー、やっぱり安心するわ、この六畳間」

頭の向きを変えると、シャツから覗いた彼の腹が締まっているのがよく分かった。凝りがたくさんあって均されていない私とはまるで違うそのからだ。それをとてもしなやかで美しいと思った。一体どんな険しい道乗り越えてきたのだろう。

「本当にどこにも行かないよね」

それが兄妹に近い安心感だと知っていたけれど、私は知らぬふりをして言った。

「行かんよ、もう。だからお前も、忘れろ。もう観覧車にも行くな。その男なんだろ、お前を観覧車に繋ぎとめているのは」

緊張した私のからだを、逸也はより強く抱いて言った。それからからだを起こし、私に覆い被さるようにして口づけした。煙草くさい、と文句を言うと、逸也は何かを企むときのように笑って、私を無理やり起こし、きつく閉じた私の口の中に侵入してきた。それは一見じゃれているようだったけれど、彼の眉根には真剣な皺が寄っていた。最初にしたのは違う、もっと何かに引き摺られまいと抵抗するような口づけだった。ずっと目を開けたまま応じていたら、彼の瞼がうっすらと開いた。目が合うと彼はひどく驚いたようで、反射のスピードでからだを離れた。そしてまるで悪事の見つかってしまった子供のような目をして、

「目、閉じろ、馬鹿」

彼は傍らの灰皿に煙草を揉み消して、私の目の上に肉厚の手を当てた。そうして再び、私に挑んできた。まるで食べられているかのような口づけだ。けれどそうして柔らかい器官を絡まり合わせていても、制服の自分のからだはいつまでも清らかな気がした。そのうちまるで尊いことをしているような気にさせられて、私は静かに彼に身を預けた。

逸也と引越し先を見に行ったときにも思った。私は自分の意思で、どこにだって行ける。からだだけなら、どこへだって行けるのだ。

それならば、からだだけでも離れるべきなんだ。

以前、南京錠で閉ざされたあの屋上の扉の先には、秘密基地があった。今はもう消えてしまった、先生ともつれ合ったあの部屋だ。再びあの扉の先は閉ざされ、錆びついた頑丈な鍵が、何百年もそうしていたように

進入禁止だと告げている。けれど。私は思いながら、逸也の首に両腕を回した。彼はそれに応えるように無防備な私の腰に腕を回して、きつく抱いた。庇護される赤子のように、私のからだの中が変化していく。そうして罪が僅かに遠のくと、足の先が行き止まりでなく、すでに新たな道が出来ているのを見つけた。

関谷先生が連れてくるあれこれにもう蓋をしようと、私は逸也の手の下で目を瞑って、自分に言い聞かせた。そしていつか観覧車から過去を棄てたみたいに、この愛情と憎悪も空に投げて葬ってしまおう。

まだ終わらない長いその口づけで、私はあの路地裏の袋小路から連れ出されと思った。

盆が近づく頃になって、母が突然、金沢へ二泊三日の旅行に行ってもいいかと打診してきた。高校時代の女友達と行くのだと言い張っていたが、男と行くのは目に見えていた。今更そんな見え透いた嘘をつく必要もないだろうにと思いながら、私は興味のないふりをして了承した。すると母は弾むような口ぶりで、「お土産買ってくるから」などと言いながらいそいそと準備を始めた。

その夜、私は逸也に電話をしようと自室のベッドの上で、携帯を手を取った。もう仕事は終わっただろうか。いつだったか杏里から誕生日プレゼントと称して貰った、壁掛けの鳩時計を見上げる。鳩を見たのは、貰った当日の一度きりで、それ以来、それは引きこもったままだ。それでも何だか愛着が湧いてしまって、結局修理には出さずにそのまま使い続けている。その時計が夜の一時を指していた。いつになったら引きこもるのをやめるんだろうか、あの鳩はと思いながら、発信した。

逸也とはあれから、こうして夜中に電話で話をするようになった。日付が変わってしまってからになるのは、彼の塾の仕事が忙しいせいだ。引越しも済んで、離れてしまったから会うことも難しくなった。朝より夜して、と言われていたから夜に電話をするようにしているけれど、本当は無理してくれているのだろうと思う。けれど彼に繋がる音を聞いていると、とても静かな気持ちになって、自分の全ての組織があのぬらぬらした偏執的な欲望に支配されていたことなど、まるでなかったようになることを知っているから、つい手が伸びてしまう。

呼び出し音が随分鳴ってから、「もしもし」という逸也の少し眠そうな声が聞こえた。

「今、忙しい？」

「ん、大丈夫。どうした？」

「あのね。お母さんが前から付き合ってる人と旅行に行くみたいなんだ」

「へえ。結構前から続いている人だよな。良かったじゃん」

屈託のない声に安心しながらも、そう真っ直ぐ言われると、曖昧に唸るしかなかった。本音の部分では、私は母の交際をよく思っていない。やはり母親が違う男の前で女になっているという現実、如何ともし難いものなのだ。

「それで、いつ行くんだって？」

電話の向こうで煙草に火を付けた音がして、そのすぐ後に空気を断ち切るような細く鋭い息の音が続いた。

「お盆中、二泊三日だって言ってる」

「ふうん」逸也は少し間を置き、やがて探るような声で続けた。「じゃあその間、俺んどこ来るか」

「いいの？ 忙しくないの」

「まあ二日くらいなら休み取れると思うから」

「やった。絶対行く」

「珍しいなあ、喜んじゃって」

「だってイツちゃん、忙しくて全然構ってくれないもん」

「それは本当に悪いと思ってるよ。でもお前、受験生なんだから勉強しろよ。大学はどうすんの。まさかまだ地方に行くつもりでいるんじゃないだろうな」

「うーん、でも大学に行くより就職したいかなあ」

「費用のことが心配なのか」

「そういうわけじゃないけど」

何となく濁したけれど、進学に伴う費用の心配がないわけではない。養育費は月々父親がしっかりと振り込んでくれているらしいが、大学まで面倒を見てもらう気は勿論なかった。けれど母のスナックでのパートではとても賄いきれないし、それ以前に母に学費を出してもらうのも避けたかった。行きたいという思いがあるのなら、奨学金だって、アルバイトをしながらだって、浪人したって、目指せる。大学はそう遠いところじゃない。けれど、実際のところ私には大学に行って何かを学びたいとか、目標を探しに行くとか、そういう気持ちがなかった。それより早く自立がしたい。あの家を出て、誰も私を知らないところで一人で生きたいのだ。

そう逸也にぼそぼそと説明すると、

「甘い！」

「甘い……」

「水穂、大学には、行け。費用は俺も出来る範囲で協力してやる。だから大学には行っておけ。お前は視野が狭すぎる」

「でも別に社会で何かを成し遂げたいっていう気持ちもないし。どうせ事務職につくくらいだよ。いいんだよ、生きていければ」

「甘い！」

「それも?!」

「いや、ただ、お前にはよく考えてもらいたいんだ。お前の世界は決して、今見えているものが全てじゃない。別に世界一周してこいって言ってるんじゃないんだ。ただお前は本当の自由がどんなかたちをしているのかを、ちゃんと見るべきだ」

「本当の自由？」

「うん。今、お前は管理されてるんだよ。それは社会に出ても変わらない。俺だって管理されて、小さな集合体の中で統制されてる。いいか、水穂。本当の自由は、社会の中で生きている人間には得られない。大人になったら自由になる、なんてまやかしたぞ」

逸也の醸す尖った空気にたじろいだ。「でも、私にとってはこの家を出る自由があれば、他の自由なんかいらんよ」

「他の自由なんて、お前が知ってるわけないだろう。お前は見ようと思えば見られるんだ。それなのに見ない奴を見てると、俺は居ても立ってもいられん気持ちになる」

「そんなこと言っただって。大学に行っただって、勉強しなきゃ卒業できないし。自由かなあ」

「お前ねえ」逸也は呆れたように笑って、煙草を短く吸った。「まあ、行けば分かるよ、俺の言ってることの意味が。そりゃ当然、努力しなきゃ卒業できねえよ。でも大学は、お前を管理はしない。お前が卒業できなくても、別にどうでもいいからだ。誰もお前を見てないし、誰もお前を束縛しない。全部水穂が決めるんだ。そういう自由の下に、お前は一度立ってみるべきだ。まあ、もっとよく考えてみろ」

自由の下に立つ、ということが私にはよく分からなかった。けれど、ここまで熱心に何かを説く逸也は初めてで、私は分からないまま、とりあえず首肯しておいた。けれど、あの路地裏から逃げ出した私の前に広がっていた、まるで荒地のような風景に風が吹いた気もした。砂埃が待って、やがて雨雲が大地に潤いを齎すかもしれない。私は今になって初めて、自分の人生にはまだ気が狂うほどの時間があるという、当たり前のことに気づいた。

「じゃあ勉強、教えて」

「嫌だよ、休みの日くらい活字という活字から離れたいね」

「じゃあどこかに連れてって」

「あのねえ」逸也は少し笑いながら、「お前聞いてた？ 少しは真面目に自分の将来考えろって言ってんの。もしこの先も」

「えっ、何？」

「いや」

だが逸也は黙ったまま、また煙草の煙を吐く音がして、稠密な間を作っただけだった。彼が煙草を呑んでいるときのこの間が好きだったけれど、言葉の途切れた気配は何だか私をやけに緊張させた。

電話口の向こうから聞こえる吐息を聞き、約束を交わし、おやすみを言い合って電話を切った。

これからも生きるために、私は進まなければいけないんだ。あんなことは、何でもないことなのだ。罪深い行為も、先生の復縁も、私を蝕むこの腐った愛情も、生きるために、早く遠ざけなくては。生きるのだ。生きるのだ。私はぶつぶつと口の中で唱えながら、見たことのない原野を想像した。しかし、原野を行こうとするのは簡単なことではない。入学金や学費のことを考えると、頭が痛くなってくる。浪人してアルバイトをして金を貯めるか、それともおとなしく父に借りるか。そのときふと、父は母が別の男と付き合っていることを知っているのだろうか、と思った。

「いや、知らないだろうな」

思わず口に出したら、何だか突然父とは一体何なのか、分からなくなってきた。いつからそうなったのか、父の浮気を見たときか、離婚が成立してから、それとも私が幼少の頃からずっとそうだったのだろうか。考えていると眠くなってきて、私はそのままもそもそと布団の中に潜り込み、いつの間にか眠ってしまった。

母が大荷物で出て行くのを見送ってから、すぐに私も準備を整えて家を出た。

二十分ほど都心方面に向かう電車で揺られ、少しして二回乗換えをする。普段慣れていないせいで、あまりの人の多さに戸惑う。人の波に流されて、別の場所に運ばれそうになりながら、何とか都営三田線に乗り換えた。それから十分もしないうちに、逸也の住む町に着いた。以前は車で行ったので、駅へ降り立っただのは初めてのことだった。地下鉄の階段を上がって地上に出ると、大きな道路をタクシーがたくさん走っていて、つい物珍しくてきょろきょろしてしまう。

教えられた道筋を慎重に進む。一本奥に入ってしまうとそこはもう静かで、土地に根付いた商店街の先には、住宅街が続いているようだった。

時間の止まってしまったような道を黙々と歩いた。時折、住宅を囲む塀から、弾けんばかりに咲きみだれている百日紅の赤い花に目を奪われる。視線の先には陽炎が立ち昇っていて、その揺らぎがますます現実感を損なっていく。額をハンドタオルで押さえながら、踏み出す足に力を入れた。青い空に入道雲が映えている。ノンスリーブのカットワンピースから突き出た腕や足がじりじりと赤らんでいくのも、今日は気持ちが良い。知らない町を歩いていると、まるで秘密の逃亡をしているような心持ちになって、カンカン帽のつばを引っ張り、頬の緩んだ顔を隠した。

マンションがある小道に入ると、途端に線香の香りが強くなった。どこから流れてくるのか判然としないせいか、余計に夢の中にいるような気になる。汗を拭いながら歩いていると、いつの間にか逸也の住むマンションの前を通り過ぎそうになっていた。

オートロックではないエントランスの扉は開け放たれていたけれど、路地の突き当たりにあるせいか日が入らず薄暗い。どこか忘れ去られた気配を持つその建物に入り、エレベーターのボタンを押した。インターホンを鳴らすとすぐに扉が開いて、そこから髪を爆発させた逸也が顔を覗かせた。

「悪い、寝てた。入んな」

Tシャツにスウェットパンツという格好に、かえって緊張してしまう。ここまで油断している姿は見たことがなかった。まだ寝起きの肌はとても艶やかで、彼も大人の男だということが頭の中に無理やり捻じ込まれる。のろのろと上がると、逸也がそれをまだ眠そうな顔で不思議そうに見ていた。どうしたの、と訊ねると、

「いや、確かに今日、来るって言ってたよなあと思って」彼はぼさぼさの頭をさらにかき混ぜるように撫ぜ、「やばい、まだ脳が寝てる。ここに水穂がいるの、まだ夢かと思ってる」

「いい加減、寝惚けすぎだって。それに失礼じゃない？ 私が来るのに寝てるなんて」

いじけてみせると、彼はまたぼんやりして、それからいつものちょっと悪そうな笑みを見せた。

腹が減ったというので、一人用の小さな冷蔵庫を覗いてみると、一人分のソフト麺と使いかけのベーコン、それから玉ねぎがあったので簡単な焼きうどんを朝食兼昼食と称して作ってあげた。ダイニングにある小さな正方形のテーブルは、一人分の皿を乗せただけで窮屈になった。醤油の香ばしい匂いが部屋中に充満しているせいか、腹はそんなに減っていなかったはずなのに、ぐうと鳴ってしまう。気恥ずかしくなって、咳払いをして誤魔化していると、子供のように一心に食べていた逸也がニヤニヤしながら顔を上げ、箸でつまんだうどんをこちらに伸ばしてきた。思わず口を開けると、

「なんか餌付けしてるみてえ」

「作ったのは私だもん」舌にベーコンの油と醤油が絡まる。「やっぱり私、天才だ。美味しい」

咀嚼しながら言うと、逸也は笑いながら再び荒々しく食べ始めた。品のいいかたちの唇が油で光って、彼

はますます獣のようになった。

汗を洗い流したいからと逸也がシャワーを浴びに風呂場へ行ったので、洗い物を済ませてから、私はベッドに座った。南西を向いたダイニングの窓から見える景色はビルや電線ばかりだけれど、ベッドのそばの西の窓からは小さな神社がよく見えた。その神社の境内に生えている木々が、室外機用スペースの手摺りのところまで張り出してきている。大きな杉の青々と茂った緑が揺れて、葉の色が反射したカーテンがうっすら緑色に染まっているようにさえ見える。それを見ていると、風呂から戻ってきた逸也が背後で、わ、と驚きの声を上げた。

「お前の、その警戒心のなさは何とかなんのか」

呆れたように言われて思わず振り返ると、逸也は髪から水滴を垂らしながら、腰にバスタオルを巻いただけの格好で、押入れの中の衣装ケースからTシャツを取り出そうとしていた。

「そっちこそ、そんな格好で出てこないでよ」自分でも驚くほど上擦った声が出た。「しかも頭濡れてるし！水垂れてるよ！」

「バーカ。何照れてやがる。そういうところで照れるんなら、初めからちゃんと考えろよ」

逸也は器用にボクサーパンツを履き、それからジーンズに足を通すと、バスタオルを頭から被り、濡れた髪を乱暴に拭き始めた。

「そんなに力任せに擦っちゃ駄目だって」

そのあまりの杜撰な拭き方を見兼ねて言うと、逸也はタオルの隙間から私を見て、ベッドの縁に腰を下ろすと、

「じゃあ、水穂がやってよ」

元々茶色がかかった髪が、窓から差し込む陽光を受けて栗色になっている。濡れた髪は乾いているときよりもずっと癖が強く、まるで高校生だった頃の彼に戻ってしまったようだった。髪をタオルで丁寧に拭いていると、ままごとをしているような気になる。弟の髪を拭いてあげているみたいだ。思いながら髪の乾き具合を確かめようと彼の後頭部に直に触れたとき、だが掌を滑っていく曲線に畏であったかのように捕まって、動けなくなった。逸也が素早い動作で振り返った。顔は少年のようにさっぱりとしていたが、その目は鋭く私を射抜いている。逸らすことも逃げることも出来ず、持っていたタオルを再び彼の頭に被せた。

「何すんだよ」

拗ねた様子でそれを取った彼が笑っていたので、つい胸を撫で下ろす。

「いつもちゃんと拭かなきゃ駄目だよ。髪が傷んじゃうんだから」

「いいよ、傷んだって」

深いブルーのVネックのカットソーに腕を通しながら言う彼に向かって、それからドライヤーで乾かさねば駄目だというようなことを、無意味に熱く説いて聞かせた。逸也は面倒臭がっていたが、私の熱弁に負けたのか、渋々洗面所に戻っていった。大きな後ろめたさに、やけに口内が乾いて、唾を飲み込むたびに喉の奥が切れるように痛んだ。

彼の乾いた髪は柔らかく、綿毛のように揺れていた。冷蔵庫からペットボトルの水を取り出して、それをそのまま飲み始める。それをぼんやりベッドから見ていると、ああ彼はここで、一人で生きているのだ、とそんなことが唐突に現実感を伴った。衝動的にベッドから降り、逸也の背中に身を寄せ、そのまま前に手を回す。逸也は少しの間されるがままの状態でしたけれど、やがて私の腕に触れ、

「やめろ」

そこには父親が子供をいなすときのような音があった。

「なんで……イッチャんだって、自分がそうしたいときに私に手を伸ばしたよ」

「何だよ、それ」逸也の腹が波打ち、無理やり手を解かれた。「そういうことを言うなよ」

逸也は傷みに耐えるようなときの顔をして、水を冷蔵庫に仕舞った。肌は見えないのに、怒りに震えているのが何故か分かる。しかしその怒りに隠れた本心が何なのか、分からない。彼の目の奥で音もなく揺らめくものに慄いて小さく謝ると、

「いいよ、もう。俺も、悪かったから」

彼は私のこめかみを人差し指で一度突いた。猫をいじるように、その指は優しい。そうされると頭の中がじんわりして、暖くなる。

「映画、行くか！」

落ち込んでいると、逸也が突然提案した。

ぎこちなさを抱えたまま、私たちは連れ立って夏の日照りの下へ出た。

映画館はお盆休みの人たちでごった返していた。子供向けのアニメ映画や、派手なアクションが売りのハリウッド映画、一見してあらすじの読めそうな恋愛映画に人が群がっている。熱気が旋風となって見えるようだ。私と逸也はそれらの巨大広告の前で立ち尽くし、やがて二人で顔を見合わせて苦笑した。私達が好むような映画がまるでなかった。駅前からは離れたところにあるミニシアターに行くことにして、並んで歩きだした。逸也とこうしてたくさんの人の中を歩くのは、初めてのことだった。二人して人ごみが苦手だから、あまり駅前やデパートに行かないのだ。逸也も同じ事を考えていたのか、人の波を掻い潜りながら私のほうに顔を寄せて、

「こんなところを水穂と二人で歩く日が来るとはね」

その声は苦笑混じりで、本当に人ごみが嫌いなんだなあと思ったらおかしくて、私もつられて笑った。

空は夏らしい青空を広げていたが、東の方に灰色の雷雲が迫っていた。予期される嵐を想像したら鳥肌が走ったように、ぞくぞくした。空に目を奪われていると、逸也の背中がいつの間にかとても小さくなっていった。人いきれの中を慌てて泳ぐように急いだけれど、同じだけ人が向かってくる。まるで潮に流されているようだ。前に進んでいるのか、後ろに進んでいるのかもよく分からない。呼ぼうと思うのに、たくさんの人を前にすると声が出なかった。躊躇っていると、頭の中に「遭難」という言葉があっちはこっちはと踊りだす。大袈裟な、と思ったけれど、目を開けていると顔のない人間たちが木のように見えてきて、このまま真っ直ぐ行くことが果たして正解なのか、などとつまらないことまで過ぎた。水面に向かって呼吸をするように顔を上げると、人の森の向こうに、逸也の頭らしきものが見えた。あ、癖毛、発見。ホッとすると同時に、彼がこちらを振り向いた。人込みの中で歩みを止めている私を見つけて驚いた顔をしたと思ったら、すぐに表情をなくした。まるで去っていく者を見送っているときのようなその顔に、瞬間、私の心は波立った。

彼は私が自分からやって来るのを試すかのように、人にぶつかっても佇んだままでいた。その姿がやがて陽炎に捕まり、亡霊のように揺らめき始め、人波に飲まれていく。薄いサンダルで堅い地面を蹴って距離を埋めた。

「何やってんの」腹に体当たりするようにして辿り着いた私の肩を受け止めた逸也は、呆れたように笑って言った。「ちゃんと真っ直ぐ歩けて」

「真っ直ぐ歩いてたよ……たぶん」

「いいや。水穂のことだから、何か考え事でもしてたか、目を奪われてたかしてたんだろ、どうせ」

「こ、これだけ人が多いんだもん、真っ直ぐ歩いてたって流されちゃうんだってば」

「そうかねえ。俺はどんなことがあると、絶対お前を見失わないと思うけどね」

「何それ」

「気持ちの大きさの違いでしょ」

「何それ」

「何それはないだろ、何それは。大体お前はねえ、昔からよくいなくなる子供で、周りの人間はほんと大変だったんだぞ。俺も吉行さんも、何度お前を探し回ったか分かんねえんだから」

「お父さんが？ そんなことあったっけ。イチちゃんが大袈裟なだけなんじゃないの。私、お父さんを困らせたことなんて覚えてないもん」

「まあ、記憶がないのも何となく分かるよ。水穂は好奇心旺盛なだけで悪気はないからな、いつも。まあ、だから厄介なんだけど。吉行さんは特にそれが分かっていたから、どんなにお前が無茶をしても、誰にもお前を怒らせなかった。だから覚えてないんだろう」

「そうなの？」

「そうだよ。千穂子さんが怒ろうとするのだって、あの人はいつも止めてたんだから。まあ、千穂子さんはお前に振り回されて心配させられて、なのに怒ることも阻止されて、可哀想だったけど」

父との思い出は、あの最悪な場面に始まり、そこで完結してしまっているの、他の思い出はその衝撃で消滅してしまったり、単純に忘れてしまったりしてあまり覚えていない。しかし過去に愛されていた話を聞くと、粘質な憎悪の中に泡が立つ。憎悪をかき回されて、私はますます意固地にならだを守った。けれど驚くことに、底から溢れてくるあぶくにからだどこか悦んでいるのを感じる。感じてしまう。まるで関谷先生を想う気持ちに捕まっているときのように。

「そういえば、あれは覚えてるか？ “トトロ事件”」

「ううん、知らない」

逸也は私の反応に、人がたくさんいるにも関わらず驚きの声を上げ、周囲の人の視線を一瞬で集めてしまった。

「嘘だろ、覚えてないのかよ。結構な大事件だったじゃん。お前が初めていなくなったときのことだよ」

「いつの話？」

「水穂、いくつだったかな。俺が中学に上がった秋だったはずだから、恐らく四つか五つくらいか」

「五つかあ。五つじゃ記憶的には、微妙な時期だよ。覚えていることもあるけど、覚えていないことも多い」

「いいや、あれを覚えていないとは驚きだね」

「というか、何でトトロなんだろう。そこからもう、分からないんだけど」

儼然と言う私を、彼は眩しそうな顔で見つめながら、

「お前がね、突然いなくなって、探しても全然見つからなくてさ。夜、警察に連絡するかってときになって、吉行さんが見つけて平然と帰ってきてさあ。でも、どこに突っ込んでったらそんなに枯葉まみれになるんだよってくらい枯葉だらけなんだよ、二人とも。お前の持ってたポシェットの中も、服のポケットの中も枯葉、枯葉、枯葉でさ。問い質したら、お前も吉行さんも、ニヤニヤしながらトトロに会ったんだって言い張って。もう皆、怒る気力も失せちゃってさって事件」

逸也が繰り返す「枯葉」という音の響きに反応して、脳の一部に小さな閃光が走った。

「何だ、あれお前覚えてないの」

「うーん」

「じゃあ結局どこに行ってたか、分からないままかー。吉行さんもずっと教えてくれなかったしなあ」

ある光景やにおいが蘇っていく。乾いた土のにおいや汗のにおい、カメラのシャッターを切る、鋭利な音、熱い肩の上の、いつもより何倍も高い視線、どこかの町の丘の上から見た、燃えているように赤い、恐ろしい空。

どうしてこれまでこのことを忘れていたのだろう。

「お前はむかしから周囲の人間の心配をよそに、決めたら猪突猛進、燃え尽きるまで止まらないんだよな」

逸也は私の狼狽には気付かず、意地悪そうに口元を緩めながら言った。

「そんなことないよ！」

「そんなこと、ありすぎるわ。だから、お前を大切に思ってる人間はいつも苦労するんだよ。吉行さんだってそうだった」

逸也は目を細めて空を仰いだ。その横顔を見て、ああ逸也は私に、父を許して欲しがっているのだろうなと気づいた。逸也がむかしの話をするとき、いつも言葉の端々に父への思慕が窺えた。それはまるで私に、父との楽しい思い出をひとつでも思い出してくれと訴えるかのようだった。けれどやはりそう簡単には許せない。町の喧騒の脇でそう思ってみるけれど、脳は無情だった。父のくたびれた格好を、白い息に混じった煙草のにおいを、どんどん連れてくる。そうしてあのとき私を迎えに来た、まだ若かった父の、まるで知らない男のようだった風貌をあっという間に再構築してしまった。嫌だ、嫌だ。気づきたくなんかないんだ。私は逸也の手をんで、目を硬く閉じた。それなのに、どんなに強く握っても隣の逸也の熱は冷めていき、静かに薄れていってしまう。太陽の光が瞼を通して、視界が真っ赤に染まった。

ああ、帰りたくねえなあ、水穂。

重たくて低い、しわがれた声が耳元で響いて、わ、と声を漏らしてしまった。

「ん？」

逸也が身を屈めて顔を覗き込んでくる気配があって、慌てて目を開けた。目の前に、彼の少年時代の頃のような目を見て、臓腑がきゅっと縮んだ。逸也が思い出話なんてするから、おかしくなってしまった。思ったけれど、言葉には出来なかった。言葉にしたら認めてしまう。私の中にとてつもなく大きな何かが棲んでいることを。そしてそれが私の中心を捉えて離さない。

ミニシアターでは半身不随の男の記録映画と、少し前に「泣ける」と流行った犬の映画、それからスタンリー・キューブリックのリバイバル上映をしていた。今の時間からは「シャイニング」が観られるようだったので、私たちはそのチケットを買った。それを観るのはお互い二度目だったけれど、即決だった。映画の好みだけは昔から合うのだ。

上映時間までまだ二十分ほどあり、飲み物が持ち込み自由だったので、逸也が近くのコーヒーショップまで買いに走ってくれることになった。呪文のように長い商品名を告げて、ぶつぶつ文句を言う逸也に手を振り、送り出した。それから私は時代に忘れられたような映画館の汚れた壁に寄り掛かり、忙しくクラクションを鳴らして走る車や、半裸みたいな格好をしたカップルの表情を、何気なく見ていた。人の声はいつもより少し大きくて、熱いから皆イライラしている。都会の町の中では蝉の声はあまり聞こえないけれど、混み始めた夕方の道路を行く車は乱暴で、それを見ているだけで暑苦しくなる。

思い切って、このきついブラジャーのホックを外してしまいたいなあ、と思いながらからだを擦ったときだった。ちょうど逸也の向かったコーヒーショップのほうに見知った顔を見つけて、硬直してしまった。

関谷先生と純代さんだ。

一体何でこんな所にいるんだろう。純代さんが関谷先生の手を引いて、こちらに向かって黙々と歩いてくる。どうして今日なんだ。吐き出しようのない恨み事が口を突いて出てくる。

まるで標本のように立ち尽くして、ただ見ていた。

純代さんの髪は、一年前と同じく腰ほどまでであるというのに、あの夜の、世界の闇を全て吸い込んでしまったかのような暗さはなく、陽光を受けて透き通り、彼女だけがこの真夏の空の下で涼しそうだった。一方、関谷先生は白いシャツに褪せた紺色の細身のパンツを履いていた。見たことのないその格好に、目がますます離せなくなった。

急いでいるようにも見えたが、人を縫うように歩くその姿は遊んでいるようでもあった。逸也とはあんなに歩きにくかった道を軽快に向かってくる様は、まるで映画を観ているようだった。通り過ぎる人の何人かが彼らを振り返る。彼らが美しいからだろう、と安心して思う。純代さんの着ている白のマキシ丈のワ

ンピースは、すらりと伸びた手足をより印象付けていたし、関谷先生に至っては、颯爽とした横顔に見え隠れする鬨が、人目を惹くのは分かりきっていることだ。

時間にしたら、たった五秒くらいのことだったかもしれない。だが数秒前の自分など一瞬で見失ってしまうほどに、私の中心は荒れ狂った。胸が抉られるような深い怒りに捕まりそうになる。理由も隠して、大きな罪だけを着せて元の場所に帰っていった男を、絶対に逃がしたくないという暗い欲望に気が狂いそうになる。そのとき、関谷先生の目が、私を捉えた。細い髪に見え隠れする華奢な彼女の肩越しから、彼は私を見て、ハッと息を呑んだ。その緊張が伝わったのか、純代さんも少女のようだった顔を緊張させて私を見た。

変わらない、変わらない、変わるものか。

少し速度の落ちた彼らがこちらに近づいてくるまでの間に、私は心の中で何度も唱えた。彼らが元の場所に二人して帰ろうと、私はもう変わらないのだ。なぜならすでに、私の足はあの秘密の部屋を過ぎて、新たな原野へと踏み出したからだ。例えその道が、関谷先生のそばを通ったとしても、もう交わったり融合したりはしない。祈るように繰り返したけれど、彼らの姿が覆せないものになると、それは大した効果は齎してくれなかった。私の中は一瞬で地盤沈下し、床上浸水を起こした。

「笠原」

関谷先生が、私を呼んだ。あれだけ五月蠅かった周囲の人の声や車の音が耳に入らなくなる。こんなときにこそ騒音でかき回してほしいのに、私の鼓膜は関谷先生の落ち着いた、語尾の少し甘くなる声にざらざらと撫で上げられた。

そこに、コーヒーを手にした逸也が戻ってきてしまった。向かい合った私たちを一目見て、彼は隙だらけの声を漏らした。両手に持っているコーヒーの片方が、私の頼んだ生クリームやらチョコレートソースやらが乗った、馬鹿みたいに浮かれたそれで、胸が苦しくなった。

「何ですか？」

逸也が不審げに問う。カップについた水滴が彼の手を滑り、アスファルトにぽつぽつと落ちた。気体に変化する音が聞こえそうなほど、辺りは静かだった。私も慌てて逸也のそばに寄って会釈すると、それに純代さんが少し困惑した様子で挨拶を返した。

「あ、イチちゃん。この人は、うちの高校の先生で関谷先生。で、こちらがその奥さん」

極力関谷先生を見ないようにしながら、弱弱しく説明をして逸也を見上げると、彼の目にほんの一瞬だけ、苛立ちに似た、あるいは動揺に似た揺らぎを見た。

「水穂さん、よね。彼氏？」私が首肯すると、純代さんは曖昧な笑みを口元に張りつけて、「やっぱり若いのねえ」

顔がカッと熱くなって、思わず逸也のからだの陰に少しだけ隠れた。関谷先生はほとんど無表情だったけれど、私を見る目だけはあの日、私のからだに口づけをしていたときのように、熱く、とろけるような目をしていて。熱いだけで欲情を持たぬ目。その目に晒されていることに耐えきれなくなって、逸也の背中後ろに完全に隠れると、先生はふはっ、と噴出して、あのくしゃくしゃの笑顔を見せた。

「デートですか」煙草の箱をトントンと叩きながら、関谷先生が言った。

「ええ。ああ、水穂がいつもお世話になってます」

逸也は私のほうにコーヒーを差し出して持たせると、ジーンズのポケットからジッポを取り出して、関谷先生に火を差し出した。その火に煙草の先端が点くその瞬間、関谷先生が私を睨むように見た。まるで何かを確認するかのような慎重な視線だった。持っていたプラスチックのカップがぬるっとして、思わず取り落としそうになる。

「映画？」

「ああ、ええ。これから二人で観ようと」

「そう。じゃあ、楽しんで」

「あ、どうぞ今後とも水穂を宜しく願います」

「笠原さんはよく出来るから。俺に宜しくする必要は、ないと思いますよ」

目を細めて言って、関谷先生は純代さんの手を取って、私の脇を通り過ぎて行った。

「よさそうな、先生だな」

逸也がどこか遠い声で言った。ふと先ほど彼の目に見つけた揺らぎのことを思い出して、背筋に冷たいものが走った。あれは一体何だったのだろう。もしかして、関谷先生との関係を気付かれたのだろうか。

「そうね」

曖昧に言って、持っていたコーヒーを逸也に差し出した。

いざ映画館に入ろうとするとき、逸也はもう一度、関谷先生たちの去っていったほうを、目を凝らすようにして見た。

それからまともな会話はなくて、虚しく届く映画はもう一生終わらないのじゃないかと思えるほど長く感じた。観るのは二度目なのに、まるで初めて観る映画のようだった。

「ねえ、床上浸水の処理ってどうするの」

眠る準備をし終えてベッドの中に潜り込み、そのそばで目覚まし時計をセットしている逸也の背中に向かって聞いてみた。案の定彼は怪訝な顔をして私を見て、

「なに、どこでそんな被害が起こってるの」

「日本のどこか」

逸也は呆れたように溜め息を吐くと、唐突に電気を消して、ベッドの縁に座った。安物のパイプベッドはその振動に派手に揺れた。目地の粗いカーテンが外の明かりを通して、部屋の中は薄ぼんやりとしている。だが闇は、彼の寝巻きの布のよれたところや、膝の裏側に溜まって、まるで彼を蝕んでいるようだった。

「ねえ、そもそも俺たち何で一緒に布団で寝てんの。シングルに二人はさすがに暑いしきつんだけど」

逸也は煙草に火をつけながらそう言った。映画館の前で関谷先生たちと別れてから、彼はずっとこの調子だ。思わず起きると、だが結局彼は枕を私の方にずらして、隣に寝転がった。頭の後ろに手を組み、口に煙草を咥えているので注意をすると、彼は煙の向こうでぼんやりと私を見ていた。それから、

「明日は朝から、仕事が入ったから」

と言った。

「えっ、二連休が取れたんじゃないの」

「んや」逸也はフィルター噛んでもごもごとと言って、突然私の寝巻きのワンピースの肩口をんで引っ張った。

「寝ろ。肩、冷えるぞ」

そのまま後ろに倒れると、逸也のにおいのする枕に受け止められて、からだの中に溜まったままの水や泥が汚い音を立てた。

「あれが、観覧車の男か」

二人して天井を見上げていると、抑揚のない声で言われた。胃が引き攣れるような緊張があって、まるで取調べを受ける犯人のような気持ちになった。逸也は身動き一つしなかったけれど、その皮膚はまるで凍っているかのように硬く力が入っていた。

「違うよ」

「あんなに年上の男だとは思わなかった」私の否定を無視して彼は淡々と続けた。「他に、誰かいなかったのかよ。同級生とか先輩とか、いくらだっていたら。何もあんな」

「何で、そんなこと言うの。自分だって年上と付き合っていたくせに」

思わず言ってしまうと、逸也はふうっ、と力強く煙を吐き出して、引き寄せた灰皿にフィルターが折れるほど粗暴に揉み消した。驚いて固まったとき、突然、逸也が私にぶつかるようにして唇を寄せてきた。あまりの衝撃に耐えられず、そのまま壁に後頭部を強かに打ちつけた。目の前が点滅していたけれど、唇に押し掛かってくる重みに何も考えられない。呼吸を求めて暴れると、そのまま倒されて押し掛かれた。押し返そうと伸ばした腕は容易く捕まり、一瞬で頭の上で組まされ、自由は完全に奪われてしまった。夢中で足をバタつかせるけれども、それも彼の片足に押さえ込まれてしまう。いよいよどうしようもなくなって、目を強く瞑ると、

「開けるよ、目。俺を見るよ」

額の中心に、燃えるような声が吹きかかった。力の限り瞑っていたせいか、思い切り開くと像がぶれて、世界が歪んだ。その間も彼の手は止まることなく、ワンピースの裾をたくし上げ、乳房に手を沈ませてくる。早く、早く、早く！ 逸也から流れてくる焦燥に取り囲まれて、部屋の酸素が薄れていった。それと共に感覚も薄れて、感じるのは胃の辺りに当たる、彼の髭くらいになった。無数の針で引っかかっているかのような尖った痛みだけを追っていると、まるで逸也自体がハリネズミのように尖ってしまった気がした。鋭い凶器のような肌に、彼自身も苦戦している。足掻くような愛撫が苦しくて、私は唯一動く首を左右に振り続けた。

そのとき、顔の脇の闇の中に、不意に誰かの足が見えたような気がして、喉の奥からおかしな声が出た。同時に信じられないような力で、逸也を跳ね除けた。

何だ、今のは。

彼がベッドの端で丸くなった私を、目を見開いて見ていた。瞳にまだ澀んだ欲望の熱が残って、目尻の辺りが潤んで見える。すぐに、幻覚を見たのだということが意識下に落ちてきて、呆然となった。

膝立ちのまま、一步で逸也が近寄ってきて、私の前で力なく正座した。Tシャツにハーフパンツの彼はまるで怒られた少年のようで、癖毛の髪が自信のなさそうにふわふわと揺れている。それから彼は弱弱しく私の名を呼んだ。

「震えてるのか」

「ああ、本当だ」

自分の手を見ると、小刻みに揺れていた。血の気が引いて、少し青白い。その間も、さめざめと泣く純代さんの虚空の目が、部屋の隅から私を捉えて離さない。白くて長い手足が光っている。

これか、幻覚の正体は。

思うと同時に、ああ、これは無理だと確信した。逃れられない。どれだけの時間が流れようと、私はきっとあのときの衝撃から逃れることなどできない。一方で、腰骨の辺りで未だに熱が疼いているのに気付いている。淫らに捲りあがったスカートから突き出た腿に乗る、大きな手の影が動くのを待っている。

逃れられないのは、何も純代さんの影からだけではない。

「ごめん。水穂、ごめんな」

逸也がそう言いながら、まるで空気をかき集めるようにして私のからだを抱き締めた。彼は私の怯えを自分のせいだと勘違いをしたまま、熱い額を私の首筋に埋めた。このままこの硬い肉に押し潰されて、消えてしまいたいと思った。口にする代わりに、私は一回りも小さくなってしまったように感じる彼の背中に手を回して応えた。

「水穂、これから先も、俺とやってくつもり」

「そのつもりだから、ここへ来たんだよ」

言うと、彼は私から音もなく離れて、

「この間、水穂のことを何でも知りたかったろ」

ずっと待っていたけれど、逸也は言葉を繋げなかった。膝の上に乘せた拳に力を籠めて、私を見ている。その言葉の意味が分かっているのか、と問われているのは明白だった。無論、私にはその言葉の持つ意味がよく分かっていた。もうこれまでのように、ガラス越しに触れ合うようなことはしないぞ、と言われていたのだ。逸也はこの間私の部屋で、二人の間に横たわるガラスを、割った。私は静かに頷いた。

「じゃあ、いつか俺に全部を曝け出してくれるか。全て投げ打って、来てくれるのか」

彼の声は震えて、落ちていく涙のようだった。

全てを逸也に託してしまえば、この幻覚も消えるだろうか。想像してみる。皮膚ごと裏返すような気持ちで丸裸になれば、逸也と生きていけるのか？ 疑問は、裸足の爪先にごとごとと落ちていくばかりで、私に何の答えも示さなかった。代わりに、冷房で冷やされた闇がベッドの隅を通過してからだに滑りより、私のどんな逃げ道も食んだ。

連れ出されたと思っていたのに、どこまで行っても、追ってくる。

冷たいからだを抱えて黙り込んでいると、逸也が突然握り拳を膝に力いっぱい押し付けて、呻いた。

「何も、何もあんな、父親にそっくりな男を……！」

心臓が波打って、冷たい指先が軋んだ。「何を、言ってるの」

「気づいてるんだろ、自分でも」逸也の目は困惑と同情の入り混じったような色をしていた。「あの男は、吉行さんにそっくりじゃねえか、水穂。だから、ひと目で分かった。あの男が、水穂を観覧車に引き止めている男だって」

突風が窓を叩いて、重い振動が部屋に伝わる。潜んでいたものが、大きく揺らめくのが分かった。

「まだ好きなの？」

私は下唇を強く噛み締めた。まだ好き、なんてものじゃない。私はからだ全部であの人にぶつかった。若さも、逸也のいう他の相応な男との青春もすべて打ち捨てて、血を抜かれたように萎びても、罪を被っても、まだこんなに、欲しい。欲しくて欲しくて、堪らない。それなのに。

「水穂は、あの男に、出てった父親の役割を押し付けてるだけなんじゃないのか？ お前、それは愛じゃないよ。重ねてるだけだ」

「違う！」

声を荒げたけれど、本当に違うのか？ とからだのどこかで問う声があって、恐怖を覚える。思い出しかけた言葉が、だがかたちを成さずに脳のどこかへ溶けていくように、これまでからだを燃やし続けていたはずのあれこれが、一体どんなものだったか、突然分からなくなってしまった。空焚きのされているようにからだは熱いのに、その熱源が分からない。

「水穂。代わりなら腐るほどいる、この世の中、探せばどこにだって。でも、本物には誰もなれない。望んでるものを履き違えるなよ。お前が欲しいのは、離れていった父親の愛情じゃないのか」

「違う、違う……」

「吉行さんが、まだ許せないのか」

「許せるわけ、ない。あんなこと。でもあんなことで、家族はめちゃくちゃになった。私のよく知るお父さんもお母さんも、もういない。あれが、壊した。あんな裏切り！」

「違うんじゃないか。お前が許せないのは、吉行さんの行為そのものじゃなくて、許すことが許せないんじゃないか。吉行さんのしたことを許すことで、家族を本当に失うと思ってるんだらう。憎んでいるうちは、かえってバランスが取れるということもある」

「五月蠅い！」

泣きじゃくりながら、怒鳴った。子供っぽい声が、窓にぶつかる風と一緒に、狭い部屋の中で響いた。私がそうして防壁を張り巡らすたびに、逸也の一見怖い目はますます痛ましい惨状を見ているようになる。

私は威嚇するように泣き続けた。

しかし本当は、分かっている。逸也の言う通りなのだ。許してしまったら、お父さんはもっと遠くに漂いさだらう。そうすれば、本当に離れてしまう。

「水穂、大丈夫だよ」

「やめて」

「やめない。もう、許せよ。前にも言っただろ？ もう自分の人生のことを考えろ。かたちが崩れても、吉行さんがお前の父親だってことは、永久不変なんだから。意地を張っていないで会いに行けよ。それで、今俺に言った恨み言を、ぶつけてやればいいだろう」

「いやだ、許せない。それを先生は分かってくれた」

「水穂。あの人には奥さんが.....家族がいるんだぞ。今度は、お前が崩すのか、それを。俺はお前に、こんな風に道を誤って欲しくなんかねえよ」

道なんか、間違っていない。この道を用意したのは、関谷先生のほうなのだ。あの罪は、まるで足枷だ。そう思ったとき、何か私の中で弾けて広がった。けれど、なかなかその一端をむことが出来ない。涙を啜ってその影を追っていると、逸也が突然ベッドから落ちるようにして床に寝転がり、私に背を向けてしまった。シングルベッドは、彼がいなくなると妙に広く心許ないものになった。

「それじゃからだ壊すよ」

「いいよ。そんな心配しないで、とりあえず寝ろ。それで、よく考えて、それからちゃんと戻ってこいよ。待っているから」

逸也は疲れた声で笑い、手枕をしてからだを丸めた。しばらくして寝息が聞こえてきた。先程の、激情を押さえ込んだような空気はまるで感じられない、安らかな寝息だった。くねくねしている髪の毛を見ながら、私もベッドに横たわって、本当に重ねていただけだったかと思ってみる。逸也の言うことは、昔から大抵当たるのだ。私が父を憎み続けているのも、本当に失うのを恐れているからだと言いつつ当てた。ならば、このからだの奥でいつまでも燻り、関谷先生を想うと濡れたり乾いたりする変化の源にあったものは、父なのか。私は、父に、抱かれて愛されたいと願って、手を伸ばし続けていたというのか。

気付くと、こめかみの辺りが濡れているのに気付いて、自分がまた泣き出しているのを知った。左目から流れてきた涙が右目に入って、気持ちが悪い。それでも目を開けたままでいると、逸也のからだはぶよぶよとぼやけてきた。成す術もなく、私はいつまでもエアコンの稼働音を聞いていた。

いつの間に寝入ったのか、朝起きると、そこに逸也の姿はもうなかった。からだにはタオルケットが掛かっていて、私の手はきちんとその中に仕舞われていた。

からだを起こすと、骨がガチガチに固まっているようで、血が廻りだすと、急激に頭が痛くなった。どうして逸也が出て行くのに気づかなかったのだろう。あまりにだるいからだを引き摺ってトイレに行くと生理が始まっていて、全てを納得した。生理用品を持ってきていなかったのも、仕方なくトイレットペーパーを何重にも折り重ねて新しい下着に当てた。ごわついて気持ち悪いが仕方ない。改めて黒ずんだ血を見ると、月日が確実に過ぎていることを感じた。

あの夏から何回目かまでは、生理が来る度死にたくなかった。肉のずっと奥のべたべたが、また私を卑しくさせるのではないかと怯えた。けれど毎月をこなしているうちに、あの嫌なぬめりは遠のいて、私は排出することに集中できるようになった。けれどそれはきっとあの夏の夜の変化を乗り越えたのではなくて、ただ汚い老婆のような自分に慣れてしまっただけなのかもしれない。

台所へ戻ると、冷蔵庫にメモが貼ってあり、「朝食はこの中」と書かれていた。それを手に取り、まじまじと見てしまう。そういえば、こんな風に彼の書いた字をじっくり見るのは初めてかもしれない。ふと部屋を見渡すと、テーブルに重ねられたノートや教材のそこそこに彼の字は転がっていた。乱雑に追いやら

れたその中に、古い英語の参考書を見つけた。それは私も使っている高校の参考書だったが、紙は傷み、色褪せていて、所々に折り目がついていたり、ページが本から離れてしまっていたりして大分使い込まれていた。恐らく彼が高校生の頃から使っているものかもしれない。パラパラと捲ると、親しみ慣れた英語の例文などが出てきて、その余白に赤で書き込みがしてあった。そういう文字が私の中を通っていくと、何故だかまるで、一人、知らない町に取り残されたような、そんな気分になった。確か、昨日もこの台所で、こんな虚無感を覚えた。この部屋の中には、身近な逸也を見つけられない。気配は確かにあるのに、まるで煙のように実態がめないのだ。まだ住んで間もないせいなのだろうか。彼を守るはずのこの部屋は、どんなに木漏れ日を受け入れていても、時折一瞬、影を生む。普段は静かにしているけれど、本当は部屋に擬態した化け物の腹の中にいるような、そんな落ち着かない気分になる。

焼いた六枚切りの食パンと彼が作ってくれていた朝食をテーブルに並べた。それはとても手が込んでいて、細かく刻んだ小松菜と挽肉を豆板醤で炒めたものの上に、目玉焼きがのせられている。口に含むとうっすらと辛味が広がって、澳の奥がつんとなった。大声を上げて泣き出したくなるような味だった。

家に帰ろうとする足が重い。あの団地のあの部屋に、足を踏み入れたくない。しかしそうかと言って、いつまでもここにいるわけにいかない。ここで待って、一体どんな顔をして、逸也に会えるというのだ。どこにも行く場所がなくなってしまった。

のろのろと帰る準備を整え、机の上に裸のままぼつんと置かれていた鍵を手にして、振り切るように外に出た。家の中の温度が一定に保たれていたせいで、外の熱気に当たると目が眩んだ。そういえば夏だった。鍵を閉めて蝉の途切れることのない合唱の下をふらふらと歩いた。

買った生理用品をコンビニのトイレで早速下着に当て、来たときとは反対の電車に乗った。振動が伝わるたびに下腹部が鈍く痛んで、古い細胞が流れ出していくのを感じる。私が何に囚われていても、からだはこうして不要なものを棄てていくのだ。では私の心はいつ変化できるのだろうか。速度を上げ始めた電車の扉のそばに差し込んできた強い太陽光線に脳天が痺れて、思考は散った。

電車を乗り継ぎ、ようやく家の最寄り駅に着いたときには気温はますます高くなっていて、駅の出口の屋外駐輪場に停めていた自転車は触れないほど熱くなっていた。サドルにタオルを乗せて、指先でハンドルを押さえながら不安定に漕ぎ出す。速度がついてくると熱い風でもないよりましで、漕いでいるときは頭の中がすうとなった。

敷地内に入っていったとき、家のある三号棟の辺りに小さな赤い車が見えた。団地内に知らない車があることは珍しくて、私は自転車置き場に自転車を止め、窺うようにそろそろと車に近づいていった。一体どここの家の来客だろう。車内に目をやったが、人影は見当たらなかった。ふと目に入った練馬ナンバーに、逸也が勤めていた大学があるほうだとぼんやり思ったとき、車のそばに小柄な女性が座りこんで、野良猫に手を伸ばしていたのが見えた。驚いてつい声を漏らしてしまうと、女性もからだをびくっと震わせて私を見た。「あ、こんにちは」

言うと、女性は少しの間があってから、首を傾げてにっこりと笑った。顔のパーツがそれぞれ大きなせいとか、その仕草には可愛らしさがあって、満面の笑みは人懐こそうだった。長袖の前開きのパーカーを羽織り、下はジーンズを履いているのに、彼女からは暑苦しい感じを全く受けない。パーカーの下の胸元の大きく開いたタンクトップからは豊かな胸が覗いていて、ベリーショート髪から出た耳のかたちがとても綺麗な人だった。骨の浮き出た彼女の手、野良猫は大きなからだを弛緩させ、完全に気を許している。そんな彼女の醸し出す空気に、何故かどこか懐かしさを覚えた。不思議に思いながら会釈をして通り過ぎたとき、

「あの」

背後から呼び止められて振り向くと、女性が何故だか私を信じられないものを見るような目で見ていた。

「あなた、ここに住んでる人？」

「はい。えっと、どちら様ですか」

「あたし、北川逸也という人を尋ねてきたのだけれど、彼の家がどこだか知りませんか」

逸也、と言われて、すぐには言葉が続かなかった。けれど彼が引越したばかりだということに思い当たって、だからここへ訊ねてきたのかな、と解釈した。

「北川さんなら、この向かいの棟の五階ですけど、あの逸也なら引っ越してしまっ」

「あの、間違っていたらごめんなさい。でも、もしかしてあなた、彼と幼馴染の子じゃない？」

「え、ええ。そうですけど……」

「やっぱり。あたし、^{なごしかおり}名越香芳と言います。逸也には本当にお世話になっていて」

反応できずにいると、名越さんは私の手を取って無理やり握手し、また首をかしげる仕草で笑った。不意に、甘い香水の香りが漂った。いつか逸也の車で匂ったそれだと、瞬時に分かった。

「ねえ、ちょっとお話ししない」

彼女がんでいた私の手を引いたので、咄嗟に振り払ってしまった。しかし彼女はそれにも動じず、かえって勝ち誇ったような笑みを口元に湛えて、私の次の出方を待っているようさえあった。その態度に、彼女が、一志が以前言っていた逸也が長く付き合っていた年上の女であると直感した。そして同時に、彼女が私と逸也の関係を知って、それに不快感を覚えているということにも。

このまま車に乗せられでもしては、どこに連れて行かれるか分かったものではない。そうかといって、こんなところで話をしているわけにもいかない。結局、迷った挙句、私は自分の家に彼女を上らせることにした。促すと、名越さんは笑いを堪えるような顔をして、それじゃあ遠慮なく、と言った。

狭い家の中は蒸し風呂のように熱気がたまっていて、家を空ける前に生ごみの処理はしたというのに、どこかから微かに臭気が漂っているような気がする。治まりかけていた腹痛がぶり返してくると、自分から血生臭いにおいが発されているような気がして、慌てて冷房のスイッチを入れた。

幸い、まだ母は旅行から帰ってきていなかった。そのことに安堵しながら、ダイニングテーブルに名越さんを座らせて冷茶を出した。彼女はそれを一口含むと、突然キッチンに凭れておどおどしていた私を見上げて、

「で、もうヤった？ もう逸也とセックスしたの？」

突拍子もない質問に気圧されて、足が少し震えた。言葉は快活だが、そこには私を弾劾しようとする気迫があった。「そうか。まだなんだ」黙っていると、彼女はそう言って、煙草を取り出し、「吸ってもいい？」

了承すると、彼女はフィルターを浅く啜え、火をつけた。目を伏せると童顔が色気にとって代わられて、化粧気のない暑さで紅潮した頬が、余計に肌を艶っぽくした。私はそんな彼女の横顔から目を背けて、母の使っていた灰皿の中身をゴミ箱に思い切りぶちまけた。

「突然、ごめんなさいね」

名越さんはそう言うと、私を「水穂さん」と呼称した。

「名前まで知っているんですか」

「ええ。逸也からよく聞いているわ。だからすぐにピンと来たの、あなたを見て」

「逸也は知っているんですか？ その、名越さんがここに来ていること」

そう言うと、彼女は豪快に笑って、「知るわけじゃないの。水穂さんもよく知っている通り、私、逸也に捨てられたんだから」

「じゃあ、どうしてここに」

「会いたかったから。どうしても、今日」

名越さんは刻み込むように、一音一音丁寧と言った。彼女の真意が、分からなかった。彼女から発される

空気は尖っていて、身じろぎすることさえしかねるほどだった。もしかしたらこれから突然私を殺すかもしれないとも思えるし、このまま何事もなく手を振って帰りそうな気もする。緊張を抱えたまま灰皿を手渡したとき、ふと彼女の吸っている煙草が逸也と同じ銘柄だということに気付いた。だがすぐにそうではないと思う。逸也と同じなのではなく、逸也が彼女と同じものを吸っているのだ、恐らく。

「逸也って酷いのよ。突然去ったの、本当に突然よ。昨日までいた人が、この世からいなくなるみたいに。正直参ったわ。部屋の物も、居た痕跡すら無くなってるんだもの。いくつになっただって、失うことになんか慣れないわよね。ところであなた、どうやって逸也を騙し取ったのよ」

「騙してなんか、いないです」

自分のペースで喋る彼女に混乱しながら、だが私が言うと、名越さんは眉を顰めて、唐突に言った。「水穂さん、逸也のこと別に好きじゃないでしょ」煙草を乱暴に消し、足を組み、言葉に詰まった私を睨んだ。「あなたみたいな女、大嫌い、私。ねえ、他に好きな人がいるんでしょう？ まだ忘れそうにないって、逸也言ってたもの」

「逸也が？」

「そうよ、痛々しいったらありゃしないわよ。どうして私が、苦しむ彼を見なくちゃいけないわけ」

「見る、って」

香芳さんは涙を鳴らして、傲然と言ってみせた。「彼、私のところに頻繁に来てるのよ」

「えっ、いつ」

驚いている私に一瞬視線を転じた名越さんは、だがすぐに嫌なものを見たという顔をして、「この盆休みに入る前に一度、大学に来たかしらね」

それを聞いても、彼女にみかかってでも逸也を取り返したいという気持ちは、湧かなかった。それよりも、折れそうな細いからだで私を撃ち落そうと躍起になっている目の前の彼女に、嫌悪の情が走った。

「ねえ、逸也、返して」彼女は煙草を手早く揉み消して、今度は懇願するような口調で続けた。「私だって言いたくないのよ、こんなこと。自分がどんどんつまらない、汚い女になっていくのが分かるもの。でも、私、本当に彼が好きなの。彼にとって、どちらのそばにいた方が健全か、あなただって分かるでしょう」

口ごもるしかなかった。名越さんと逸也の間で、一体何が起きているのか、そもそも私と過ごしたこの一年の間、彼らがまだ続いていたのか、それさえ分からない。けれどはっきりしているのは昨夜、私は逸也の望むかたちにはなれなかったということだった。それだけでなく、昨夜私は、私から居場所を奪った彼の変化を、本当は責めたいとさえ思った。その負い目が、私にどんな声を荒げさせることも阻んだ。

「少し、待ってくれませんか」

「どうして」

「逸也と二人だけで、話をさせてください」

本心だったけれど、口に出すと私の中がどんどん冷えていくのが分かった。かき立てられも熱くもなれない。ただごうごうと鳴る古い冷房の冷気に混じって、からだだけが静かに沈んでいく。いっそ関谷先生を思ったように、かき乱されたかった。だが今、私は逸也の不透明な部分にさえ、感情を動かされない。ただ、幼い頃からあれほど正義に溢れていた逸也がいつの間にか纏っていた濁りの前に、呆然と立ち尽くすばかりだ。目の前の、私より小さな彼女を真っ直ぐ見据えた。彼女は私から目を逸らすと、灰皿の中の崩れた煙草を指先で弄っていた。とても淋しい背中をしていた。

「ねえ、あなた、好きな人いるんでしょう？」

「どうしてそんなこと聞くんですか」

「ねえ、いるんでしょう、好きな人」突然、叫んだと思ったら彼女は私を涙の溜まった目で睨みつけて、声を荒げた。「いいから、答えてよ！」

「落ち着いてください」

「嫌よっ、逸也に離れてほしくないの。ねえあたし、彼が必要なのよ。そばにいてほしいの。あたしから居場所を取らないで。お願い、取らないで」

名越さんは両手で顔を覆って、肩を震わせ始めた。泣き止むどころか、転げ落ちていくように激しさを増す。彼女の指の間からはどんどん涙が零れ落ちてきて、頬もいっそう紅潮していった。その泣き方があまりにも純粹だったせいも、私の胸は追及することも否定することもなく、ただざわめいた。不思議な魅力のある人だった。

仕方なく、落ち着くまで名越さんの背中を撫でていた。彼女の背中にはほとんど肉がなく、背骨が浮きでていて、触れるたびにそれが掌に刻まれていった。嫌悪はまだ私の中にしっかりと残っていたけれど、不思議と触れることを嫌だとは思わなかった。

「大丈夫よ。逸也のことは私に任せて。私がずっとそばにいるから」

やがて冷静さを取り戻した彼女がかすれた声で言って、パーカーの袖を数センチ、捲くりあげたときだった。僅かに露わになった彼女の腕に、無数の切創のようなものが見えた。それらはまだ赤く生々しく腫れ上がっていて、思わずその手を捕まえてしまった。彼女は驚いて腕を引いたけれど、それが無駄だと悟ると子供のように怯えた顔をして、だがすぐに狡猾な女の表情を繕った。

「何よ、離して」

「これ、何ですか。大丈夫なんですか」

名越さんは「別に何でもない」と言ってもう一度腕を引いたけれど、私は手を離せなかった。

「逸也も、いつだったかそんな風にあたしを見たわ。すごく驚いてね、まるで世界の終わりを前にしているような目をしてた。でも、そのときだけは、自分のからだの意味のあるものに思えた」

そう言うと、名越さんは涙に濡れて浮腫んだように見える顔を歪ませて、おもむろにパーカーの下のタンクトップを捲った。下着もつけていない、彼女のまっさらなからだは傷だらけだった。わき腹には腕にあるものと同じような痕跡があり、腰には大きな青あざが鎮座している。そのほとんどは治りかけてはいるものの、ひと目で酷い傷だと分かるものばかりだった。そこら中にできたかさぶたは、まるでからだかひび割れているみたいだ。

「こんなこと、一体誰に」

まだ手をんだまま漏らすと、名越さんの手が少しだけ震えているのが伝わってきた。けれど俯いて自分の傷を見る彼女の顔は笑っているように見えた。何か不穏なものに引きずられていく気がして、力いっぱい歯を食い縛ったとき、

「前の、恋人が、するのよ」

名越さんが青紫色した痣を指先で愛おしそうに撫でながら、言った。まるで赤ん坊でも撫でていような陶酔に、私はひどく混乱した。

「ねえ、逸也がいないとあたし殺されるわ。元彼にもあたし自身にも。あたしにとって逸也は、あたしがあたしでいられる唯一の場所なのよ」

「ちょっと待ってください」

奇妙な違和感が風に舞い上げられたように、私の中に広がった。怪訝な眼差しを向けた私に名越さんは一瞬怯んで、戦慄いた。それで、その違和感の正体に気づいた。逸也がこんな傷だらけの女を放っておくわけは、ないのだった。好きな女だったのなら尚更だ。それなのに、もしこの人の言うことが本当なのならば、どうして突然去るなどしたのだろう。

「逸也は、知っているんですね？ あなたのその傷のことを」

「知ってるわよ」私から顔を背けて、吐き捨てるように言った。「ほんと嫌な女ね、あなた」

隙を突かれてんでいた手を振り払われてしまった。そうして自由になった彼女は突然、治りきっていなかった左腕の生傷に爪を立て、思い切り引っ掻いた。何かが引き千切れるときのような嫌な音がし、傷口がぱっくりと口を開けると、そこから赤黒い血がぬるぬると出てきた。この人は、何て弱い。臓腑が震えた。私は自分の中の嫌悪をはっきりと視認した。それは彼女に感じているというより、こんな弱い女の血に触れた逸也に対して、より感じているものだった。

視界に入った買ったばかりの生理用ナプキンを手繰り寄せ、それで彼女の傷口を押さえた。手を震わせる私を面白そうに眺めている名越さんと、ふと目が合った。その瞬間、彼女のした行為も彼女自身も恐ろしくて、憎くて、堪らなくなった。

「痛いですか」

「ちょっとね。でも、あたしこのじんじんするの好きなの」

そう言って力を抜いた名越さんからは、もう激昂は消え去っていた。その代わりに、今度はまるで赤ん坊を産み落とした後のような安穩とした気配に包まれて、薄っすらと笑みを浮かべている。その横顔を見ると、離婚直前、母が父を脅したときの方が過ぎた。

私に今ここで殺されるか、私と水穂をあなたが殺すかどちらか選びなさいよ。

母はそう言って、包丁の切っ先で父の喉元をいくらか刺した。血は出たのだったが、そのことはよく覚えていないが、父の表情は覚えている。彼は確か笑ったのだ。笑った父を見て母は荒れて、その包丁を自分の胸に突き立てようと振り上げた。だがそれを父は静かに止め、奪い取った刃物をそばにいた私に預け、また笑った。母は父の腕の中でまだ暴れていたけれど、その時間は短く、後は生きることさえ投げたように脱力した。顔は蒼白で爪まで白かった。しかし、彼女の八重歯が蛍光灯に反射して光ったとき、母もまた笑っていることに私は気付いた。それはとても穏やかで、救われたときのような笑みだった。そのことがずっと分からなかった。けれど、今このとてつもなく弱い女の人を見ていたら、何となく彼らを笑わせるずっと奥にあるものの一端が見えた気がした。

ゆっくりとナプキンを剥がすと、血はもう止まっていた。勢いよく流れ出したように見えたが、流血していたのは僅かな時間だった。だが血の跡がついた皮膚は腫れ、手を離してしまうと傷口はまたゆるゆると開いていってしまう。私はまたそっとナプキンで押さえた。

恐ろしく静かな時間だった。彼女の左腕を支える手のひらに、熱い体温を感じている。しかしその腕は、彼女から切り離された、ただの物のようだ。まるで彼女の代わりに傷ついているようでさえある。

「病院に行きますか」

聞くと、彼女が拒否したので、仕方なく救急箱を持ってきて、傷口をくっつけるように救急テープを貼り付けた。上からガーゼを当てる。そうした一連の処置を施しながら、私は聞いた。

「この腕の傷のほうは、全部自分でやったんですか？」

名越さんは驚いた顔をして、私を見た。「だったら、どうだって言うの」

「何も言いませんけど.....もしかしてからだの傷も」

「それは違う！ それは違うわ。あれは元彼がやったの。畑津君に、^{はたっ}やられたのよ」

あまりの剣幕に、私は包帯を巻く手を止めてしまった。一見責め口調だけれど、まるで何かに怯えているようでもある。それにかえって不信感が増した。だが彼女が例え私に何か嘘をついていたとして、それが何だというのか。それを暴いたところで、何になるというのか。私は弱くため息をついて、包帯を巻くのを再開した。すると名越さんが勝手にぼそぼそと話を始めた。

「畑津君がね、あたしといることに倦んできた頃、こうして血を出すととても優しくなって、大事にしてくれたの。私を心配して、離れずにいてくれた。でもそれも慣れてくると、薄れていくの。大きかった愛情も、痩せるのよ。堪らなかったわ、堪らなく怖くて憎くて、でもそれでも愛してるの。切っても切っても、

戻らない。余計憎まれて、離れていく。だからもういっそ心を、別の誰かに寄せてやれと思ったのよ」

「畑津さんという人を諦めて、逸也を選んだってことですか」

随分待ったけれど、彼女はいつまでも目を伏せて黙っていた。その沈黙に、彼女が畑津さんという人の気を引くために、駆け引きをしているのではないかという予感に行き当たった。それでは逸也は、この人のつまらない恋愛沙汰の道具にされたのか？ 怒りが走ったとき、だが先に名越さんのほうが声をあげた。

「水穂さんの考えていることは分かる。でもあたし、利用なんかしてないわ！ 最初は、確かに、そのつもりだった。けれど今は違う。逸也は全部分かった上で、それでもいつでもあたしを信じて欲してくれた。それに支えられて、もう手離せなくなったの。好きになったの」

「それ、本当に、好きなんですか。そうしてまだ、待ってるんじゃないんですか」

ちらつく暴力の痕と、だけれど彼女から感じる拭い切れない畑津という人への愛情が、奔流となって私にぶつかって矛盾を大きくしていく。自傷を続けて、他の男を使って、それでも殴る男を取り戻したいのか。そんな人間が本当にいるのだろうか。理解できず、今度は私が黙るしかなかった。

「でもあなただって同じじゃないの？ あたしに説教なんか出来ないんじゃないの」名越さんが、包帯を巻き終えた左腕を嘲笑いながら吐き捨てた。

「どういう意味ですか」

「逸也が言ってたわよ。しばらくは、水穂の望むかたちでいてやりたいんだって。そうすれば、そのうちきっと忘れることが出来るからって。それって、あなたの心の中にもまだ、前の男がいるってことじゃないの」

「そんな」

「これ嘘じゃないわよ」

「でも！ 私はもうあの場所には戻らないって決めてるんです、あなたとは違う。あそこから連れ出してくれたのは、逸也なんだもの。だから」

言ってみたら、それがあんまりぐらぐらして、言葉を続けられなくなった。私もまた、逸也から得られる絶対的な安定を手にして、心置きなく、一心に、関谷先生を想っていた。ただ受け入れなかつただけで、そのことに私はずっと前から気付いていた。そしてきっと、これからもそれは続いていくのだ。そう思って顔を上げたら、名越さんは何もかも見透かした顔をして、私を見ていた。

「あたしは水穂さんよりずっと逸也を愛しているわよ。彼の欲するものだって与えられる」

「逸也の、欲するもの？」

名越さんは勝ち誇ったように、小さな顔を歪ませて、ゆっくりと言った。「分からないの？ 守るものよ」それがあんまり漠然としていたので、眉を寄せて彼女を見たら、名越さんは突然緩慢な動作で腕を広げた。

「この、からだよ。逸也が自分から別れを告げても尚、あたしの元へやって来るのは、この傷があるからよ。離れても、あたしが心配で仕方ないんですって。

逸也はね、いつでも何かを守っていないと駄目なのよ。生きていけないの。守るものが、唯一、彼を救うのよ。それをあたしは与えてあげられる。でも水穂さんは、どう？ 彼に何を与えてあげられるの。大体あなたが本当に望んでるのは、逸也じゃないじゃない」

「じゃあどうして、逸也はあなたから離れたんですか。ずっといたら良かったじゃないですか、そんなに名越さんが大事だというなら」

子供の愚痴のような響きがあって、言ってから顔が赤くなった。そんな私を「まだ分からないの？」という顔をして見た彼女は、淡々と saying のけた。

「あなたたちが、兄妹みたいに、育ってきたからでしょ？」

「えっ」

「逸也にとって、あなたが妹だからよ。だから放っておけなかったのでしょ。女より、彼は妹を取った。男と女の好きではないの。だからあなたがさっさと前の男のところに戻ってくれたら、逸也はあたしの所に戻ってくるのよ」

名越さんは悔しそうに顔を顰めると椅子から立ち上がり、私の隣をさっさと通り過ぎた。けれど再び私の前へ戻ってきて、包帯の巻かれた腕を上げてみせて、

「これ、ありがとう」

放心したまま首を振ると、名越さんは煙草と甘い香水の匂いの混ざったからだをいっそう私に近づけ、無理やり視線を合わせて言った。

「あのね、あたしはもう、こういう生き方を変えられないと思うけれど、水穂さんのように逸也を傷つけない。約束する。彼の心を守るためなら、どんなことだってしてみせるわ。だからあたしを信じて、あたしに任せて」

そうして、名越さんは静かに出て行った。

やがてまたエアコンの稼働音が耳に割り込んでくると、先程までのことが白昼夢のように思えた。波立つことなどない、一定に保たれたその音があまりにも恬淡としていたからだ。顔を上げ、誰もいなくなった部屋を見渡すと、太陽の光が部屋に差し込んでいた。しかしそれは私には届かず、私の外を焼いている。日付が変わってベッドに潜り込んでも携帯電話を握ったままでいたけれど、結局自分からかけることは出来なかった。答えが出ていなかったし、負い目があるからだった。

気づくと一向に鳩の出でこない時計が三時を差していた。

うつらうつらしていたら、不意にまた幼い日のことを思い出した。

そうだ、やっぱりあれは五歳になったばかりの頃のことだった。

*

幼い頃、団地から伸びている道の向こうが、いつも気になっていた。団地の敷地内から出てはいけないうと母にきつく言われていたから、外は危険に満ちているのだと思うと同時に、だからこそ魅力的だった。団地内の、代わり映えのしない原っぱの上で、一志や他の男の子に混じってチャンバラごっこをしながら、いつも視界の端で外に出て行く大人を目で追っていた。着飾って出て行く女たちや、夜遅くまで帰ってこない男たち そんな彼らがいつも気になっていた。

ある日の昼下がり、私はとうとう我慢が出来なくなって、団地内で一番若くて綺麗なお姉さんが外に出るのを見計らって、こっそり彼女の後について敷地の外へ出た。斜めがけのポシエットに飴玉をいくつか、ラップで包んだ朝の残りのパン、一円玉や五円玉が数枚の他にビー玉やおはじきがたくさん入ったがま口の財布を入れて、臆することもなく知らない世界に飛び出した。彼女の硬質なヒール音の後に続いて見えた世界は、普段母や父の手に引かれて見えるそれとはまるで違っていた。町のざわめきも、早足で通り過ぎていく人並みも、重なって大きくなる出所の分からない音も、私にとっては全てが魔法の国の出来事のようにだった。こっそり抜け出して、大人の真似事をしているという高揚感が、私からますます恐怖感を奪った。初めはすぐに引き返すつもりでいた。けれど人垣に流されているうちに、周囲は全く見覚えのない場所に様変わりしていた。一体どこをどう通ってきたのか、辺りには団地の外を通っていた大きな道路はなく、一面に乾いた茶色い土ばかりの畑が広がっていて、この世の終わりみたいな場所に一人で立っていた。人影もなく、歩き続けた足がひどく痛んで心細かった。季節は秋から冬に変わる頃で、夕方になると急に気温が下がって、薄手のカットソー一枚のからだはぶるぶる震えた。

それでももうろうろしているうちに、細いけれどちゃんとした道路に出た。視線の先にバス停を見つけて、思わず駆け出した。青い屋根のついたバス停には斜めに傾いた錆びたベンチが一台置かれていて、倒れこむようにその端っこに腰掛けた。座ると少し落ち着いて、私はそこで朝の残りの、水分の飛んでしまったパンを食べた。しかしそれは大きな失敗だった。腹が膨れてしまうと、途端に恋しさが増してしまった。何度も泣きべそをかきそうになったけれど、本当に泣いてしまったら恐ろしいものに捕まってしまう気がして、結局私はそこで気を張り詰めたまま二本のバスを見送った。バスの扉が開くたびに、運転手さんに怪訝な顔をされたけれど、話しかけてくれる大人は一人もいなかった。

いつの間にか雲が晴れて、世界を溶かしてしまいそうなほどの真っ赤な夕日が目の前に姿を現した。恐ろしくなった私はついにベンチから立ち上がって、明かりのほう目指して駆け出した。走り出すとすぐに足の痛みがぶり返したけれど、無我夢中で畑のそばを走り続けた。迫ってくる夜の気配にすっかり怯えて、激しい呼吸を繰り返しながら、神様ごめんなさいと何度も唱えた。

どれくらい走ったのか、気がつくとは私は小高い丘の上に立っていた。登り終えたとき、畑から見えていた明かりが、丘の上に一本だけ立っていた電灯だということに気づいた。まあい笠をつけた電灯は御伽噺に出てくるそのように可愛くて、私はその白い明かりを下から見上げて、とてつもなく救われた。緊張が解けて脱力して、太い電灯のポールを抱え込むようにして腰を下ろした。

眼下にはぼつぼつと家の明かりが見えていて、そのずうっと向こうに群青色の空が迫りつつあった。まるで空がゆっくり食べられていくみたいに見えて、私はポールに必死にしがみついた。もう、帰れない。私も食べられる。目尻に涙が溜まって、慌てて乱暴に拭いたら目尻がひりひりした。その時、誰かが丘を上ってくる音がして、私はからだを強張らせた。恐る恐るポールの影から顔を上げると、黒かったシルエットは大きく濃くなり、夕日を浴びて、やがて父に変わった。

始め、私はそれを、自分の作り出した幻かと思った。けれど熱を感じる生々しい呼吸音や、嗅ぎ慣れた煙草のにおいに、すぐに現実だと分かって飛び上がるように立ち上がった。

「水穂か？」

駆け寄ってきたその顔は強張っていた。

「お父さん！」

思わず叫んで両手を伸ばすと、父は手にしていた黒いジャケットを草原の上に落として私の前に跪き、力いっぱい抱き締めて、耳元で「良かった！」と声を震わせた。腕に力を入れられるたび、父が胸の前に掲げていた真っ黒な大きなカメラがからだに押し付けられて、痛い痛いと言を上げた。

父は仲間同士で立ち上げたという小さな会社で、広告やカタログの写真を撮る仕事をしていた。カメラを持っていたということは、その日は撮影のある日だったのかもしれない。

そのときの私は、見つけてもらった安堵と父がこんな時間にいるという嬉しさが一気に押し寄せて、今にも大声で泣いてしまいそうなほど興奮していた。しかし、私からからだを離して、怪我はないかとからだ中を点検する父の汗臭い、色褪せた綿のシャツは皺くちゃで、膝が汚れてだらしく歪んだチノパンを見たら、急に不安が押し寄せて、

「お父さん、お仕事は？ 怒ってる？ お父さん、ごめんなさい」

「何にも言わなくていい。怒ってないよ。水穂は、理由なくこういうことをする子供じゃないだろ。そのことはよく分かってるから、とにかく無事でいてくれただけでいい。でもこれからは、俺を誘えよ。一人で行くな」

もう寒いくらいなのに、額にも鼻の頭にも玉の汗が浮いている顔で疲れと優しさの入り混じった笑みで崩れた。それで糸が切れてしまって、堰を切ったように涙が出てきた。父はまた私を強い力で抱き締めて、宥めた。肩や腰に回された手が小刻みに震えていた。そこにはいつだって揺るがない、絶対的な存在だった父親の彼はどこにもいなかった。大きな罪悪感に囚われたけれど、上手く謝れなかった。

「しかし水穂は、どうしてまたこんなところまで冒険にやってきたわけ」

聞かれて、私は口ごもった。外の世界に出てきた背景は、何も好奇心だけのことではなかった。

父は不規則な仕事をしているせいか、仕事が重なると家に帰ってこなくなるのがしばしばで、そんな父に母は苛立ちを募らせることが多かった。母は昔からどこか弱くて、思いもしないところで、ぽっきり折れてしまいそうな柔な部分があった。だからか、母は家の中でいつでも突っ張った空気をまとって、それには子供の私でさえ気を遣わせられていた。その頃、母はそうしていつでも険があって、それが父に向かっていくたび、父の足が余計に家から遠のいていくように思っていた。当時の私は一志たちと遊びながら、目の端を通り過ぎる綺麗に着飾った女の人や、若くて生き生きしている男の人を見るたびに、その負のスパイラルを止める方法が、何となく外の世界にあるような気がして、だから強硬手段を取ったというのが根底にあった。しかし、それを口に出そうとするには、私は語彙を知らなすぎた。結局、迷った挙句、

「外に、出たかったの」

「うーん、そうかあ。俺のせいかなあ。最近、どこにも連れてってやってなかったし。でも、分かる」

「分かる？」

「おお。外に出たい気持ち」

父はそう言いながら私の涙で濡れた頬を、シャツの裾で拭いて、それから私のおかっぱの髪を両耳に掛けて視界を広げると、ニッと笑った。

「お父さんはどうしてお外に出たくなるの。毎日出てるじゃん」

「それとは別なんだよ。ただ当てもなく、どこかへ行きたくなる。どこでもないどっか。水穂もそうなんじゃないの」

首を傾げ応えると、父は「わかんねえか。つーか当たり前か。それでいいよ」と笑って、私の頭を撫でた。その大きな手が私の頭をすっぽりと覆うと、途端に淋しく、不安な気持ちになって、私はその手を両手でがっしりとんだ。父はしばらくの間そのままでもいたけれど、何の前触れもなく手を引き抜くと、私の額に自分の額をつけて、上目を見た。いつもの煙草のにおいもシャツについた汗のにおいも、全てが父をかたち作っているというのに、目の前にいる父が全く知らない男のように見えて、緊張した。思わず目を背けようとする、だが父は額を僅かに動かして、私が逃げようとするのを阻んだ。

「でも、お前、お母さん心配させちゃ駄目だろう。水穂が突然いなくなって、お母さんがどれだけ心配して、悲しんだか」

「それ、ほんと？」

「どうして」

「だってお母さん、たぶん水穂のこと嫌いだもん」

ぼそぼそ言うと、父は私から離れて腹を抱えて笑いだした。「お前、そりゃ絶対ないよ。ははは、何だよ、そんなこと思ったの？ ガキのくせに」

そう一蹴されると、自分でも驚くほどの安心に混乱して、私はいつまでももじもじしていた。その脇で、彼は長い間、低くてしわがれた声で喉を鳴らして笑い続けた。よく知っているのに、全く知らない。そんな曖昧な気持ちに何故だか胸がますます高鳴って、しがみついて抱き締めたいような、逃げ出してみたいような、そんなわけの分からない感情に翻弄された。

思考がぐるぐる回って、不貞腐れたように頬を膨らませていると、父は落としたままでいたジャケットを拾い上げて汚れを払い、それを私の肩に掛けた。さっきの手の重さと同じ重さがからだに乗って、感じたことのない幸福を感じた。その大きさにうろたえて、父の太腿にしがみついた。父は一瞬驚いたように私を見たけれど、脱力した笑みを漏らして、携帯電話を取り出した。母に掛けたのだと、すぐに分かった。呼び出し音が鳴っている間に、彼は携帯を肩で挟み、胸ポケットから煙草の箱を取り出して啜え、それからしかめ面をしてライターで火をつけようとした。まるで煙草にキスするみたいだなあ、と思って、どきどきしながらそれに見惚れた。そのとき、通話口から母の金切り声にも似た泣き声が私の元にまで漏れ聞こえてきて、思わずしがみついた腕に力を込めた。父は私を見下ろして口の端を歪ませて笑うと、私の頭に手を乗せて、母を根気よく宥め続けた。父の足はとても硬くて、それはここで私を待っていた電灯のようだったけれど、今私を支えているそれはとても暖かくて、電灯よりもっとずっと頼もしかった。

赤黒い空が、だんだん群青色の夜に飲み込まれていくのを父の足の隙間から見ながら、帰らなきゃ、と思った。あの四方を団地の棟に囲まれた部屋の中で泣いている母が抱えた不安と淋しさが、突然手に取るように分かってしまい、後悔に襲われた。

「お母さん、カンカンだぞ。覚悟するんだな、水穂」

電話を切ってようやく煙草に火をつけた彼は、同時に無防備な声を漏らした。不思議に思って、彼の視線の先に目をやるとそこには赤黒い空が広がって、その真ん中に真っ赤に光った夕日がまさに今、落ちていくところだった。

私が感嘆の声を上げると同時に、父は突然私を肩車し、首に提げていたカメラのレンズを空に向けて、無心にシャッターを切り始めた。時折吹く風の中に、空気を切断するような重いその音が響いて、赤黒い海の中で溺れているような夕日が彼のカメラに吸い上げられていった。先端を闇の中に隠した近くの建物の煙突も、薄闇の中で生きているように見える鉄塔も恐ろしいというのに、その前でカメラを構える父の姿は美しく、私はそれを上から身じろぎ一つできずに見つめていた。目を逸らせば、口から吐き出される煙のようになって、消えてしまう気がした。まるで実体のないお化けに抱かれているようだ。いつもより何倍も高い視界は、丘の下を崖のように見せた。

気が済んだのか、少ししてシャッター音が止んで、

「ああ、帰りたくねえなあ、水穂」

父は突然そんなことを言って、しばらく夕日をぼんやりと見ていた。しかし忽ち私を地面に下ろすと、彼も夕日を背にして座り込んで、煙草を啜えたまま私を見た。逆光で彼の姿は暗くて見えづらかったけれど、懸命に目を凝らしていると、だんだん暗さに目が慣れて、目を細めて私を見る父と目が合った。その目が、まるでさよならを告げているみたいな気がして、私は慌ててまた手を伸ばした。肩に乗っていた父のジャケットが、そのせいで草原に落ちた。振り向いて見ると、まるで抜け殻を前にしているような気になって恐ろしくなった。

「このままお前を連れて、どっか行っちまおうかな」

彼は落ちたジャケットを拾って、再び私のからだに被せて、今度は袖を通させた。すっぽりと覆われると、温かいお湯の中に入っているような気になった。彼は両手で丁寧に袖を何重にも折って、ようやく出た私の手を慈しむように握った。

「お父さん？」

不安が差して、首を傾げて呼ぶと、父は慌てて煙草を口から離して噴出して、「お父さんかー」と幾度も苦笑しながら呟いた。

「何がおかしいのか、分かんない！」

無然として、ガサガサするジャケットに首を竦めて、父の笑い声が去るのを待った。そんな私の頬を柔く抓って、

「いいなあ、水穂。お前は女で、良かったな」

「えっ、お父さん、女に生まれたかったの？」

それは困る、という気持ちで真剣に言うと、父はまた噴出した。

「お父さん、帰る。お母さんが待ってるよ。お家で、一人で、待ってるよ。だから早く帰ってあげなきゃ」

訥々と言うと、父は一瞬だけ傷ついたときのような顔をした。見間違いかと思って、しばらく彼の顔をじっと見つめ続けていたけれど、父はもうそんな気配は見せなかった。代わりにまた意地悪そうな笑みを浮かばせて、

「お前、めちゃくちゃ怒られるぞ。覚悟、できてんの」

「カクゴ？」

「怒られる用意は出来たの？ ってこと」

私はつと普段母が怒るときの剣幕を思い出して、竦んだ。ぶるぶると首を振り、父の首に巻きつくように腕を回した。

「じゃあ、トトロに会ったとでも言っとくか。そんなアニメ映画があっただろ」

私はいつか見た、小さな女の子が家の前の森の中で、巨大な森の主に出会う話を思い出して胸を高鳴らせた。「そうすればお母さん、あんまり怒らないかな」

「どうかな」

困惑する私のそばを離れたと思うと、彼は近くの枯葉を集めてきて、それを私の頭の上に思い切り降らせた。突然のことで声も出せずにいると、

「トトロに会うには、森を通らなきゃならないだろ。それなら、もっと汚れないと。でも、ははは、これじゃかえって心配するか」

言いながら、だが私の持っていたポシエットにまで枯葉を詰め始めた。驚いたのと力が抜けたのとで、私は笑うことも出来ずに呆然とそれを見ていた。

やがて彼は満足そうに頷いて、「これなら怒られまい」と言った。汚れた手で触るから、ポシエットモチノ

パンも、茶色い汚れがついた。私はその手を捕まえて、一生懸命に汚れを払い落とした。それを彼は面白いものを見るように眺めながら、二本目の煙草に火をつけた。深く目を伏せて、火に煙草の先を慎重に寄せる彼は、また愛する女の人にキスをしているみたいになった。その横顔が薄闇の中にぼんやりと照らされるのを見たら、からだがざわざわと騒いで、高揚した。そして私のために必死になる父を前にして、言い様のない満足感に囚われていた。お父さんは私のもの。何の心配もいらない。この人は私のために何でもする。いつでも私のそばにいて、私を守ってくれるんだ。

「ああ、沈んじゃったな、水穂。もう、暗くなっちゃったよ」

言われて空を見上げると、もう夕日は跡かたちもなく消えて、そこにはずっしりと重たい闇が鎮座しているばかりだった。そのとき、隣で煙草の煙を吐く父の息が、とてつもなく淋しいものになった。細くて、弱くて、どうしてだか今にも泣き出しそうな気配を感じた。転んだ一志が泣き出すまでの、あのちょっとした間に、それはそっくりだったのだ。思わず、隣に腰を下ろした父の顔に両手を這わせた。少し伸びた髭が柔らかな手のひらの肉に刺さって、痛い。でも、冷えたその顔が温くなるまで、触れたままでいた。「お父さん、泣くの？」私が恐る恐る聞くと、父は目を丸くした。「だって、一志が泣くときと同じ顔してるよ」

「五歳児と、同じ顔かよー」

笑いながら言って、煙草を靴の裏側で揉み消した彼は、私の髪を乱暴にかき上げて、それから唐突に抱き締めた。まるで犬を抱くような雑さだったけれど、そのほうが愛情を感じた。彼は自分の膝の上で私を腕の中に入れて、私の頭の上に自分の顎を乗せると、かすれた声で言った。

「お前は女だからさ、いつか、俺の元から離れる日が来るし、他にどんな拠り所だって見つけるだろう。でも、もしそれを失う日が来て、孤独が怖くなったときには、いつでも俺のところに戻って来い。俺は、どんなによぼよぼのじーさんになっても、待っててやるから。俺は永遠にお前の父親だからな」

言い終わると父は何の未練もないという風に、突然私を立ち上がらせ、自分も立ち上がった。私の視界は、また彼の汚れたチノパンでいっぱいになって、顔がぐんと遠くなった。

「お父さんの言ってること、全然分かんない。それに、私、ずっとお父さんと一緒にいるよ」

父の言い方に責められているような色を感じたので、自然と拗ねた口調になった。すると彼は私の小さな手を取って、丘を下りながら、

「俺には待ってることしか出来ないんだから、待たせるよ」

よく聞き取れなくて聞き返すと、だが彼は、「だから娘の父親なんて嫌なんだ」と言って苦笑した。

帰ってから散々怒られた私が沈んでいると、数日して父が一枚の写真を私にくれた。それはあの日一緒に見た、夕焼けの写真だった。そこに映っていた、まるで闇を切り裂いて這い出てきたようなどろどろの夕日に、息を呑んだ。せいぜい二、三日前のことだったというのに、自分が見たあの夕日が果たして本当にこんなにグロテスクなものだったのか、分からなくなった。見ていると引きずり込まれそうで、だから私は、その写真を埋めたのだ、土の奥深く、もう取り出せないと思えるようなところに、大切に。

*

ハッとしてからだを起こすと、カーテンの隙間から明るくなり始めた青い空が見えた。いつの間にか寝てしまっていたらしい。時刻はもう朝の五時を指していた。重い頭を何度か振って、完全にからだを起こした。下半身がひどくだるくて、ぼんやりと目を向けるとシーツに少しだけ黒ずんだ血が滲んでしまっていた。何か言葉が生まれる前に、シーツを剥ぎ取り、汚れた下着も換えて、風呂場に飛び込んだ。生理の血は、すぐに洗わないとどんどん落ちにくくなる。時間が経てば経つほど、滲みになって跡に残る。

キャミソールと下着という格好で、洗面器に血液を落とす専用の洗剤を入れ、その中にシーツと下着を洗めた。目には見えないけれど、きっとゆっくりと洗剤液が染み込んで、分解して、溶かしているはずだ。だ

から大丈夫だ、と何度も深呼吸した。けれど、私の頭の中でさっき見た夢の映像がどんどん鮮やかさを増し、私をますますそこに磔にする。地面に出来る影のように、過去の風景の中に焼き付けられて、動けなくなってしまいそうだ。

まだ付け置きの間まではあったけれど、洗面器の中に手を突っ込み、揉み洗いを始めた。陽気なフローラルの香りが鼻を突いてくしゃみが出て、目に涙が溜まった。

「待っていると、言ったのに」

呟いたら、どんどん恨みがましくなって、シーツを擦る手に力が入った。擦りすぎではいけないと分かっているのに、生地がそこだけ傷んでいくのが分かっても、どうしても止められなかった。気づいたら洗面器の中がうっすらと赤く染まっていたので、その水を思い切り流して、新しい水を溜めた。シーツはそれにもすぐに馴染んだけれど、つれてしまった縫い目はもう元には戻らず、それがまるで傷口のように見えた。

あのときの父がどうしてあんな言い方をしたのか、私はきっとずっとそのことを考えている。今も、これからも、許さないままで考え続ける。

下着の汚れも落ちたので、それを硬く絞って洗濯機に入れ、スイッチを入れた。すぐに大量の水が吐き出される音と回転音が私の周囲を取り囲んで、過去も現在も一緒くたにした。

あられもない格好のまま台所へ行って、冷蔵庫から冷えた麦茶をコップに注ぎ、飲んだ。乾いた細胞に冷たさが広がって、私はまた少し前に進んだ。

部屋に戻って携帯を見たけれど、逸也から連絡はなかった。カーテンの隙間から見えた朝日が、夜が明けたことを告げている。

逸也と話がしたい、と突然思った。いつものように、私の話を聞いて欲しい。うん、うん、と話し終えるまで何も言わずに頷いて、私の話を受け取って欲しい。けれど、その欲求の源泉を見つけてしまった私には、もうそんなことは出来そうになかった。

海に潜るように、もう一度ベッドに滑り込んで、頭までタオルケットを被った。タオルケットにカーテン越しの太陽の光が当たって、視界はうっすらとオレンジ色に染まった。

タオルケットの中の酸素が徐々に減って苦しくなってきたとき、汗ばんだ父の髪から伝わる熱気が、息苦しくなるほど熱かったことを思い出した。私はタオルケットの端をきつくみ、より強くからだを丸めて、海の中に沈んでいくみたいに一人きりになった。

帰りたい。

でもどこに。

唇を動かしたけれど、それは音にはならず、携帯を握り締めたまま、そのうち私はまた、眠りに落ちていった。

再び目が覚めたときには、昼を随分過ぎていて、洗濯機を回していたことを思い出した私が慌てて居間に行くと、旅行から帰ってきた母が、荷解きしていた。呆然となっていると、彼女は綺麗に結わいていた髪を解き、いつものようにめちやくちにかき回すと、私を見上げて、おはようと言った。

「おはよう。いつ、帰ってきたの」

「一時間くらい前。そうだ、水穂ちゃん、洗濯機回したまま寝るのやめなさいよ」

「あ、ごめん」

「もう、帰ってきて洗濯しようとしたら、濡れたまま放置されてるんだもん。仕方ないから干しといてあげたけど」

「あ、ありがとう」

でも何もシーツなんて大きなものを、今日洗ってなくてもいいじゃないの、とその後も続く小言をおざなりに聞きながら、母のために熱いコーヒーを入れてやることにした。

母とは未だ何を話しているのか分からない。父の裏切りから三年も経っているのに、私はまだ母をどこかで憎んでいる。あの日、私を父の前に差し出すことで、己の復讐を完遂させたことに、いつまでもこだわっている。

「そういえば、旅行はどうだったの。金沢、混んでた？」

「ああ、うん。すごい人だったわよー」

その言い方があまりにも心ここにあらずだったので、どうしたのかと促すと、彼女はダイニングテーブルの上で頬杖をついて、

「あのね、水穂ちゃん。明日の日曜、あけといてほしいの」

私の背に、眠たげな声がぶつかった。私はフィルターをゆっくり落ちていく濁った水を見るのに集中しながら、何で、と聞いた。

「会ってほしい人がいるのよ」

「会って、ほしい人？」

「あたしの今の男のこと、薫から聞いて知ってるでしょ」

薫とは母が世話になっているスナックのママであり、母の高校時代の友人のことだった。私はコーヒーが抽出される間に、冷蔵庫から出したオレンジジュースをコップに注ぎながら、以前薫さんから母の付き合い合っている男について聞かされたことを思い出した。確かスナックの常連の男で、母より五歳上の男ではなかったか。

「中古車販売業をしている人でね。名前を^{うにただお}宇仁唯雄っていうの。バツイチで、五歳の男の子がいるけど親権は元妻のほうにあるから、実質独り身ね」

「ち、ちょっと待ってよ、子持ちなの？」

あんまり驚いたので、つい流しにコップを落としてしまった。鈍い大きな音がして、手にオレンジジュースが思い切りかかった。

「そんなに驚くこともないじゃない。宇仁さん、もう五十なのよ。そりゃあ子供の一人や二人いるわよ」

「明日は駄目。杏里と約束があるの」

「嘘でしょ、どうせ」母はふっと息を漏らすように笑って、「水穂ちゃんは、ほんといつまで経っても嘘つきねえ。上手くつけないなら、つかないほうがましよ、嘘なんか」母はそう言って気だるそうに煙草に手を伸ばして火をつけた。「とにかくあけておいてね。彼、ここに来るから」

「ここに？ 何でここなのよ！」

「いい加減、ここにあの人がいたことを忘れるの。もう、あたしは好きにするのよ」

その声は、これまで聞いたこともないほど強く簡潔だった。私はあまりの怒りだかショックだか分からないもので、頭が真っ白になってしまった。忘れることも許すことも出来ないうえに、どこにも逃げられない。突然訪れた絶望の前でパニックになって、からだがぶるぶる震えた。それを見られてたまるか、とぬるい水道水で手を洗いながら、

「だからって、こんなところに連れてこないでよ」

「どうして」

「どうしてって」

喉元まで出掛かったが、何とか飲み込んだ。しかし視線はそばの床に向いてしまう。父と愛人の汗や体液が染み込んでいる気がして何百回と拭いた床に。母はそんな私の視線の先を目敏く追って、

「水穂ちゃんもいい加減忘れなさいよ」

「忘れるなんて、無理よ！」

母は私の激高に驚き、だらしなく煙草を挟んだまま、私のことを見上げていた。疲れてはいるけれど、今

の母の目は私の知るどんなときよりも美しかった。濁ったゼラチンのようなそれではなくて、きちんと物を映して、大事なものを掬い取る目だ。私はその目にすべてが見透かされてしまう気がして、再び背を向けた。ドリッパーを取り外す手が震えていた。真っ黒なコーヒーの湯気が顔に向かって伸びてきて、思わず顎を引く。首筋がべたつくほど、汗を掻いている。こめかみから流れ落ちる汗を、硬直した手で素早く拭い去り、揺れるコーヒーに映る自分から目をそらして、そこに思い切りミルクを注いで掻き混ぜた。日曜日、宇仁唯雄は特別な格好をしてやってくるでもなく、白い麻のシャツを肌に直接着て、皺だらけの色褪せたジーンズをだらしなく履いてやってきた。

「あんたが、水穂ちゃん？」

無精髭を親指の腹でさすりながら、何がおかしいのか不敵な笑みを浮かばせてそう聞いてきた。どう生きたらそんな風になるのかというほど、鋭さを湛えた目をしている。誠実さも好感も、どこを探しても感じられない。足元のビーチサンダルも履き潰されていて、全体的に放埒な印象がある。けれどそうして一見隙だらけに見える何もかもに騙されていたことに、すぐに気付かされる。男が間合いに入ってきたとき、産毛にまで緊張が走った。強く殺伐とした目に囚われると、まさに蛇に睨まれた蛙のごとく動けなくなってしまう。

だが私は舐められてたまるかと何とか睨みつけ、

「名前を呼ぶのはやめてください」

「じゃあ何て呼んで欲しいわけ？ 端から面倒臭いガキだね」

宇仁は心から煩わしそうに顔を歪めて言うと、脇を通り、勝手に部屋に上がり込んだ。私の知る誰よりも上背のある男だった。額を出しているところも、ワックスで撫で付けられた黒髪も気に障る。母はいい歳をして“千穂子ちゃん”などと呼ばれ、浮かれている。うんざりしながらも、途中で席を立ったり苛立ったりしないと約束をしてしまっていたので、我慢して茶の用意をした。

「そんであんたは、俺と千穂子ちゃんが再婚すんのは嫌なんですよ」

私の出した冷茶を一気に飲み干すと、宇仁はまた底意地の悪い目をして下卑た笑い声を漏らし、言った。別に、と言いかけた私を遮り、母がクスクス笑って、

「そうなのよ。この子、いつまで経ってもファザコンが抜けなくて嫌になっちゃう」

「そういう訳じゃない！」

つい声を荒げてしまい、しまったと思ったときにはもう遅かった。宇仁はますます性格の悪そうな顔をして私を眺めて、「ファザコンちゃんか」と嘲笑した。

「違います。あと、別に再婚を頭ごなしに反対している訳じゃないです。こんなに突然だったら、誰だって驚くと思う」

「突然じゃなかったら良いというわけでもないだろうに」

宇仁は母から煙草を貰って火をつけさせ、おもむろに吸い始めた。その動きはどこか粘ついていて、だがそうした仕草のひとつひとつからこの男と母が睦みあっている様などを想像してしまう。

「まあ、俺は再婚するのにいちいちあんたの了承を取る必要はないと思ってるけど」

「どうしてですか？ だって宇仁、さんと母が再婚したら、私も一緒に住むことになるんですよ。私にだって口をだす権利はあると思う、んですけど」

「何で？ 千穂子ちゃんは、あんたの母親やるためだけに生きてるわけじゃないだろ。彼女こそ好きにする権利があると思うがね」

悔しい思いでからだ熱くなったが、結局何も言い返すことは出来なかった。

ふと宇仁の横で静かに微笑んで頷いている母が視界に入った。その顔は、それまで見たことのないほど穏やかで、媚びている。しかしその嬌態には可愛らしさもある。それを認めてしまうと、家が、突然知らない

顔をして私を見ているような気になって、膝の上の手を見えないところで強く握り締めた。

「あの、母から聞きました。子供が、いるって」

「ああ、いるよ。前の奥さんのところだけど」

「その子は」

「^{ひろみ}広海」強い口調で遮り、宇仁は歯を見せてニタニタと笑った。「広海っていうから。俺の息子。チョー可愛いよ」

「その広海君は、あなたが他の女と再婚するのをどう思ってるんですか」

「さあ」

「さあって」

「そんなのわかんねえよ。俺は広海じゃねえんだから。でもまあ、あいつはもう新しい若いパパにぞっこんだから、別にどうでもいいんじゃないの」

「淋しがったり、しないんですか」

「淋しいかもね。あいつ、俺のこと好きだし、まだ五歳だし、俺に似ないで頭良いし。ねえ？」

宇仁がまだ長い煙草を揉み消しながら、母を覗き込むようにして首を傾げたのを受けて、母はまるで少女のように恥じらいながら、そうよねえ、と同じように首を傾げてみせた。

「まだ五歳なんだから、当然よねえ。でも広海君は、パパを宜しくお願いします、ってあたしにはちゃんとやってくれたわよ。水穂ちゃんよりも、しっかりしてたわ」

「どういう意味よ」

「あんたみたいに、屈折してねえってことだよ」

「それは、子供だから手段を選べなかつただけなんじゃないの？ 嫌だと言いたくても言えなかつたのよ」

「いいや、違う。ただ、やけに利口なだけ」宇仁は淡々と言った。「俺がこんなだからか、あいつはすでに分かってるんだ。一人になった俺が、駄目になってきていることが」

「五歳児に、甘えすぎじゃないの、大人のくせに」

吐き捨てるように言うと、宇仁は片眉を上げる独特な笑い方をして、「甘えたっていいだろ、家族なんだから」

「水穂ちゃんもそろそろ分かってよ。私ももう、解放されたいのよ」

弱いだけのくせに。解放だなんて言って、ただ一人で生きられないだけじゃないの。何とか嚙下し、歯を食い縛る。

分かっている、弱さが悪いわけじゃない。私がただ変化を受け入れられない、子供なのだ。五歳児よりも、ずっと。

「大丈夫だって。俺、千穂子ちゃん、マジ愛してっから。それにあんたの父親ほど弱くはないからな。そこまでとち狂ったことはしない」

宇仁は軽々しく言っただけ、私の肝を冷やさせた。母に目をやると、だが彼女は平然とした様子で茶を啜っていた。わけが分からなくなっていると、宇仁が突然やけに真面目な顔をして、

「じゃあ、行くか」

そう言って私の方へ腕を伸ばしてきたので、驚きながらそれから逃れると、母が緊張感をなくした顔をして、

「水穂ちゃん。ちょっと唯雄さんと出かけてきなさいよ」

「何、言ってるの」

「何だよ、聞いてないの」

伸びをしながら大儀そうに言い、宇仁は私に、今日はそもそも顔合わせだけに終わらず、交流を深める日

だったと説明した。母の涼しい横顔を見て、嵌められたことを悟った。

勝手に再婚するだの、私の子承など不必要だのと言っておいて、親睦は深めろというのか。付き合っていられないとばかりに勢いよく席を立ち、家を出て行こうとした。そこを宇仁にまんまと捕まった。

「待てよ。キレやすいお嬢ちゃんだな」

「この手を離してくださいよ！」

宇仁にまれた腕を上下に振り回した、が、この大男の力になど最初から敵うはずもなかった。

「いつまでそんな風にガキみたいに騒いでるつもりだよ。ほら行くぞ」

そのまま宇仁に引っ張られて、無理やり靴を履かせられた。屈辱を覚えつつも助けを求めて振り返ると、母は笑みを浮かべ、安閑とした様子でひらひらと手を振っていた。

外へ連れ出されると、灰色の低い雲の隙間に濃い青が、まるでそこにだけ水を溜めているように見え隠れしていた。私は抗えない力に引き摺られながら、早くその青が引っくり返りでもして、何もかもをも流し去るような大雨を降らせないと願った。

外に停まっていた、よく磨かれて艶めいた黒色の外車に乗せられ、勝手に降りたら殺すぞと凄まじられた。堂々と拉致か。呆れて、かえって逆らう気も失せて、自分からシートベルトを締めた。従順になった私に満足したのか、宇仁はどこに行きたいかと尋ねながら、発進した。

「どこでもいいですよ、もう、別に」

「何だよ、張り合いねえな。ないの、なんか。女子高生ならたくさんあるでしょうが。行きたいところ」

「あるけど、どこもあなたとは行きたくない」

「面倒臭えなあ」

「じゃあ降ろしてください」

「それは駄目だ。千穂子ちゃんに怒られるからね、ちゃんと交流深めないよ」

ふざけた調子で言われただけなのに、そこに簡単には入り込めないような二人の時の流れを感じた。

「母とは、いつもどんなところに行くんですか」

「まあ、大抵店で会うけど、千穂子ちゃんの出勤前は、俺の家が多いかなあ」

また試すような視線を送ってきたので、心から蔑んでいるのが伝わるように憎しみをこめて睨めつけた。が、彼は全く動じる様子もなく、

「じゃあ遊園地に行くか」

「何でそうなるんですか」

「いいじゃん、遊園地。あんた、好きそう」

「遊園地なんか好きじゃないですよ！」自分でも驚くほど素っ頓狂な声が出た。

「ああ、男か？ 何か嫌な思い出でも作ったか」黙っていると、呆れたように、「何だよ、一度は好きになった男と行ったところだろ？ 別にいいじゃねえか、思い出は思い出として大事にすりゃあよ」

「あなたには分かりません」

「そうか？ 若いとかじじいだからとか、関係ねえと思うけど」

「そういう意味じゃなくて」

宇仁は合点がいったというように顎を突き出して頷き、「じゃあ、どうしたら信用してもらえますかね」

「何で、母だったんですか。あの人はあの通り精神的に弱いし、束縛も強いし、人を試さないと愛情を量れない。そういう人間と、これから先、一緒に生きていくつもりですか。あなたには愛してくれる息子もいるのに」

「生きていくつもりですよ。だって広海は、俺の面倒見てくれねえもん」

「何、それ……」

「冗談だろ、マジでひくなよ」宇仁は音ばかりうるさい冷房のファンを強めて、それよりもさらに声を張り上げて言った。「広海にはさ、俺のことはさっさと忘れて、幸せになってほしいんだよ。せっかくいいパパにめぐり会えたんだ。俺がこんなじゃ、いつまで経っても新しいパパに慣れないって、元奥さんにも言われてね」

「心配しなくてもさっさと忘れますよ。父親をやめた人のことなんか、すぐに」

「うわ、可愛くない笑い方をするね、あんた。そんなじゃ彼氏に愛想尽かされるぜ。ああ、もう尽かされたんだっけ」

平静を装おうと思うのに、そう思うほど頬が痙攣してしまった。

「いや、悪かったよ」宇仁は神妙に言うと、真面目な口調で続けた。「なあ、あんたの男って、すごい年上？」

「どうしてですか」

「いや、何となく。あんた、同世代の男には何の期待もしない気がしただけ」

黙ると、宇仁は了解も取らずに、片手で器用に煙草を吸い始めた。細く開けられた窓に、煙がどんどん吸い込まれるように出て行く。それをぼんやりと見ていると、ふと宇仁の浅黒いからだが目に入った。年齢よりもずっと若いのが、それでもやはり露出している肌は衰えている。張りは失われて、水分の飛んだ皮膚は硬そうに見えた。何にも揺るがず、どこまでも耐えていける肌だと感じた。

「俺はさ、逆だったんだよ。年下が好きだったんだけど、生きていくには同じくらいの女じゃないと駄目なのかもって悟ったっていうか。前の奥さん、かなり若かったんだけど、俺疲れちゃってね、そういうのに。お互い見てる着地点がまるっきりバラバラだった。それで別れてすぐ、あんたのお母さんに会ったの。あの人はね、俺より五歳は若いけど、あんたが思ってるよりもずっと強いし、ずっと色んなことを理解してる。伊達に歳食ってねえよ」

「嘘よ。お母さんのことなら私の方が分かってる。ずっと二人で生きてきたんです、今まで。お母さんには、あなたみたいな強引な男じゃなくて、もっとあの人の弱さを理解して寄り添ってくれる人じゃなきゃ」

「それでも駄目になったじゃん。それって前の旦那のこと言ってんでしょ」

返事に窮した。その通りだった。握った拳の行き場はなくて、いつまでもジーンズの上で沈黙していた。話をするのが怖い、と唐突に思った。この男と話をしているうちに、全部吐き出してしまいそうな気がする。だが何もかもを洗い浚いぶちまけて、いっそ私を糾弾してほしい、知られることで、もう逃げることをやめたい、とも思う。この男になら、それが出来そうな気がふとした。

「困った娘だね」宇仁は悪巧みする少年のような顔をして、大袈裟に溜め息を吐いて言った。「もうすぐ着くから」

これまでも相当飛ばしていたのに、彼はますますアクセルを踏んだ。そのくせ急ブレーキや急発進が多いその運転に気分が悪くなってきて、

「ちょっと待ってください。酔う、あなたの運転」

喉元に胃液を感じて思わず前屈みになりながら言うと、だが宇仁は別段気を遣った運転に変えるわけもなく、赤信号で止まってようやく、「誰と比べて」と意地悪く聞いてきた。そのとき私の頭に浮かんだのは、逸也ではなく関谷先生だった。

「あんた、そいつに大事にされてたんだよ。じゃなきゃ、これくらいで酔わない」

「大事になんて、されてないわ」

感情が顔に出ているような気がして、私は口元を押さえながら顔を背けた。しばらくして、背中に「もうちょっとだから」と声を投げ掛けられた。その声はそれまでのものとは違い、静かで優しい声だった。私は僅かに狼狽した。

それから十分もしないうちに、宇仁は大型の立体駐車場に車を滑り入れた。この駐車場は老舗デパート

に隣接していて、小さい頃、よく家族で来た記憶があった。嫌な予感がして宇仁の方に向き直り、無言で睨むと、

「懐かしいか？」

宇仁はまた不敵に笑いながら、ハンドルを器用に捌いて駐車を終え、車からさっさと降りてしまった。そうかと思えば助手席の方に回りこんできてドアを開けると、強引に私の腕をんで引き摺りだした。

このショッピングセンターの上には小さな屋上遊園地があった。たぶん宇仁は母から、小さい私を連れて、よくここへ家族で訪れたことを聞いていたのかもしれない。いい加減放してと懇願する私に、あからさまに手を繋ぐようなかたちに持ち替え、宇仁はずんずんとデパートの中に入っていった。すぐに化粧品や香水の入り混じった、痺れるほど甘ったるい匂いや騒がしい人の声にまみれた。宇仁はその間を淡々と流れるように抜けて、真っ直ぐエレベーターに乗り込むと屋上のボタンを押した。

エレベーターの扉が開くと同時に、耳鳴りに似た子供の声が雪崩れ込んできて、私は一瞬怯んだ。宇仁は立ち止まりかけた私を自分の隣まで引っ張ると、ビーチサンダルの底を鳴らし、遊園地と隔てられたガラスの扉を開けた。

外に出ると、一面に広がった緑色のマットに懐かしさを呼び起こされて、思わず感嘆を漏らしそうになった。あれから何回もの雨風に晒されただろうに、足の裏で感触を確かめると何も変わっていない。だが見覚えのある遊具はさすがに減っている。以前は小さな汽車のための線路が屋上を一周するように引かれていたはずだけれど、それは三分の一ほどに縮小され、隅に追いやられていた。マットの上にあるのはコインで動く動物の乗り物ばかりで、錆びて傷んだ雨避けの下には、年代物のピンボールやパチンコ台が打ち捨てられたように並んでいる。どれも私が子供の頃にはもっと種類があって、子供が群がっていた。よく見れば、今はもう電気さえ切られていて、音もない屋上遊園地は、空間の歪みに突然現れたみたいに浮いていた。しかし例え電気を流して無理やり生かしたところで、今の子供はそんなものに惹かれはしないだろう。遊んでいる子供たちは最早コイン遊具でさえ遊ぶことなく、広い場所を生かして独自の遊びに夢中だ。時の移り変わりに小さく傷心したけれど、柵の向こうに広がる景色はあまり変わっていないのが嬉しかった。天気は思わしくなかったけれど、ほんの僅かの間、雲の切れる瞬間に、真っ青な空と共に富士山が顔を出して、小さい頃父に肩車されて見たその雄峰な姿と重なった。それをもっと近くで見たくて、宇仁の手を振り解こうと振った。だがやはりびくともせず、もっと抵抗しようとする、宇仁は私の考えを察したのか、また私を引いて柵のそばまで連れて行った。

エレベーターを降りたときに聞こえた興奮した声から、多くの子供がいるものと思っていたけれど、中で遊んでいる子供はせいぜい三、四人で、親と思われる大人の姿もなかった。私と宇仁は子供たちの怪訝な視線の間を潜り抜けて、柵のそばへ寄った。そのとき、一人の勝気そうな少年が私たちの後についてきて、人差し指をこちらに鋭く向けながら、

「おまえら何してんの？　ここで大人は遊んじゃいけないんだぜ」

「うるせえよ、ガキ。俺たちデートしてんだから邪魔すんじゃねえよ」

宇仁は繋いだ手を少年の前に突き出し、真面目に答えてみせた。どこから見ても全うな人間には見えないうえ、彼の凄みのある低い声を真正面から受けて、少年が泣き出してしまおうのではないかとそわそわしている私をよそに、だが少年はますます生意気に、

「デートォ？　こいつ、子供じゃん。おっさんがこんな子供とデートするわけないじゃん！」

「可哀想に。よく見てやれよ、いい女じゃねえか」

少年の前に膝をつき、宇仁は私を上目で見ながら少年の耳のそばで言った。少年は真剣な面持ちでしつこく私たちを見比べていたが、やがて背後で少年の帰りを待っていた友人たちの方へ向かって、「エンコーだ！　エンコー！　こいつらエンコーだぜ！」と騒ぎ出した。

「馬鹿！ このくそガキ！ 違えよ！」

あまりの大声にさすがの宇仁も慌てたのか、私の手を離し、ビーチサンダルの足を何度も纏れさせながら少年を追っていった。それを見ていたら何だかおかしくなってきた、私はとうとう腹を抱えて笑ってしまった。今この瞬間に、母が彼に惹かれた理由が分かってしまった。心の冷たくなっていた部分が、瞬く間に温かみを帯びていく。それなのに、どうしようもなく、悲しい。笑いながら、でも悲しくて悲しくて仕方がないのだった。

「おい、笑って見てんじゃ、ねえよ」宇仁が腰に手を当て、苦しそうに喘ぎながらこちらに寄ってきて言った。

「めっちゃくちゃ苦しそうですよ、大丈夫ですか？」

「そりゃあんた、もう動ける歳じゃねえんだから当然だろ。五十なめんな。だから交代。俺は休憩」

「もうダウンかよ、ピーサンじじい」

詰ってはいるけれど、少年たちの心はもうすっかり宇仁の虜だ。私は、鬼が私になったことに不満を漏らす子供たちに向かって、「こらぁ」と声を上げて全速力で走り寄って行った。

「ヤベー！ エンコー女怖えー！」

口々に言いたい放題言う少年たちを、笑いながら追った。酸素が足りなくなっていて、乳酸がたまって、からだが重たくなっても、無邪気な彼らと同じだけ騒いで無心になった。それまで宙に浮いていたようだったからだに、ほんの微かに重力を感じた。

もうこれ以上は走れないという頃には昼を大分回っていて、私と宇仁は二人して人工芝のマットの上に倒れこんだ。激しい呼吸がおかしくて、顔を見合わせて笑い合った。

「ねえ、一つ教えて、宇仁さん」

激しい呼吸が落ち着いてから、今にも落ちてきそうな空を見つめて、何の感慨も加えずに言った。頭の下で手を組んで雲の流れを目で追っていた宇仁が、肘をついた手に頭を乗せて私を見下ろすようにし、

「何だ」

「宇仁さんは、うちのお父さんのしたことをどう思った？ 知っているんでしょう？ 父が何をしたか」

「俺には、分からんね」宇仁はまた仰向けに寝転がって続けた。「愛しているのに、傷つけることなんか」

愛しているのに？ 言われた意味が分からず、小首を傾げた。愛しているから憎むのだ、と母について言った逸也の言い分なら、私は痛いほど理解できたけれど、宇仁の言葉をすんなりと受け入れることは出来なかった。

「千穂子ちゃんには言っていないんだけど」宇仁が突然起き上がって、胡坐を掻いたからだを私のほうへ向けた。「この間、会いに行ったんだ、俺一人で」

「え、お父さんに？ 会いに行ったの？」

宇仁は今にもみかかりそうな私の勢いに身を反らして、

「だって、怖えじゃん。いつ取り返しにくるか分かんねえし。だから先に牽制しに」

「何で、お父さんに何言ったの」

「落ち着けよ。何にもしてねえって」宇仁は眉根を寄せて困惑していたが、やがて強い目をして私を見て、

「あんたの父親ね、まだ千穂子ちゃんが好きみたいだったぜ。きっと、ずっと愛したままなんだぜ、あの。絶対伝えてやんねーけど」

彼は「卑怯だろ」と得意そうに言って、また寝転んだ。

「何で、そんなこと私に教えるの」

「だってあんた、分かってねえんだもん。自分が愛されていたこと」宇仁はぼんやりと空を見上げたまま、ぼつりと言った。

「愛されていたって、何でそんなことが言えるの？ 馬鹿なこと言わないで下さいよ。愛があつてあんなこ

とするわけじゃないじゃないですか」

「いいや、愛はあった。だがお前の父親も母親も、大きな間違いを犯した。ガキにそんなとち狂ったもん見せるなんてどうかしてるし、まだ十三のガキに甘えて自分を守るなんて馬鹿げてるよ。そりゃ責めるさ。俺だってそうする。あんたは何も間違っちゃいない。でも愛は確かにあったんだ」

「どこにあったっていうんですか？ 私の中に今でも残っているものは永遠に続くんじゃないかってくらいの憎しみと、後悔だけなんですよ。愛を感じていたら、憎みなんてしない。……でも憎み続ける限り、家族はまとまっていられる。鈍感な私のせいで、父の弱さに気付かなかった私が壊した家族のかたちを保たせていられる。接着剤になっているのが憎しみだったとしても、それが消えない限り私たちは永遠に家族でいられる。それでいいんですよ、もう。だから余計なことを言わないで。嘘はもうたくさん」

気付くと、口にしてしまっていた。初めて会った男に何を言っているのだろう、と思いながら、だがそれは痞えが下りるように唇から滑り出てきてしまった。そしていざ目の前に言葉が落ちると、逸也に指摘されたときよりも素直な気持ちで自分の言葉を受け入れていた。

そうだ。初めはただの憎しみしかなかったものが、今では父を繋ぎとめる術になっている。私さえ忘れずにいたら、家族は永遠にあの日の最悪から出ないが、代わりに次に進むこともない。私は父と母から受けた裏切りよりもずっと、家族が壊れたことの方が苦しかったのだ。まるで大気圏の向こうにぽーんと飛ばされて生まれた孤独が、苦しくてならなかったのだ。

もし、普通に愛してもらえていたら、と何度となく考えた。そうだったなら、私はこんなに歪まず、自由に振る舞うことに何の躊躇いも覚えず、人を信じることも容易になっただろう。あの団地の狭い家だって、安心できる一つの居場所となったかもしれない。けれど私は、愛されたかったと叫びながら、この憎しみを抱えた異様な毎日を結局棄て去ることができない。棄てられたのは、たった一度きり、先生と居た一年程度のことだ。先生と離れたら、棄てたはずの憎しみは簡単に私の元へ戻り、再び巢食ってしまった。そしてまた憎むことで、かえって自分の安定を図っている。

けれど気を抜くとすぐに苦しくなるのは、本当はいつも、手離したい気持ちと手離したくない気持ちにからだを引っ張られているからだ。だから宇仁の言葉は私を捕え、鉤爪のようなそれは肉にめり込み引っ掛かる。

「馬鹿だな、あんたほんとに。憎しみが消えたら繋がりが切れると思ってたのか。そんなことはないんだよ」
「でもそのどこに愛があるっていうんですか」

「言ってもう、気付いているんだろ？ あんたの家族は、あんたの父親の起こしたひでえ一日がなくてももう駄目だった。それが分かっていたからあんたの父親は、わざと自分に対する憎しみをあんたに与えたんだ」

「だから！ それのどこに愛情があるのかって聞いてるんですよ！」

「まだ分らんのか？ あんたの父親も、憎ませることで家族でいようとしたんだよ。離れて、やがて薄れて、いつか何もなくなってしまうことを恐れた。そんなことになるんだったら、憎しみででもいいから繋ぎとめておきたかったんだ。だから弱いと言ったんだ。でもそうでもしなけりゃ離れられなかったんだろ、いや、そうしてでも一緒にいたかったのか。それも一つの愛情のかたちなんだらうと俺は思う。弱さが作った愛ってところか。まあ理解には苦しむが」

「そんなのは愛じゃない。だったらもっと頑張っただけ欲しかった！ 頑張っただけ、家族を壊さないでいて欲しかった！」

「頑張ったって駄目なものはある。頑張ったら何もかもが上手くいくわけじゃないだろう」

そんなことは分かっている。確かに私たち家族はいつからか駄目だった。気付いたら父も母も、どうしたって上手くいかなくなっていた。分かっているのに、私はそれを上手く飲みこむことができず、薬を嫌

がる子供のように首を振って、憎しみに身体を蝕まれるままにしていた。でも留めようとしても痛みは確実に遠ざかっていた。中心から引き裂かれるようだった痛みは宇仁の言葉が齧す痛みにかき消されていく。憎しみを溜めこんできたからだがかたちを失くして、崩れていく。私はそれに脅えた。

異常だと思った。いや、ずっと異常だったのだ。こんなことでは、誰かを愛せる人間には一生なれないに決まっている。だから先生のこと逸也のこと大事に出来なかった。そうじゃないのか？

考えていたら、宇仁が私の顔を覗き込んで、静かに言い聞かせるように言った。

「もう憎む必要もないだろう。家族ってもんは離れたくても離れらんねえ、どんなに距離が開いたって、あんたのからだにしっかり括りついているもんだ。あんたが憎まなくなると、あんたは父親のことを絶対に忘れてたりしない。そうだろ？」

「でも、憎むのをやめたら、お父さんは一人きりになってしまう」

「心配ねえよ。あんたの父親は悔いていたよ。しきりにあんたの様子を知りたがった。元気にしているか、どんな大人になったか、恋人はいるのか、母親との関係はどうか。それはどれも犯した罪に対する後悔に繋がっていた。あんたの父親も、罪を犯さなくても自分の気持ち次第で家族は壊れずにいられるってことに気付いたんだろう。

なあ、あんたらは血が繋がってるんだ。あんたが否定したって、あんたのからだを延々流れて、しっかり家族を繋ぎとめてる。血の、鎖で。だからもう生きたいように生きればいいんだよ」

顔を上げて宇仁を正面から見た。彼は片方の唇だけ歪ませた独特の笑い方をして、私の鼻先を指で弾いた。遅れて、涙腺に詰めていた栓をどこかに失くしてしまったみたいな涙が溢れだしてきた。

血の、鎖。

ずっと、ずっと欲しかった感覚が、今やこのからだにあっさり満ちている。

そのとき不意に、私が関谷先生との夜に必死に探していたものは、これだったんじゃないかと思った。まるで閃光が走っていったように、暗い部分に光が当たって言葉が生まれた。

もっともっととしがみついて熱を吸って、暖かさの中に身を沈めて追ったものは、こうして私を繋ぎとめてくれる確かな重さだったのだ。

そう思ったら、胸が引き裂かれるような痛みで襲われた。乾いているのに濡れていたからだ、しんとしていく。私はもう、一人きりではなかった。同時にもうあんな風に貪りあって、沈んで、探し続ける必要もなくなってしまった。

そんな馬鹿な、と思う。だが私の動揺など置いて、苦しかった深い憎悪と愛情が、先生と先生との過去を連れてどんどん亡霊のようになっていく。そして同じように父も消えていく。憎しみから手を離すと、父はすぐに色を失い、虚空の中へと消え去ってしまった。血、血の鎖！ 私は狼狽しながら手首をもう片方の手で強く握り締めた。すぐに血管が浮き上がり、指先に熱い痺れがやってきて安堵が身体中に染み渡る。これと同じものが父の中にも流れている。どうして気付かなかったのか。父はいつでも私のそばにいて、私を繋ぎとめていたんじゃないか。

胸に沁み渡る暖かさは、あの丘に父が迎えに来たときに酷似していた。それでもあんな酷いものを見せられたことを、すっかり許せたわけではない。殺したいほど強く憎んだことも、まだしっかり覚えている。しかし憎しみを離しても父は私のそばにいるという事実、わたしは今悦んでいた。彼がいつまでも私の父だということに、ホッと胸を撫で下ろしている。

きっとこれが真理なのかもしれないとぼんやりと試してみる。私はまだほんの子供で、従順な犬みたいなものでしかないのだ。何も突っ張ることはない。からだ欲している声に従ってもいいのだ。そんな言葉を浮かべてみると、からだを支配していた痛みが和らいで、からだの中が柔らかくなった。

しかし、どこを探してもこの暖かい場所に先生は居ない。憎しみから離れて自由になると、彼は私の爪先の

すぐそばにある孤独の淵から、一人で落ちていってしまった気がした。その影を目の裏で追おうとしたとき、私は逸也の部屋で、幻覚の後に「あの罪は、まるで足枷だ」と思った後に触れかけた何かに、今になって行き当たったことに気付いた。

関谷先生も、父と全く同じことをしたのだ。

それは表面的だけのことじゃない。先生もまた、私を憎しみに縛ったんじゃないか。しかし、一体何故？
何のために？

「俺にはさあ、繋がってる血がないだろ。だから、あんたと千穂子ちゃんに対して、絶対に無責任にはならない。それでなくても、女の中に入って行くのは勇気がいるんだ」

混乱している私の耳に、宇仁がぶれの無い声が割り込んできた。どうして、と聞いた私に、彼は遠雷の聞こえる空に吐いた。

「母親と子供ってのは、それだけ特別なんだよ。男親にだって入り込めない、何かがある」

「何かって、何ですか」

「何かは、何かだよ。でも、うーん、そうだな。父親と子供って、何か希薄なんだよ。母親はやっぱさ、自分で腹痛めて産んでるせいか強いんだ、繋がりが。でも、父親は違う。いくら血が繋がってても、母親のようにはなれない。広海といるとそう感じるんだ。あいつ自身は俺との繋がりが強く感じていてくれるが、でも俺のほうはどんなにでても、離れていく気がする。だから、俺はこの再婚にも相当な覚悟をしたんだよ」

「見かけによりませんね」

「うるせーよ」

「でも、ありがとう。話せてよかったです」

私が呟くと、宇仁は私の頭を乱暴に小突いて、

「もうデレんのかよ、張り合いねえなあ」

「あ、そういうところは一生好きになれないかもしれないです」

「ああそうかい。でも、まあ、さ。だから何が言いたいかって、俺を父親だと思ふ必要なんてないんだ。ただ、俺はあんたの父親になる覚悟はあるから。それだけは覚えておいて」

「私のために命も賭けてくれますか」

「賭けるよ」宇仁は即答した。「あんたが望むなら」

「嘘です嘘です、母を宜しくお願いします。あなたの言葉がなかったら、私はあなたを、いやあなたじゃなくても誰かをこんなに信用できなかったかもしれないです。だから感謝しています」

「うるせーうるせー。ほら、いつまでも泣いてんじゃないよ」

頭を下げた私にまた軽口を叩いた宇仁は、さっさと立ち上がると、一人で出入り口へ向かって歩き出してしまった。

雨が降ってきていた。いつの間にか先程の少年たちもいなくなっていて、屋上はがらんとしている。そこに、宇仁のビーチサンダルが擦れる音が響いた。その音を聞いていたら、彼は今日、初めからこのことだけを私に伝えようとして、私に会いにきたのかもしれないと思った。

私は急いで、今まさにエレベーターに乗り込もうとしていた宇仁を目指した。彼は私が走ってくることに気付き、閉まりかけた扉を咄嗟に手で押さえ、

「あんたも一緒に帰るの？」

「帰るよ！」

「じゃあ、早くしろよ。置いてくぞ。千穂子ちゃんが待ってる」

そう言って、彼は長い右腕をこちらに向かって差し出した。

私は思い切り地面を蹴って、その手をしっかりと握った。大きい、指の長いその手は、関谷先生を思い出させる。

エレベーターが地下駐車場に着く頃には、関谷先生に会いたくて、堪らなくなった。同時に私の中で、先生が植え付けた罪がまた揺れた。

名越さんと会って以来、逸也と連絡を取らぬまま後期授業が始まってしまった。

あの日からずっと彼に伝えるべき言葉を探している。逸也はあの夜私に「よく考えて、戻って来い」と言ってくれたけれど、もう私にその意思が生まれる余地はなくなってしまった。屋上遊園地で図らずも手にした謎の答えが、もうずっと私を支配しているからだった。

もし私が自由を求めて去れば、逸也は恐らく名越さんを救いに、再びそのからだを張るのだろう。けれど、あの女の人はあまりにも弱かった。あの弱さは人を引き摺り込む。そんな渦中に再び飛び込ませることは正しいことなのだろうか。いや、それ以前に私はもう、何も言わずに見送ることしか許されないのじゃないだろうか。言葉は残酷で、切り捨てたり裏切ったりするときには大きく響き、問いはいつも深くまで沈んで、私を混沌の渦に引き込んでいく。

だが、そのときはすぐにやってきた。

答えの出ないまま数日して、昼で終わった始業式から真っ直ぐ帰ってくると、逸也が団地のコンクリートの階段に座って待っていた。いつもなら部屋に入って待っているのに、その日は日の当たらない、真っ黒な石の上で、彼は膝の上で手を組み、恐ろしいほど静かに待っていた。

「何で電源切ってたよ」

私の姿を認めると、待ってられないというように、速足で近づいてきた。その剣幕に、私は立ち尽くした。考えることはやめなかったけれど、彼からの電話が怖くて電源を切っていた。

「ずっと、考えてたの。それで」

「一人で何を考えんの？ 香芳さんが、お前のところに行ったんだろ。お前は何でそんなことも、俺に言わないんだよ！」

逸也は私の曖昧な返答など一切許さず、悩む隙も与えずに声を荒げた。彼がこうして怒りを露わにするのは、本当に苛立っているときだと知っているから、ますます言葉は消えていった。

「どういう風に言っているのか、分からなくて」

「何だよ、それは」

俺がどんな思いで　　そこまで言って、彼はコンクリートの壁を拳で叩いて舌打ちした。

「今日、仕事は」

「休み。昨日まで塾の勉強合宿で、お前と会った以来、休みがなかった」

「そう、だったんだ」言おうか迷って、言った。「名越さんと、もうずっと、前から会っていたって聞いた」言ってすぐ、それが嫌な言い方だったと気づいた。それは、すぐさま偽りの非難に変化して、無様な防壁になった。私の中には、やはり変わらず嫉妬も非難もなかった。私はただ、逸也の悲しい怒りの前で、無防備なからだを曝け出す勇気がなかっただけだった。

打った拍子に付着したのか、逸也の拳から劣化した塗装片がパラパラと落ちた。それを追う彼の目が、突然酷く冷めた。まるで作り物のような色に変わって、やがてゆっくりと私の方へ動いた。瞬時に、ここへ戻ってきた頃の逸也と重なった。

一年前、彼は初め、少し怖かった。感情が表に出ても、本当に考えていることまでは決して外に出てくることがない。彼の中心に、底なし沼に似た、どこまでも暗く深い穴が開いているように思った。底までの距離がめないから、迂闊に近づけない。勇気を出して飛びこんでも、些細なことをきっかけにして、沼が彼ごと飲み込みそうな危うさがいつもあった。

それが今の彼にも再び出現していた。

「ああ、会ってたよ。見殺しには出来ないから。でもどうせ、何とも思わなかっただろ？」

顔を上げると逸也の冷めた瞳の奥に、粘ついた熱が見えた。ますます能面のようになる表情とは対照的に、目の奥の熱だけはゆっくりと上昇し続けているようで、やがて溶けた鉄のようにどろっと揺れた。その変容に、打ちのめされた。

「ごめん」

「どうして謝んの。元々水穂が俺に気のないことは、分かってることだったじゃないか。だから謝ることなんかねえよ」

「だって、それでも嘘ついててくれたから。この世で嘘が、一番嫌いなのに」

「お前が大事だったからな」逸也が、抑揚のない声で言った。「もう、答え出てんだろ」

「……もし、私が離れたら、名越さんのところに戻るの？」

「姑息な女だな、お前」嘲笑うように言って、だがすぐそこに困惑の混ざった、不恰好な笑みを張りつけ、

「じゃあ俺にどうしろって言うの。香芳さんを見殺しにして、でもお前があの男のところに戻るのを見送って、お前が辛いときは支え続けられればいいのか。そうすればお前は満足するのか」

「そんなこと言ってないよ」

「じゃあ何なんだよ！ 俺にだって、限界はあるんだ！」

「分かってる。でも心配なの。あの人、傷が凄かった。腕の傷は全部、自分でやっているって言ってたし、それに、からだの傷は、前の彼にやられるんだって言ってた、殺されるって。だからイツちゃんが必要なんだって」

「香芳さんは、そう言った？」首を傾げた私に、逸也は暗い目をして繰り返した。「あの方はお前に、そう言ったんだな」

「傷のこと？」

聞くと、逸也は不気味な笑い声を漏らした。口から漏れる邪悪な息が、彼から生気を奪っていく。ぞっとして、それを止めさせようと声を荒げた。

「ねえ、本当は分かってるんでしょ？ あの人、利用してるんだよ、イツちゃんのこと。前の彼の愛情を取り戻したいから、傷を作って気を引いてるんだよ」

「知ってるよ」

「じゃあ、何で！ どうしてそんな人のこと」

逸也はそれには答えず、やけに落ち着いた顔をして、

「お前と会ったと言い出してから、香芳さんの様子がおかしい。傷がどんどん増えていく」

「どういうこと？」

「なあお前さ、香芳さんの前でも、そうやって責めたの？ 何も知らないくせにさ」

心臓が大きな音を立てた。まるで小さな爆発が起きたようだった。「何言ってるの」

「だからさ、責めたのかって聞いているんだよ！ お前のことだから、表面的なことだけで分かった気になって、説教でもしたんだろ」

「何、それ。何でそんな言い方するの」

「もう、待てないから」腰に手を当てて、私から目を逸らした。「待ってても、絶対に俺のほうには向かないって分かってるから」

そのとき私は、逸也が離れていく恐怖きつと初めて理解した。いつも私を守っていた決して波立つことのない、凧の海のように平穏な場所の喪失の痛みと無力感が、強く私に迫った。

「嫌だ、あの人のところへ行くのを見るのは、嫌だ。イツちゃんが、そんな風に扱われていることが、イツちゃんの正義が、そんなことに使われることが嫌だよ」

「そんなこと、お前が言う資格ないだろう」

「あるよ！ あるもん」

「ないよ」逸也は正論を放った。「あれからずっと考えてた。あの日、吉行さんにそっくりな男を前にして、水穂が間違いを犯してることを知って、どうすればいいか、ずっと考えてたよ。でも、結局いつも同じところにぶち当たる」

「同じところ？」

「お前にとって、俺は、男じゃない」慌てて首を振る私を、遮って言った。「体のいい、家族みたいなもんなんだよ。だから、きっと俺にはどうすることも出来ない。友達じゃ、そういうのは救えないんだ」

「そんなことは」

途中で何か弾けたような音が鳴って、脳が揺れた。

それからすぐに左頬が熱くなって、逸也に頬を張られたのだと気付いた。踏ん張っていた膝小僧の力が抜けそうになった。どこかで窓の開閉音が聞こえたけれど、からだは動かなかった。

「何やってんだよ！」

突然声が割って入ってきて、視界に何か大きな塊が割り込んだ。驚いて見上げると、一志が逸也の肩を両手で突き放すのが見えた。

「通りのほうまで丸聞こえだつーの」

一志は走ってきたのか少し息が上がっていて、浅黒いからだから熱い熱を感じた。恐らく部活帰りなのだろう、白いTシャツの下はジャージを履いていて、肩にはブランドロゴの入った、紺色の大きなスポーツバックを提げていた。

「お前ら、ここどこだと思ってんの。迷惑考えろよ！」

逸也は一志にみ上げられたカットソーの胸元を見て、ふっと息を漏らした。そして、私のほうへ真っ直ぐ向き直り、

「分かってる。お前にとって俺が都合のいい兄貴なのは、俺の自業自得だよ。俺、お前のことがむかしから好きだったよ。女として、ちゃんと好きだった。でも、約束が、あったんだ。ちょうど一年くらい前、吉行さんが俺を訪ねてきて、そのとき、約束をしたんだ。俺にはもう出来ないから、お前が水穂の帰る場所になってやってくれよって。俺は……お前も、吉行さんも大事なんだよ。だからどっちの気持ちも優先したかった」

最後の方はかすれて、逸也の周囲の空気がたわんでぶれた。その横で、一志が眉間に深い皺を寄せて、逸也から顔ごと逸らした。逸也がそうしてずっと父の呪いにかかり、気持ちを殺して、何とか家族でいようとしてくれていたことに初めて触れて、その重さに恐ろしくなった。

「だから、戻ってきたの？ 一年前、だからここに」

「違う」

その「違う」が嘘か真実かは分からなかった。けれど逸也がこれまで私のそばで見せた、父のような兄のような、ただの男のような顔を思い出して、叫びだしそうになった。

逸也は目を赤くして、裏切られた人のような顔をしていた。その目から一筋の涙が落ちて、どこかに消えた。それを見たら、からだの中が波打った。

そのとき突然甲高いベルの音が鳴って、逸也がジーンズのポケットから携帯を取り出した。それを見てから、彼は静かに一志の手を解いた。兄貴、と漏らした一志の肩に軽く手を乗せて、私に向かって疲れた顔で微笑んだ。

そうしてすぐに、彼はそばに停めてあった車に乗りこんだ。一度だけ、フロントガラス越しに私を見た逸也と目が合った。その顔がまるで痛みを耐えるときのように歪み、少年のように無防備だったので、また

激しいざわめきが起こった。

二人でその場に取り残された私たちは、逸也の車の音が聞こえなくなってもずっと佇んでいた。しかし先に一志が肩に掛けたままでいた大きなスポーツバックをどすんと落としたので、ようやく膠着は解けた。一志はそばの花壇を囲む石の縁に脱力して腰を下ろし、何なんだよもう、と一言呟いた。その彼の瑞々しい肌と場違いな気だるさが、とても眩しかった。

「久しぶりだね、カッチャン。またでかくなった」

そう言うと彼は短髪の手をがしがしと乱暴に撫でて、お前は変わんねえと漏らした。そのからだはもう大人と違いがなくて、白いTシャツを盛り上げる大きな肩甲骨や、袖から伸びる焼けた逞しい腕は知らない人のようだった。けれど、いつも拗ねたような調子の声だけは私のよく知る彼のままで、それが嬉しくて、思わず私もその短髪に手を伸ばして犬の首を撫で回すようにかき混ぜた。一志は「クソッ」とか「やめろよ」とか暴れて抵抗していたけれど、やがて私の手首をがっちりとんで、自分の隣に引っ張って座らせた。「そういえば、カッチャンは何でここにいるの。あっ、全国大会はどうだった？」

「おい、あっ、じゃねえよ。たまには応援しに来いっつーの。でもまあ、それはぼちぼち。お蔭様でそれで大学はほぼ決まり。父ちゃんも金だけは惜しまず出してくれるからよ」ため息をつきながら面倒臭そうに言うと、彼は自宅のある棟を見上げながら、「今日は荷物置きに、それから冬服とか取りに来たんだよ。それより何があったんだよ、一体」

私はこの夏にあったことを彼に話した。彼はそれを口を挟まずに静かに頷いて聞いていたけれど、名越さんの話になった辺りで分かりやすく苛立ち始めた。

「あの女は悪魔だよ」一志の口からそんな言葉が出たことに驚いて黙っていると、彼は悔しさを滲ませて続けた。「兄貴は、あの女のせいでおかしくなったんだ」

「でも、名越さんのからだ、本当に痣だらけなんだよ。殺されるとまで言ってた。あんな人のそばにいたら、私だって正常でいられる自信ない」

「違えんだよ、水穂」

「何が？」

「あの女、全部自分でやってんだ、あれ」

すぐに理解できずに、頭の中で繰り返して、深呼吸して言った。「腕の傷のことじゃなくて？」

「違う。全部だ。腕も、からだも、あの傷、あの痣、全部自分で作ったんだよ。当然兄貴もそれ知ってるぜ」

そう言った一志のこめかみを汗が流れていった。まだ夏本番みたいな太陽が空に浮かんでいて、蝉が忙しなく鳴いている。その中で、私だけが時が止まったみたいに、一志から目が離せなくなっている。

「そうやって傷つけないと、畑津って男の愛情を感じられないんだと。だからどんどんエスカレートしてる」

「そんなことを、何で一志が知ってるの」

「だって俺、見たんだもん。兄貴が前に住んでた部屋に行ったとき、あの女が自分の腹をめちゃくちゃに殴ってた、拳で。慌てて止めたら逆上されてよ。あんたに何が分かるんだって、腕切りやがった。困ってたら兄貴が帰ってきて、必死で宥めたんだけど治まらなくて。そしたら兄貴、畑津って男を呼んだんだ。そんなとき、兄貴は全部知ってて、それでもその位置に居続けてるんだって分かった。畑津さん、いい人だったよ。自傷癖っていうの？ それなかなか治なくて、兄貴にも迷惑かけてすみませんって、俺にまで頭下げてった」

「ちょっと待って。そんなのおかしいじゃない。全部分かってて、じゃあどうしてあの人を救おうとするの！」

「分かんねえよ、俺だって！ でも、きっと好きなんだろ。水穂のことも好きなんだろうけど、あの香芳って女のことも好きなんだよ」

そのとき、ふと名越さんの不安を隠そうとするかのような声を思い出した。

守るものが、唯一、彼を救うのよ。

やはり彼女の言った通りなのだろうか。私が“血”によって繋ぎ止められていたことに救われたように、彼はそうして自分を必要とするものに、救われているのだろうか。それが相手にとってはただの手段でしかない、知っているのに？

「あの部屋を引き払って、大学も辞めてこっちに戻ってきたって聞いたときは、ちょっと安心してた。ここの水穂もいるし、大丈夫だろうって。なのに、お前何してんだよ。兄貴、ちゃんと繋いどけよ」

そう言って伏せた切れ長の、細い奥二重の目は逸也にそっくりだった。一志が呼吸する度、それが腕に響いて伝って、逃げ出したくなる。皮膚の内側で肉を捻転させているものは、後悔だ。

逸也がここへ戻ってきたのは、本当に逃げ場を失くしてしまったからなんだろうか。身勝手な父との約束を無理をして果たそうとしていたのではなく、その存在が彼を一時でも救ったのだったらいいが……。いや、そんな風に考えるのは私こそ勝手だ。

本当に、私は一体何をしていたんだろう。呪縛で縛って、役割を押し付けて、そのくせ私は何も与えられなかった。けれど、彼はそれでも私との暗黙の信義を破らないでいてくれた。

そんな彼を置いて、一人だけこの荒廃した道を抜けることは出来ない。

驕った考えだと分かっていたけれどそう強く思う。けれど逸也はさっき、きっと私のからだと自分のからだに繋いでいた糸を自ら断ち切った。それでも私は彼を、父のように失いたくはないと思う。容易く手離しては駄目だと思った。

だがそう決意したとき、けれど心の奥のほうでちりちりと弱い炎で燃え続けているものがあることに気づかされる。普段は様々な波に翻弄されていて気づかないけれど、一日に一度はからだの奥で爆ぜる音が鳴る。それを聞かたび、私は端からそう設計されたみたいに、あの大きな細長い指に捕まる。植えつけられた罪が、新しい感情に飛び火して一緒に燃やしてしまおうとするかのように、勢力を増していく。まるで私を逃さないように燃え続けているのだ。

途方に暮れたとき、一志が私の汗ばんだ手を取り強く握った。

「水穂、俺も力になるから。だから兄貴と一緒に居てやってくれよ」

私は何も言えず、だが手首を返し、一志の手を握り返した。

九月も半ばを過ぎた頃、まだ残暑の厳しい宵闇に、突然携帯電話が鳴った。表示を見ると非通知で、震えて鳴り続けるそれを前にしばらく躊躇したが、結局出た。

「十倉純代と言います」電話の主はそう言ってすぐに続けた。「関谷の妻だった者です。突然ごめんなさい。電話なんかして」

「あ、いえ」

言葉が続かず黙ると、沈黙で眩暈がした。

「そりゃあ、びっくりするわよね」

そう笑う彼女の声は、以前と同じに低く囁れて、言葉が発されるたびに息が漏れているように聞こえる。その響きはとても甘く、色気があった。

「どうしてこの番号を」

「前にね、琉二の携帯をこっそり盗み見て、メモしておいたの。これ琉二には内緒よ」

驚きと警戒心で、腹に力が入った。目を瞑ると、まだ気配が残っている。闇を好み擦り寄って来る生き物のように、しつこく私を待っている。あの夜、初めて私という獲物を捉えた彼女の目が、光っている。胃痛と吐き気が私を襲った。

「ここ、監視の目が厳しいからあまり長くは話せないのだけど、少し私の話を聞いてくれる？」

「はい、もちろん。あの、ここ、って、まだ施設に？」

「うん。私は元気なだけだけどね。医者からしてみれば、私はそれなりに重篤な肺炎患者さながららしいわ」

「そう、なんです。夏にお会いしたときは、元気そうだったからもう治療は済んだのかと……」

「ああ、あの日は具合が良かったのよね。だからまた施設抜け出して、琉二に会いに行ったの。父が付きっ切りだから、結構大変なのよ、抜け出すのも。でも抜け出さないと、今の私は自分からは琉二に会えないの。それなのに、どうして抜け出した日には必ずあなたに会ってしまうのかしらね」

「ごめんなさい」

謝ることはないわよ、と純代さんは声の所々に穴が開いているようなかすれた息のような声のようなものを漏らした。

「あの、関谷先生は元気になっていますか」

つい聞くと、純代さんはスッと気配をなくして黙ってしまった。

「それは、きっとあなたの方が詳しいわよ。私、あの夏以来会ってないもの。外出も面会も禁止になってしまったから、お手上げなの」

「えっ」

「聞いていないの？ 離婚したらしいわよ、私」

「らしいわよって」

「知らない間に、父が離婚届出してたの。あなたに会ったあの日が、私と彼が夫婦だった最後の日よ。だから私が聞きたいわ。琉二は元気になっている？」

私が黙ると、彼女は「なあに、気を遣っているの」とからかうように笑った。

彼は始業式の日、壇上にも立たなかった。ただ体育館で、マイクを使って簡単に休職が明けた挨拶をしただけで、言葉を交わす機会も、そばを通り過ぎる機会さえも得られなかった。けれど時折廊下の先に行く彼を見かけるたび、また少し痩せて、生が薄れたようだと思った。彼は屋上の前で会って以来、明らかに私を避けていた。

電話の向こうの純代さんには、息を吸うことも難しくなるような圧迫感はなかった。私の中に染み込んだ彼女の気配はまるでブラックホールのように近づくものを吸い込んでしまうような引力があって、その洞穴のような目は命さえ吸い込みそうだったけれど、今こうして通話口から流れてくる彼女はとても静謐で、安穩としている。

「突然電話したのはね、伝えたいことがあったからなの。私、あなたのこと、本当に全然恨んでないのよ。信じてくれる？」

「あ……それは、関谷先生から聞きました。あの、それで私、ずっとあなたに謝りたくて。ごめんなさい、私」

「いいの、やめて。謝って欲しいなんて思っていないし、あなたが謝る必要なんてこれっぽっちもないのよ。でも、良かった。私の言うことを信じてくれるのね。でも本当にその通りなのよ。私、あなたに恨みなんてないの。あの瞬間はもちろん頭が真っ白になって、どうにかなってしまうんじゃないかって思ったけれど、今はもうそんなことはないわ。憎んで、もっと狂ったら、琉二はそれだけ私のそばにいてくれたかもしれない。でも分かったたのよ。琉二は私に、もう出会った頃のように夢中にはならないって」

「どうしてですか。先生はいつだって」

「私はいつまでも死んだものに囚われているし、彼ももう手に入らないものに囚われているから」純代さんは一呼吸置いて話し始めた。「私たちがそういうものを追うようになったのは、私が事故に遭ってからだった。琉二に頼まれた買い物をした帰りの夜道で、バイクに轢かれて、左耳の聴覚を完全に失ったの。結婚したばかりの頃で、翻訳家になる夢があったのだけど、諦めざるを得なくなった。琉二は随分自分を責めてね。あの人は本当に変わってしまった。でもそれを境にして、私も生きていく自信が突然消えてしまっ

たの」

「でも、子供を欲しがっていたって」

耳に当てた携帯電話の向こうで、一瞬、火が大きく揺らめいたような空気の振動を感じた。それがあまりにも不吉なものに思えて、電話を持つ右手がじんと痺れた。今すぐにでも通話を切ってしまいたかった。けれど、純代さんのため息がそれを阻んだ。

「そう、だからそれに縋ったの。子供を得ることで、私は再生しようとした。私がいないと生きていけない、琉二の分身が欲しかった」

嫌だ。私はいつまでも耳から離せない電話を握り締めたまま、そう思った。関谷先生のからだの奥で、全ての進入を遮っていたものが、掘り出されていく。どんなに強く触れて、肌から器官から分泌されるものをなすりつけても、私が彼から血の鎖を得られなかったように、彼も一番欲しかったものを得られずにいた。それを、こんな場所で、この人の口から聞きたくなどない。けれど声が、出せない。

「琉二とは大学時代に知り合ったから、随分長い時を一緒に過ごしたわ。お互い片親で育てられて、人より半分だけ、受けるべきだった愛情が足りないの。だから私たちはお互いを半身のように感じてた。だから、私が子供が欲しいとごねたことで、彼は目の当たりにしたんだと思う。私には子供が手に入るんだってことを。私は子を持つことの出来る女で、自分はただの男でしかないんだってことを。

あなたも女だから、分かるかな。父親というものは、母親とは決定的に違うじゃない。私はね、父親との間にはいつも透明な膜のようなものを感じていて、どんなに可愛がられて守られても、父はいつも膜の外側にいて、魂まで預けてしまうことは出来なかった。それなのに、殺したいほど憎んだ母を、私はいつもその膜の中に感じてた。微かでも覚えてる影を追って、忘れた手の暖かさを必死で想像して……。しかもそれはいつだって馬鹿みたいに優しいのよ、彼女は私を捨てて消えた最低な母親だっていうのに。

琉二の母親はね、若くして癌にかかって苦しみ抜いて、死んだのよ。彼はそのときまだ小学五年生だった。モルヒネの副作用や病状の悪化から意識混濁が激しくて、優しくった母親が自分を忘れて、壊れた人形みたいになって、消えた。それから彼はいつだって膜の内側で、いなくなってしまった母親を探してる。今もよ」

心臓が嫌な音を立てていた。確か宇仁もそんなようなことを言っていた。

彼女の言うとおり、母との間には甘えた関係がある。どんなに強く当たっても切り捨てられることもなければ、自分もまた本当には切り捨てられない。それは母との間にあるもので、だからこそ父はいつもどこか遠かった。だから私は父を繋ぎとめるために憎み続けたのだ。それでも今は、私は血の鎖を手に入れた。彼らもまた私にとっての血の鎖を探しているのだろう。純代さんの事故前までは、それがなくてもきっと上手くいっていたのだ。突然絶対的なものを失い、二人して虚空に投げ出された。それを思うと、私の前では決して曝け出すことのなかった先生の本当の孤独と欲望に締め付けられた。

「ねえ、水穂さん。私はあなたが羨ましいわ」

「え？」

「だって、女を憎む彼が、唯一あなただけは女として見てた。私にはそんな風に思えるのよ。初めはそうじゃないって、あなたも私と同じ、琉二の偏執的な愛による被害者みたいなもんだって思ってた。あなたも私も恐らく彼の永遠の孤独を少しでも埋めるための相手でしかないんだって。でもね、だんだんそうじゃないんじゃないかって思えてきたの。もしかしたら琉二は、あなたのことだけはきちんと愛そうとしていたんじゃないかって」

不意に、ずっと頭の奥に引っかかって私を圧迫していた塞がりが消えた。あの夏の夜、純代さんがベッドの前で叫びかけた一言が、頭の中いっぱい弾けたのだった。

「一つ聞いていいですか」純代さんの返事を待って続けた。「あなたはあの夜、何を言い掛けたんですか？」

先生に何か言おうとして遮られてしまったでしょう？」

純代さんは思案していたのか、暫く黙っていたが、やがて何か思い当たったように深く息を吐くと、「あなたは女が、皆、憎いからよ」と呟くように言った。私が聞き返すと、彼女は力なく笑って、「女に愛されたいくせに、子供の産める女が皆憎いあなたは、どんなに頑張ったって永遠に一人きりなのよ、と言ってやりたかったの。琉二という人を知りながら先に“子供が欲しい”と裏切ったのは私なのに、まさか彼が私を裏切るなんて露ほども思っていなかったから自分でもどうすることもできないくらいパニックに陥っていた。でもあの状況ではまだ間に合うと思ったし、結局は琉二が私以外の女とどうこうできるわけないと高を括った」

「どうして、先生が私のことを愛したなんて、そんなことを思ったんですか？ そんなことあるわけがないのに」

「縛ることでしか人を愛せず、普通の恋愛や家庭を欲さず、その狂った束縛を持ちこたえて生きてくれる女だけが人生に一番必要だったあの男が、あなたのことは本当に後悔していたから。

琉二の作ったあの夜は、私への復讐としても自分の孤独を守るためとしても、どちらにせよ完璧だったと思った。あなたみたいな若い女の子を夢中にさせて、何にも考えさせないように縛って、それを私に見せつけて……どう見ても完璧じゃない？ でも彼は満足するどころか、時間が経つにつれて私以上に衰弱していった。私はそれをそばで見ている、あなたに植え付けた罪の重さに、自分で耐えられなくなったのかもしれないと思ったの。自分を憎んでもなお想っていてくれるあなたに救われるはずが、実際はその逆だった。そう思ったから、私は琉二があなたを本当に愛したのだと思ったのよ。本当に愛した人に酷いことをしたら、誰だって傷つくでしょう」

「そんな……」

「彼にとってはね、水穂さん。私は初めから女ではなく、無条件に彼だけを愛する母親だったのよ。だから、私が子供を持ちたがることを琉二は恐れたの。彼にとっての半身で無償の愛を与える母親だった私が子供を持つ、ということの意味を、彼は誰よりも知っている。それが二人の血を分け合ったものだという事は、彼を救わない。私が子供を持ったとき、腹を痛めることもない自分が永遠に独りになることを、父子家庭の経験から知っていた。そういうものを、恐れたのよ。だから彼が私のところへ戻ってくるはずはないの。心もからだも。一度本心を見せてしまったら、私たちの間でそれはなかったことには決してならないのよ」

「でも先生は結局、純代さんの元に、戻ったじゃないですか」

「情が、移っていたのでしょよね、きっと。あなたという繋がりに繋ぎ止められて一時心の余裕が出来た彼は、罪滅ぼしに私の願いを叶えてやろうと戻ってきたのかもしれない。そんなことは分からないわ。でもね、そもそも出来なかったのよ、子供なんか。私は卵巣に卵がなかったの。笑っちゃうでしょ」

そう言って、純代さんはひとしきり一人で笑って、小さくため息をつく、「もう限界ね」とぼつりと呟いた。

「ねえ、琉二には内緒にしてね。こうやってあなたに電話したこと」

「どうしてですか」

「だってようやく終わったのだもの」

「本当に、終わっちゃったんですか」

「そうよ。だからこれからも琉二のこと、一生、許さないでいてあげてね。強く強く彼を憎んで、そうやってあの人に縛られて、いつでも一番に考えていてあげて。頼んだわよ」

「どうして、そんなこと言うんですか」

純代さんは私の狼狽を含んだ問い詰めには答えず、

「一度、あなたとちゃんと話したかった。琉二が愛した人の声をちゃんと聞いて、関谷琉二という人のことを教えてあげたかったんだ」

それから純代さんは私にメモを用意させて、住所を書き留めさせた。何の住所だと問う私に、彼女はこともなげに関谷先生の新しい住所だと言った。

「そんなの、教えないでください」

「あなたのためじゃない。私は琉二のために、しているだけよ。それから、これは信じてもらえないかもしれないけれど、まだ若いあなたをあんな夜に巻き込んでしまったことを、私も悔いているのよ、本当に」

そう言って、彼女は混乱している私をおいて電話を切ってしまった。行き場をなくした言葉たちが、突然の静寂になす術もなく飲み込まれ、後に残ったのは不通音が鼓動と連動する音だけだった。純代さんから齎された膨大な情報量に眩暈がして、私はまるで溺没しかかった人のように数回吐いた。

ずっと知りたかったことなのに、こうしてあの夜の真相を知ったことが何を連れて来るのかも分からず、何も考えられず、ただひたすら与えられた情報に揺られ、酔い、無力さに泣く日々が続いた。

何をどうすれば良い方向へと舵が取れるのか想像も出来ず、茫洋とした海にエンジンを失った船が一艘ぼつんと浮いているような夜は、私を何も出来ないただの子供だと思い知らせるだけだった。それは父が作ったあの裏切り以降に私が感じてきた虚しさに酷似していた。

そして私は改めて思い知らされる。先生と父はやはり似ている。先生もまた父と同じに、永遠に繋ぎとめられて、孤独から逃れたかったから私にあんな最悪を齎した。

彼らは二人とも何かに命を繋ぎとめておかねば生きていけない、弱くてずるい人間なのだ。愛しいくらいに。

三日後、授業を終えた後、帰ろうとしていると杏里が慌てて私の机までやってきて、小さな紙片を手の中に潜り込ませてきた。そして彼女は周囲を見回して、私の耳に口を寄せ、

「さっき、廊下で関谷から預かったの」反射的に心臓を波立たせた私よりも動揺を露わにして、彼女は声を震わせた。「ねえ、もしかしてもう、付き合ってるの？」

「違う違う」狼狽して彼女を座らせて、講習で浮かれた生徒たちのざわめきの中に溶け込ませる、小さな声で否定した。「そんなわけないじゃん」

「じゃあ、何なのよう！ 超びっくりしたんだけど！」

「大したことじゃないって。そう、ギター、ギターをこっそり教えて欲しいって頼んでたから、たぶんそのこと」

ギターア？ と訝しがる杏里を下手な嘘を繰り返して誤魔化しながら、震える手で手のひらの小さな紙をいやらしく隠しながら開けた。そこに「視聴覚準備室に」の七文字が走っているのが分かった。一瞬のことだったのに、右肩上がりのその字が声で再生される。急いで折り畳んで、スカートのポケットの奥深くに突っ込んだ。

「ちょっと、何て書いてあったんだよー」

小突いてくる杏里に曖昧に笑って見せながら、私は迷った。純代さんの「終わった」という一言が、突風となって私を揺らしている。関谷先生はどうしているのだろう。あの電話からずっと気になっていた。けれど顔を見ることは出来なかった。罪の理由を頑なに曝け出さなかった彼の前に、飛び出す勇気が持てなかった。彼は私がああ罪の意味を知ったとは露とも思わないだろう。それを思うと、とてつもない裏切りを犯した気になって、足が竦む。けれど結局そうした理性は、再生された声に弾かれてしまった。

「私ちょっと行ってくる」

手を振る杏里に笑みで返して、教室を飛び出した。

視聴覚準備室まで一心不乱に走って、扉の前で簡単に身だしなみを整えてから扉を開け、素早くからだを潜り込ませた。すぐに眩むほどの眩しい夕日が目に入って、目を瞑った。少ししてゆるゆると開けた瞼に、オレンジ色に染まった部屋が映しだされた。いつものように、僅かに開け放したカーテンから外を覗いていた関谷先生が、ひどく落ち着き払った様子で私を見た。息を整える余裕もなく、私は彼の傾いた斜め顔に吸い込まれた。

「走ってきたの」

私が息を弾ませて頷くと、

「そんなに急がなくても待っているのに」言って、ホッとしたように笑った。

久しぶりに入った視聴覚準備室は、少し埃のにおいがした。細く開いた窓から、外で騒いでいる生徒の声や、別れを告げあう甲高い声が時折上がった。その中で、みどころをなくした彼を、ただ黙って盗み見た。その目も私を、初めて会った頃よりもずっとしつこく、舐めるように見ている。堀の深いところに諦観と、陰鬱な影が差している。彼は普通の人より何倍ものスピードで歳を取っているみたいに見えた。今では私だけに繋がれて、何とか留まっている人。そこには静かに朽ちていくような退廃がある。そこに感じたことのない充足を見つけてうるたえた。

「杏里に伝言するなんて、びっくりしたよ」

「ああ、直接君に言うよりいいと思って」

「それにしたって……電話してくれれば良かったのに」

関谷先生は再び私に横顔を向けて、困ったように笑った。

「渡したいものがあったんだ。大したことじゃないんだが。笠原、俺の前の家にこれを忘れていったでしょう」

彼が傍らにあった紙袋を私の方へ差し出したので、緊張しながら近寄り、受け取った。中を見ると、そこには紺色のハイソックスがきちんと折り畳まれて入っていた。あの夜のものとすぐに察知した。あの時私は確か、裸足のまま靴を履いて飛び出したのだ。羞恥心と絶望が湧いて、顔が熟れたトマトのように赤くなっていくのを感じた。

「こんなもの捨ててしまってよかったのに」

「そう言うかとは思ったんだけど、俺の一存では決められなくて。ましてや気軽に話せるようなことでもないし、で、こんなところまで呼び出してしまいました」

「あの、もしこれから私の物が出てきても、捨ててしまってください。たぶん、もう何もないと思うけれど」

上擦って言うと、関谷先生は笑った。その顔がすごく疲れているように見えて、つい、

「先生、ちゃんと食べてるの？ 元気なの？ ねえ私をずっと、避けていたでしょう」

言いながら、語尾がどんどん死んだ。懐かしい愛おしさが、容易くぶり返す。何を聞いているのだろう、私は。恐る恐る関谷先生を見ると、彼は少し悲しそうな目をしていた。

「元気だったよ。大丈夫、ちゃんと食べてる。君も、あの青年と仲良くやっていますか」

「はい」慎重に言った。

「そうか。良かった」

目を逸らすと、先生は煙草を取り出して、吸い始めた。

「まだ吸ってる」

「ああ……一度吸い始めてしまうと、どうもね。もう抜け出せそうにないなあ。そんな美味いってわけじゃないんだけど、途切れると無意識に探してしまう。暇だと特に」

「前はどうやってやめたの」

関谷先生は束の間、眉を顰めて、ふうと煙を吐いた。「吸うことも思い浮かばない時期が、あったんだ」

それは、純代さんが事故に遭ったときのことを言っているのだろうか。そうぼんやり考えて、そういえば電話、と思った。

言おうか。

迷ったけれど、とても言えない、と思い直した。純代さんからの電話のことを口に出しては、彼をいっそう落ちぶれさせるだけの様な気がしたのだ。

「じゃあ。あの、これ、ありがとうございました」

紙袋を少し上げて小さく会釈をし、踵を返した。もう充分だ。声が聞けたのだから、いいじゃないか。言い聞かせながらドアの取っ手に手を掛けたときだった。彼が優しい声で言った。

「大丈夫か」からだを強張らせて立ち止まった私にゆっくりと近づいてきて、関谷先生は続けた。「様子が何か変だ」

驚いて振り返ると、眼前に関谷先生の白いワイシャツがあったので、固まった。ほんのりと甘い煙草のにおいがして、まるで自分が吸ったように眩暈がする。そのとき突然手が伸びてきたので、驚いて思わず身を竦めて「いや」と短く叫んでしまった。私の鼻先で止まって、行き場を失くしたそれが一瞬揺れた。けれど再び近づいてきたので、目を強く瞑ると、それが頭に触れたのが分かった。ゆっくり目を開くと、目の前で糸くずを揺らしながら「ごみ」と言って、目に幾筋もの皺を寄せて関谷先生が笑っていた。

「大丈夫だから。心配しないで」

小さく呟いて、髪を手早く指で梳いた。彼は穏やかに頷いて、私のために扉を開けた。

「さようなら。気をつけて」

背後で扉が閉まった。もうここで会うことも、約束を交わすこともないのだろう。先生がこれからどう生きていくのか、彼の人生に関することはもう、何一つ分からないままになってしまった。閉塞感に胸が潰れそうになって、のた打ち回るようにそこから離れた。

教室に戻ると、窓辺に凭れ掛かって外を見ている杏里がいた。ゆっくりと近づいて隣に立つと、彼女の視線の先に、校庭でサッカーをして遊んでいる細田君達が見えた。そうだ、杏里は細田君が好きだったっけ。思っ

「細田君に気持ち伝えないの？」

彼女は思い切り狼狽して見せたけれど、しばらくして再び細田君のはしゃいでいる姿に視線を移すと、真剣な顔で、

「するよ。言うよ、好きだって」

まるで願い事を唱えるように彼女は言った。それが他の誰かに聞かれてしまったら叶わなくなってしまうと怯える少女のように、小声で、でも力強く言った。それがすごく遠い、光のように思えた。かけがえがなく、脆いもの。でもそれをきつと皆が、大事に抱えて生きている。卵を温めて孵化させようとするみたいに、試行錯誤して、不安になったら誰かと見せっこして励ましあったりして、大切に育てるんだ。そう思ったら、言葉が出なくなってしまう。細田君を追いかける杏里の横顔はとても綺麗だ。黙ったまま見つめていると、彼女は怒ったような顔で照れて、

「笠原は気付いてるのかなあ。関谷、前から笠原のことよく見てたんだよ。授業中とか廊下で、ほんの一瞬なんだけど」

「えー、何それ」

「笠原は意識して見れないのかもしれないけど、あたしは笠原が好きな奴だと思ってかえって見ちゃうんだよ。だから気付くの」杏里はいひひっと笑って続けた。「関谷さ、すごく大事そうに見るんだよ、笠原のこと。ほんと一瞬のことなのにさ、分かるのそれが。女の本能で」

「女の本能で？」

からかうように復唱すると、彼女は憤慨して私を肘で小突いた。

「あたしだって女の本能くらい働く！」

そうして二人で笑い合った。杏里は私に何も聞かなかった。彼女は私の通学鞆を押し付けるように持たせると、

「帰ろ」

「うん」

杏里と並んで廊下を歩いた。日が落ち始めて陰った廊下はどこか物淋しいけれど、何かが起こりそうな非日常的な気配もある。私達は欲しいものや進路の話をしながら、時折窓の外に目をやって、外の大きなイチョウの木に銀杏がぼつぼつしているのを見ては、それを踏んだときのおいを思い出して顔を顰めあって笑った。

三階の教室から二階まで降りたとき、下からパタパタと上履きの音が近づいてくるのが聞こえた。それがだんだん大きく、激しくなるので怪訝に思って立ち止まると、下から血相を変えて走ってくる細田君達と鉢合った。細田君の他には三人いて皆、軽音楽部のメンバーだった。

「一体どうしたの」

杏里が少し緊張した面持ちで言うと、細田君が「あ、布野か。それが大変なんだよ！」と上擦った声で言った。興奮しているのに、真っ青な顔色がすぐに不穏な空気を撒き散らした。

「何があったの？」

「いや、俺らもまだよく分かんねえんだけど」細田君の後ろにいた一番背の高い男の子　確かベース担当だった　が、落ち着かない様子で口元に手をやりながら、弱弱しく続けた。「さっき非常勤の先生達が騒いでて」

「だから何なんだって」

「や、何か、関谷の奥さんが亡くなったとか何とか」

「えっ」

驚いて聞き返すと、ドラム担当の男の子が「自殺って聞こえたよな」とぼそっと呟いた。事態が全く把握出来なかった。パニックを起こして「どういうこと、それ！」と声を荒げる杏里に、細田君が苛立ったように、

「だから分かんねえって言ってんだろ。大体、関谷って結婚してたのかよ。そんな話一度も聞いたことがねえっつーの」

思わず、あ、と声が漏れてしまった。前に、精神病を患っている純代さんのことは、校長先生の計らいで内密にしてあるという話を聞いたことを思い出したのだった。それを聞き逃さなかった杏里に知っていたのかと迫られて、慌てて否定した。

混乱が日の全く当たらない廊下に余計に満ちて、ショックや怒りや不安に押し潰されそうになりながら、そのまま皆で流れるように職員室に向かった。頭の中がぐらぐらして、一步近づく度に胃が熱くなって吐き気がこみ上げる。さっき会ったばかりの関谷先生の顔が頭の中で揺れては、その影に純代さんの長い真っ直ぐな髪が見え隠れした。

私は恐ろしかった。肩に提げた通学鞆の中の携帯電話から、死の気配が漂ってくるようだった。それが外にまで漏れ出て来ないように、腋に力を入れて鞆を押さえた。そんな私の手を、杏里が何も言わずに握り締めた。その手は子供のように熱く、汗ばんでしっとりとしていた。それを強く握り返して、私達は足を速めた。

職員室まで二メートルまで迫ったとき、中途半端に開けられた扉から、騒然とした空気が廊下にまで溢れているのに気づいて、私達はあっさり怖気づいた。ただ細田君だけはそれを掻き分けて、からだごとぶつかるようにして扉を開けた。途端にざわめきが止んで、今度は濃い緊張の波が彼にまともにぶつかった。それでも彼は物怖じしなかった。職員室内に向かって、「何があったんですか」と大人みたいな声を張り上げた。そのとき職員室の手前の給湯室に人の気配がして振り向くと、坂崎先生がゆらりと出てきた。そこに人がいることに全く気づかなかった私と杏里は驚いて、思わず声を上げた。廊下に立ち尽くしている私達を見た彼は眉を顰めて、心底面倒臭そうな顔をした。

「お前ら、こんなところで何やってんだ。もうとっくに下校のチャイム鳴ったろう」

「先生、関谷先生の奥さんが亡くなったって本当ですか」

「お前ら全員、そのことでここまでぞろぞろやって来たわけか」坂崎先生が冷笑を浮かべて言った。「最悪だな。お前らには何の関係もないんだから帰れ」

その言い分は尤もではあったけれど、野次馬のように扱われたことに憤って、私達の耳には入らなかった。今まで一番落ち着いていた体格のいいドラム担当の男の子が後ろで「あ？」と反発したのが聞こえた。

「帰れと言っているのが分からないのか」

「分かりませんよ。ちゃんと説明してくださいって頼んでるでしょ。生徒の質問には答えましょうよ」

細田君が恐ろしいくらい冷静に言うと、坂崎先生は小さく舌打ちし、

「関谷先生の個人的なことだ。お前らに話す必要はない」

「個人的なことだと隠すってことは、関谷先生の奥さんが亡くなったのは本当なんですね」

「しつこいぞ、細田。大体お前ら、どこから聞いてきたんだ」

「非常勤の原口先生と沖野先生が、下で興奮して喋ってるの聞いたんですよ」

坂崎先生はそれを聞いて、苛立ったように後頭部を掻き毟った。そして疲弊したため息をつく、突然神妙になって、

「まだ俺らも混乱してるんだ。関谷先生は病院に向かわれたけれど、あとはその後の連絡次第。だからお前ら、軽々しく口外するのはやめてくれ」

そう言うと、先生は足早に職員室に戻って扉を閉めてしまった。ベースの男の子が「口外すんなと言わなきゃなのは、俺らにじゃねえだろ」とぼやいた。それが去ると、今度は不気味な静けさが廊下を取り巻いた。いつの間にか杏里は私から離れて、細田君のそばに寄っていた。死、というものは私達にはあまりにも馴染みのないもので、皆、それをどう扱っていいのか分からず、途方に暮れているようだった。しかし、私は俯いて、ねずみ色の廊下を踏みしめて立つ自分の上履きを見た。私だけは、彼らとはあまりにも立っている場所が違う、と思う。

居ても立ってもいられず、私は誰にも声を掛けずに廊下を駆け出した。微かに杏里が私を呼ぶ声がした気がしたけれど、構わず階段を駆け下りた。

どうしよう。

心臓の音で、他のものは全て遠のいて聞こえない。からだを割りそうなほど大きなその音が、私を責め立てる。

どうしよう、どうしよう！

追いつかない感情が溢れたものが、目玉を濡らした。それがわらわらと縁に溜まって、溺れそうになる。この波に捕まりたくない。息をきらして下駄箱までやってきて、上履きからローファーへ履き替えようと屈んだとき、だが洪水が起こった。視界が歪んで、慌てて走り出したら昇降口のガラスに思い切り額を打ち付けた。痛みに呻いて、足が止まりかける。空はもう闇を帯び始めていて、家や建物の隙間から、空にしがみついて落ちまいとするかのように夕日がぐらぐら揺れていた。強張る足を引き摺り、時折拳で打って、駐輪場に逃れるように滑り込んだ。だが、思考の滑り寄るスピードは恐ろしく速かった。夕日が空から引き摺り下ろされる反動を利用して、迫ってきたようだった。

私だろうか。私が、殺したのだろうか。

震えが止まらなくなって、自転車を握り締める。

「たった三日前のことなのに」

駐輪場にぽつぽつ残った自転車の中に蹲ると、重たい涙がぼとぼと落ちていった。まだ、本当に純代さんが亡くなったかは分からない。あれは細田君達が持ってきた噂でしかないし、坂崎先生だってはっきりとは肯定しなかった。そう思ってはみるけれども、言っているそばから否定していた。

死のにおいというものは私からとても遠いところにあって、それがどんなかたちをしているのかも、どんな色をして、そして人にどんな影響を及ぼすのかも、そうしたことは何一つ知らないのに、純代さんが自殺をしたことは恐らく本当のことだという確信があった。そのことに、自分で打ちのめされた。

純代さんのかすれた声が、鼓膜を執拗に撫で上げてくる。どうしてあのとき、彼女の変調にもっと注意しなかったのだろう。私に電話をしようと思ったときには、彼女はすでに命を絶つことを決めていたのではないか。それとも私との会話の中で、決心してしまったのだろうか。どうしてもっと早く、関谷先生に純代さんから電話があったことを伝えなかったんだろう！

急き立てられるように携帯のボタンを押し、関谷先生の電話番号を表示させた。瞬間、ああ、と声でも息でもないものが漏れ、膝を地面につき四つん這いになり、獣のように震えて嗚咽してしまった。

電話など、出来るはずがない。今声を聞いたら、私はきっと先生を許してしまう。純代さんの告白で彼という人のことを知ったら、彼が私にしたことなど、本当はもうどうでもよくなってしまったのだ。でも、それ

じゃいけない。あのとき純代さんは言ったのだ。関谷先生を一生許すな、と。それでしか先生を生かせない。そうすることでしか、愛することを許されないのだ。私がかつてそうだったように、憎しみをもち続けて縛ってれば、彼の命を少しは護れるはずなのだ、きっと。それならば私にできることは決まっている。

自転車を引いて団地まで帰ってくると、白く物寂しい電灯の下に、いつかのように赤い車が停まっているのが見えて、私は分かりやすく怯えた。そのとき軽快な足音が近づいてきて、向かいの棟に目をやると、そこから逸也が下りてきたのが見えた。しぶとく鳴いていた蝉の声も、その瞬間ふっと消えた。

久しぶりに見た彼のからだは肉がまた少し削げたせいなのか、骨格の美しさが遠目からでもよく分かるからだになっていた。

すぐ横に、一志と座った花壇が遠くの棟のほうまでいくつも続いていた。一志と話し、ここに留まることを決めたのはついこの間のことだというのに、今の私にはそのことが夢の中の出来事のように感じられる。逸也は少し遅れて私に気付くと、目を見開いた。手には使い古された教科書やノートを持っているから、取りに戻っていたのかもしれない。そういう、生きるために必要なものを。

「イツちゃん」

呼ぶと、逸也は目を伏せてゆっくりと近づいてきた。

「久しぶりだな。何だか顔色が悪いぞ、水穂」

「先生の奥さんが、亡くなったかもしれないの」

言葉が自然と口を突いて出た。逸也は一瞬眉を顰め、口元を強張らせたけれど、すぐに態勢を整えて私を真っ直ぐ見返した。その熱い瞳に触れたとき、ここは、やはりどうしようもなく優しく、静かな場所だと私は思った。そして彼は、恋人なんかよりも、ずっと大事な人だった。

「行くのか」

僅かな沈黙の後、首肯した。

「うん。行くわ。私が行かないと、誰も彼を救えない」

「行かせないって言ったら？」突然逸也が強い口調でそう言った。「このままお前を浚って、行かせないようにするって言ったら？」

「そんなことしないよ、イツちゃんは」

笑って言うと、逸也の指が突然私の頬に触れた。嗅ぎ慣れた煙草の匂いのする熱い手に、女のにおいが染み付いているような気がした。

「この間、殴ったりして悪かったな」

「ううん、あれは私が悪かったんだよ。あの、名越さんは？ 大丈夫？」

「うん」

「うん、じゃ分からないよ」

突然、頬を撫でていた逸也の手が私の手首をんで引っ張った。「乗れ、水穂」

「い、嫌だ！」

思わず叫ぶと、だが逸也は私を拘束したまま持っていた参考書や教科書を、運転席のドアを開けたそばから後部座席に投げつけて、また私を強く引っ張った。そうして無理やり助手席に乗せると、私に覆い被さるようにしてシートベルトを締めた。慌てて取り外そうとした手を、彼は片手だけでがっちりと押さえこんで、

「頼む、乗ってて」

扉が閉められると車体が少し揺れた。フロントガラスの前を、逸也が癖毛を揺らして横切る。そのとき、ルームミラーにピンク色のお守りがぶら下がっているのが目に入って、それが名越さんの車であることに意識がいった。彼女のにおいと逸也のにおいが絡まりあい、浮きだった彼の男の部分が私の肌を擦ってき

たので、つい取り乱しそうになる。そのとき逸也が運転席に乗り込んできて、また車体が揺れた。そのときにはもう逃げる間もなく扉にロックがかかって、小さくていかにも脆そうな車は、大袈裟な排気音を散らして走り出してしまった。

「分かってるだろうけど、これは香芳さんの車。ごめんな、俺のじゃなくて」

「一緒に住んでるの？」

「いいや。香芳さんは畑津さんのところに今もいるよ。それで時々俺のところへ来る。今日も来てたんだ。でもあの人、さっきもおかしくなって、俺じゃ押さえられなくなって結局畑津さんと呼んだ。たぶん今も俺の部屋で香芳さんを落ち着かせているかもしれない。俺、余裕なくなってさ。気付いたらこれに乗って走ってた。だから頭冷やすついでに置き忘れてた教科書取りに戻った」

逸也がいかにも何でもない風に言うので、かえって何も言えなくなる。結局私の口から零れ出たのは、「大丈夫？」という、無力さの漂うあまりにも漠然とした言葉だけだった。しかし逸也は平然としたまま、ただ前だけを見据え、

「大丈夫だよ。あの人は何があっても自分からは絶対に死なないから。ただパニックになって、畑津さんの愛情に触れられればそれでいいんだ。それで俺の好きなあの人に戻る」

「そうじゃなくて、イツちゃんは大丈夫なの」

「俺？ 何で。大丈夫だよ」

「ねえ、どうしてイツちゃんはそんなにあの人に必死なの」

「そんなの水穂と一緒にだろ、きっと。いや、違うのかな」逸也は歯痒さに語気が荒くなる私を遮り、歌うように言って速度を上げた。「俺、水穂が好きだよ。それは変わらない。でも香芳さんを放っておけないんだ。あの人さ、バランスが取れているときは、よく笑うんだ。子供みたいにさ、俺に向かって恥ずかしげもなく大好きって、本気で言う。あなたがいてくれて本当に良かったって。ただそれだけのことで、結局手には入らないのに、でもそう言われることで俺は生きることが少し楽になる。その少しが、今の俺にとってはすごく大きなことなんだ」

「そのことで失うことの方が多くても？」

逸也はいつものように意地悪そうな笑みを見せた。そこには肯定の持つ前向きさがあった。

「まだ上手く説明できねえけどさ、何ていうか……そうだな。理由とか理屈を超えた、命が選んだものに従わざるを得ないって感じがあるんだ」

「命が選んだ？」

「分かんねえよな。俺もよく分からないもん」

「いや……何となく分かるよ」

当てもなく進む車に揺られながら、本当は痛いくらいに分かるその言葉の意味を追っていた。逸也の心にも、どうしようもないものがあるのだ。そんなことをしても傷つくだけだと、無意味だ、時間の無駄だと言われても、自分ではどうすることも出来ないほど激しく心が動いてしまうということが、この世にはある。分かっているのに止められない。命を賭けても守りたいと願ってしまう。取りとめもなく流れていく景色を見るふりをして、私はそれを人は愛と呼ぶのかもしれないと思った。

「だから分かってるんだ。水穂の言うことも一志の言うことも。誰に言われなくても俺が一番良く分かってる。こんなのは良くない、もっとこの人生を大事にしなきゃ駄目だって。でもどうも上手くいかないんだ。香芳さんのことがちゃんと終わらないと、俺はどうやら次には進めないみたいだ」

「うん」

「結局吉行さんとの約束、守れなかったな」

「ううん、守ってくれたよ。イツちゃんは、今でも私の大切な場所だよ。今の私を見れば、お父さんはきっ

とイツちゃんに感謝する。私ね、イツちゃん。近いうちに、お父さんに一度会いに行こうと思うんだ。ちゃんと話をしに。そのときイツちゃんの話も出来たらいいなと思ってる」

逸也は父を語る私の口調に驚いたのか、一瞬丸くした目を私の横顔にぶつけた。私は気付かないふりをして前を向いていたけれど、彼の驚きはしっかりと視界に入っていた。だからその驚きが、やがてまあるく優しくなっていくのにもすぐに気付いた。そしてふと、最後になって逸也が欲していたものを、たった一つだけけれど私は与えることが出来たのかもしれないと思った。恐怖と後悔で縮こまっていた胸の中心が、僅かにじんわりと暖くなる。

「で、どこなの」

国道を走っていた車を突然路肩に止め、逸也は真っ直ぐ前を向いたまま言った。訳が分からず私が首を傾げると、彼は「あの先生の家だよ」と続けた。

「え」

「連れてくから、俺が」

「い、いいよ。一人で行ける」

「何で？ 俺じゃ役不足？」

「そうじゃないよ。でも、悪いから」

「一度でいいから俺を頼れよ。なんて、ずるいか、今更」

「そうじゃないの。本当は、まだ行く準備なんて出来てないだけなの。それにどんなに私が行きたくても、今私が行ったらただ先生を追いつめるだけの様な気がするんだ」

「でもお前のからだは望んでるんだろう？ 水穂はそれをさっき、ちゃんと俺に言ったよ。行くって。だから俺はこうして車を走らせてるんだ」

私は確かに言った。一度は諦めた。しかし心はもうずっと前から決まっているのだ。私が行くことで何が起ころうと、先生のそばに行きたい。そして彼の命を護りたい。そう、このからだ騒いでいる。

泣くのを堪え、急いで通学鞆を漁って手帳を見つけると、そこから二つ折りにした紙片を取り出した。純代さんから聞いた関谷先生の新しい住所を書いたものだった。それを逸也に見せると、彼は唇の片方を吊り上げて、得意そうに笑った。そして闇を切り裂いて走る特急列車のように、彼は、彼の命が護ろうとしている人の小さな赤い車で、私のためにぐんぐんスピードを上げた。

三十分ほど走ったところで、車は緩やかに止まった。

そっと窓の向こうに目をやると、弱い電灯の明かりの中に、こじんまりとした四階建ての焦げ茶色のマンションが見えた。それはあまり頑丈じゃなさそうで、以前先生が住んでいたマンションに漂っていた家族のおいがまるでしないのがひと目で分かった。

「あれか」

逸也が助手席のほうに身を屈めてきて、私たちは一緒にマンションを見上げた。彼のふわふわした髪が鼻先で揺れる。一瞬、それに触れたときの記憶に引き摺られて、手が伸びかけた。だが耐える。そんなことで彼を大事に出来るのなら、もうとっくにしていた。もう私が彼に出来ることは何一つ残っていない。距離を保って、からだに開いた風穴を覆い合っていた私たちは、とっくに道を違えたのだ。

「気をつけて行けよ」

「うん。ありがとう」

「.....あれきりなのかと思っていたから、良かった、こうして会えて、話せて」逸也はハンドルに乗せた両腕に顔をうずめて言った。

「私もだよ。ずっと謝りたかった。私はずっとずるかった。甘えてばかりで、誰よりもイツちゃんを傷つけた。ごめんなさい、ごめんね、イツちゃん、私」

しどろもどろになったら、逸也がうずめた顔を上げて噴出すように笑ったと思えば、私に深い情に染まった目を向けた。しばらくそうして見つめていたが、やがて彼は朝露に濡れた森のような静けさの中で、優しい声で言った。

「一人だと思ふな、水穂。困ったことがあったら、いつでも連絡してこい。必ず力になってやる。お前が帰り道をなくしたときは、俺がいつだって教えてやる。血は繋がっていないが、俺たちは兄妹みたいなもんだろう？ だから、お前はお前の命をちゃんと生きていてくれ」

それが約束ではなくて、別れの言葉だとすぐに分かった。だが呪いのような父の言葉に囚われているせいなのか、離れることも逃げることもせず、まだ私のために身を裂くようなことを言う。それを思うと、どうすることもできないほど胸が苦しくなった。彼をその呪いからすぐにでも解放してあげたかったけれど、今の私には何の術もない。

ハザードランプの点滅音が響く車内で微動だにせず、スカートの裾をいつまでも握っている私に、逸也は「ほら」と肩を押した。半ば追い出されるように車から出ると、随分温度の下がった九月の風が私にぶつかってきて、その瞬間、逸也から軌道がずれたのを今度ははっきりと認識した。

だいぶ距離があいても、だがまだ私の背後であの赤い車の動く気配はない。きっと助手席の窓の向こうで小さくなっていく私を、逸也はずっと見ているのかもしれない。

何度も振り向いてしまいそうになるのに耐えながら、私は弱かったからだが強くなっているのを感じていた。踏み出す足から迷いが消えて、前に進む力が備わっているのを感じる。そこにはもう痛みも、からだに開いた穴から空気が漏れる音もなかった。二人で寄り添ってきた時間や交わした言葉が、私の弱かった部分を強くしているのだ。彼は私のそばから去ってもなお、私に出来た穴を塞いでくれている。そう思うと、泣けてきて、瞬時に頬は涙で無様に濡れた。

そのとき背後で車が走り出す音がした。数秒我慢してから振り向くと、もう赤い車は影もなく、ただ茫洋とした道路が広がっているばかりだった。

しばらくして前を向き、目の前に聳えるマンションを見上げて、ただひたすら前に足を動かし続けた。硬いでこぼこのコンクリートを靴の裏でしっかりと踏みしめながら、こうして距離があいても、あの誇り高き戦士のからだの傷を、私も癒してあげられていたらいいと強く願う。いや、例え癒せることがなくても、せめて暴風雨の盾にくらいにはなっていたい。そうするにはどうしたらいいのだろう。彼の言うように、自分の命をしっかりと生き続けていたら、その答えをいつか見つけることができるのだろうか。

濡れた頬を制服の肩口で拭き、もう一度、住所を書いた紙を確認してみる。関谷先生は、四階の角部屋に住んでいるらしい。四階立てのそこにエレベーターはなく、住人はマンションの脇に備え付けられた階段で出入りするようになっている。その下には、誰でも覗ける郵便受けがあって、駆け寄ると四 五号室に確かに関谷という文字を見つけた。

階段を上りながら、このマンションの中で寝起きする先生を想像していた。以前のマンションの一つ一つの部屋から漏れるオレンジ色の光の中で野良犬のようだった先生は、その想像の中にはいなかった。寂寥や孤独を何とかやり過ごして、ただ静かに息をしている姿ばかりが浮かぶ。

部屋の前まで来て、もう何も考えずにインターホンを押した。だが反応がない。続けざまにまたインターホンを押し、再び反応がないことが分かると今度は扉を手で叩き、ドアノブを引いて扉が開かないことを確認し、拳の果てには「先生」と声に出して呼んでみた。しかしやはり応答はなかった。

周囲に目をやってから、扉に耳をつけてみた。鉄の扉は、来るものを拒むように冷えている。そのあまりの冷たさに、すぐからだを離してしまった。

いつの間にか風が止んでいた。マンション中が静まり返っており、どの部屋からも物音一つしない。心臓が早鐘を打っている。恐れているのは、彼がこの世にすでに見切りをつけていやしないかということだっ

た。それでなくても、最近の先生は魂をどこかに置き忘れた人のようだった。

今になって携帯電話の存在を思い出し、先生に掛けてみる。だが耳に飛び込んできたのは、「おかけになった番号は現在使われておりません」という非情なアナウンスだった。呆然となり、とうとう共用廊下に座り込んでしまった。関谷先生は、番号まで変えて、私を遠ざけたのか。一年の間、掛けては駄目だと言いつけて必死に我慢してきたけれど、恐らくあの夏、休職が決まった時点できっと彼は番号を変更していた。純代さんの言葉を思い出す。もし彼女の言うことが本当ならば、先生は後悔からか、きっと私が他の誰かからだを寄せることが出来るようにしたのかもしれない。

不意に視線の横に、扉についた郵便受けに入った新聞が飛び込んできた。今日の夕刊だった。それを急いで抜き取り、受け口を押さえて額をつけ、中を覗き込んでみた。だが真っ暗で何も見えない。息を止めて耳を澄ませても、何の音もしない。もし、中で倒れていたりしたらどうしよう。とりとめのない不安に襲われて途方に暮れる。

しばらくは術もなくぼんやりと座り込んでいたが、いつまでもそうしているわけにもいかず、スカートを払ってのろのろと立ち上がった。廊下灯の青白い光が汚れたプラスチックのカバーを照らして、いっそううら寂しさを連れてくる。マンションの脇に引かれた小さな線路をまだ一度も電車が通っていないことも、世界から断絶されたような孤独感を強くさせていた。まるで台風の目の中に入ってしまったようだ。無風状態の中にいて何からの侵略も受けないような、隔絶された心許なさが振り切れない。

とぼとぼとマンションの階段を下りたとき、一台の軽自動車が見え、マンションの裏手に入っていくのを見た。そういえばまだ駐車場を見ていなかった。逸る気持ちを呼吸で抑えて、その車の後を追った。

車が駐車を終えて、中から出てきた主婦と思しき女性が買い物袋を提げて去っていくのを建物の影に隠れて見送り、周囲を見渡しながらから駐車場に近づいた。駐車スペースには白い塗料で部屋番号が記されているようだった。

四 五に、関谷先生の車はなかった。安心と落胆が一度にやってきて、立ち眩みがした。それでも依然として関谷先生の無事が確認されたわけではない。

マンション前まで戻って、自動販売機でペットボトルのスポーツ飲料を買って飲んだ。それがからだを落ちていくと、相当喉が渇いていたことに気づいて、喉を鳴らして半分近く一気に飲みしてしまった。潤いが満ちると、緊張が少し和らいだ。

ふとマンションの敷地と国道の境に目をやると、そこに不動産屋の看板が立っているのが見えた。思わず駆け寄って見ると、入居者募集の広告だということが分かった。よくない考えが沸々と湧いてきて、私はしばらく立ち尽くした。目の端に、不動産屋の電話番号がちらつく。

私は頭の中に湧いたある計略を、何度もイメージし、そこに穴がないかを確認し、思い切ってそこに電話を掛けた。ツーコールで営業の鏡といえそうな明るい男の声が社名を告げた。

「あの、今そちらが入居募集をしているマンションの前に居るんですが」

言うと、男はいっそう明るい声でマンション名を聞いてきたので、カタカナばかりの浮かれたその名前を答えた。するとすぐに空き室の説明に入ろうとしたので、

「いや、入居したいわけじゃないんです」

遮って言うと、男は明らかにテンションの落ちた、営業マンとしては失格な声で、「はあ」と困惑を漏らした。

「実は、ここの四 五号室に従兄妹が入居しているんですけど、まだ帰っていないみたいで、連絡も取れなくて、家に入れなくて困ってるんです！」

一息に言うと、電話口の向こうから濃い疑念と警戒の気配が流れ込んできた。

「いや、あの、うちではそういうのは対応しないことになっていまして……」

「そこを何とかお願いします！ 静岡から来たんです、一人で。もう今から帰るお金もないし、困ってるんです、すごく！」

口を挟む余地も与えず、真に迫る勢いで何度もお願いしと繰り返していると、男がマンションまで来てくれることになった。

待っていると、ものの十分で不動産屋の男はやってきた。絵に描いたようなサラリーマン姿のその男は、だがとてつもなく童顔で、まるで同い年の男子がスーツを着て歩いているようにさえ見えた。男は清潔さだけが取り柄だというような短髪の上に手を乗せると、私を見て、「うわー」と無防備な声を上げた。出来る限り好印象に見えるように、スカート丈も目いっぱい下ろして、靴下も膝小僧まで引っ張り上げ、シャツのボタンも一番上まで留めた私は、今にも泣きだしそうに下げた眉でしおらしく会釈して見せた。制服はこういうときには役に立つ。男はひと目で私を「地方から出てきた可哀想な従兄妹」と認識したらしく、身分証もないんです、と嘆く私の嘘までまんまと信じた。そのことにこちらのほうが心配になった。

「四 五号室の関谷さんだね」

「はい、関谷琉二です。高校の教員をしています」

高校教諭という職業も彼を安心させるのに功を奏したのか、男は私のような子供にまで折り目正しく名刺を差し出した。男の名前は白崎昌保しらすきまさやすといった。

「静岡からなんて、随分遠くから来たんだね。家出とかじゃないよね？」

「違います。明日学校が創立記念日なんで、ちょっとお兄ちゃんのところへサプライズで遊びに行きたくなっちゃったっていうか」

何度も頭の中で練習したというのに、一度慌てると動揺からますます早口になって、言いながら自分でもこんな怪しい言い分が信じてもらえるわけがないな、という気になったけれど、だが彼は「そっかあ」と言っただけで、それ以上の追及はなかった。

白崎さんはスーツのポケットから鍵束を取り出して、四 五号室の鍵穴にその中の一つを滑り込ませた。カタンと小気味良い音が鳴って、

「開きましたよ。じゃあ、一応控え取らせてもらいたいのので、名前と住所だけ頂けますか」

そう言って一枚の用紙とペンを渡された。嫌な汗が流れて、受け取る手が少し震えたけれど、捨て鉢の気分で電話をしたときにも名乗った偽名と偽住所を走り書きして手渡した。それを見た白崎が一瞬眉を顰めた気がしたけれど、大振りな動作で何度も頭を下げて礼を言い、逃げ込むように部屋の中に入った。

中に入って鍵を閉めると、溜まった闇や空気が僅かに動いて押し出されるような圧力を感じた。全ての窓にカーテンが閉まっているようで、中は恐ろしいほど真っ暗だった。

玄関から真っ直ぐ伸びている廊下を手探りに進んでいく。壁に手を這わずと電気のスイッチらしきものを指先が見つけた。

電気を点けると暗闇に慣れていた目に、白熱灯色の明かりが差しこんで目の奥が痛んだ。しかしゆっくりと開けた目に飛び込んできた部屋に、絶句した。1LDKの部屋の中にほとんど何も無かったからだった。壁際の台所はあまり使っている形跡がなく、リビングダイニングの床には一人用の黒い冷蔵庫の他には、三十インチほどのテレビがそのまま置かれ、あとは小さな丸いローテーブルが真ん中に鎮座しているばかりだった。部屋の所々にまだ開けてもいないダンボールが放置されていて、白い壁はどこか無機質で冷たく、生きるために必要なもの全てを突き放すような相容れなさがある。

恐る恐る部屋を仕切る、閉め切られた引き戸を開けてみた。リビングの明かりが漏れて闇が逃げていくと、その狭いベッドルームに簡素なシングルベッドがぽつんと置かれているのが見えた。起きぬけのままで皺くちやで、ベッドサイドに置かれたギターや読みかけの文庫本をやけに生々しく感じる。

堪らなくなつて、いけないと思いながら、だがベッドに顔を突っ伏した。鼻から深く息を吸い込む。微かに

先生のにおいが記憶と結びついて、安堵した。ベッドの上に転がっていた目覚まし時計を手にとると、時刻は八時半を回っていた。

仕事を終えた母が帰宅するまでに帰るならば、猶予はあと九時間程度しかなかった。再び顔を布団にうずめると、夜の持つ密度の濃い静寂が覆いかぶさってきて、すると恐怖もまたゆっくりと這うように舞い戻ってきた。

そのとき私の世界に、いつの間にかぼっかりと大きな穴があいているのを感じた。暗く、先の見えないその穴は深さも温度も分からず、全てが未知だ。近づけば、まるで堤防の先に立ったときのように、足元に海に似た巨大な怪物がすぐそこまで迫っているような感じがある。ただとにかく恐ろしいという感覚だけが私の四肢から容易く自由を奪っていく。

それが死の気配そのものなのではないかという考えに思い当たったのは、しばらく経ってからのことだった。そうイメージが出来上がると、今度はそこに純代さんが落ちていく映像が重なり、私はベッドとギターと文庫本以外何もない薄暗い部屋に立ち尽くしたまま自分をも失くしそうになった。

彼女の言葉も願いも全てがまだ温かいままだから、彼女のからだが消えたということに現実感がない。そこに突き落としたのが自分かもしれないということも、まだどこか靄のように曖昧模糊としている。だが穴は私の目の前で大口を開け、確かな闇とどこまでも続く虚空を曝け出している。それは先生の部屋に馴染み、まるで蜘蛛の巣のようにびっしりと張り廻らされているのだった。

私の中にある何を持ってしても、この穴を補填することはできないだろう。これまでの生の中で獲得したどんな解決方法も、死の前ではきっとごみ屑同然なのだ。全てを犠牲にして足掻いても何の役にも立たない。その穴に対して私は無力な子供でしかない。

先生、どうか生きて、早く帰ってきて。

台所の前で体育座りをしてきつく膝を抱え、先生を思ってひたすら念じ続けた。力を弱めてしまうと願いも効力を失ってしまう気がして、いつまでもそうしていた。

朝、配達員が新聞を郵便受けに差し込んだ音で起きて、関谷先生がまだ帰っていないことを知った。

からだがとても痛い。昨晚、店から電話を掛けてきた母と口論になり、そのまま床の上に倒れこんで眠ってしまったせいだ。

母にはそれまで、杏里の家に泊まっていると嘘をついていた。そのくらいの嘘ならば、二、三日くらい何とか持つだろうと思ってついた嘘だった。しかし昨日になって、看破されてしまった。母は、どこにいるのかと執拗に問い詰めてきた。けれど、本当のことは言えなかった。何度も危険のないことを伝え、強引に電話を切った。しかし電源を切ってしまうことは出来ず、それからずっと母からの着信を伝える携帯のバイブ音を、耳を塞いで遮断し続けていたのだった。

それからもう一件、電話があった。杏里からだった。その電話で、先生が学校には三日間の休みを三日前に取っていたらしい、という事実を知った。

私は学校にも行かず、カーテンの閉まりきった部屋の中で関谷先生を待ち続けた。一度、マンションの近くに見つけたコンビニにパンをいくつかと下着や洗面用具を買いに出ただけで、あとはただひたすら死が放ってくる怖れや沈黙と肩を並べていた。

だが腹が減って買い置き最後のパンを食べ終えたとき、自分のからだが臭ってきていることに気づいた。ここに来てからもう三日も風呂に入っていない。風呂を借りたいが、勝手に借りてよいものだろうか。

それに、入っている間に先生が帰ってきたらどうするのだ。そんなことをぐずぐずと迷っていたが、結局思い切って借り、汚れた下着の洗濯も済ませた。だが風呂釜の縁に掛けた濡れたパンツやブラジャーを見下ろしたとき、一体何をしているのだろうかという虚しさに捕まってしまった。死を後押ししたかもしれない人間が、何故こんな風に当然のような顔をして、自分の日常を優先しているんだろう。どうして明日が来ることを疑うこともなくこうして

後ろめたさと恥辱がない交ぜになったものに襲われ、この命が、とてつもなく恥ずかしかった。しかしそれでも私は生きていた。

裸のままのからだはとても寒くて、コンビニで買った男物のLLサイズのTシャツを頭から被り、簡素な下着を身に着けた。それを着るとワンピースのようになって、そこから突き出て露になった醜い足が、また許せなくなった。

死の恐怖が黒い海のように大きくなって、私を飲み込む。苦しくて、拳を振り上げて自分の足を打って、打って、打った。柔らかい肉が弾けた音を上げて、打ったところが瞬時に赤く染まった。延々繰り返していると、少しだけ恐怖が和らぎ、今になって名越さんのことが少しだけ分かった気がした。

右足と左足が、沸騰しているように熱く、腫れあがってきて、醜さが増してくる。羞恥はいつまでも止むことがなくて、疲れと痛みで腕が上がらなくなるまで打ち続けた。しかし本当にもうこれ以上は打てない、というところまで来たとき、これからどうしたらいいんだろうという現実的な不安感に襲われた。このままここでじっと待っていることが最善なのか？ このまま先生が帰って来なかったら、私は他にどうすることが出来るんだろう。心臓がどくどく鳴って、息苦しさに這い蹲る。からだを引き摺ってベッドまで戻り、先生のおいの残る布団にきつく包まった。

ハッとして目を開けると、視界が暗かったので激しく混乱した。手で布団を掻き分けて何とか出した頭があまりにも重くだるいので、いつの間にか寝ていたのだと気づいた。そのとき、扉の向こうで大きな音が上がって、からだを起こしかけたら、その視界に突然関谷先生が飛び込んできて、私は硬直した。

先生はひどい顔色をしていた。

そのうえ、左頬が切れて赤い、血のかさぶたが出来ていた。その周囲が、赤紫色と黒っぽい青色の痣が散って、ピンポン球ほどに腫れている。まるで試合後のボクサーのようだ。

彼は最後に学校で見たスーツ姿のまま立ち尽くして、ベッドの中の私を驚きの表情で見下ろしていた。ネクタイは取り払われ、首元のボタンは外れ、よれたワイシャツの襟元は汚れている。まるで重罪でも犯して逃げてきた人のように見えた。

「先生」

布団を剥いで露になった自分の姿に、言葉が続かなくなる。襟ぐりの大きいTシャツが右肩を曝け出していて、捲りあがったシャツの裾から下着が見えていた。そして突き出た足は真っ赤に腫れあがっている。慌てて隠したが、先生がよるけて近づいてきて、一気に布団を剥がしてしまった。Tシャツの裾を強く引っ張って隠そうとした私の手も捻り上げて、上からまじまじと私の全身を見つめた。

「どうしたの、これ」

それは聞いたことのないほど疲弊した声だった。眉根を寄せて私を見つめたまま、彼は身を屈めて私の腫れた足に触れた。ひんやりとした冷たさが、熱を持って麻痺したそれに乗ると、まるで下半身が溶けていくような気がした。

「自分でしたの？」

そう聞いたと思ったら、先生は暴風に耐え切れなくなった小枝のように、突然がくんと折れて床に膝をついた。慌てて支えようと手を伸ばしたけれど、間に合わずに凄い音がした。けれど、生きていた人間の音だ、と思ったらからだがぶるぶる震えた。

「先生、どうしたの。気分が悪いの？ 救急車呼ぶ？」

矢継ぎ早に言う私の太腿に、彼は落ちるように頭を乗せた。鈍い痛みが走ったけれど、その重みからだの奥が痺れた。頭を垂れて脱力する先生は、神様に懺悔している人のような気がした。

しばらくして彼は破り捨てるように着ていたものを脱ぎ捨て、下着一枚だけの姿になった。そうして今度はからだごと私のほうに倒れこんできた。長い腕と、あばらの浮いた硬いからだに捕まったら、身動きは全く取れなくなった。真綿で締め上げられるように全身が潰されていく。絞られて、私ごと流れ出していってしまいそうだ。

「先生、あの、私」

説明をしようとする私の口に手を押し付け、先生は布団の中で私を後ろから抱き締めた。それから両手と両足を私のからだに巻きつけて、流木にしがみつくようなかたちになった。腫れた足に、ざらついた皮膚と柔らかい脛毛が絡みつく。耳たぶに伸びた髭がざりざりと当たって、とても痛い。身を擦るとセミダブルのベッドが呻くように軋みを上げるので、そのまま固まっていると、干乾びたミイラみたいな先生とそのまま化石になってしまうような気がした。

「もう、帰ったのかと思った」

そう言った関谷先生は、突然からだを揺すぶって、声を押し殺して笑った。

「えっ」

「何だよ、西部ゆう子って」

「何でそれを知ってるの！？」それは私がここを開けてもらうときに使った偽名だった。

「西武ゆうえんちから取ったとか、言わないだろうなあ」

凶星だったので黙っていると、関谷先生はますますからだを揺らして笑っていた。耳たぶに先生の唇がついたままだったから、その度耳の中に生暖かい湿った息が流れてきて、くすぐったさにぞくぞくした。

「あのね、さすがに家主に確認を取らずに鍵開けるわけないでしょ。笠原が不動産屋に電話した後、ちゃんと俺にも連絡があったんだよ」

「だって、だって先生が電話番号変えたりするから！」

狼狽して言うと先生は私に巻きつけた手足に力を入れて、ますます強く私を絞った。これまで力の加えられるところのなかったからだのずっと奥の肉から、じわじわと何かがしみ出してくる感覚がある。それがひび割れた肉の間を通っていくと、頭がぼうっとしてじっとしていられなくなる。寝返りを打つことも出来ない。まるで全身がその液に浸されるのを待っているように、先生は私が勝手に動くのを許さなかった。

「何で来たの、ここに」

「先生が、死んでしまうと思ったから」

「そんなことで」

「そんなことじゃない！」

声を上げると、先生は前触れなく私をくるりと返して、簡単に自分のほうに向けた。突然眼前に迫った胸板の曲線に怯むと、首の後ろに手を入れられて顔を上げさせられた。充血した目玉がゆっくりと上下する。一度下までいっても、何度でも上まで戻って執拗に見ている。その目の下には痣のような翳がたっぷり溜まっていて、眠気に澱んでいた。突然そこに、ゆっくりと水が溢れてきた。押し寄せてくるそれに濡れた左目の痣が腐り落ちていきそうだった。思わず、ああと声が出た。自由になった手で先生の顔を挟んで、ますます目を澱ませるそれをどんどん親指の腹で拭き取った。けれど、全然間に合わない。それでも拭き続けていないと、先生が液体になって消えてしまうような気がする。そのとき彼がうっと呻いて、私の首筋に顔をうずめて背中に両腕を回してきた。お腹に触れた先生のお腹がひくひく痙攣していた。濡れた手で髪に触れると、その毛は硬く、やっぱり野良犬だった。

不意に、彼からどことなく雨の匂いがした。ここ三日、雨など降らなかったのに何故だろう。思ったとき、すぐにそれが雨の匂いではないことに気付いた。

それは、線香の匂いだった。微かだが甘い沈香の香気が、彼の髪の毛や肌に張り付いているのだ。

「先生、純代さんは」

「死んだよ……死んだ。首を吊って、独りで逝ったよ」

先生のお腹が震えなくなった。代わりに、きつく回していた手の力が緩まり、私の頭を自分の首筋に押し付けて、髪を、背中を、何度も何度も撫でた。けれど肌に押し付けられた鼻が線香の匂いに支配されて、私は乱れた。顔を背けようとする、出し抜けに耳を咬まれた。驚いて顔を上げて、だが目の前の光景に、息を呑んだ。

そこにいたのは闇に染まった見たこともない男だった。狼狽して自分の肌を見る。リビングから漏れる明かりがあるから、私の肌は多少薄闇色をしているくらいだ。けれど、先生は違う。痩せたからだは真っ黒で、声も無く泣くその姿は、まるで濃霧に濡れた冷たい林のようにけぼっていた。

「殺したのは、俺だ」先生の熱い右手が私の首筋に潜り、頸動脈が絞まる。「殺したんだ、俺が。追い詰めて。それで義父に殴られてこのざまだ」

徐々に力が加わると、頭の中に血が溜まり、拍動と共に頭蓋の奥で熱がたゆたった。先ほどまで壊れ物を扱うように撫でていた手が、今度は破壊的な力に満たされていることが恐ろしかった。でも、先生がそうしたいのなら、ここで殺されてもいいと思った。この恍惚に似た快樂こそが、以前、私たちが互いのからだに身を沈めて彷徨っている間中、まみれていたものだった。けれど私はもうそれを欲しいと思わない。代わりに虚空のような目をした先生を憐れだと思った。それは同情とも侮蔑とも当然違う。彼は以前孤独の穴の中にいた私だった。私は過去の自分を彼に重ねて、何て淋しいところにいたのだろうと改めて思っていた。「死のうと思っていた。笠原の予想のとおりさ。俺はとんでもなくつまらん男だ。こうなって、頭に浮かんだのは死ぬことしかなかった」

震えた声が止んで、突然首にかけられた力がふっと消えた。それに私は息を呑んだ。まるで彼の命の重さが軽くなったような気がしたのだ。ここから離れて死の方へ向かったせいで、私に押し掛かっていた重さが遠のいた感じがした。

「独りは嫌だ。もう、独りでこんなに淋しいのは、嫌なんだ」

子どもが漏らした弱音のように弱々しくそれは響いた。いつか感じたどのときよりずっと、現実には生きていない人のようになっている。どうしてこの人は。胸が痛んで目の中に閉じ込めるように見つめると、涙に濡れた彼の目に、罪をつくる前にしていたような欲情が揺れていた。先生は跳ねるようにからだを起こして、私を硬い鉄格子の中に閉じ込めるように、私の上で四つん這いになった。そして私の着ているTシャツを引き千切らんばかりに引っ張った。だから私はそれがすんなりと取り除かれるように、頭を上げ、腰を上げて下着を脱がすのも助けた。私がまっさらになると、先生もボクサーパンツを脱いで、鉛のように重いからだで向かってきた。

先生は、やっぱりすごく乱暴だった。けれど、そのくせ優しい。だから私は彼を救いたかった。何とかして、先生の肌にしみこんだ黒い闇を吸いだしたかった。でもこうして交わりの中で彼を救う方法が分からない。逸也を、生活を、振り切ってここまで来た私に残っているのは、やはり結局彼を憎み続けることだけなのだった。

手を頭の上に伸ばして万歳のかたちになって、脱力する。先生は剥きだしの私の乳房を硬い手のひらでんでは舐めた。赤くなったところを掬い取るように舐める。舌の突起がまるで猫のそれのようにざらついている人だった。その舌で撫ぜられると、私はいつも自分からだがあるということに気づかされる。ざりざりと音がしそうなほど硬い舌に執拗に舐められていると、細胞が剥がれ落ちていくような気がするから

だ。そうしてやがてかたちを失くしていく。

先生の首の後ろに両手を回して、こっちにも、という風に舌を突き出した。先生は左右非対称の顔を近づけて、それを歯で捕まえてから吸った。ねっとりとした粘液に纏わりつかれて、遠のいていた激しい欲望が皮膚の一枚下で猛り狂う。振り落とされないようにしがみついて、強く舌を絡めた。浮き上がった背中を先生が長い指で支えてくれた。

口から溢れ出す唾液がどちらのものか分からなくなると、先生は再び私のからだに戻っていった。廃れたラブホテルでしたときのような接し方ではなかった。乳房をぎ取ろうとするかのようにみ、へその中に舌を突き入れる。それでも見つけられないと苛立つように、彼は私の足を乱暴に開いた。何かから逃れようとするような沈み方をしたので、私は少し怖くなって短く叫んだ。それでも彼は勢いを止めなかった。真っ直ぐな道の先に見える水平線の向こうに宝物があると信じる子供のように、ただ一心に向かってくる。貫かれながら、涙が溢れた。瞑っていた目を開けて先生を見ると、真剣だった険しい目を僅かに細めて、私を見返した。

温かい血が肉の間を流れていくのを感じる。

私が先に見つけてしまった血の鎖を、私の中に探しているのだろうか。十五の私に救われたと言った人。帰り方が分からなくなるとして孤独に捕まった子供が母を呼ぶように愛撫する。

これまでなら、私もその愛撫に全部で応じて、二人して彷徨うことができた。お互いのからだの熱の中に、探し物が必ずあると信じて疑わなかった。けれど私は今、こうして先生に触れて深く繋がっていてももう別の場所にいる。そして、そのことに先生もそろそろ気付く。

罪が足りない。

もっと、もっと罪が必要なのだ。

唐突にそう閃光が走った。

罪があれば、彼を救える。

私に出来る、唯一の方法は、彼を許さず憎み続けて、永遠に私の中で熱く燃やして支配することだけだ。

そうすれば、彼を一人にしないで済む。一緒にいても、先生は私のことも信じない。私では彼を変えられない。彼は女という生き物を信じない。だから上手く愛せない。だから憎ませる。憎しみは彼を雁字搦めに拘束する。先生はその拘束によって生かされる。その支配さえあれば孤独を感じず生きることが、きっと出来る。

もう何度も繰り返した道筋を再び脳内に思い描いて、私は隙だらけの両腕をぶつけるように先生の首に伸ばした。それから今度は私が、力いっぱいそれを絞めた。先生は初め目を見開いて僅かに身を引いたけれど、ゆっくりとからだを起こした。首を握っていた私のからだもそれで起こされた。そうすると、絞めやすくなった。

「許さないわ！ 私はあなたを絶対に許さない！ あなたが私にしたことを一生許さない。あの罪で、結局純代さんまで殺したんだ。先生のせいだけじゃない。あれは私のせいでもある。私たちは許されることのない罪人なんだよ。そう先生が仕向けたのよ。だから私はあなたをこれからもずっと恨み続けるわ！ お父さんと同じように、憎み続けるわ！」

先生の顔が、だんだん赤黒くなっていく。それでも力を入れ続けた。色が左目の傷との境がなくなってきたとき、穴という穴から先生の命が行き場を失い、零れ落ちていくのが見えた。それまでまだ概念だった死が、私の前に躍り出てきたと思った。先生の体中から黒いものが溶け出して、私の腕にまで迫ってくる。滑らかに、音も感触もなく、駆け上ってくる。そうして私を包んだそれは、私からいっさいの感覚を奪い、分厚いだけで何も無い空間の中へ連れ出そうとした。わああん、と悲鳴のような泣き声を上げて、手の力をいっそう強め、私はまだ叫んだ。

「分かったって言って！ 一生憎まれ続ける覚悟を見せてよ！ 先生がいなくなったら、私はこの憎しみをどうしたらいいの！ また私を一人にする気なの？！ お父さんと同じに」

そのとき、先生のだらりとしていた両手が首を絞める私の手に触れて、こじ開けるように離された。その指は全て硬直して、離れて尚、先生の首をんでいたときのかたちを保っていた。

先生は私から離れると、からだバラバラになるのではないかと思うほど咳き込んだ。獣のように臥せて、咳き込む彼のからだはとても頼りない。しかし私はそんな彼に向かってまだ、許さないわ！ と罵声を浴びせた。

「先生のしたことを、やっぱり私は一生賭けて憎み続けるわ！ これまでのことを絶対に、永遠に、忘れない。絶対に一人で死なせたりなんかしないから！」

咳が止んだ先生は、ぜえぜえと喉を鳴らして呼吸をしながら、ぼつりと言った。

「ごめん、こんなことを言わせて、ごめん」

そうして泣く先生を冷たい目をして見下ろしながら、本当は抱きついて今度は私が抱いてあげたいと、喉がひりつくほど思う。

誰か、助けて、と口走りそうになって、慌てて飲み込んだ。私達を救うものはない。唯一彼を支えるのは、私の中に埋められた、この罪ひとつ。この罪にからだを蝕まれ、喰われ続け、憎しみでからだを震わせて、どこにいても誰と何をしても許さないで憎み続けることこそが、彼を少し救う。寄り添っていても、どちらも生きられなくなってしまう。

疲れて互いに纏れ合い、倒れこむようにベッドに横たわった。そして彼はすぐに眠ってしまった。私の肩に顔をうずめるようにして丸くなって眠る彼は、少年のように無防備で、僅かな解放の気配があった。私は先生の乱れた髪を撫で、頭のかたちを掌に刻んだ。しかし手を離すと、それがどんなかたちだったかもう残っていない。ふと不安になって、夜の海に浮いているような部屋を見渡した。そこはまだ暗かったが、きっと孤独や死の穴からは出たはずだ、と私は自分に言い聞かせた。彼はまだ穴の淵に立っていて、ふとした瞬間に落ちるかもしれない。それでもきっと、私のからだから伸びたこの憎悪が命綱となって彼のからだを引っ張り上げるだろう。きっと、そうしてくれる。

朝日が昇る前に、私は眠っていたふりを解いた。

そして父親にそっくりなこの人をこの世界に繋ぎとめるために、いつか彼がああ寂れたホテルに私を置き去りにしたように、私も静かに彼の熱から離れて、この部屋を後にした。

「うわあ、やっぱり今日も真夏日更新っすよ」

「ああ、道理でお客が来なかったわけだ」

私が笑って言うと、事務所兼休憩室であるこの部屋に一台しかないパソコンに齧りついていた大城君が、ディスプレイからびよこんと顔を上げて、ニヤつきながら、

「甘いっすよ、笠原さん。若い男女というものはですよ、こういう密室で、もうどっちの汗だか分かんなくなるくらい絡み合って、愛を貪るプレイが大好きなんですから」

「ふうん」

「ふうん、じゃないっすよ！ 大体、笠原さんだって、あるでしょ、そういうことの一度や二度。若い男女なんて、それしかないじゃないすか、やること！」

「でも、今日来たのは十組だけじゃない。しかも半分以上主婦友同士の子供連れ。そしてここ三時間はひとりの客も来ていない」

切符売り場のほうに目を配りながら言うと、彼はうう、と悔しそうな声を漏らして、ギイギイ鳴る事務椅子に大きなからだを預けた。

「でも、笠原さんも不思議な人っすよね。まだ若そうなのに、なんでこんな寂れた遊園地でバイトなんかしてんすか。顔だって綺麗じゃないっすかー」

「あのねえ、大城君。私のこと、いくつだと思ってるのよ。もう二十八よ、私。あと何か失礼だよ」

苦笑して言うと、やや遅れて大城君の「ええっ」という騒がしい声が事務所内に響き渡った。驚いて振り向くと、彼が立ち上がって私のほうへ近寄ってきた。

「嘘ですよね……俺、二個上くらいに思っていました」

「おいおい。それは言い過ぎだって」

「だって、ここに来たとき笠原さん、年齢言わなかったじゃないすかー！」

そうだったっけ、と嘯くと、彼は困ったような顔をして頭の後ろを掻いていた。

「いや、びっくりした。たぶん、ここ半年くらいで一番びっくりしました」

「えっ、そんなに？」

嫌そうに言うと、だが彼はますます私をじっと見つめて、きちんと整えられた無精ひげの顎をさすりながら、

「でも、綺麗って言ったのは嘘でもお世辞でもないすよ」

「はいはい、もういいよ」

「いやあ、でもやっぱ二十八には見えないっすよ。でも童顔っていうのとも違うんすよねー。こう何ていうか時間が止まってる感じっつか」

その言葉に胸の奥に油が跳ねたみたいな痛さが走ったけれど、「ほんと失礼だなあ、君は」とからかいながら、見て見ぬふりをした。

大城君はまだ二十三歳だけれど、社員なので私の上司にあたる。彼は十九歳の頃からここでアルバイトをしていて、専門学校を卒業した後、そのまま社員になった。しかし何がきっかけだったか、いつの間にか彼のほうが私に敬語を使うようになってしまっている。

私は一年前から、この西武園ゆうえんちでアルバイトを始めた。

高校を卒業する頃、宇仁と母が再婚したのもあり、一年浪人して都心の大学に入ってから一人暮らしを始めた。それから卒業後五年はそのまま東京で就職し、椅子を作る会社の事務をしていたけれど、去年、ゴ

ミの日にゴミを出すように辞表を出した。辞表を出したその日には、この遊園地に電話していた。その頃、バイト募集はしていなかったのだが、私の鬼気迫る熱意に折れて、アルバイトとして雇って貰えることになった。

観覧車担当になったのは、偶然だった。

ここに配属されたアルバイトは私の他に、二十歳の短大生の神宮寺^{じんぐうじ}さんという女の子一人だけだった。今日、彼女はシフトが入っていないのでいない。それでも私と大城君の二人だけで充分足りてしまう。アナウンスは録音だし、客が来ても案内とゴンドラの鍵閉めをするくらいで、他に仕事といえば清掃くらいのものだ。

外はまだ明るいけれど、あと四十分もすれば終園で、今日の業務は終わりになる。経費節減のため、終園時刻を回ってからはほぼ回さない。だから、一周約十五分のこの観覧車はあと二回ほど回したら、電源を切らなくてはならない。

「笠原さんって、いつもそうして観覧車を見上げてますよね」

「えっ、そうかな」突然言われて、すごく動揺してしまった。

「そうですよ。一年間ずっとそうしてますよ。それなのに、乗らないんすよね」

大城君は何かを言い掛けて、だがまた頭をがしがしと掻いてパソコン画面に戻っていった。彼が理由を聞いたがったことは分かったけれど、言葉が出なかった。

十年、か。

窓から、空に向かって聳え立つ観覧車をまた見上げた。

面接に来た際に十年ぶりに見たこれは、遠いむかしにあの人と手を繋いで目指したときと何ら変わることなく、赤い美しい車輪を回し続けていた。当たり前のことだというのに、変わらずに居続けたその前で、私は暫く動けなくなった。

まだ制服を着て、移動手段はいつも自転車だった自分を思い出して、ふ、と息が漏れた。当時の私は、この身に巢食った罪を守り、育てることで精一杯だった。そうしていれば、あの弱い人を救えると信じていたのだ。

「あ、大城君。もうそろそろ止めないと」

事務所内の大きな壁掛け時計を見て、言った。大城君が頬杖をついたまま時計を見て、一瞬思索気に目を伏せた。それから私に視線を移して、

「笠原さん、せっかくだし、ちょっと乗ってきたらどうですか。ちょうど気温も下がってきたことだし」

「いいよ、私は」

「でも、こいつ、今日可哀想すよ。こんなに一人で回り続けて、寄り添ってもらえたのが数えるほどだなんて」

「さすが大城君、卑怯な言い方をするなあ」大城君は自分で豪語するほどの観覧車マニアなので、観覧車を語らせるととても熱くなる。「でも、まだ誰か来るかもしれないし、やっぱり仕事中は乗れないよ」

「でも、工作中じゃないと乗れないすよ。だって笠原さん、その感じからしてプライベートではぜってー来ませんもん」

私が掃除用具を出しながら笑って誤魔化していると、大城君は操作機器のあるブースの鍵を手にして、先に外へ通じる扉を開けて言った。

「ほら、もう、誰も来ませんって。悲しいくらいの閑散っぷりっすよ。そして、ほら見てください、この赤いボディ！これがあなたのためだけに回るんですよ、マジで最高だと思いませんか！」

扉を開け広げている大城君の前を素通りして、掃除用具を手に、まだとろけるほど暑い夏の夕空の下に出た。ひりつくような熱気と、草木の萌える匂いを思い切り胸に入れると、冷房で冷えたからだ全部で夏

を感じた。

後ろから大城君がしょげながら寄ってきて、二人して巨人のような観覧車を見上げる。空を切り裂くように回るそれに、今はもう何の感慨もなかった。

変わらない場所に近づけば、再び生まれるものだと思っていた。において記憶が呼び起こされるように、私の中のあの罪がまた私を粘質液で浸すと期待していた。けれど何度、この馬鹿みたいに大きな観覧車が空を横切る様を見ても、あのとき自分がどんな思いであの人の前に座っていたのか、何故あんなに救われた思いになったのか、そういうことがもう何一つとして思い出せなかった。

そのとき自分の中の罪が、完全に薄れてしまったことを認めた。事務職に就いているときから、片鱗はあった。だから辞めて、ここへ来たのだ。けれどここへ来たら、もうあの人の声を思い出せないように、そのかたちが、色が、味が、知らぬ間にこの手から離れていたという事実、改めて身を裂かれた。その痛み、に竦んだ。これ以上近づけば、かえって喪失を直視する気がして、観覧車には乗れなくなってしまった。十年前のあの夜からしばらくして、また唐突に学校を去ってしまったあの人が、今はもう生きているのか死んでいるのかさえ分からないまままだというのに、この身の罪の消失で、私はあの人を今度こそ独りきりで殺してしまったと思った。

そのとき、突然大城君が私から掃除用具を奪い、私の手を強く握り締めた。抗う間もなく、彼はそのまま私をゴンドラの前に連れて行った。

「ちょっと大城君、私は嫌なんだってば」

「いいから」

その身軽さと手の力強さに、心臓が波立つほど動揺してしまう。「い、嫌だあ！」と子供のように騒いで、逃げようと及び腰で踏ん張る。いざそばまで近づくと、いつもその速いスピードに怯んでしまう。それを大城君が「怖くない怖くない」と満面の笑みで言いながら、次にやってきた赤いゴンドラの扉を片手で器用に開け、結局抵抗も虚しく、ほとんど突き飛ばされるように押し込まれてしまった。慌てて下りようとする、とそれを閉められ、

「笠原さん。下からじゃ何にも見えないっすよ。まずは、乗らなきゃ始まらない」

彼は得意そうに言って親指を立てると、いってらっしゃい、と大きく手を振って私を見送った。乗ったら大城君がすぐに遠ざかってしまっ、と、呆然となった。

ああ、これはもう、観念するしかないか。硬直したからだを無理やり預けると、ゴンドラが少し揺れて、中に溜まっていた熱気が重く動いた。

やがて左手に多摩湖が見えてきて、私の心は素直に懐かしさに震えた。夕日を反射して黄金色の帯を作ったそれが、時折風に煽られて、たわんだ。ゴンドラが天辺に近づくにつれ、湿気を含んだ風が隙間から入り込み、肌がべたついてくる。額に汗を感じて拭いたその手が少し震えていた。

半周を終えようというとき、不意に目に入った空の低さに私は萎縮した。赤く染まった分厚い入道雲が視界を阻んで、手を伸ばせば吸い込まれてしまうようだったのだ。

最高部、六十二メートル。ここから投げ棄てれば、恐らくそんな思い出なんてひとたまりもないよ。突然声が蘇り、私は空気を掻くように手を振り上げて、慌てて耳を塞いだ。

憎しみなんか、今ここで棄ててしまえ。持っていたって大事に出来ないのならば、手放す努力をすべきだ。重力に逆らっても。そうする君を誰も責めない。そんな権利は誰にもない。

これまで思い出そうとしても、うまく思い出せなかったのに。塞いでもあの低くて甘い声が、まるですぐそばで鳴ったように蘇る。

これまでもずっと、ここで、繰り返されていたのだろうか。私が乗るまでこの観覧車は、あの日あの時の場面を乗せて回り続けていたのだろうか。そう感じたとき、空がゴンドラごと私を抱くように、そのからだ

を寄せてきたような感覚に捕まった。まるで私が何事かを吐き出すのを待つように、取り囲まれる。頂上に着いていた。

ああ、と唇から声が漏れた。

この場所からだを戻しても、あの人の罪がいつまでも戻ってこなかったその理由^{わけ}を、私は静かに受け入れた。

ずっと、後悔していたのだ。

最後の夜、殺してあげることも出来ず、苦しみを全て吸い取ってあげることもできず、だが先生の与えた罪と憎しみを抱えて去れば、きっと救えると馬鹿みたいに信じていた自分を、悔い続けていたのだ。

これまで私は、それと向き合う覚悟がなかった。あの日ただ逃げただけの自分を認めたら、もう本当に動けなくなってしまう。そう思えば思うほど、進むことも戻ることも出来なくなってしまったのだ。

しかし、時間は確実に私を変えた。あんな風にしなくても、いくらだって救えたのに。そんな台詞を、十年経ったら平気で口に出れる私に、時間は作り変えてしまった。

逃げたことを、逃げているうちに自分が変化してしまったことを、そして時間と共に罪を薄れさせたことを、長い間悔い続けていた。もう嫌だ、と思いながら、けれど悔い続けることで自分を守ってもいる。そういうのこそがもう嫌だった。

けれど、回り続けて、ここに戻ってきたのだ。

長く離れていた空に抱かれて、私はそう思った。思うと、ようやくあの言葉の本当の意味に触れた気がした。

ここから棄ててもいいのだと、そうする君を誰も責めないとあの人がそう言った本当の意味が、十年経って、やっと分かったのだ。あの人は最初から何もかも分かっていたのかもしれない。私が再びここに戻ることも、いつか憎しみが薄れたことを責めることも。

あれは確かにあの日あの時の私に言われた言葉だったけれど、こうして時間が回り続けて未来に至っても、私を救う言葉となっていた。これはきっと考えすぎじゃないだろう。あの人はいつだって私のことを、誰よりも分かっていた。

これ以上はないところまで近づいた空が、ゆっくりと去っていく。棄てるか、何もかも。腹に力を入れて思う。一秒ずつ、時計が針を進めるようにゴンドラが動いていく。早く、早くしなくては。空が行ってしまう。

駄目だ 違う。

出来るわけがない。

空に渡してしまうことなど、絶対に出来るわけがない。

思うと同時に、私は急いで祈っていた。あの人がまだこの世界に見切りをつけず、きっと私の中の憎しみに救われて、生き続けているようにと。いや、そうじゃなくたっていい。どこかで誰かを愛して、そして同じように愛されていたっていいんだ。ただ絶望や孤独の淵から離れて、生きていてくれたら何だって。深く、深く祈りながら、私はまだあの人を、狂いそうになるほど好きで、あの頃だって、私はやっぱり死にたくなるほど愛していたのだ、と思った。

空が、私の告白を咀嚼するように、雲をうねらせたように見えた。張りつめていた力が抜けると、突然、からだ崩れるように、会いたい、と思った。そうしたら、腹の奥がだるくなって溶け出してしまった。あれから誰とも交わることが出来ずに、干乾びてしまったからだの見えないところが、あの人を全身で呼ぶように濡れている。近づいたらすぐに絡みついて私を捕まえるあの粘っこくざらついた舌を、溢れてくるものが舐めたい舐めたいと騒いでいる。

これからこの熱と後悔を抱えて、どこを回り続ければいいのだろう。ここから一生離れられずに、同じ空

を横切って一人きりで生きられるのだろうか。思うと、果てしない思いに駆られて、嬉しいような絶望するような、ひどく曖昧なものに浮かされる。

息が苦しくなり、ゴンドラの際間に顔を近づけて湿った空気を肺一杯吸った。車のかたちがはっきり見え始めて、まだ小さいけれど、子供を真ん中に挟んで手を繋ぎ、帰っていく家族が分かるほど、地上に近づきつつあった。もう、今日も終わる。不意にそう思ったとき、乗り場からは離れた切符売り場の手前に、黒い人影が目に入った。瞬間、全身の毛が逆立って、時間が止まった。

影は、観覧車をじっと見上げていた。

そこはきっと事務所からも運転ブースからも見えない位置。

ああ、神様！

思わず子供のように椅子に飛び乗って、胸の前で手を組み合わせた。

顔までは見えない。けれどそれが関谷先生だと、すぐに分かった。まだ熱いアスファルトの上で、ただ佇み見上げている。小脇にスーツの上着を抱えて、真っ白いシャツはくたびれて、影は全体的にしどけなさを纏っている。それが後ろ髪をひかれるようにゆっくりとからだを反転させて、去っていく。人の顔がうっすら見えるほどにまでゴンドラが下りたときには、もう姿はなかった。

地上についたゴンドラの扉を大城君が開けて、こちらに手を伸ばし、私が下りるのを助けてくれた。手のひらに、熱を出した子供のような湿った熱さが触れて、くず折れてしまいそうになる。

「大丈夫ですか」

大城君が心配そうに私の肩を支えて、顔を覗き込んできた。その必死さと、若い艶やかな肌が眩しくて、懐かしくて、胸が震えた。

「そうだ、ちょっと聞いてくださいよ。今ね、笠原さんが乗ってるとき、すげえ雰囲気のある男の人が来たんすよ！ 乗りますかって言ったら、笑って首振って帰っちゃったんすけど」私を乗り場のすぐそばにあるベンチに座らせ、運転を止めながら彼は興奮して続けた。「なんかね、その男の人の目の前に立ったら、体感温度が二度くらい下がりましたよ。でも冷たいけど、親しみ深いっていうか。ああ、何ていったらいいのかなあ。とにかく、近寄っていきたくなる感じだったんすよねー」

「それって、野良犬みたいな感じ？」

「ああ、そうそう、そんな感じ！ 放っておけないっていうか。でも同情を誘う感じはなくて、ちょっと憧れる感じっすよ。ああいう雰囲気って、年取ると勝手に出てくるもんなんすかねえ。欲しいなあ、あんな感じ。女にモテそう」

健康的に焼けた彼のからだに、あの影が乗ることなど想像も出来なくて、つい笑うと大城君が「笑うことないじゃないすかー」と拗ねた。

「そういや、どうでした？ 観覧車体験は」

私はまだ高鳴る胸とだるいからだを持って余しながら、少し悩んで、

「良かったよ。乗って良かった。ありがとう、大城君のおかげでいい体験が出来たわ」

「マジッすか。そんなら良かったっす。さすがっすね、やっぱ」

「何が？」

「観覧車に決まってるじゃないっすかー」

操作を終えた彼が弾けるような笑顔で言って、掃除用具を振り回しながら、「ああ、そうか」とぼんやり言って、またニヤニヤするので、

「なあに」

「さっきの男の人ね、笠原さんに似てるんだ」

大きく頷いて納得を見せる彼の前で、私は息が止まるほど狼狽した。それを私が傷ついたと取ったのか、

彼は真剣な顔をして「いやいや、違いますよ」と手をぶんぶん振りながら否定した。

「あの凄みが笠原さんにあるってわけじゃないっすよ。ただ、この観覧車を見上げる姿が似てたんすよ、すごく。大事な過去を、抱き締めるみたいに見てる感じが」

からだの温度が上昇し、込み上げてくるものに負けてしまった。瞬く間に涙が目から溢れて、溜まっていたものが吐き出されていった。大城君がしばらくしてそれに気づいて、慌てて駆け寄り、混乱しながら汗臭い制服のシャツでそれを拭っては、忙しなく謝った。その小型犬のような動きがおかしくて、泣きながら笑ってしまう。彼がそんな私にあからさまに安堵するので、私はまたいつものように変わらずやってくる明日を待つ気になれた。

追い掛けようとは思わなかった。あれから十年を経た自分なら、今度こそ一緒に居ることが出来るんじゃないかという浅ましい考えが一瞬過ぎたけれど、すぐに否定するしかなくなった。あの別れのままでいいのだ。だってきっと彼もまた、ここに過去を棄てに来た。

今は乗らずに帰ってしまったけれど、またいつかやって来るだろう。ここに居れば近いうちに会うこともあるはずだ。そのとき、淵から遠のき、今度こそ現実を生きている彼を見られるように祈り続けるのだ。

しばらくして空を眺めると、雲の切れ間から太陽が光芒を放っているのが見えた。先生が、去っていったほうだ。

どうかあの光の下に先生がいますように。

どうか、あの人をこれからも照らし続けて。

そしてそのとき、彼の世界が幸福の光に満たされますように。

瞑っていた目を開けると、東の空からゆったりと本格的な日暮れが近づいてくるのが見えた。手渡された掃除用具を持って、もうほとんど回転が止まりかけている観覧車へと、大城君と並んで歩きながら向かっていった。(了)